

石橋条里制遺構  
藏福遺跡  
乍ノ下遺跡

山梨県中央自動車道  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1984・3

山梨県教育委員会  
日本道路公団

石橋条里制遺構・藏福遺跡・保ノ下遺跡正誤表

ページ、行	誤	正
凡例 3	S B - 住居址及び建物址	掘立柱建物址
挿図目次第2図	…藏福遺跡保ノ下遺跡付近図	…藏福遺跡付近図
挿図目次第36図	柱穴間実測図	掘立柱建物址群実測図
図版目次 石橋条里制遺構第3地点図版1	石橋条里制遺構第3地点発掘前全景 石橋条里制遺構第3地点発掘前全景	Ⅲ Ⅲ 後
同上 図版2	1号住居址住居址内炭火物出土状況	1号住居址 住居址内炭化物出土状況
1P 1行目	436番地? 442番地の1	436番地・442番地の1
14P	ページの数字16	14
17P 下から3行目	1形	円形
19P 第11図タイトル	2号掘立柱建物址柱根実測図	2号掘立柱建物址柱根間実測図
41P 第36図タイトル	柱穴間実測図	掘立柱建物址群実測図
88P 上から1行目	1号、2号溝状遺構	1号・2号溝状遺構
88P 第80図地図説明	IIc 暗褐色土(粘土)_____	IIc 暗褐色土(粘土)、溝掘込面
99P 上から1行目	石橋条里制遺構第II点	石橋条里制遺構第II地点
99P 下から6行目	石橋条里制遺構第I点	石橋条里制遺構第I地点
173P 下から10行目	縄文時代中期	縄文時代前期
藏図版8の説明	番号はP 27の資料と同一	第3表
藏図版9の説明	番号はP 27の資料と同一	第3表

石橋 条里 制 遺構  
藏 福 遺 跡  
保 ノ 下 遺 跡

山梨県中央自動車道  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1984・3

山梨県教育委員会  
日本道路公団

## 序

山梨県内における中央自動車道建設に伴う事前発掘は、1966年度の富士吉田線大月市宮谷遺跡の発掘に始まり、1980・81両年度の西宮線一宮町・勝沼町地内积迦堂遺跡の発掘をもって終了いたしました。1982年11月には中央道西宮線が全線にわたって開通いたしましたことは、なお記憶に新たなところであります。この間、発掘した遺跡数は43、出土遺物は無数10万点の多きに達しております。これらにつきましては、当埋蔵文化財センターにおいて総力を挙げて鋭意整理を加え、完了したものから逐次調査報告書を刊行して参っております。本年度は東八代郡八代町・境川村地内の石橋条里制遺構・藏福遺跡・保の下遺跡の3遺跡と、一宮町地内の豆塚・東新居の両遺跡とをそれぞれ一冊ずつに合本して刊行しようというもので、本書は前者の3遺跡を合冊したものです。

石橋条里制遺構は3地点で調査され、平安時代中期・後期を中心に、住居址・掘立柱建物址・井戸址・堀状遺構・条里型地割線等の遺構、土師器・須恵器・多数の木製品等の遺物が検出され、条里制施行期の集落の状態を推定する資料等が得られました。次に藏福遺跡は中世中期から後期にかけての遺跡で、寺院址とする伝説があり、掘立柱建物址・配石・溝群等の遺構、土師質土器・陶磁器・仏具等の遺物が発見されました。また保ノ下遺跡は古墳時代前期の遺跡で、住居址・溝・土壙等の遺構が発見され、土壙から木製品、溝からは投棄されたと思われる土師器が出土いたしました。以上3遺跡ともそれぞれに特色をもち、今後の研究に資する点が少なくないと信じます。

末筆ながら、終始いろいろとお世話いただいた関係機関各位、直接発掘調査に当たられた皆様方に改めて厚く御礼申し上げます。

1984年3月31日

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

## 例 言

1. 本書は中央自動車道西宮線建設工事に伴う、石橋条里制遺構第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅲ地点、藏福遺跡、保ノ下遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて実施したものである。
3. 発掘調査は、森和敏、土橋久雄が担当し、折井忠義、渡辺礼一、雨宮正樹が調査員として行った。
4. 本書の執筆は森和敏、雨宮正樹、渡辺礼一（保ノ下遺跡）が分担した。
5. 本書の作成、資料整理は榎本勝、宮沢まさみ、竜沢みち子、山本真喜子、小林たつ子、古屋房子、相沢正子、池谷絹子、古川一也、横小路豊、山口富士男、小林高広、木之瀬久司、丸山哲也、丸山勉、写真撮影は森和敏、小島重人、丸山哲也が当った。
6. 石橋条里制遺構第Ⅰ地点、藏福遺跡、保ノ下遺跡出土材の樹種の識別鑑定は、山梨県林業試験場・主任研究員・渡辺利一氏と技師・藤平登留氏に、種核の識別鑑定は山梨県立女子短期大学教授・理学博士・市川三次氏に依頼した。記して謝意を表わす次第である。

## 凡 例

1. 本書における遺構番号は発掘調査時に付されたものを使用し、資料整理時に番号を欠番としたものもある。
2. 地層図の斜線は未発掘部分である。
3. 掘図の遺構平面図、実測図に使用している記号は次のとおりである。  
SGS—集石列、S—石、SSR—列石、SB—住居址及び建物址、SE—井戸状遺構、SR—一道、SD—溝（水路）、SX—不明遺構、土—土器、土器番号、土群—土器群、石—石器、木—木器、Po—柱根番号、P（pit）—柱穴番号、TP—トレンチ（試掘）列石実測図の実線は崩れた石、破線は積み直しを表わす。
4. 遺物実測図の（ ）内番号は遺構平面図の遺物番号である。

# 目 次

## I 石橋条里制造構

### 序 章

#### 石橋条里制造構第I地点

第 1 章 遺跡の位置と環境	1
第 1 節 位 置	1
第 2 節 環 境	1
イ 自 然 環 境	1
ロ 歴 史 的 環 境	2
第 2 章 調査の経過	5
第 3 章 層 序	6
第 4 章 造構と遺物	12
第 1 節 奈良・平安時代の造構と遺物	13
掘立柱建物址と遺物 坑穴式住居址と遺物	
配石造構と遺物 列石と遺物 井戸状造構と遺物	
土壤と遺物 杖列	
第 2 節 中・近世の造構と遺物	88
溝状造構と遺物 列石と遺物 井戸状造構 集石列	
第 5 章 ま と め	97

#### 石橋条里制造構第II地点

第 1 章 遺跡の位置と環境	99
第 1 節 位 置	99
第 2 節 環 境	99
イ 自 然 環 境	99
ロ 歴 史 的 環 境	99
第 2 章 調査の経過	99
第 3 章 層 序	100
第 4 章 造構と遺物	103
埋石掘状造構と遺物 住居址と遺物 埋石造構と遺物	
配石造構と遺物 列石と遺物 その他の造構と遺物	
第 5 章 ま と め	140

#### 石橋条里制造構第III地点

第 1 章 遺跡の位置と環境	141
第 1 節 位 置	141
第 2 節 環 境	141
イ 自 然 環 境	141

ロ歴史的環境	141
第2章 調査の経過	144
第3章 層序	145
第1節 リモート・センシングによる石橋条里製造構に関する報告書	146
第2節 調査地区の層序	146
第4章 遺構と遺物	146
道と灌漑用水路 杭列 水田 住居址と遺物	
列石 その他の遺構・遺物	
第5章 石橋条里製造構の坪割りについて	161
第6章 まとめ	165
<b>II 蔵福遺跡</b>	
第1章 遺跡の位置と環境	167
第1節 位 置	167
第2節 環 境	167
イ 自然環境	167
ロ歴史的環境	168
第2章 調査の経過	169
第3章 層序	171
第4章 中・近世の遺構と遺物	174
掘立柱建物址と遺物	
土壤 配石 列石 集石列 溝と遺物	
第5章 增福山利最寺の関係資料について	190
第6章 まとめ	194
<b>III 保ノ下遺跡</b>	
第1章 遺跡の位置と環境	196
第1節 位 置	196
第2節 環 境	196
イ 自然環境	196
ロ歴史的環境	197
第2章 調査の経過	198
第3章 層序	200
第4章 遺構と遺物	201
第1節 弥生時代の遺構と遺物	203
1号土壤 6号溝 その他	
第2節 古墳時代の遺構と遺物	204
住居址と遺物 掘立柱建物址 溝と遺物 土壙と遺物 柱穴	
第3節 中・近世の遺構と遺物	219
第5章 まとめ	220

## 挿 図 目 次

第1図 石橋条里制造構(第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地点) 藏福遺跡、保ノ下道路位置図	第32図 13号掘立柱建物址実測図	38
第2図 石橋条里制造構(第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地点) 藏福遺跡、保ノ下道路付近図	第33図 13号掘立柱建物址柱穴間実測図	39
I 石橋条里制造構	第34図 14号掘立柱建物址実測図	39
石橋条里制造構第Ⅰ地点	第35図 14号掘立柱建物址柱穴間実測図	40
第3図 石橋条里第Ⅰ地点グリッド配図図	第36図 柱穴間実測図	41
第4図 レンチ地層図	第37図 掘立柱建物址模式図	42
第5図 レンチ地層図	第38図 掘立柱建物址模式図	43
第6図 レンチ地層図	第39図 グリッド出土柱根実測図	43
第7図 レンチ地層図	第40図 グリッド出土柱根実測図	44
第8図 試掘地層図	第41図 1号住居址実測図	46
第9図 石橋条里制造構第Ⅰ地点全体図	第42図 1号住居址出土遺物実測図	47
第10図 2号掘立柱建物址実測図	第43図 1号住居址出土遺物実測図	48
第11図 2号掘立柱建物址柱根間実測図	第44図 1号住居址出土遺物実測図	49
第12図 2号掘立柱建物址出土遺物実測図	第45図 3号住居址実測図	50
第13図 2号掘立柱建物址柱根実測図	第46図 3号住居址出土遺物実測図	51
第14図 2号掘立柱建物址柱根実測図	第47図 3号住居址出土遺物実測図	52
第15図 5号掘立柱建物址実測図	第48図 6号住居址実測図	53
第16図 5号掘立柱建物址柱穴間実測図	第49図 6号住居址出土遺物実測図	53
第17図 9号掘立柱建物址実測図	第50図 7号住居址実測図	54
第18図 9号掘立柱建物址柱穴間実測図	第51図 8号住居址実測図	54
第19図 10号掘立柱建物址実測図	第52図 7号住居址出土遺物実測図	55
第20図 10号掘立柱建物址柱穴間実測図	第53図 8号住居址出土遺物実測図	56
第21図 11号掘立柱建物址実測図	第54図 2号配石実測図	56
第22図 11号掘立柱建物址柱穴間実測図	第55図 3号配石実測図	57
第23図 12号掘立柱建物址実測図	第56図 4号配石実測図	57
第24図 12号掘立柱建物址柱穴間実測図	第57図 5号配石実測図	57
第25図 4号掘立柱建物址実測図	第58図 5号配石出土遺物実測図	58
第26図 4号掘立柱建物址柱間実測図	第59図 4号列石平面及び側面図	58
第27図 4号10号掘立柱建物址出土遺物実測図	第60図 5号列石実測図	58
第28図 4号掘立柱建物址出土木製品実測図	第61図 3号井戸状遺構実測図	59
第29図 4号掘立柱建物址柱根実測図	第62図 3号井戸状遺構出土遺物実測図	60
第30図 4号掘立柱建物址柱根実測図	第63図 3号井戸状遺構出土踏跡実測図	60
第31図 4号掘立柱建物址柱根実測図	第64図 3号井戸状遺構出土木製品実測図	61
	第65図 4号井戸状遺構実測図	62
	第66図 4号井戸状遺構出土木製品実測図	62

第67図	1号土壙実測図	63	第14図	3・6号住居址実測図	112
第68図	1号土壙出土遺物実測図	63	第15図	3号住居址かまと実測図	112
第69図	3号土壙実測図	64	第16図	3号住居址出土遺物実測図	112
第70図	3号土壙出土遺物実測図	64	第17図	3号住居址出土遺物実測図	113
第71図	1・2号杭列実測図	64	第18図	5号住居址実測図	114
第72図	杭実測図	65	第19図	5号住居址かまと実測図	114
第73図	掘立柱建物付近出土遺物実測図	66	第20図	5号住居址出土遺物実測図	115
第74図	掘立柱建物付近出土遺物実測図	67	第21図	6号住居址出土遺物実測図	116
第75図	2号掘立柱建物付近出土遺物実測図	68	第22図	7号住居址実測図	117
第76図	2号掘立柱建物付近出土遺物実測図	69	第23図	7号住居址出土遺物実測図	118
第77図	5号配石付近出土遺物実測図	70	第24図	8号かまと実測図	118
第78図	5号配石付近出土遺物実測図	71	第25図	8号かまと出土遺物実測図	119
第79図	4号列石付近出土遺物実測図	72	第26図	9・10号かまと実測図	126
第80図	1号溝状造構実測図	88	第27図	9号かまと出土遺物実測図	120
第81図	2号溝状造構実測図	89	第28図	10号かまと出土遺物実測図	121
第82図	1号井戸状造構実測図	90	第29図	11号かまと実測図	121
第83図	列石平面図及び側面図	91~92	第30図	11号かまと出土遺物実測図	121
第84図	列石平面図及び側面図	93~94	第31図	11号かまと出土遺物実測図	122
第85図	3号集石列実測図	95	第32図	2号埋石造構出土遺物実測図	122
第86図	4号集石列実測図	95	第33図	1号配石出土遺物実測図	123
第87図	中・近世遺構出土遺物実測図	96	第34図	2号配石実測図	123
第88図	73グリッド出土鉢貨拓影	96	第35図	2号配石出土遺物実測図	124
			第36図	5号配石実測図	124
			第37図	7号配石実測図	125
<b>石橋条里製造構第II地点</b>			第38図	7号配石出土遺物実測図	125
第1図	4号トレンチ地層図	100	第39図	1号列石実測図	126
第2図	6号トレンチ地層図	101	第40図	1号列石出土遺物実測図	126
第3図	7号トレンチ地層図	102	第41図	2号列石実測図	126
第4図	3号トレンチ地層図	103	第42図	3号列石実測図	127
第5図	5号トレンチ地層図	103	第43図	4号列石実測図	127
第6図	石橋条里製造構第I地点全体図	105	第44図	4号列石出土遺物実測図	127
第7図	9号埋石型状造構出土遺物実測図	104	第45図	2・7号配石付近出土遺物実測図	128
第8図	11号埋石型状造構出土遺物実測図	104	第46図	グリッド出土遺物実測図	129
第9図	1号・4号住居址実測図	107	第47図	1号列石付近出土遺物実測図	130
第10図	1号住居址出土遺物実測図	108	第48図	9号埋石型状造構出土遺物実測図	131
第11図	2号住居址及び1号配石実測図	109	第49図	傳状遺物実測図	131
第12図	2号住居址かまと実測図	109			
第13図	2号住居址出土遺物実測図	111			

### 石橋条里製造構第III地点

第1図 石橋条里製造構第III地点遺構実測図…別図	178
第2図 石橋条里製造構第III地点遺構実測図…別図	178
第3図 石橋条里製造構第III地点遺構全体図…147	179
第4図 分間図(古水田復元)…148	179
第5図 4号トレンチ平面図及び地層図…149	180
第6図 4号トレンチ付近実測図…149	180
第7図 7号トレンチ平面図及び地層図…150	181
第8図 8号トレンチ平面図及び地層図…151	182
第9図 9号トレンチ平面図及び地層図…152	182
第10図 2号トレンチ平面図及び地層図…152	182
第11図 1号トレンチ地層図…153	183
第12図 10号トレンチ平面図及び地層図…154	183
第13図 11号トレンチ平面図及び地層図…154	183
第14図 5号トレンチ平面図及び地層図…155	184
第15図 3号トレンチ地層図…155	184
第16図 6号トレンチ平面図及び地層図…156	184
第17図 出土遺物実測図…159	184
第18図 出土遺物実測図(近世)…160	184
第19図 出土遺物実測図(近世)…161	185
第20図 4号水路覆土出土錢貨拓影…161	185
第21図 石橋条里製造構坪命名図…161	186
第22図 中央道中心杭N463～N465付近地層図…162	186
第23図 AA' 橫断平面等高線図及び土壤含水分布図…164	186
第24図 AA' 橫断断面土堆積模式図…164	186
第25図 BB' CC' 橫断平面等高線図及び土壤含水分布図…164	186
第26図 BB' CC' 橫断断面土堆積模式図…164	187
第6図 73グリッド出土遺物実測図…178	187
第7図 51グリッド出土遺物実測図…178	187
第8図 52グリッド出土遺物実測図…178	188
第9図 62グリッド出土遺物実測図…179	188
第10図 63グリッド出土遺物実測図…179	189
第11図 73グリッド出土遺物実測図…179	189
第12図 1号配石実測図…180	189
第13図 1号配石、61グリッド出土遺物実測図…180	189
第14図 1号列石出土遺物実測図…181	189
第15図 69号溝出土遺物実測図…182	189
第16図 64号溝出土遺物実測図…182	189
第17図 46溝出土遺物実測図…182	189
第18図 74グリッド出土遺物実測図…183	189
第19図 121グリッド出土遺物実測図…183	189
第20図 111グリッド出土遺物実測図…183	189
第21図 67号溝遺物出土状況図…184	189
第22図 67号溝出土遺物実測図…184	189
第23図 51グリッド出土遺物実測図…184	189
第24図 41号溝出土遺物実測図…184	189
第25図 59号溝出土遺物実測図…184	189
第26図 11号溝出土遺物実測図…185	189
第27図 12号溝出土遺物実測図…185	189
第28図 42グリッド出土遺物実測図…186	189
第29図 83グリッド出土遺物実測図…186	189
第30図 84グリッド出土遺物実測図…186	189
第31図 84グリッド出土遺物実測図…186	189
第32図 123グリッド出土遺物実測図…186	189
第33図 102グリッド出土遺物実測図…186	189
第34図 2号溝出土遺物実測図…187	189
第35図 67号溝出土遺物実測図…187	189
第36図 83グリッド出土遺物実測図…187	189
第37図 62グリッド出土遺物実測図…187	189
第38図 鉄製品実測図…187	189
第39図 砥石実測図…188	189
第40図 錢貨拓影…188	189
第41図 錢貨拓影…189	189
第42図 41・42グリッド平面図…別図	189

### II 藏福遺跡

第1図 藏福遺跡グリッド配置図…170	170
第2図 7号・8号・9号試掘地層図…171	171
第3図 1号・2号・3号・4号・6号試掘地層図…172	172
第4図 藏福遺跡全体図…175	177
第5図 柱根実測図…177	177

第43図	51・52グリッド平面図	別図	第15図	4号溝出土遺物実測図	207
第44図	61・62グリッド平面図	別図	第16図	4号溝出土遺物実測図	207
第45図	63・64グリッド平面図	別図	第17図	6号溝出土遺物実測図	207
第46図	71・72グリッド平面図	別図	第18図	5号溝出土遺物実測図	208
第47図	73・74グリッド平面図	別図	第19図	1号土壙出土遺物実測図	209
第48図	83・84グリッド平面図	別図	第20図	1号土壙出土遺物実測図	210
			第21図	1号土壙出土遺物実測図	211
			第22図	2号土壙出土遺物実測図	212
III 保ノ下遺跡			第23図	3号土壙実測図	212
第1図	保ノ下遺跡付近図	195	第24図	3号土壙出土遺物実測図	212
第2図	保ノ下遺跡グリッド配置図	199	第25図	3号土壙出土木器実測図	213
第3図	14号試掘坑地層図	200	第26図	4号土壙実測図	213
第4図	18号試掘坑地層図	201	第27図	4号土壙出土遺物実測図	213
第5図	24号試掘坑地層図	201	第28図	5号土壙出土遺物実測図	213
第6図	保ノ下遺跡遺構全体図	202	第29図	据立柱建物址付近出土遺物実測図	214
第7図	1号土壙発掘段階別実測図	203	第30図	1号井戸状遺構実測図	219
第8図	1号土壤出土遺物実測図	203	第31図	錢貨拓影	219
第9図	6号溝出土遺物実測図	204	第32図	2A・2Bグリッド平面図	別図
第10図	石礫実測図	204	第33図	7A・7Bグリッド平面図	別図
第11図	1号住居址出土遺物実測図	205	第34図	8A・8Bグリッド平面図	別図
第12図	1号住居址出土遺物実測図	205	第35図	9A・9Bグリッド平面図	別図
第13図	2号掘立柱建物址実測図	206			
第14図	3号溝出土遺物実測図	207			

# 図版目次

## I 石橋条里制造構

### 石橋条里制造構第I地点

- 図版1 全景  
図版2 63—4C グリッド試掘セクション  
発掘参加者  
図版3 2号掘立柱建物址柱穴断面  
図版4 4号掘立柱建物址 柱穴断面  
図版5 4号掘立柱建物址柱穴断面  
図版6 1号住居址 3号住居址  
図版7 柱穴断面  
図版8 柱穴断面 1号住居址かまど  
2号配石 3号配石 4号配石  
図版9 5号配石①③ 周囲 4号列石  
5号列石  
図版10 3号井戸状遺構遺物出土状況  
図版11 4号井戸状遺構遺物出土状況  
図版12 1号土壙 1号土壙出土炭火米  
図版13 1号・2号杭列 紡錘車と竹杭 竹杭  
1号溝状遺構 2号溝状遺構 62グリッド  
ド土器群  
図版14 1号列石 6号列石 7号列石 8号列  
石 9号列石 10号列石  
図版15 4号集石列 1号井戸状遺構 2号井戸  
状遺構 2号井戸内側石積状況  
図版16 2号・4号掘立柱建物址・1号住居址出  
土遺物  
図版17 1号、3号、7号、8号住居址、5号配  
石出土遺物  
図版18 3号井戸状遺構 その他出土遺物  
図版19 2号掘立柱建物址柱根  
図版20 2号掘立柱建物址柱根  
図版21 4号掘立柱建物址柱根  
図版22 4号掘立柱建物址柱根  
図版23 柱根  
図版24 柱根 グリッド出土木製品 1号杭列

図版25 2号杭列、柱、礎板

- 図版26 3号、4号井戸状遺構出土遺物  
図版27 井戸状遺構内出土木製品  
図版28 4号井戸状遺構出土遺物  
グリッド出土錢貨・種核  
図版29 植物質遺存体(顕微鏡写真)  
図版30 植物質遺存体(顕微鏡写真)

### 石橋条里制造構第II地点

- 図版1 石橋条里制造構第II地点全景  
8号掘立柱状遺構  
9号掘立柱状遺構  
11号掘立柱状遺構  
図版2 1号・4号住居址 2号住居址  
図版3 3号・6号住居址 5号住居址  
図版4 2号埋石遺構 2号埋石遺構断面  
図版5 7号住居址 2号列石 3号列石  
4号列石  
図版6 ①2号住かまど ②5号住内8号かまど  
③3号住かまど ④3号住内9号かまど  
⑤3号住内11号かまど ⑥2号配石  
⑦5号配石 ⑧7号配石  
図版7 住居址内出土遺物  
図版8 住居址・その他出土遺物
- ### 石橋条里制造構第III地点
- 図版1 石橋条里制造構第3地点発掘前全景  
石橋条里制造構第3地点発掘前全景  
図版2 南方より1号溝を望む 1号住居址住居  
址内炭火米出土状況  
図版3 1号溝にかかる暗渠 1号溝と杭列  
図版4 4号溝附近 4号溝  
図版5 2号列石付近 3号列石とS X-1・2  
図版6 出土遺物(中・近世の遺物)  
紡錘車 4号溝出土古銭

## II 藏福遺跡

- 図版1 藏福遺跡全景 9号試掘セクション  
図版2 全景西方より 全景東方より  
図版3 51グリッド・62グリッド付近  
63グリッド・73グリッド付近  
図版4 1号集石列、2号集石列  
1号列石 柱穴と柱 柱穴  
図版5 1号配石 67号溝遺物出土状況  
図版6 出土土器及び種核  
図版7 出土木製品  
図版8 植物質遺存体〔顕微鏡写真〕1  
図版9 植物質遺存体〔顕微鏡写真〕2  
図版10 出土鉄貨

## III 伊ノ下遺跡

- 図版1 伊ノ下遺跡全景 1号住居址  
図版2 2号掘立柱建物址 6号溝  
図版3 1号土壙土器出土状況(1)・(2)  
図版4 1号土壙土器出土状況(3) 3号土壙遺物  
出土状況  
図版5 1号溝 1号井戸状遺構  
図版6 9AG炭化物をともなう焼土 出土鉄貨  
と種核  
図版7 出土遺物(土器)  
図版8 出土遺物(土器)  
図版9 出土遺物(石器)  
図版10 1号土壙出土遺物(石器)  
図版11 出土遺物(石器)  
図版12 出土遺物(石器・木器)

# 目次

## I 石橋条里製造構

### 石橋条里製造構第I地点

- 第1表 2号掘立柱建物址柱穴・柱計測一覧表 ..... 19  
第2表 5号掘立柱建物址 柱穴・柱計測一覧表 ..... 24  
第3表 9号掘立柱建物址柱穴・柱計測一覧表 ..... 25  
第4表 10号掘立柱建物址 柱穴計測一覧表 ..... 26  
第5表 11号掘立柱建物址 柱穴計測一覧表 ..... 28  
第6表 12号掘立柱建物址 柱穴計測一覧表 ..... 29  
第7表 4号掘立柱建物址 柱穴計測一覧表 ..... 33  
第8表 13号掘立柱建物址 柱穴計測一覧表 ..... 39  
第9表 14号掘立柱建物址 柱穴計測一覧表 ..... 40  
第10表 掘立柱建物址 柱穴計測一覧表 ..... 45  
第11表 出土遺物一覧表 ..... 73  
第12表 石橋条里製造構第I地点出土の種核 ..... 85  
第13表 石橋条里製造構第I地点出土木材の識別結果 ..... 97

### 石橋条里製造構第II地点

- 第1表 出土遺物一覧表 ..... 133

### 石橋条里製造構第III地点

- 第1表 出土遺物一覧表 ..... 159  
第2表 リモート・センシングによる地層表 ..... 163  
II 藏福遺跡
- 第1表 掘立柱建物柱間距離表 ..... 174  
第2表 藏福遺跡出土の種核 ..... 192  
第3表 藏福遺跡出土木材の識別結果 ..... 193

## III 伊ノ下遺跡

- 第1表 出土遺物一覧表 ..... 215  
第2表 伊ノ下遺跡出土の種核 ..... 218

# 石橋 条里制 遺構

# I 石橋条里制遺構

## 序 章

石橋条里制遺構は、本県の中央部で甲府盆地東南辺にあり、境川扇状地の扇央から扇端に広がっている。発掘地点は3ヶ所に分かれ、それぞれその性格、内容は異なっている。

第Ⅰ地点は境川扇状地の扇央にあって、境川右岸の約150mの地点、すなわち三門部落の西端に位置する。検出された遺構や遺物の時期は二時代にわたり性格、内容は、およそ次のとおりである。まず中・近世のものとして、溝群・石垣・列石・井戸などがあり、染付・黄瀬戸・天目などが出土した。溝群は細く浅いもので、その使用目的を明らかにする事は出来なかったが、水田の中に掘ったものであろうかと推測している。石垣・列石・井戸は屋敷の区域内にあったものかも知れない。次に奈良、平安時代のものとして、掘立柱建物址群、竪穴式住居址群、配石遺構群、集石列、列石、井戸状遺構、土壙、杭列などが検出された。これらからは日常雑器としての土器、須恵器や祭祀関係遺物などが出土した。祭祀遺跡としての性格が強いと考えられる。また踏跡をはじめ多数の木器や29本の柱根などが地下水位が高かったため腐らずに残っていた。これだけ多くの木製品が出土したのは本県では初めてである。

第Ⅱ地点は第Ⅰ地点より北150mに位置する。したがって地形や景観は同じである。ただ地下水位が第Ⅰ地点より低く1.2mくらいで浸透してくる事が異なる点である。ここからは平安時代後期の遺構と考えられる埋石堀状遺構に囲まれた中に、住居址群、配石群、埋石遺構などを検出した。

第Ⅲ地点は、境川と狐川の複合扇状地の扇端にあって、狐川左岸の約150mの位置にある。この地点は從来から言われてきた条里制遺構の中にあったので、その道路と水田址の検出に努めた。現在の路面より約40cm下に、条里制施行当時のものと思われる路面を検出し、道路の覆土では、これより現代に至る各時代の遺物が出土したので、引続いて道路は使用されていたとみられる。道路交差点では、道路を敷設するために破壊されたと考えられる平安時代後期の竪穴

式住居址 1軒を検出した。

したがって、境川扇状地扇端で、条里制（この正否は別として）が施行されたのは、11世紀後半と考えられる。敷衍して考えると、甲府盆地にある条里制遺構と考えられている多くは、この時期に施行された可能性がないだろうか。

水田址では、現在のものより小さいと思われるものを検出したが、長直し（耕地の合併や整形をすること）のために破壊されていて、確実なものは得られなかつた。



第1図 石橋条里遺構（第I、II、III地点）、藏福遺跡、保ノ下遺跡位置図



第2図 石橋条里製造構（第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ地点）、藏福遺跡付近図

# I 石橋条里制遺構

## 1. 石橋条里制遺構第I地点

### 第1章 遺跡の位置と環境

#### 第1節 位 置

石橋条里制遺構第I地点の所在地は、東八代郡境川村三門字西川町436番地?442番地の1とその周辺にあって、中央道中心杭S・T・A465の南と北にある。東経138度37分01秒、北緯35度36分30秒の位置である。

遺跡から東に三門と石橋の部落が続いている。南100mに境川が西流し、西1,300mに笛吹川が南流し、北900mに浅川の支流である孤川が西流している。浅川は笛吹川に入り、さらに下流で釜無川と合流して、富士川となり太平洋に注いでいる。八ヶ岳を北西に、南アルプスを西に眺望でき、手前に甲府盆地を一望することができる。甲府市までは車で約20分の位置にある。

なお詳しくは序章を参考にされたい。

#### 第2節 環 境

##### イ、自然環境

甲府盆地東側は、御坂山脈が連なっている。本遺跡は、この山脈から流出する境川扇状地扇尖に存する。

御坂山脈北西麓（盆地側）は、地形が、その中央で二区分される。すなわち、八代町南部から南西に約16km続く市川大門町まで曾根丘陵があり、境川村北部から北東に約13kmの勝沼町まで、浅川、金川、京戸川、日川などによって形成された標式的な扇状地がある（序章第1図・境川村誌P37第7図P36第6図参照）。

境川扇状地は、この二区分する境界にあり、境川の名称も、これに拠って発生した地名のように思われる。この境川扇状地は標式的な曾根丘陵地形である坊ヶ峰と小黒坂部落のある丘陵との間をぬって流出する境川によって形成された。言い替えれば、境川村と八代町が接するこの地域には、曾根丘陵の下に、境川、孤川などの小扇状地があるわけである。

遺跡付近の微地形は、勾配は1,000分の31.7（傾斜角1.8度）で北西に低くなっているフラットな場所である。発掘地点付近からこの傾斜角がややゆるやかになっていて、標高は27.3mから275mの間に入っている。

今はこの付近全体は果樹園が多いが、近年まではほとんど水田であった。從って段々畑になっ

ていて、畠と畠との落差は50cmから1mくらいである。遺構は、中世のものは水田が開かれて後に構築されたので、比較的残りは悪く、また奈良・平安時代のものは現地表下1~1.2m位深い層にあったので、比較的残存率は良かったと言えるであろう。

地下水位は非常に高く50~100cmで浸透してくる。浸透水は、降水後は著しく多いが、3・4日晴天が続くと際立って少なくなる。湧泉も至る所にあって、発掘区内だけでも4~5ヶ所あり数10m下ると灌漑用水路となる。湧泉があると、そこから私設堰が引かれて、公の堰へと流れ込んでいる。スプリングラインは第二地点の北側150mから第一地点の西側100m前後の所に弧を描くようにあって、標高は約269mである。そして、スプリングラインを境に西と北側には条里制造構があり、この上方は湿地帯と現集落がある。

南に流れる境川は、この付近では40~50cm高い天井川となっている。

地質は『境川村誌』自然環境編（境川村編、西宮克彦、昭和53年）から、抜粋、要約するところとおりである（境川村誌P39第9図参照）。

この遺跡に近い4ヶ所の深井戸、すなわち石橋（深度130mと140m）、三門（60m）、大坪（50m）から採取したボーリングコア資料と、これらの地域で行った電気探査の結果等で総合判断すると、境川の平地地区は、表土の厚さは約5m前後で有機物を比較的多く含む砂質泥からなり、その下位約22mは、砂礫層は石英閃綠岩や石英安山岩等の巨礫も含まれているが、ほとんど拳大程度の花崗岩、花崗閃綠岩、粘板岩、硬質砂岩、チャート・ホルンフェルス、安山岩等の遠来砾を多く含む砂から成り立っている。

表土並びに最上位の砂礫層は沖積層に、それ以下は洪積層であろうとしている。

この沖積層は、今から約1万年前に始まる最も新しい地質時代に、笛吹川や御坂山系から流れ出る渓流などが運んで来た粘土や、砂礫を堆積させて造られつつある地層である。また境川村の平地の発達は悪く、洪水時の浸水区となりやすい低地帯地域であるという。

## 四、歴史的還境

古墳時代とそれ以後における本県の政治、経済、文化の中心は、甲府盆地東部にあり、その置かれた場所は笛吹川下流域から上流域へと遷った。

中道町下曾根に巨大古墳甲斐銚子塚が古墳時代前期に築かれた後、後期には御坂町下成田に国造級の被葬者と考えられている巨大な石室をもつ姥塚古墳が築造され、さらにその上流春日居町には、甲斐國最初の国府が置かれ中心地が移動したといわれる。

中心地が移動したとは言え、この間、境川村には後期古墳が50基以上築造されており、南西に隣接する中道町にも多くの後期古墳がある。ただ、曾根丘陵地帯では後期古墳時代に比定される真間、鬼高郡の遺物を出土する確かな集落址は、少ししか知らない。

その後の奈良・平安時代の遺跡は、上流域の諸扇状地に著しく多く、濃厚になり多種多様な遺跡が形造られる。これに比べ曾根丘陵地帯では以前のままか、それより減少するようである。少なくとも広く濃密になる事はないようである。

石橋条里制遺構第Ⅰ地点が所在する境川扇状地でも、平安時代の集落は拡大していくようである。

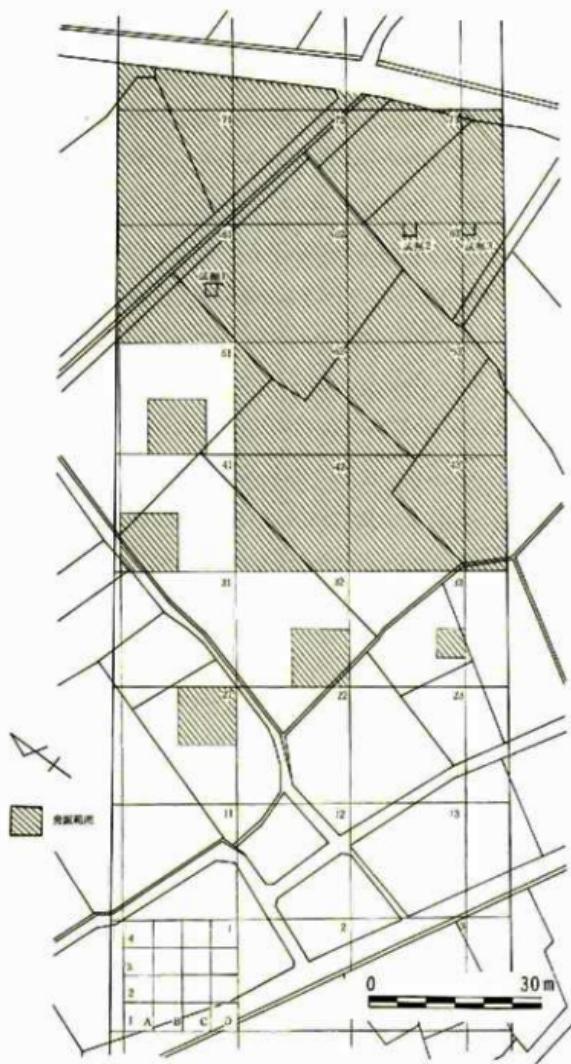
これについて遺物の分布状況を調査して、聚落のあり方等を明らかにした資料はない。一部を裏付けるものとして以下の事をあげておく。筆者が見たところによると、石橋や三門の部落内やその周囲には、広く濃密な国分期の土師器散布地が見受けられる。また石橋条里制遺構第Ⅱ地点の発掘調査によって明らかになったように、この地点付近では条里制（条里制関連遺構と考えるのが適切かも知れない）は、平安時代後期の11世紀後半に施行されたものであろう。水田として開拓されたのは、文献史学によって明らかにされている事象を考えあわせてもこの頃と考えられ、ひいては、境川村から八代町に広がる一連の条里制遺構は、一般的にはかなり広い範囲が平安時代後半に開拓されたと考えられる。さらに、武田氏の親族衆に石橋八郎信継があり、『甲斐国志』によると石橋に住んでいたとあって、その活動期はおおよそ平安時代末期から、鎌倉時代初期にあたるようである。『境川村誌』に掲載されている絵図（242ページ、元禄11年、大須賀宣方氏蔵）によると、石橋部落を囲むように（南部は外れているが）東西600m、南北490mの方形の網張りと思われるものがある。中に方形に区画する道が通っており、鉤の手や筋違い、二又に分かれる道が見られる。また字名に人通り、仲町、先座敷、毘沙門、本光寺、万福寺、宮の前、天神、佃等も網張りの中や付近にみられる。

以上のような状況を総合して考えると、境川扇状地は、平安時代後期にはかなり広い範囲に聚落があったと思われる。

本遺跡や石橋条里制遺構第Ⅱ地点から、重なったまま融着した須恵器の破片が4個出土した。これらは焼く際に失敗したものと思われる。本遺跡からは、失敗作に類似した須恵器破片が多量に出土しているので、近くにある登窯で焼かれたものと考えて差しつかえないであろう。

『境川村誌』村の歴史（前掲、上野晴朗）によると、登窯が藤垈～在家、牛居沢、小黒坂立石、大窟にある神社の敷地、手古松の北の台地（山田）、小黒坂の熊野神社境内の五ヶ所を掲げている。この他に三門の清水信吾氏等が、三門のお墓（口明塚古墳所在地）で墓穴を掘った際、斜面で多量の焼土と須恵器破片を発見し、焼土は登窯のような形状をしていたという。以上のように聞くところによれば、その形状も登窯によく似ているし、その際発見した、重なって融着した須恵器の失敗作破片も見せて頂いた。また牛居沢の窯跡は筆者も実見している。幅50m、深さ40m位の沢にあり、北東に分かれる支谷の北斜面で、真赤な厚い焼土が幅1m、長さ約3m、傾斜角30度位ある場所を見ている。ここからは同村誌P170第11図の須恵器破片を小林藤吾氏が採集しているので、やはり窯に間違いないであろう。全て登窯跡は、曾根丘陵に入り込んでいる谷の斜面を利用して構築されている。原料である陶土は、牛居沢の場合には窯のある周囲の崖に露出している。

以上、石橋条里制遺構第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ地点に關係した点を略述した。



第3図 石橋条里遺構第I地点 グリッド配置図

## 第2章 調査の経過

石橋条里遺構第I地点の発掘は昭和55年4月2日に開始し、同年11月21日に終了した。日曜日と祭日を休み、延約8ヶ月間にわたって行なった。

発掘予定面積は約9,800m<sup>2</sup>であったが、このうち遺構を検出した範囲は約6,300m<sup>2</sup>であった。

地区全域に中央道の中心杭を基準として、グリッドを設定した。20m×20mの大グリッドを作り、この中をさらに5m×5mの小グリッドに分割して、その名称を図のとおりに付した。

まず発掘予定地における遺構の分布状況を把握するために、大小グリッドを考慮しながら数グリッドおきに、千鳥に試掘を行なった。どのグリッドでも、表土の下は黒色土混りの礫層があり、数ヶ所には50cm位の大きい転石も見られた。これは境川によって供給された氾濫層である。これは作業を著しく困難にし、発掘期間が大幅に遅れた原因となった。また結果的には、この遺跡の表土に散布していた土師器片は、氾濫によって上流から運搬されて來たものである事がわかった。

次に主要な遺物と遺構を検出した経過の概略を記す。

発掘区北方の80台グリッドから試掘を始めると同時に、40台～70台の各グリッドで小試掘ピットを設定した。

4月11日に71グリッドの3に幅20cm、深さ3～10cmの小さな数条の溝群を検出し、これを第一溝状遺構とした。溝の底にはシルト層が少し堆積していて、その中から志野系陶器破片や土師質土器破片が出土した。続いて4月19日には第二溝状遺構を検出した。溝は第一溝状遺構よりやや広く深いが、その性格は同じものと考えられる。

6月10日頃までに中世の遺構、1～4号列石、1、2号集石列、1号井戸状遺構や平安時代の竪穴式住居の1号住居址などを検出した。6月26日に2号掘立柱建物址の柱を氾濫層（砂疊層）の下から検出すに至った。30日にはこの2号掘立柱建物址の床面と思われる文化層から、土製壺玉と土製管玉が出土し氾濫層の下にも遺構が存在することが確認出来た。2号掘立柱建物址の北10mの位置で、7月23日に立石をもつ5号配石を国分式土器を伴って氾濫層の下から検出した。

一方8月下旬までに、中世の遺構である列石6・8・9号なども検出し、その後8月30日には3号住居址を一軒だけ検出し、これに統いて6、7号住居址を検出した。9月から11月には、竪穴式住居址群、掘立柱建物址群の精査を続け、この終了に近い11月11日と18日に3号井戸状遺構及び4号井戸状遺構を検出した。3号井戸状遺構からは踏鏡など多くの木製品が出土した。

この間、約8ヶ月間は砂疊層と湧水と降雨による水没で発掘は非常に困難をきわめた。

なお発掘調査速報「石橋田圃条里遺跡」（第I地点）を次のとおり発行した。

No.1 昭和55年5月9日 No.3 ✕ 7月9日 No.5 ✕ 12月23日

No.2 ✕ 6月13日 No.4 ✕ 9月2日

### 第3章 層序

本遺跡付近の地形、地質については、第1章第2節の「自然環境」を参照されたい。

この遺跡では扇状地の扇央といってよい地層が形成されている。基準層序はグリッドの基準点を連結した線とし、それはその流れの方向に同一のものと、やや直角のものとになった。

なお層序番号はグリッド毎、遺構毎に付けてあるものもあるので、必ずしも統一していない。同一番号が同一地層とは限らない。

地層は扇状地の特有な層序で非常に乱れていて、基準層序とするような確かな地層を形成していない。しかし、大きくは表土（耕作土）、シルト層、礁を包む泥炭層（ローリングした土器器、骨片等も含む）、遺構包含層に分けることが出来る。

第6図に示したように61、62グリッドの中心にあるトレンチは、そのポイント61グリッドC-3から63グリッドA-3に至る30mの間に設定した。これは1号列石と2号掘立柱建物址を貫通している。

ここには表土とその下層（1・2・3層）は図に載っていない。1号列石は発見時は二段積であったが、上部を破壊されたと考えられる。高さは約20～30cmで61グリッド側が低くなっている。このグリッドには、石垣は破壊されていてかかっていないが2号掘立柱建物址の柱穴の一部がかかっており、Ⅳc層N.2である。Ⅳc層はⅣa層から掘り込まれている。Ⅳa層は拳大から人頭大の石を中心として、大は70cmから小疎までを多量に含む泥炭層である。表土からⅣc層の掘込面までの深さは約90cm位である。Ⅳa層はこのトレンチのはば全域に見られる。2号列石は第6図のⅣa層の上にあり、62グリッド3-Aと同3-C間では、Ⅳ層とⅤ層の間に石垣があったことを示す落ち込みがある。

52、62、72グリッドの中心を通るセクションは52グリッド3-C点から72グリッド3-C点までの約40mである。72グリッドにある5号配石はⅣ層で被覆されていて、この層の下が生活面である。62グリッド3-C点の南にある2号掘立柱建物址も、生活面は同じでⅣ層上有る。62グリッド3-Cと1-Cの間にある1号土壁は低く、その生活面はⅣ層の下にある。この面には50～20cm位の石があり、人の手によって運ばれて来た様子もうかがわれる。地層では前記の建物との関連・前後関係は掘めなかったので出土遺物の項で述べることにする。

これら前述した2号配石、2号掘立柱建物址の遺構面は同一であり、その下に1号土壁はあるものと思われ、2号配石、2号掘立柱建物址のいずれも水平である。この上部に泥炭層であるⅣ(a)層がある。

53グリッド1-A点から63グリッド1-A点までの地層図は20mである。但し表土から第3層までは省略している。4号住居址などの掘立柱建物群の上層を横断し、3号井戸状遺構の横と1号柱から10号柱などの柱穴群を通る。建物群付近ではその生活面となる第25図1層

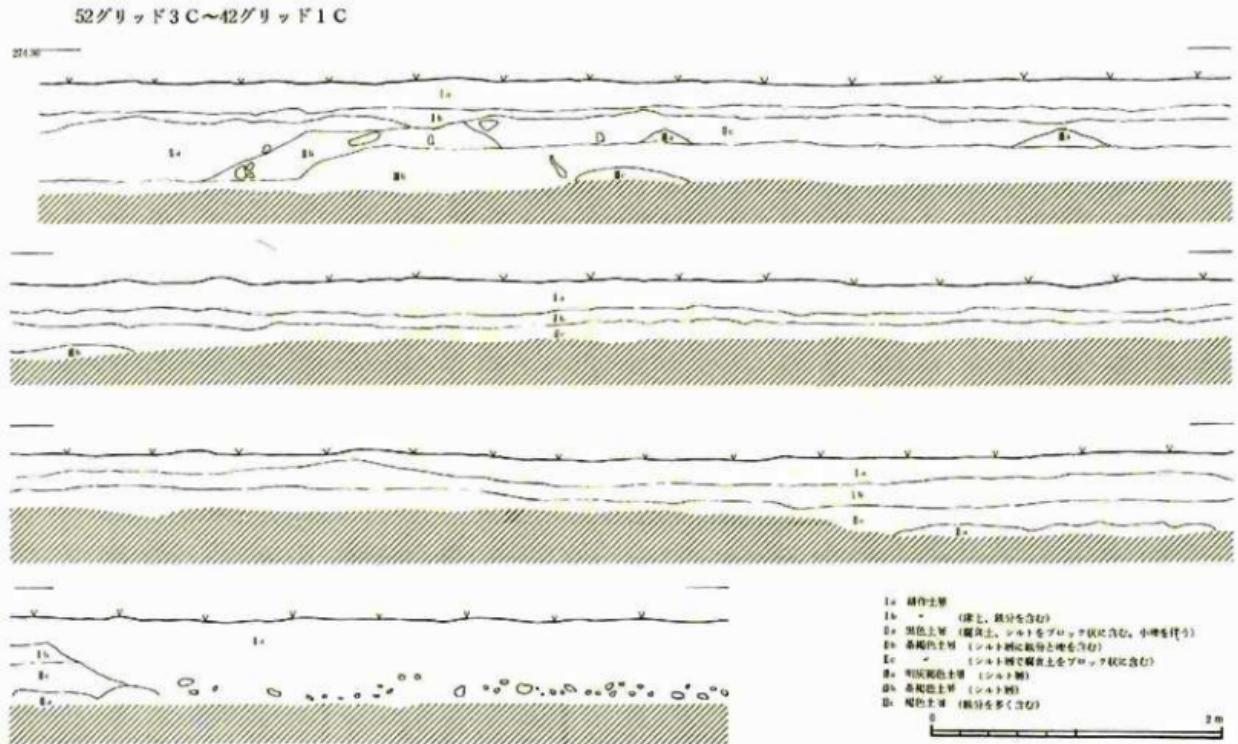
よりⅡ層上は第5図Ⅴc層(氾濫層)である。この北東にあるⅣ層の礎層は、建物群付近では柱根より下にあった。さらに、1号住居址付近まで南になると上に出て、その掘込面となっていたと見られた。建物群を建てる以前に低くなっていた所に氾濫で礎が堆積したものであると考えられる。3号井戸状遺構付近と柱穴群の地域では地層が著しく乱れている。この生活面は、掘立柱建物址群より下層にあり、乱れているために、その生活面を確定出来なかつた。その高低差は約20cmあり、生活面の標高は、4号掘立柱建物址で273mあり、柱穴群と3号井戸状遺構付近では273.05m前後である。

第5図は、53グリッド1—A点から53グリッド1—B点までである。これは2号掘立柱建物址の隅の上層図であるが、建物付近では地層が非常に乱れている。

71、81グリッドにある溝群にかかる地層は第80図である。6本の溝を横切る線は71グリッド2—D点から81グリッド2—D点までの20mである。ここの地層は上からⅠ層—表土(水田耕作土)、Ⅱ層—礎混入腐食土層、Ⅲ層—腐食土層、Ⅳ層—礎混入腐食土層となっている。溝は全て約4cmの厚さのあるⅡ層下部からⅣ層を掘り込んでいる。住居址群付近との地層の対比は出来ないが、中世遺物を出土したのでこれより上層であるということは言える。溝の深さは3~4cmであり、その底にはわずかにシルト層の堆積が認められた。これは水の運搬作用によって堆積したものと考えられる。この線と直交する地層図は、81グリッド1—C点から82グリッド1—A点までの15mである。これは二本の平行している溝を切っていて前述した状態と同じである。ただ、床面は82グリッド側が約20cm高くなつていて、この遺構を性格づけていると考えられる。

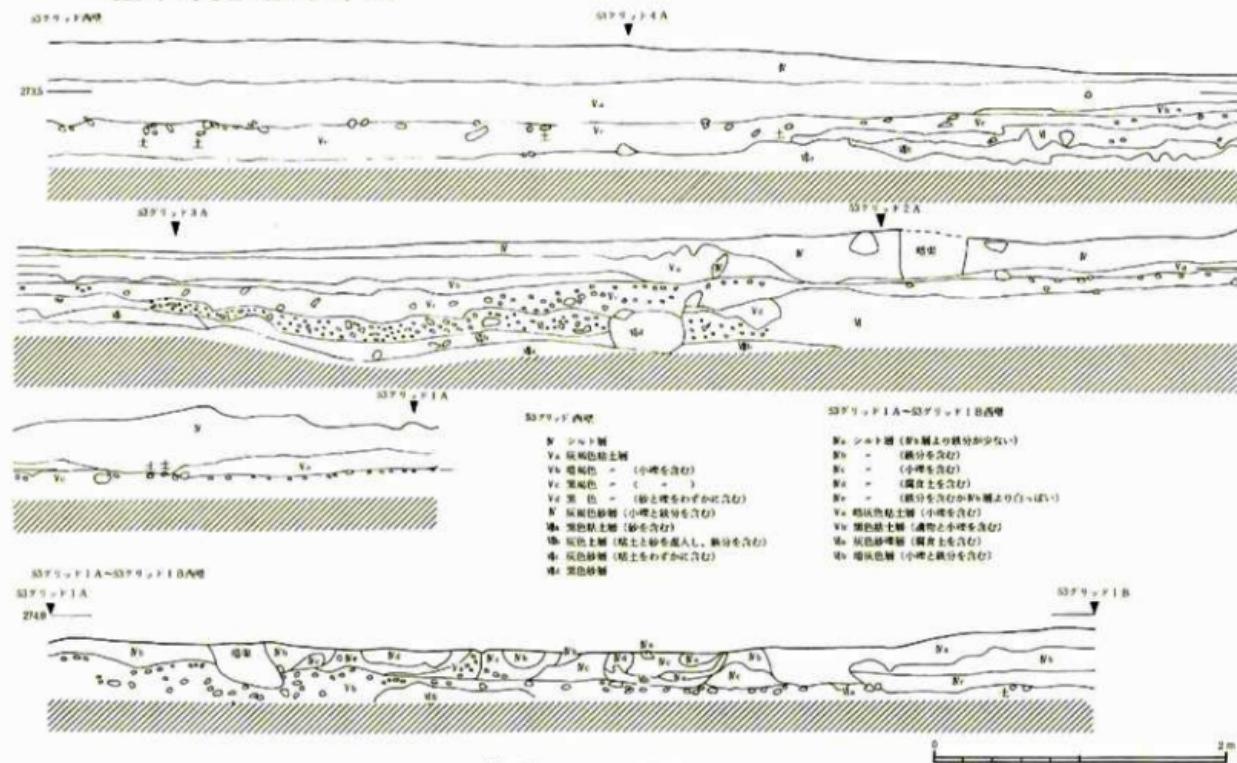
最後に63グリッドと64グリッドにあけた試掘の地層図第8図を説明する。前者は4号集石列の右側に、後者はその左側に位置する。前者には氾濫層であるⅣ層の下にあった配石の一部が下層に入っている。この配石は4号集石列と同一生活面上にあり、さらに3号住居址とは同一生活面上にあるといつてよい。後者はⅣ層が氾濫層で著しく礎が多く、大は人頭大から、極小礎に至るまでを含んでいる。

石橋条里制遺構第1地点の地層は、境川扇状地の氾濫原であったため、遺構は礎層の中にあつたといつて過言ではない。従つて地層も極めて見分けにくく、遺構を層序順に確實に時代決定することは困難であった。

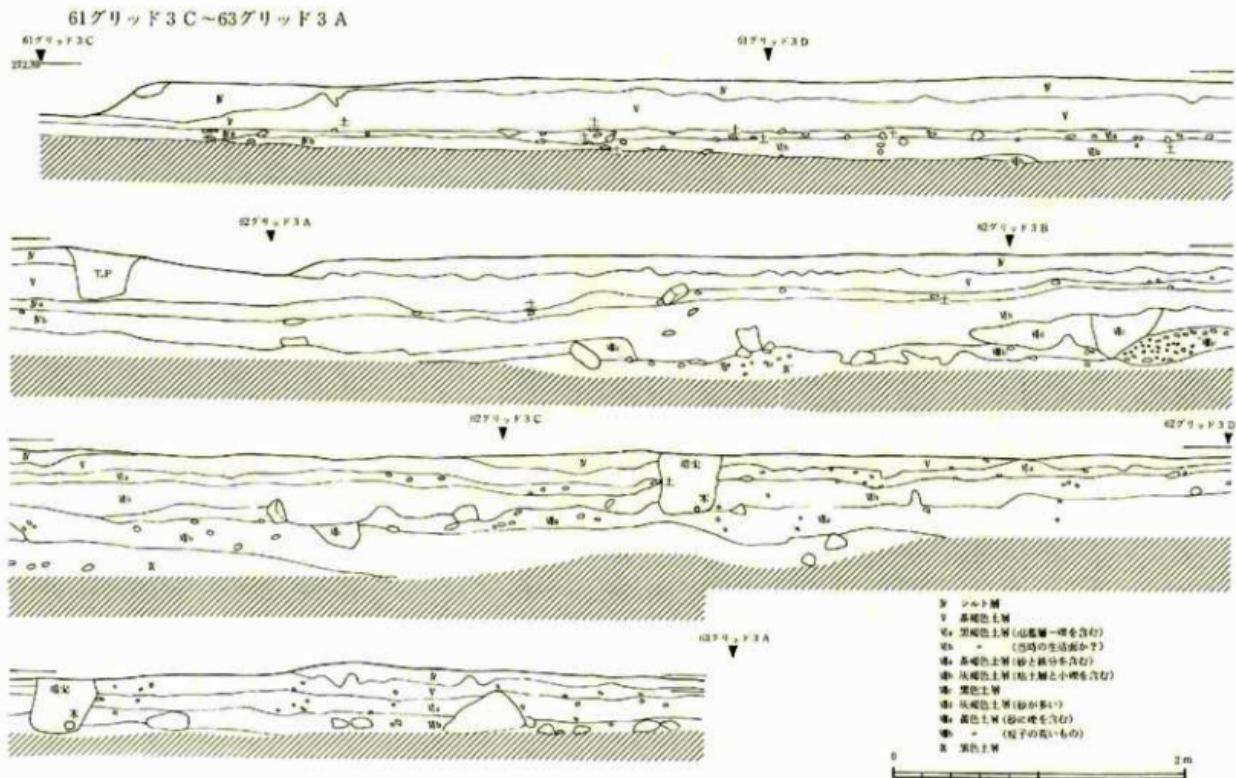


第4図 トレンチ地図 (1:40)

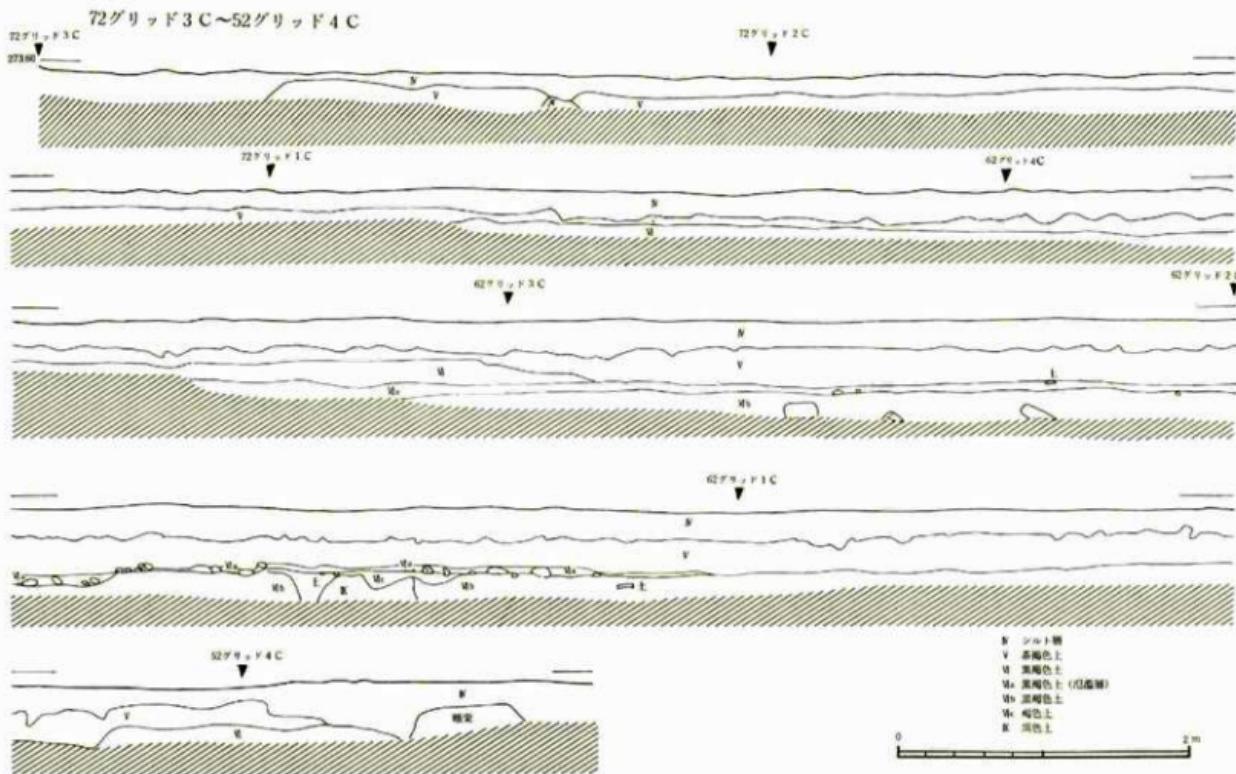
53グリッド5A～53グリッド1A



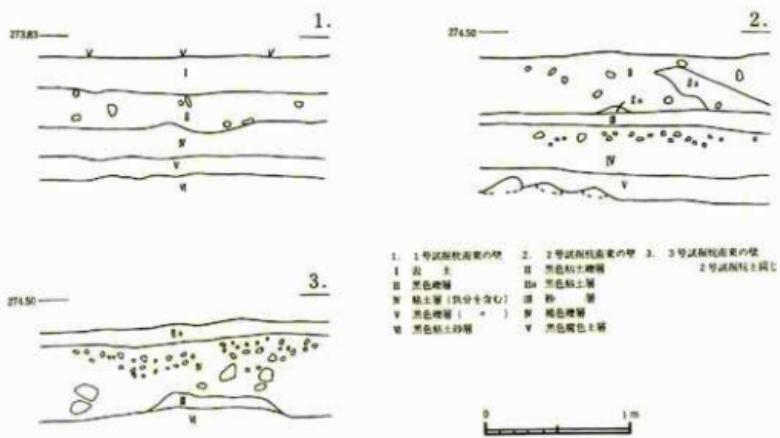
第5図 トレンチ地層図 (1:40)



第6図 トレンチ地層図 (1:40)



第7図 トレンチ地層図 (1:40)



第8図 試掘地層図

## 第4章 遺構と遺物

石橋条里制遺構第1地点で検出した奈良・平安時代と中・近世の遺構の分布状況・遺物についてその概略を示しておく。

遺跡の範囲は微地形から考えると、発掘区の南側から東側・北東側にかけて広がっている可能性がある。発掘区域南方50mあたりで側溝の拵幅工事中、焼土と土器を伴う住居址らしいものを断面で発見した。ただ1号住居址から約30m南までは、今回の試掘では遺構はなかった。東側から北東側の路線外にかけて若干遺物が散布している。このような集落のあり方として散村的に広い範囲に分布していることも考えられる。

発掘地域内の遺構の分布状況は、平安時代のものは南の地域が中心をなすといってよい。最南端に竪穴住居址が4軒、この北にはほぼ同生活面上に掘立柱建物址が7棟と4号井戸状遺構があり、統いてこの北側下層に3号井戸状遺構と柱穴群があり、柱穴群の中には9本の柱根も発見されている。柱穴は連結出来なかつたが、建物址と考えざるを得ない状況である。1号畔、3号土塙も同一生活面上にある。これらより上層に6号列石（石垣）とこれを挟むように1号列石（石垣）と8号列石がある。1号畔の東にこれより上層に2号掘立柱建物址があり、さらに北にこれとほぼ同一生活面上に5号配石と3号住居址が、また南に4号列石（石垣）がある。最北端に中世か近世の2ヶ所の溝群がある。

これらの遺構からは、平安時代の土器、須恵器、灰釉陶器や中世末か近世初頭に生産されたと考えられる天目、黄瀬戸、染付などが出土した。

## 第1節 奈良・平安時代の造構と遺物

### 掘立柱建物址と遺物

前述したように調査は2号掘立柱建物址付近を10月中、他は11月に行なった。この建築時期は大きく二時期に分けることが出来る。その一は52、53グリッドにまたがっていて、最下層に包含されていたものでA群とする。他のものは53グリッド1—A点付近と62グリッドにあったものでB群とする。さらにA群・B群とも建物が重複しているので、若干であるが、時期差があると思われる。これを一群・二群・三群のように分けることとする。(第36図)

柱穴の上場の平面と柱の断面形状を5形式に分けて説明する。I式は隅丸方形、II式は□>○で丸味のある方形、III式は○>□で円に近い方形、IV式は円形、V式は不整形とする。A群の柱穴の総数は21個である。建物として4個以上の柱穴が連結出来るものはないが、柱根の残存と考えられるものが柱穴No.1、2、3、4、7、8、10、11、61、78の中に各1本ずつ合計10本あった。この中にはNo.3、7、11のように腐食があまり進まず比較的残存のよいものや、柱穴No.5のような礎石と思われる敷石があるので、掘立柱の建物であったことは確かであろう(図版7)。しいて連結するとすれば柱穴No.1、3、8で柱の中心間距離はNo.1とNo.8の間で340cm(1間5尺2寸)、No.3とNo.8の間で155cm(5尺1寸1分)である。

柱穴の形状は、上場でみるとNo.3がII式、No.5とNo.6がIII式、他のNo.1、2、4、7、8、10、61はIV式である。その最大径は、それぞれ107cmから30cmの間にあり多様で、平均は58cmである。深さは35cmから17cmの間にあり、平均は28cmで、柱穴としては浅い。この柱穴は砂層の中に掘り込まれており、その上層に黒色腐食土層があったのであるが、生活面は確定出来なかった。しかし、8m西にある4号井戸状遺構とはほぼ同じレベルかやや下層になる。

柱根の底の標高は、最高272m95cmから最低272m67cmの間にあり、その平均は272m80cmである。

第10表は柱穴の平面形、深さ、最大径、柱根の断面形、最大径、残存している長さ、底の標高を掲げたものであるが、これらを勘案しても同一建物として柱穴を連結することは出来ない。

柱の断面形状はNo.10がI式、No.7がII式であり、他の8本は全て円形である。これでみると全部の柱が円形か方形ではなく、一部のみが面取りをしたものであろう。

また、柱が残存した柱穴にも2基だけII式とIII式があるが、必ずしも方形の柱穴に方形の柱が入っているとは限らない。

次に遺物としての柱根について説明する。柱根はほとんどのものが腐食が進んでいて、建築当時の現状を留めていない。さらに炭化も進んでおり木質の状態も悪くなっているが、一応現状での長さ、最大径、材質の種類等を別表に掲げておく。

1号柱は断面が円形で、丸太のまま使用したかのようである。底はやや平である。2号柱は腐食して僅かに中心部が残っているだけである。年輪からみると一本の木をそのまま使っ

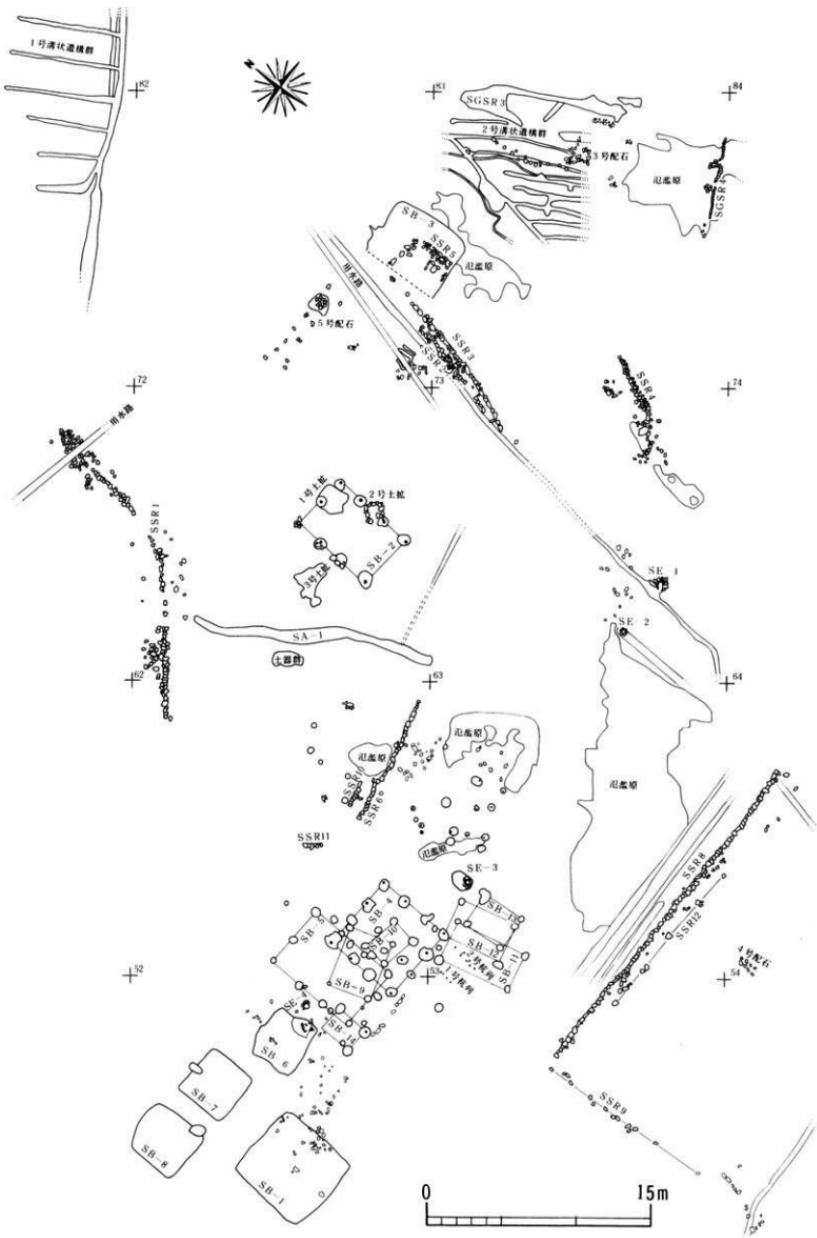
ている。3号柱は比較的よく残っているが、表面は旧状を留めない。割材のようでもある。底は中心が平で周囲が丸味を帯びているので、11号柱にみられるように、底の回りを削り取ったものかもしれない。底より5cm上が凹んでいるのは切り込みを入れたためであろうと考えられる。切り込みが入っているものは、A群では3号柱だけである。4号柱は周囲は腐食して、中心部と4本の節が残っていて旧状は留めないが、節だけは腐食しないで残ったものとすると、柱の太さがわかる唯一のものである。丸太柱とすると直径が約16cmであり、1本の木をそのまま使用したものであろう。6号柱は割材であって断面円形状であるが、方形であった可能性もある。底部は平であるが、鋸で切ったものとは一概には言えない。底部には60～70本の年輪が見られ、これから推測すると直径50～60cmの原材を4～5本に割ったものであろう。根本から上は腐食が著しく、現状は三角錐状になっている。7号柱は僅かに木片が残っていただけで、考察の余地がない。8号柱も節の部分だけが腐食をまぬがれて3個の木片が残っていただけである。10号柱は底面の形からみると方形の柱であったと思われる。現形、材質等が6号柱と近似しているので、同一原材ではなかろうか。11号柱はその一部分が最もよく保存されており、柱の形状や加工痕をみることが出来る。断面円形で一本の木をそのまま丸太柱として使用しており、最下端を四面から広く鉈状工具で削り取り加工しているが、他の部分に加工痕はない。年輪は60～70本を数えることが出来る。

以上各柱について説明したが、共通してみられる点をあげておこう。まずはほとんどの柱が原形を留めていないことで、B群に比較して著しく保存が悪く充分な観察が出来ないことであった。また全ての柱は上端になる程細くなり、尖っていることである。これは地表に近い程腐食率が高かったためであろう。

建物の使用年代については、この遺構に伴う土器が出土しなかったので、隣接する3号井戸状遺構から出土した土師器によって判断すると、8世紀の国分寺初頭に比定出来ると思われる。

B群はA群より後の時期の建物である。42、43、52、53の各グリッドにまたがっている8棟（4号、5号、9号、10号、11号、12号、13号、14号）と62グリッドにある2号掘立柱建物址の合計9棟である。前者は重複しており、後者はこれから北東に約20m離れて1棟だけである。この中には9号掘立柱建物址のように柱穴の大きさや柱穴間の距離が長過ぎたりしている理由で、建物とするのに十分な条件を備えていないものもある。また14号建物のように3個の条件の良い柱穴とそれに伴う2本の柱根があるにもかかわらず、柱穴が1基足りないものもある。この他に明らかに柱穴であろうと考えられるものでも連結出来ないものもあったり、柱穴としては貧弱なものもある。

柱穴の平面形状、深さ、最大径や、柱の断面形状、最大径、現状の長さ、柱の底の標高は別表に、柱穴の形状は模式図に、柱間距離、方向、柱穴間距離は柱間実測図と柱穴間実測図に示した。なお柱間距離は柱の中心点間を、柱穴間距離は連結線の交点間を測定した。従って柱間は柱の位置がずれている場合で、一直線上にのらなくても正確な距離であるが、柱穴



第9図 石橋条里製造構第1地点全図

間は柱の位置を柱穴の下場を勘案して定めたので、方向や距離等は必ずしも正確ではない。

柱穴の切合関係や建物の方向や造物等から2号、5号、9号、10号、11号、12号掘立柱建物址が古いと考えられこれを一群とし、その他の4号、13号、14号掘立柱建物址は新しいと思われるるのでこれを二群とする。ただし一群、二群ともその中の新旧の差はつけ難いものが多い。

方向別に建物を区別すると、北から東に $7^{\circ} \sim 8^{\circ}$ 向くものに2号、10号、11号、12号建物があり、 $0^{\circ} \sim 3^{\circ}$ の間にに入るものに4号、5号、13号、14号の4棟があり、例外として9号建物が北から西に $17^{\circ}$ 向いている。これは建物の新旧を区別する一要素ともなる。

また柱穴に柱根が残っていないものは、腐ってなくなつたのではなく、その建物の後に新しく建物を建て替えるために柱を引き抜いたので、残っていなかつたと考えてよいであろう。そうすると腐朽して使用出来なくなつて建て替えたのではなく、伊勢神宮の遷宮のような定期的、祭祀的な意味で建て替えたことが考えられる。

なお、2号掘立柱建物址以外の建物から伴出した土器についてはこの項の最後に一括して説明する。

B群の建物について古いと思われる順に説明しておく。まず一群は次のとおりである。

2号掘立柱建物址 62グリッドで1棟だけ孤立して最初に発見された掘立柱建物址である(第10図)。8本の柱根が残っていた。隅にある109号柱穴だけは残っていなかつたので柱間距離は柱穴の下場の中心を測定点とした。

南北に長い建物で、北側の梁間口には柱があるが、これに対応する南側梁間口には柱がない。また北側の101号柱は明らかに外側に突き出でていて変形形をなす。建物全体は北側で狭くなつており、109号柱穴は極端に内側に入つてゐると思われる。

第11図に示したように、1間の柱間距離は比較的不統一であるが、平均柱間距離は192cm(1間3寸4分)で1柱間が1間(181.8cm)を越える間が多いことが注目される。柱の断面はほぼ円形であつて柱穴と同形であることは、この建物群の中でも古い時期に立てられ、4号掘立柱建物址と同時期まで使用され、同時に破壊されたことを示唆している。方向は北から東へ $8^{\circ}$ 向き、古い建物の基準線となり得ると考えられる。

全ての柱根には切り込みがあり、立っていた時のその方位は、ばらばらで規則性はない。切り込みを入れた目的はわからないが、動く事を防ぐためにでもしたものであろうか。昔は穿孔して入れる例が多いようであるが、ここでは残存していなかつた。

柱根は、106号柱を除いて、全て北西に傾いていた。4号掘立柱建物址と同様このことは後述するが、洪水によって傾いた可能性があり、洪水伝説を裏付けるものかも知れない。

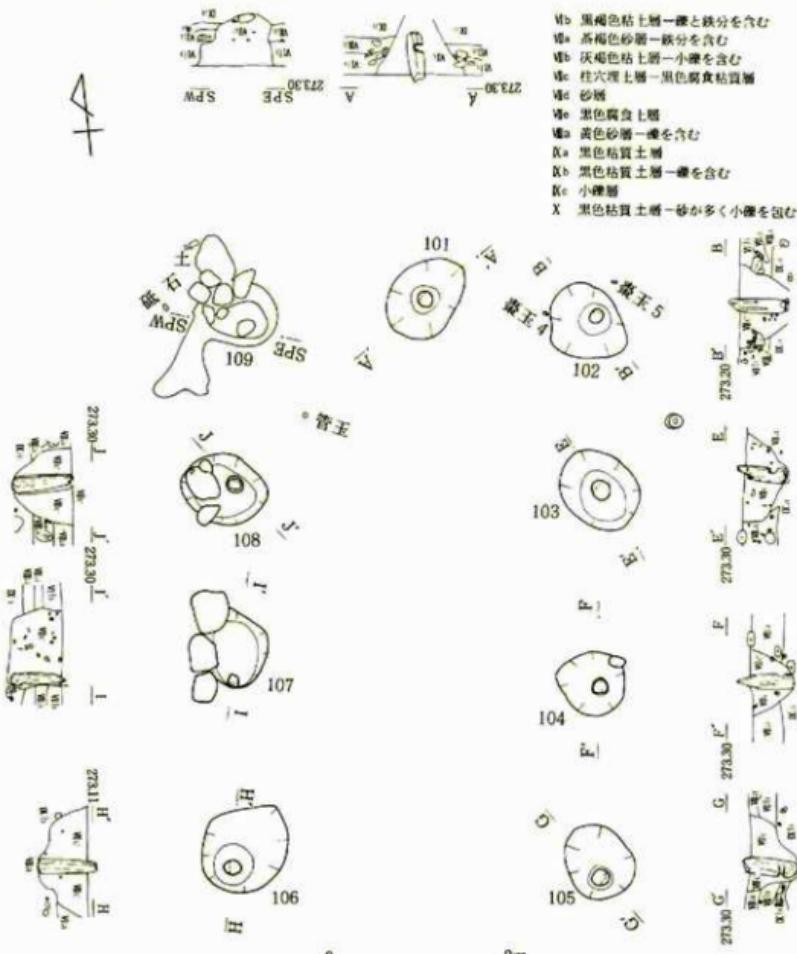
柱の傾きの平均は $7^{\circ}9'$ でその平均方位は北- $53^{\circ}49'$ 一西である。仮に建物の高さが5mとすれば、最上端で約62cmの傾きとなる。

柱穴の形状は不整形な102号柱穴を除いて全てD形である。柱は柱穴の最も低い所に立てられているが、101号柱だけは柱穴の底についていない。また102号柱の下には底に石を敷いて高さを調整している。柱穴の深さの平均は54cm、最大径の平均は91cmで全掘立柱建物址

の中で最も大きい。

ここからは土製管玉2個と土製聚玉1個が出土している。やはり祭祀的な遺構とみてよいであろう。

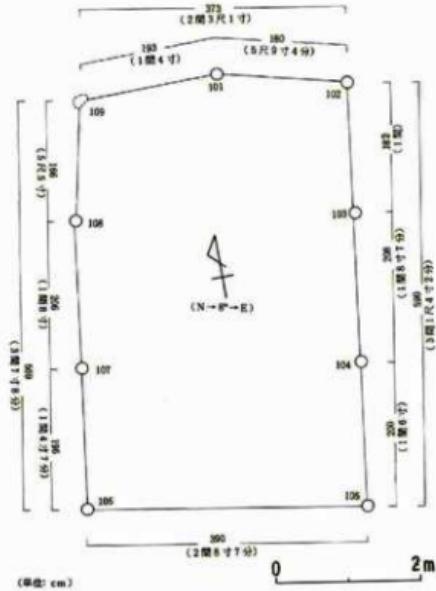
なお柱根の傾きを計る基準線は柱目に表われた年輪とした。実測及び計算は、古川、木之瀬、小林、横小路、河西が担当した。



第10図 2号掘立柱建物址実測図

2号掘立柱建物址内から出土した土器器は、No.5、6、11、14のように10世紀前半頃の国分式がある。これらが掘立柱建物に伴うかどうかは疑問の余地があるが、生活面に伴う遺物と見做しておく。

柱 残存していた8本の柱の長さは530mmから632mmの間で、平均590mmである。その太さは、最大径が150mmから167mmの間で平均160mmである。4号掘立柱建物址より約40mm細い。全てのものが立ったままで柱根は残っていた。上端は細く尖り、中心が凹んでいる。こうなつたのは立ったまま腐ったためであろう。すべての柱は削材で作られ、その年輪から推定すると6つ割～8つ割位にして使用している。削材であるが、現状では断面がほぼ円形で、その腐朽状態を観察すると建築時の形状をそのまま残していると見られる。また全ての柱には下から15cm位の高さに溝（切り込み）がある。溝は深いものも浅いものもあり、溝の断面は直角のものも斜めのものもあり、切断面は鉈器で掘ったもののごとくきれいではなく、その底は2～3mmに段階的に掘った痕跡が残っている。柱の最下部の周囲は、底に向って斜めに鋭利な刃で削ってあり、切り込み溝の下だけは、102号柱を除いて全て特に大きく削っていることが特徴的である。底の切断面を見ると、段階的に切ったような痕跡が残り、鋸で一気に切ったものではない。柱の底の高さは標高272.641mを最高とし、最低は272.484mで、その差は157mmであり、平均は272.568mである。



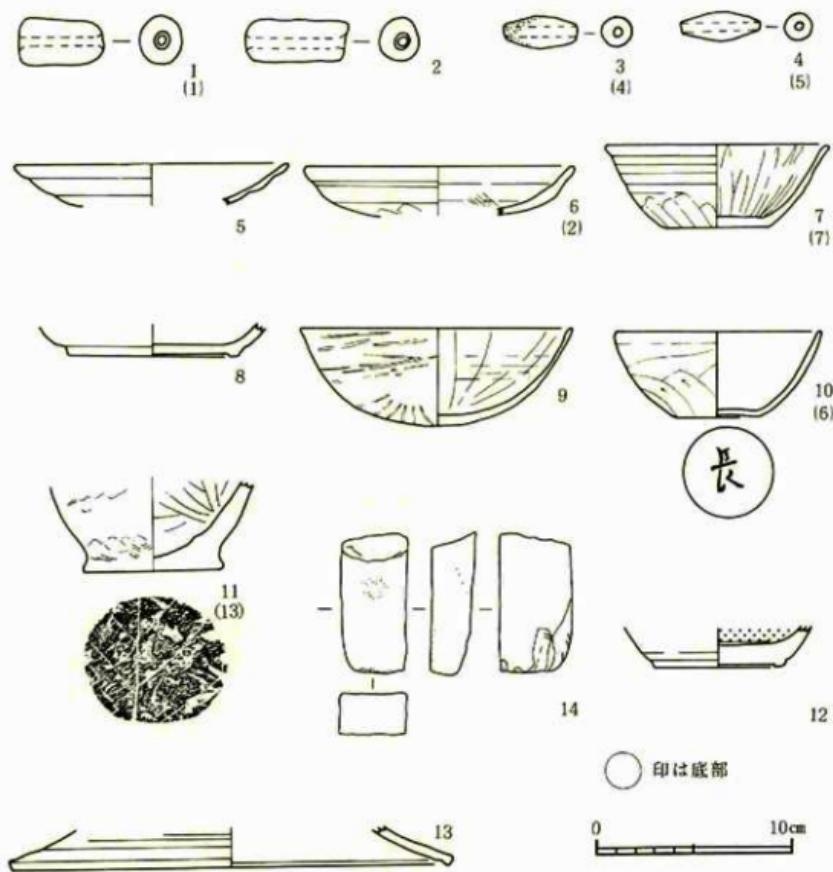
柱穴番号	柱穴の形状	柱穴の深さ(mm)	柱穴の最大径(mm)	柱の形状	柱の最大径(mm)	柱の長さ(mm)	柱の底の標高(m)
101	④	630+*	980	④	165	530	272.589
102	⑤	530+*	920	④	153	625	272.549
103	③	460+*	940	④	154	533	272.641
104	④	460+*	760	④	167	610	272.594
105	③	500+*	820	④	163	560	272.589
106	④	525+*	1060	④	165	627	272.549
107	④	580+*	880	④	161	583	272.549
108	④	630+*	930	④	150	632	272.484
109	④	540	900				
平均		540+*	910		160	590	272.568

#### (註) 1、柱穴と柱の形状

- ① 四角形 ④ 円形
- ② □>○ ⑤ 不整形
- ③ ○>□

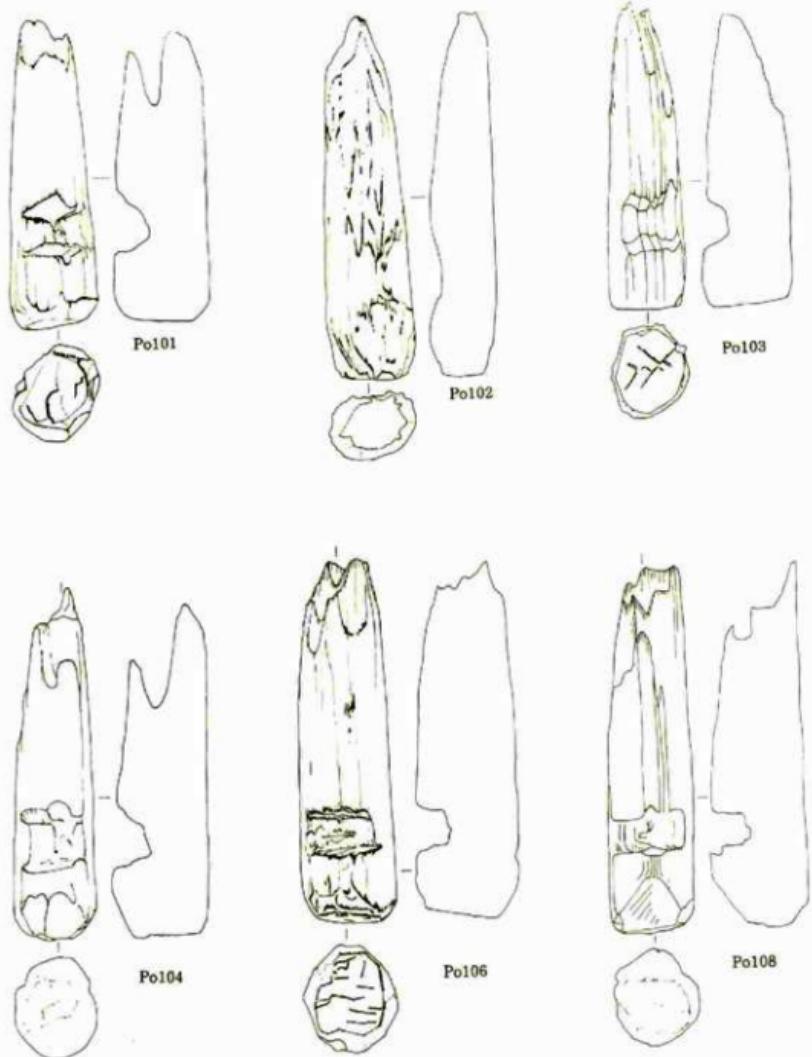
#### 2、\*は柱の底まで掘らなかったもの

第1表 2号掘立柱建物址  
柱穴・計測一覧表

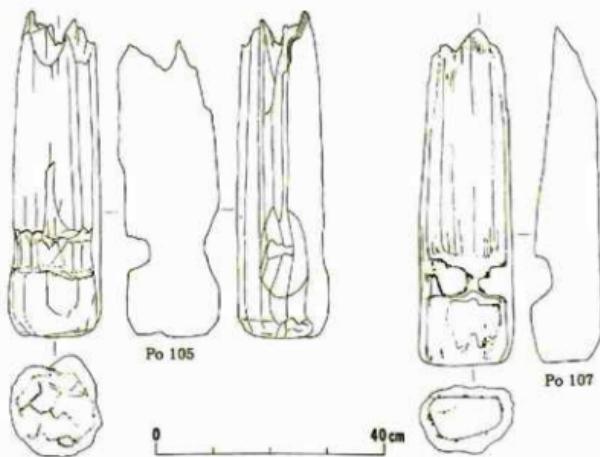


第12図 2号据立柱建物址出土遺物実測図

出土木材の識別鑑定の結果と写真は第13表、図版29、30の通りである。



第13図 2号振立柱建物址柱根実測図 (1:10)

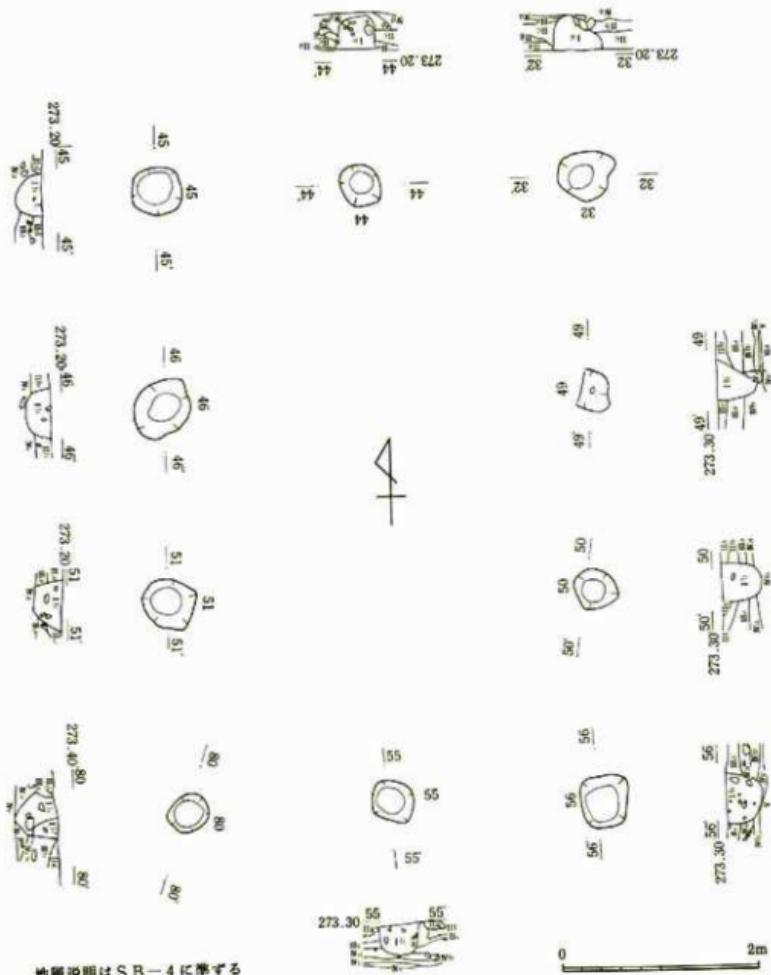


第14図 2号掘立柱建物址柱根実測図

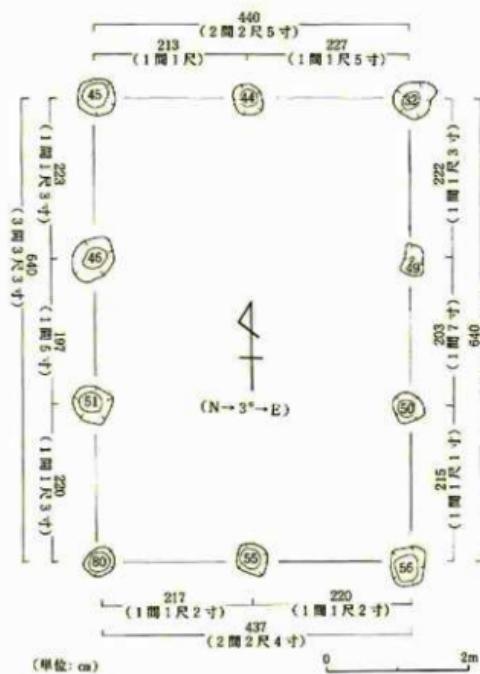
5号掘立柱建物址(第15、16図) 柱根は残存していない。南北に長く、桁行は3柱間、梁間は2柱間で、桁行の方向は北— $10^{\circ}$ —西である。

柱間距離の測定点は、柱穴の下場を勘案して、建物の平面形がゆがみのない方形になり、全ての柱穴が直線上に並ぶような点とした。この方法は柱根のない全ての建物に共通して使った。

桁行の長さは両側とも3間3尺3寸(640cm)で、1柱間の平均は1間1尺1寸(213cm)であるが、各間の長さは不統一である。梁行の長さは、南側は2間2尺4寸(437cm)、北側は2間2尺5寸(440cm)と両方ともほとんど同じ長さであるが各間の長さは不統一である。両方の桁行、梁行ともほとんど同じ長さであるから、建てる時は先ず4隅の柱を建て、その後で間柱を立てたものと考えられる。ただ両桁行の中間の柱間は平均より6寸と8寸短くなっているのは意図的に狭くしたものであろうか。柱穴の上場の形状は10基のうち、5基は隅丸方形、2基は円形に近い方形、3基は円形である。方形の柱穴の方向と建物の方向とは同じではないが、方形の柱穴があるので、柱の全てもしくは一部が面取りをしてあったものと考えてよいであろう。10基の柱穴の平均の深さは34cm、最大径は54cmである。49号柱穴は4号掘立柱建物址の23号柱穴で切られているので、4号掘立柱建物址の方が新しいと考えられる。



第15図 5号掘立柱建物址実測図



第16図 5号掘立柱建物柱穴実測図

9号掘立柱建物（第17、18図）桁行2間1尺3寸（400cm）、梁行1間3尺6寸（292cm）の長方形の建物である。桁行方向が北-17°-西と他の建物と方向を異にし、48号柱穴が小さい点などから、建物とするのに若干の危惧がある。これには桁行が長いにもかかわらず、隅柱の柱穴しかないのであるが、11号、12号建物のように桁行が長くても、間柱がないものもある。

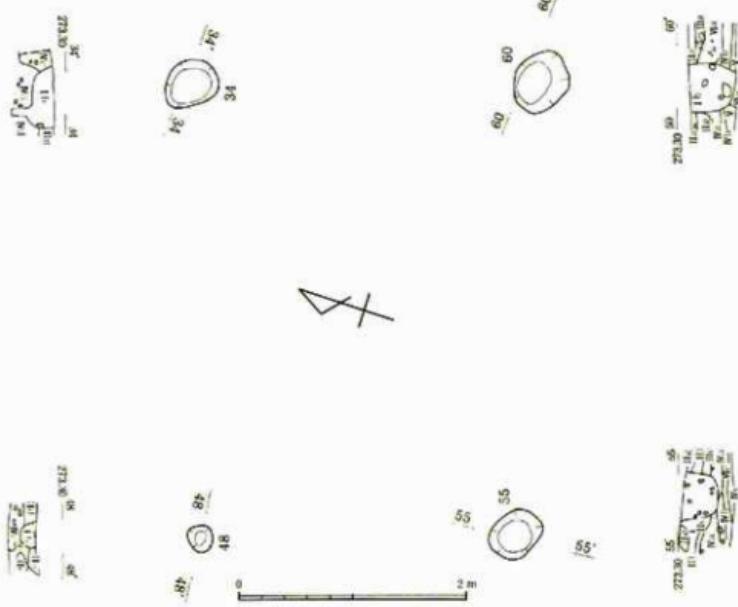
柱穴の形状は3基が円形、1基が円形に近い方形である。

建物番号	柱穴番号	柱穴の形状	柱穴の深さ(cm)	柱穴の最大径(cm)	
5	32	③	360	640	
	44	①	358	500	
	45	④	270	500	
	46	③	262	700	
	49	①	410	500	S B 4 pit 23と切合
	50	④	403	480	
	51	①	292	590	
	55	①	308	520	S B 9 と共用
	56	①	360	620	
平均			35cm	55cm	

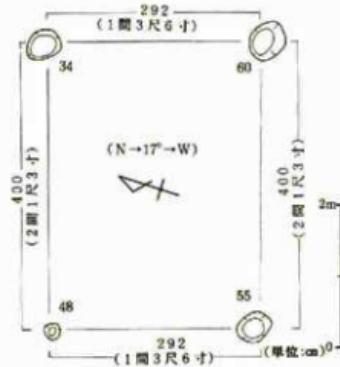
（註）1、柱と柱穴の形状

- ① 楕丸形 ④ 円形
- ② □>○ ⑤ 不整形
- ③ □<○

第2表 5号掘立柱建物  
柱穴・計測一覧表



第17図 9号掘立柱建物址実測図  
地図説明はSB-4に準ずる



第18図 9号掘立柱建物址柱穴間実測図

建物番号	柱穴番号	柱穴の形状	柱穴の深さ(cm)	柱穴の最大径(cm)	
9	34	④	378	490	S B 4 pitを切ってい る
	48	④	136	490	
	55	③	308	520	S B 5と共通
	60	④	407	600	
平均			31cm	47cm	

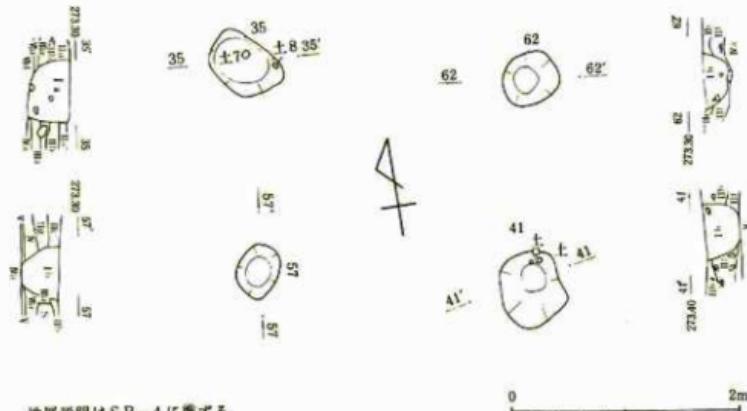
(註) 1、柱と柱穴の形状

- ① 圓丸方形 ④ 円形
- ② □>○ ⑤ 不整形
- ③ □<○

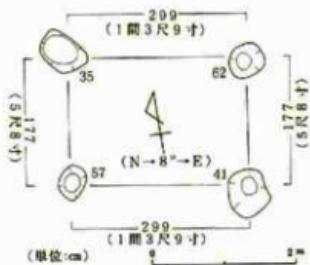
第3表 9号掘立柱建物址  
柱穴・計測一覧表

10号掘立柱建物址(第19、20図)この建物群の中で最も小さい4本柱の建物で、東西に長く、桁行方向は北-8°-東である。4本の柱を直角に連結するには若干の無理があるが、4号掘立柱建物址の内側にある柱穴群を連結するにはこれが最も妥当である。他の遺構にも例があるように、建物の平面形は歪んでいたと考えてもよいであろうが、ここでは柱穴の下場を勘案して隅は直角とした。

柱穴の平面形は2基が隅丸方形、1基が円形に近い方形、1基が円形である。方形の柱穴の線と桁行方向とは一致しないが、柱穴の形式は柱に似せて掘ったと考えられるので、柱は面取りをしてあったであろう。柱穴の深さの平均は31cm、最大径の平均は56cmである。



第19図 10号掘立柱建物址実測図



第20図 10号掘立柱建物址柱穴間実測図

建物番号	柱穴番号	柱穴の形状	柱穴の深さ(cm)	柱穴の最大径(cm)	
10	35	②	370	380	
	41	①	313	670	
	57	④	328	480	
	62	①	216	490	
	平均		31cm	56cm	

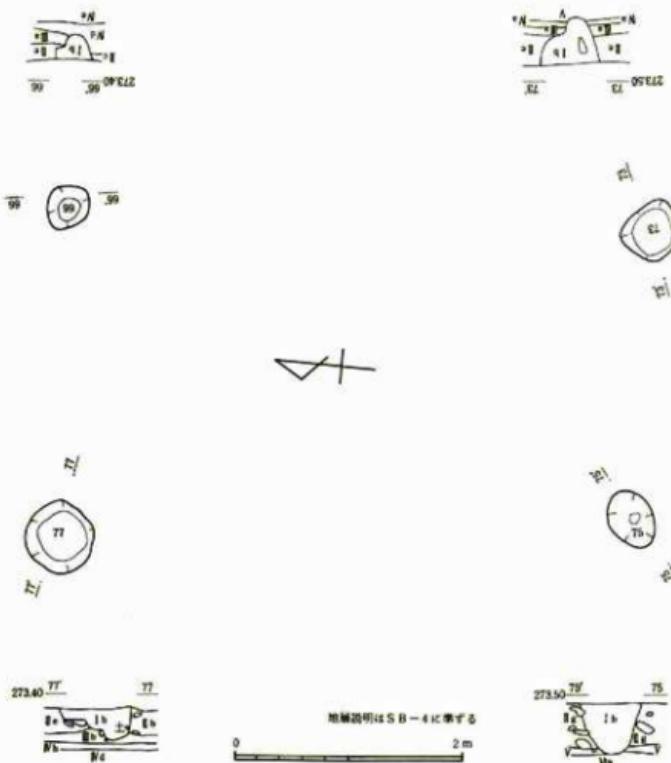
(註) 1、柱と柱穴の形状

- ① 隅丸方形 ④ 円形
- ② □>○ ⑤ 不整形
- ③ □<○

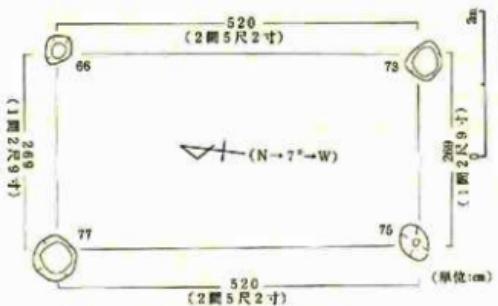
第4表 10号掘立柱建物址  
柱穴・計測一覧表

11号掘立柱建物址（第21、22図） この建物群の中で最も細長い4本柱の建物で、南北に長く桁行方向は北—7°—西である。桁行が2間5尺2寸（520cm）と長いにもかかわらず間柱がないのは、9号、12号掘立柱建物址と同じである。

柱穴の平面形とその方向、柱の断面形は10号掘立柱建物址と類似している。柱穴の平均の深さは34cm、最大径の平均は54cmである。



第21図 11号掘立柱建物址実測図



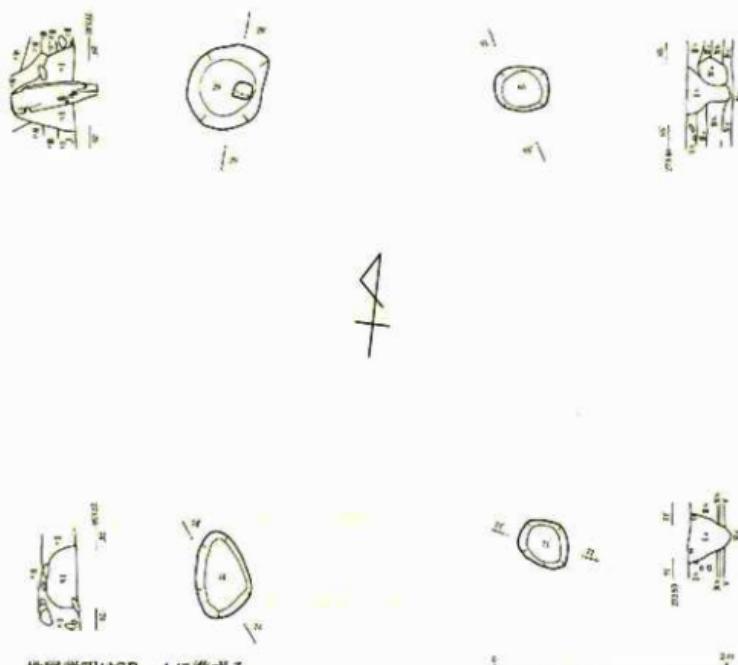
第22図 11号掘立柱建物址柱穴間実測図

建物 番号	柱穴 番号	柱穴 の 形 状	柱穴 の深 さ (cm)	柱穴 の最 大 径 (cm)
11	66	③	221	420
	73	②	413	570
	75	④	450	530
	77	①	216	490
	平均		34cm	54cm

(註) 1、柱と柱穴の形状

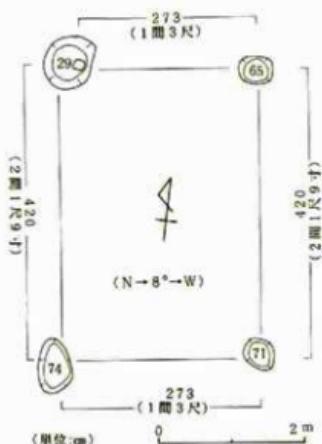
- ① 橋丸方形 ④ 円形
- ② □>○ ⑤ 不整形
- ③ □<○

第5表 11号掘立柱建物址  
柱穴・計測一覧表



地層説明はSB-4に準ずる

第23図 12号掘立柱建物址実測図



第24図 12号掘立柱建物址  
柱穴間実測図

建物番号	柱穴の形狀	柱穴の深さ(cm)	柱穴の最大径(cm)	備考
12	②	548	830	S.B.4と共通
	③	372	490	
	④	360	500	
	⑤	260	740	
	平均	39cm	64cm	

(註) 1、柱と柱穴の形状  
 ① 暋丸形 ② 円形  
 ③ □>○ ④ 不整形  
 ⑤ □<○

第6表 12号掘立柱建物址  
柱穴・計測一覧表

### 12号掘立柱建物址

(第23、24図) 南北に長い4本柱の建物で、桁行方向は北-8°-西である。桁行が2間1尺9寸(420cm)と、長いにもかかわらず間柱がないのは9号、11号掘立柱建物址と同じである。

柱穴の平面形とその方向は10号、11号掘立柱建物址と似ているが、隅の65号、71号柱穴は正しく桁行、梁行方向

と一致している。柱穴の深さの平均は32cm、最大径の平均は64cmである。

二群の建物は次のとおりである。

4号掘立柱建物址 (第25、26図) 9本の柱根が残存していた。柱が残っていなかったのは25号柱穴とそれに対応する反対側の30号柱穴、及び22号柱穴である。柱間距離は柱の中心点と、柱根が残っていない柱穴の柱間距離測定点は、2号掘立柱建物址と同じように柱穴の下場の中心点とした。

建物は東西南北に正確に間口がとっているが、意図的にこのように建てたものかどうかは判断が難しい。

建物の平面の大きさは南北が2間5尺4寸3分(528cm)と2間5尺4寸9分(530cm)、東西は2間5尺4寸3分(528cm)と2間5尺8寸2分(540cm)と非常に正確である。しかし、各柱間距離は最長の間が1間2寸6分(188cm)、最短の間が5尺9寸4分(180cm)で、かなり不正確である。平均柱間距離は5尺8寸5分(177cm)で、1間(181.18cm)に満たないことが注目される。平均柱間距離を唐尺(1尺=29.67cm)で換算すると、5尺9寸7分となり、3分(9mm)の違いがあるので唐尺を使った可能性がある。この建物の柱を建てる方法も先ず隅柱を立ててから間柱を立てたものではないかと考えられる。

柱の断面は9本のうち8本は面取りがしてあり、第7表のように□>○が5本、○>□が3本で面取りした面は梁方向と平行しており、この点でも2号掘立柱建物址より丁寧な建築である。柱底から約5cm上部には2号掘立柱建物址と同じように、全ての柱に切り込み溝があり、立っていた時のその方位は特に規則性はない。又カンザシ(簪)も残存していない。

たので、これを嵌め込んだ溝とも思われない。

柱底の標高は最高が27号柱で272.897m、最低が23号柱で272.555mでその差34.2cmで、全柱底の標高の平均は272.670mである。23号柱の底には2枚の礎板が敷いてあり、これは柱の高さを調整したものかも知れない。

柱根は2号掘立柱建物址と同様に全てが北西方向に傾いていた。柱の傾きの平均は $6^{\circ}31'$ で、その平均方位は北 $-29^{\circ}32'$ 西である。仮に建物の高さが5mとすれば、最上端で約57cmの傾となる。

柱穴は12基（第25図）で、この内半数は方形に意識して掘っている。柱根を面取りして方形にしようとしたものが全9本のうち8本であるから、柱穴より柱根の方が方形を意識していると考えてよいであろう。柱穴を結ぶ線は、平行と平行しており、他の建物とは違い、規則正しく掘っている。

各柱穴の深さと最大径は別表のとおりである。その平均は深さ53cm、最大径85cmで2号掘立柱建物址に次いで大きい。この点でもしっかりと重要なものであった事がうかがえる。

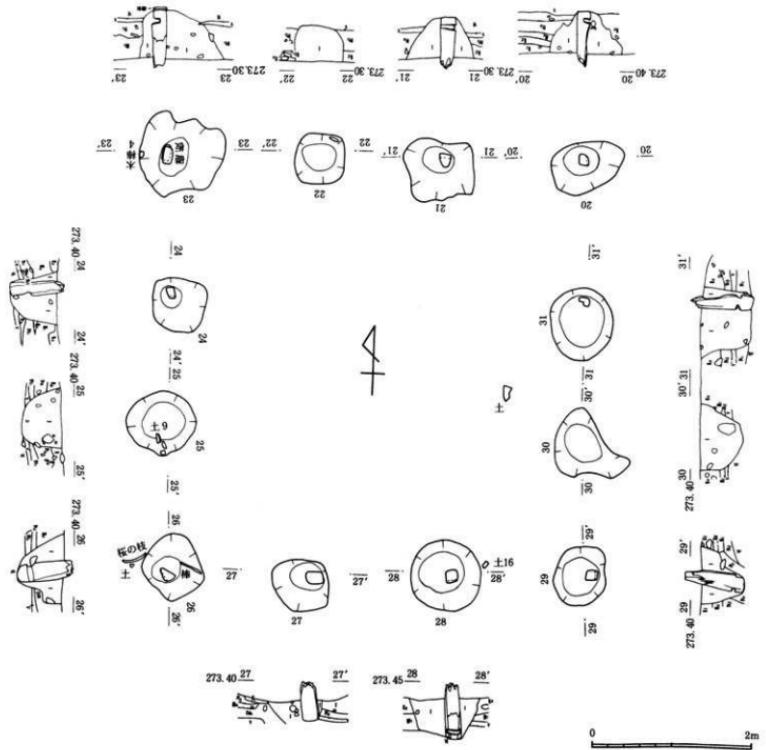
また、4号掘立柱建物址の23号柱穴は、5号掘立柱建物址の49号柱穴を切って掘られているので、4号掘立柱建物址の方が新しい。この事と4号掘立柱建物址には柱が残存している事から、最も新しく建築された建物と思われる。

4号掘立柱建物址の遺構については以上である。これら諸点から総合して考えると、特別な建物であったと思われる。後述するように祭祀的な遺物や遺構も検出されているので、神社のような祭祀遺構に伴う建物であった事が推察されるのである。

柱 種板 残存していた9本の柱の長さは、788mmから520mmの間で、平均690mmである。その大きさの最大径は、242mmから172mmの間にあり平均196mmで、2号掘立柱建物址より40mm大きい。全てのものが立ったまま残っていた。すべての柱は上端が細くなり、凹部が一ヶ所ないし数ヶ所ある。全ての柱は割材で作られ、その年輪から推定すると六つ割～八つ割位にしたものを使っている。柱の断面形は、20、21、23、29、31号柱の5本はやや丸味を帯びた方形、24、26、27号柱の3本は円形に近い方形、28号柱は円形を呈する。また27号柱を除く8本には柱底より約10mm上に切り込み溝がある。ただし、29号柱だけはほとんど周囲にある。この4号掘立柱建物址の柱の溝は、2号掘立柱建物址のものより比較的深く、よく掘っている。

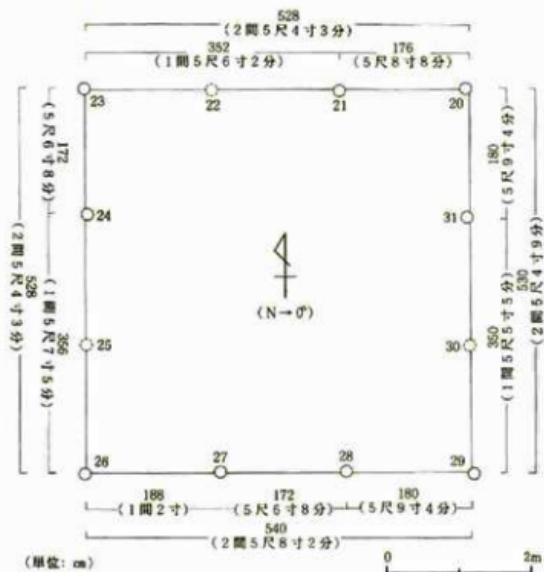
溝の切削面には鋭利な刃物で切ったと思われる痕跡がある。中には鋸で切ったかと見られるものもあるが、用具を推定することは難しく、そのほとんどは斜めに2～3ヶ所階段状に切り込んでいるので斧状の利器を使用したとも考えられる。柱底の切削面は段階的に切っていて、鋸で一気に切ったものではない。柱底の切削面は全て直角に切っていないことが注目され、切り込み溝の下が高くなっているものが21号、23号、24号、28号柱で、20号、26号はその反対に低くなっている。これは意識的にこう切ったもののように感じられる。

柱の底の高さは標高272.897mを最高とし、最低は272.555mで、その差34.2cmで、平均



- I 柱穴の埋め土、小礫と鉄分を含む
- Ia 黄褐色砂層
- Ib 黄褐色砂層、粗い砂粒に腐食土を含む
- Ic 黒褐色粘土層、礫、鉄分を含む
- Id 灰褐色砂層
- Ie 青灰色砂層
- If 黄青白色砂層、礫を含む
- Ig 黄色砂層
- Ia 黄褐色粘質層、粗い砂粒を含む
- Ib 青灰色砂層、粘土、鉄分を含む
- Ic 青灰色粘土層
- Ia 青灰色砂層、小礫を含み、粒子が粗い  
砂粒が細かい
- Ib “
- Ic 青灰色砂層
- Id 暗緑色粘質層、細かい砂粒を含む
- Ie “
- V 黒色粘質層、泥炭層
- VI 青灰色粘土層、細かい砂粒を含む

第 25 図 4 号掘立柱建物址実測図

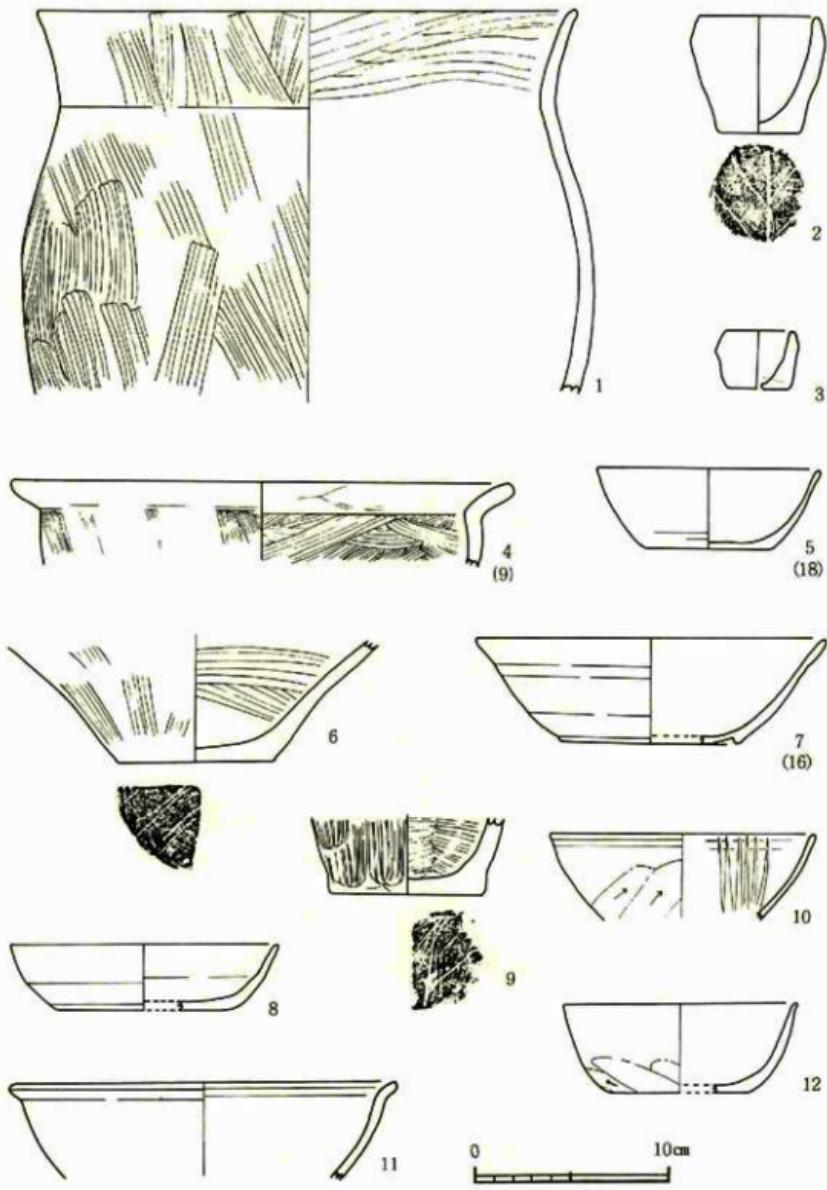


第26図 4号掘立柱建物址柱間実測図 (1:80)

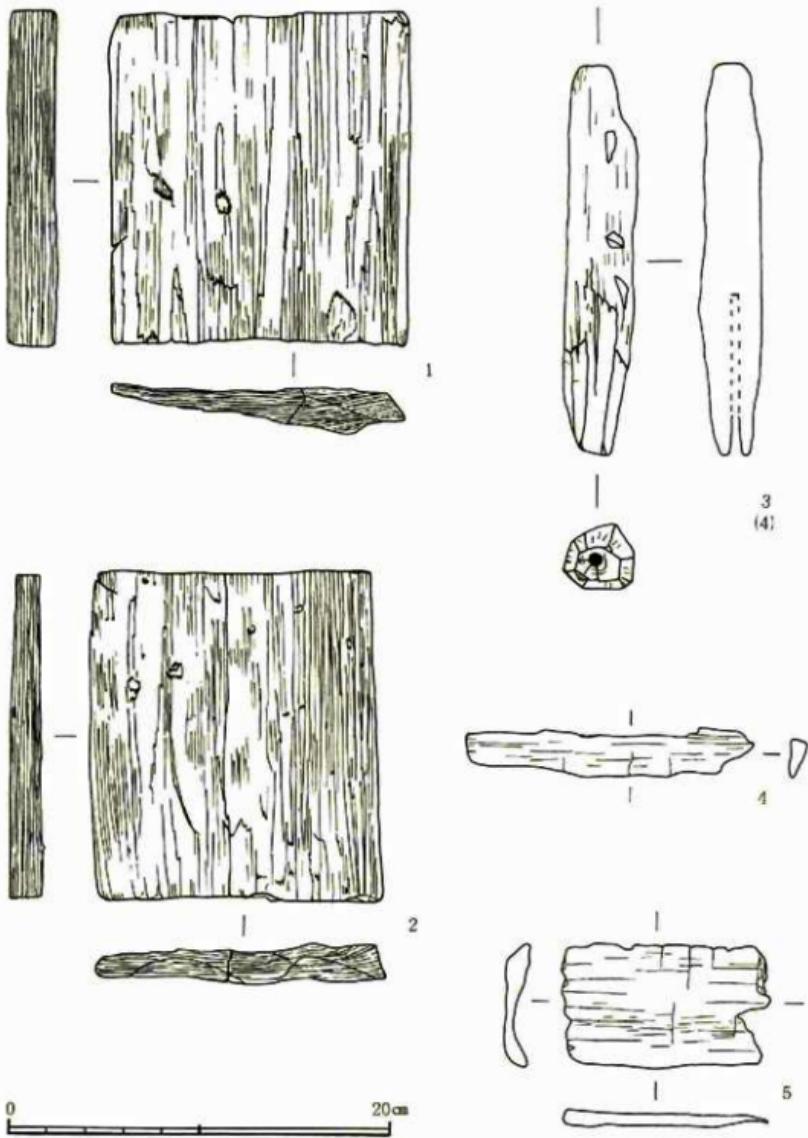
建物番号	柱穴番号	柱穴の形状	柱穴の深さ(cm)	柱穴最大径(mm)	備考	柱の番号	柱の形状	柱の最大径(mm)	柱の長さ(cm)	柱底面の高さ(cm)	備考
4	20	③	539	940		20	②	183	698	272,633	
	21	①	524	860		21	③	190	658	272,632	
	22	①	450	640	S B 9 pit SSに切替へれて いる						pit
	23	③	607	1080	S B 5 49と切合	23	②	242	721	272,555	礎板あり
	24	①	581	680		24	③	183	630	272,584	
	25	④	500	880							
	26	③	583	840		26		208	698	22,680	
	27	③	285	800		27	③	189	52	272,897	
	28	④	512	900		28	③	186	705	272,722	
	29	④	548	830		29	③	172	788	272,720	
	30	③	557	880		31	③	212	764	272,610	
	31	④	612	920							
平均				53	85cm			19.6	69cm	272,670	m

第7表 4号掘立柱建物址  
柱穴・計測一覧表

(注) 1. 柱と柱穴の形状  
 ① 球丸方形 ④ 円形  
 ② □>○ ⑤ 不整形  
 ③ □<○

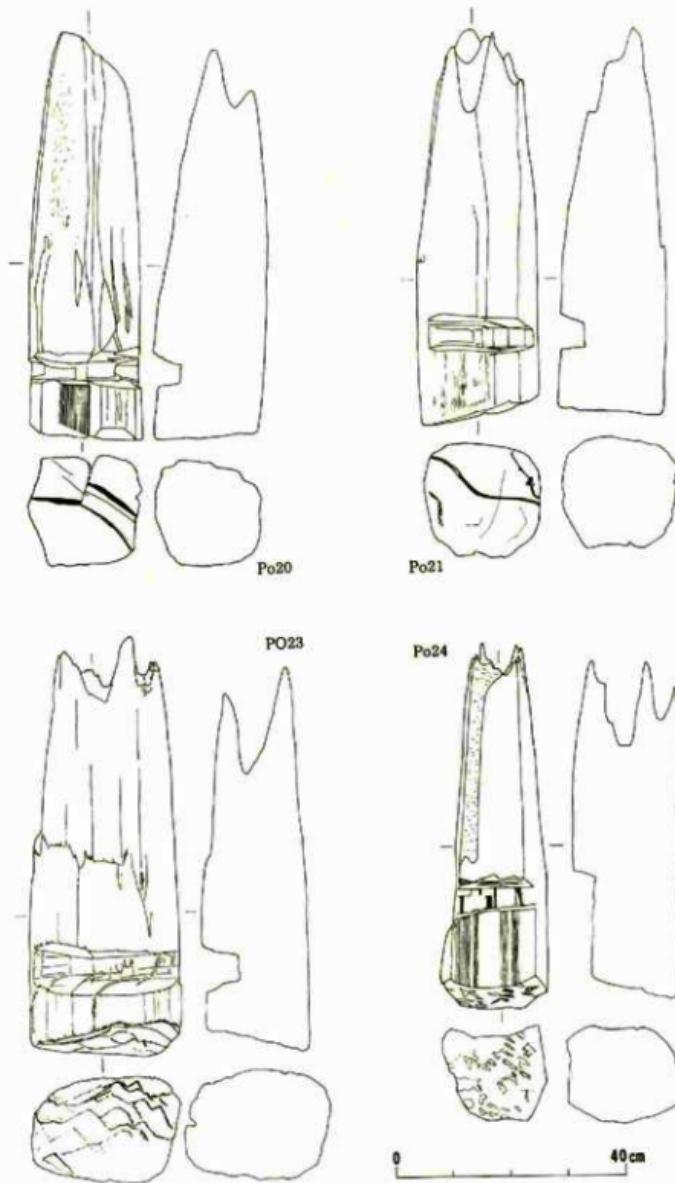


第27圖 4号・10号据立柱建物址出土遺物実測図

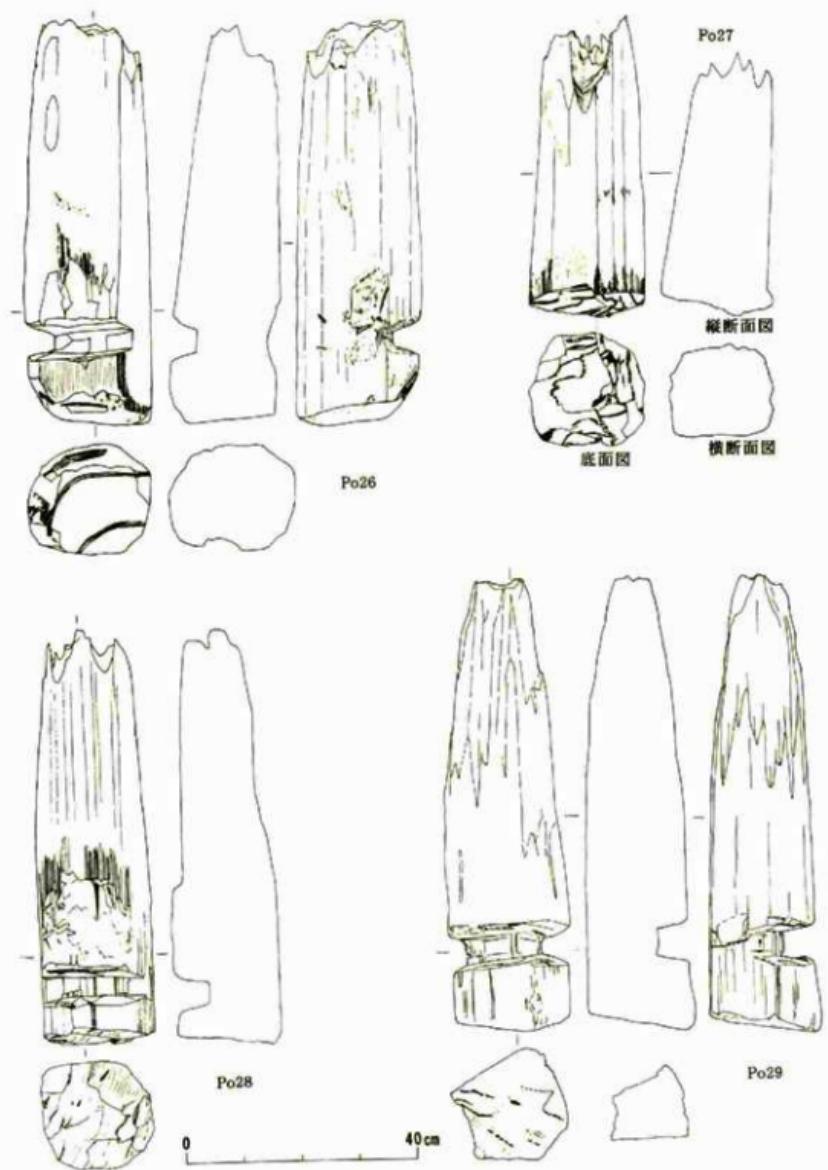


第28図 4号掘立柱建物址出土木製品実測図

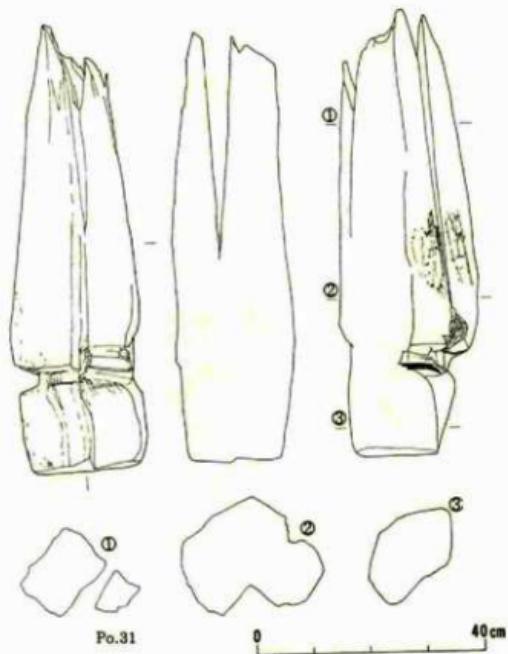
1・2 P 023の檻板  
3 有孔棒状木製品 4・5 板残欠



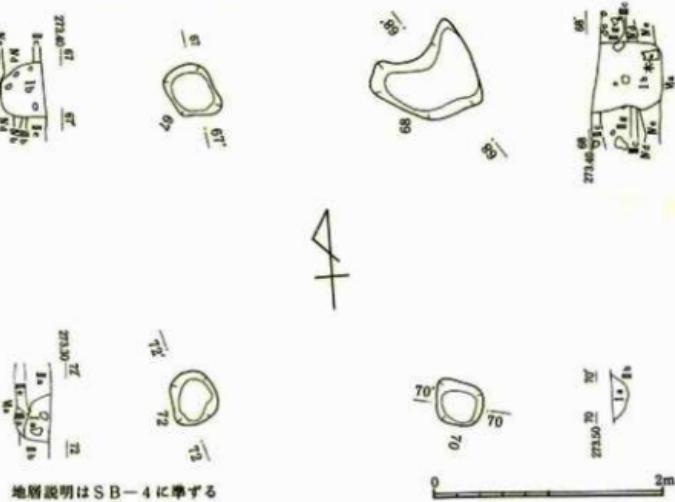
第29圖 4號掘立柱建物址柱根實測圖



第30圖 4號掘立柱建物址柱根實測圖



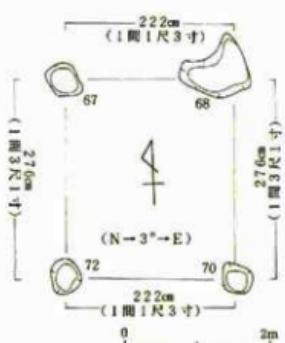
第31図 4号掘立柱建物址柱根実測図



第32図 13号掘立柱建物址実測図

13号掘立柱建物址  
(第32、33図)

南北に長い4本柱の建物で、  
桁行方向は北-3°-東である。  
10号、14号掘立柱建物址とこ  
の建物は最も狭い部類である。  
柱穴の平面形は2基が隅丸  
方形であるから、4号掘立柱  
建物址の例のように柱も方形  
に近いものを立てたと考えら  
れる。柱穴の深さの平均は32  
cm、最大径の平均は64cmであ  
る。



第33図 13号掘立柱建物址柱穴間  
実測図 (1:80)

建物 番号	柱穴 番号	柱穴 の 形 状	柱穴の 深 さ (mm)	柱穴の 最 大 径 (mm)	
13	67	①	340	540	
	68	③	578	1050	
	70	①	153	480	
	72	④	215	480	
	平均		32cm	64cm	

(註) 1、柱と柱穴の形状

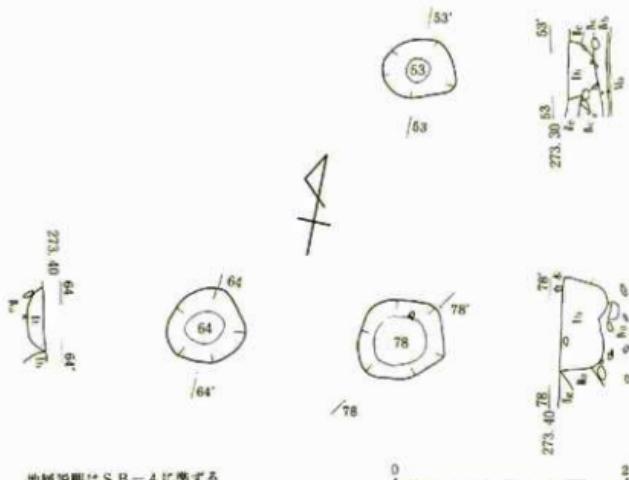
- ① 椭丸方形 ④ 円形
- ② □>○ ⑤ 不整形
- ③ □<○

第8表 13号掘立柱建物址  
柱穴・計測一覧表

14号掘立柱建物址(第34、35図)南北に長い建物で、桁行方向は北—3°—東である。10号、13号掘立柱建物址とこの建物は最も狭い部類である。

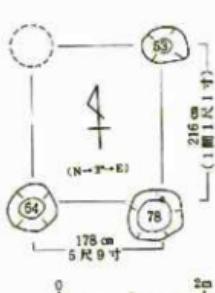
78号柱穴には柱根の一部が残っていたが、他にはなかった。ただ柱穴が1基検出出来なかつたのであるが、柱根と他の2基の柱穴があるので、一応1棟の建物とした。柱穴は2基が円形に近い方形であるから、方形状の柱であったことが推察出来る。柱穴の深さの平均は25.4cmで最大径の平均は72cmである。

柱根が僅かに残っていたが、そのほとんどは腐食してしまって、原型は留めていなかった。



地軸説明はSB-4に準ずる

第34図 14号掘立柱建物址実測図



第35図 14号掘立柱建物址  
柱穴間実測図 (1:80)

建物番号	柱穴番号	柱穴の形状	柱穴の深さ (mm)	柱穴の最大径 (mm)	柱番号	柱の形状	柱の最大径 (mm)	柱の長さ (mm)	柱の底の標高
14	53	③	240	670					
	64	④	143	660					
	78	②	380	830	78	③	45	65	
	平均		25.485cm	72cm					

(注) 1、柱と柱穴の形状

- ① 圓丸形 ④ 円形
- ② □>○ ⑤ 不規形
- ③ □<○

第9表 14号掘立柱建物址  
柱穴・計測一覧表

その他の柱穴と柱根（第36図） B群の中にもA群のように建物として連結出来ない柱穴が約10基あった。この中には大きいものもあるが、平均より小さいものが多い。また40号柱穴には柱根が残っていたにもかかわらず、他に連結出来るものがなかった。

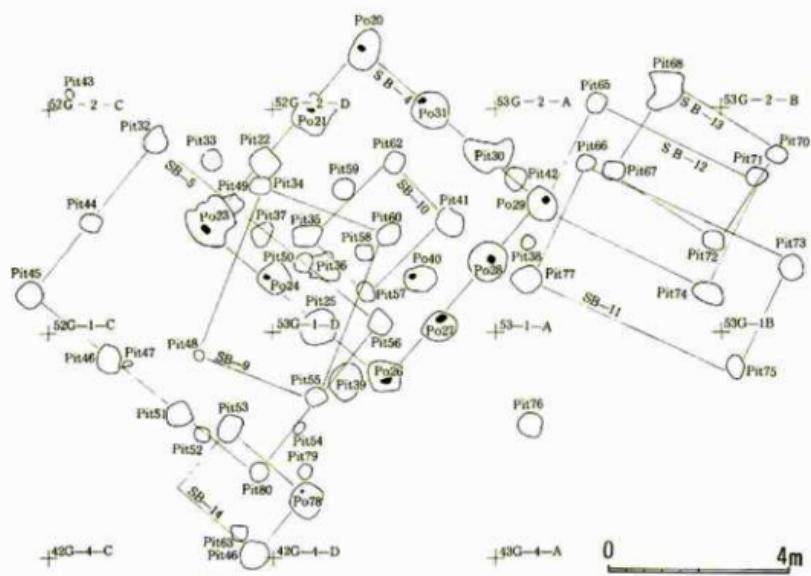
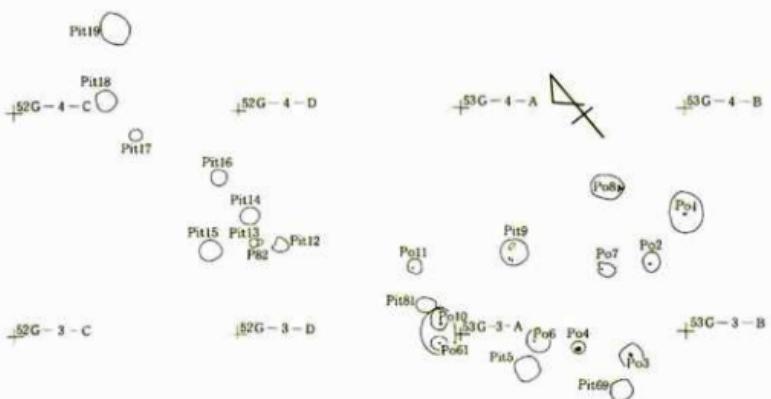
以上の結果に基づいて建物の前後関係等について若干説明を加えておく。

A群は明らかにB群より古く、貧弱な建物であったと思われる。

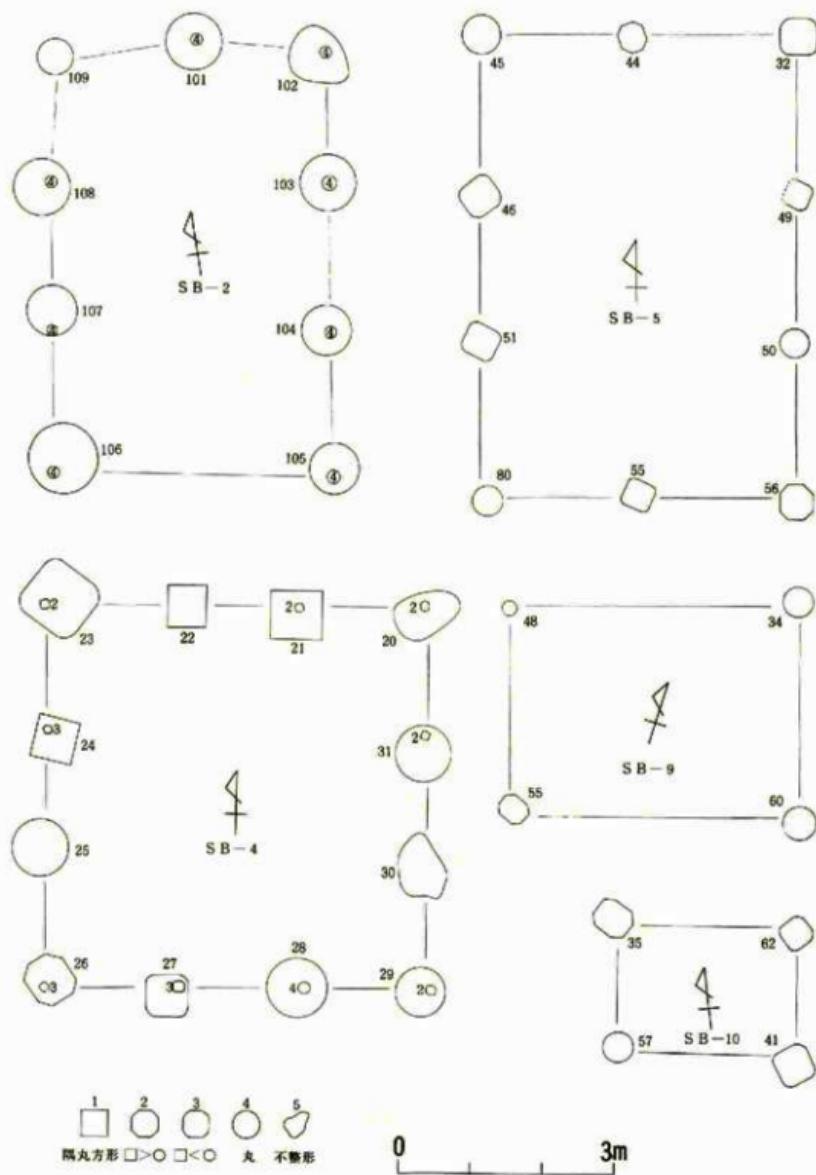
B群では2号掘立柱建物址は早い時期に建てられ、この遺跡が廃絶するまで使用され、2号掘立柱建物址と同じ頃かやや遅れて、10号、11号、12号掘立柱建物址が建てられ、さらに5号、13号掘立柱建物址となり、最後に4号、14号掘立柱建物址となって、廃絶時には2号、4号掘立柱建物があったように考えられる。

遺 物 土師器、須恵器が出土した。4号、5号掘立柱建物址付近から出土した遺物について一括説明する。なお2号掘立柱建物址については前述したとおりであり、52、53グリッドにまたがる掘立柱柱穴群付近では遺物は出土しなかった。

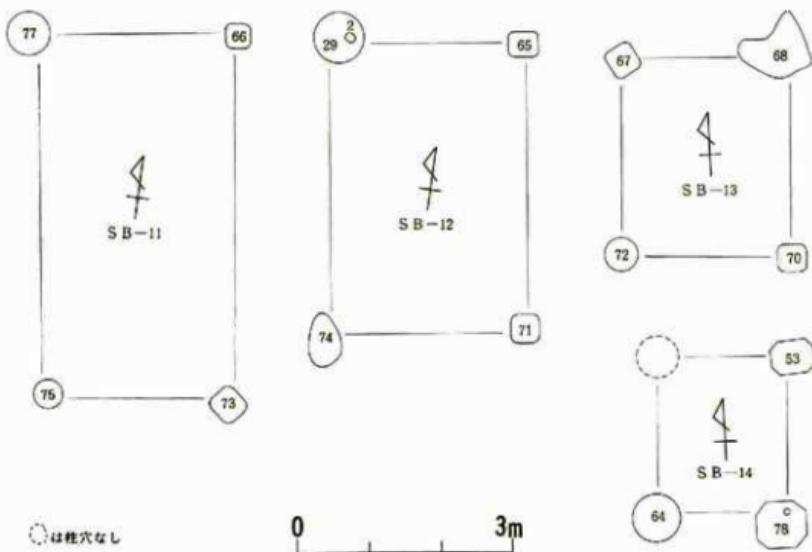
4号と5号掘立柱建物址付近では建物が重複しており、また高床式であるため、必ずしもこれらの建物に伴う遺物であるとは言えないが一応ここで取扱う。遺物の全体量は比較的少量であって、須恵器については、この中で占める量の割合は他の遺構に比べて高率であることが言える。須恵器の完形品ではなく、土師器の手捏式土器2個と坏1個だけが完形で出土し、そのうちの1個は底部に焼成前の穿孔がある。時期は第27図N.1の甕が7世紀後半の鬼高期から8世紀前半の真間期にあたり、N.8の皿が真間期中葉頃と見られるから、古墳・奈良時代に比定出来る。他の土師器は9世紀から10世紀前半頃の国分式に比定出来る。



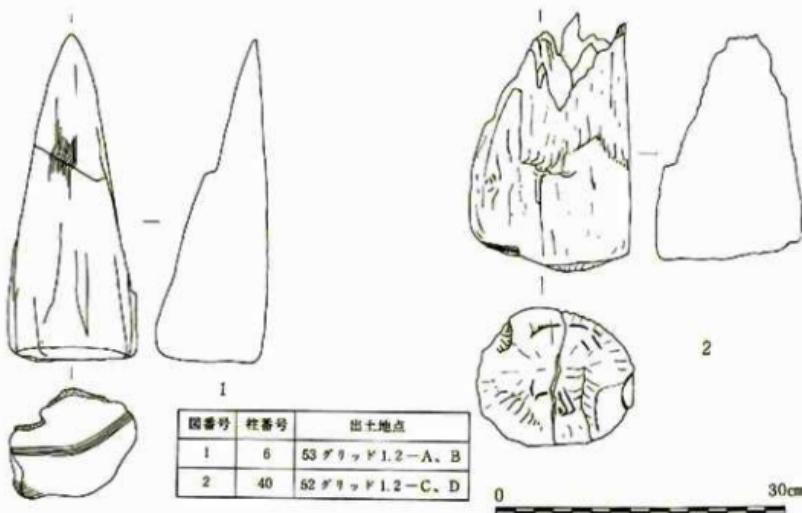
第36図 柱穴間実測図



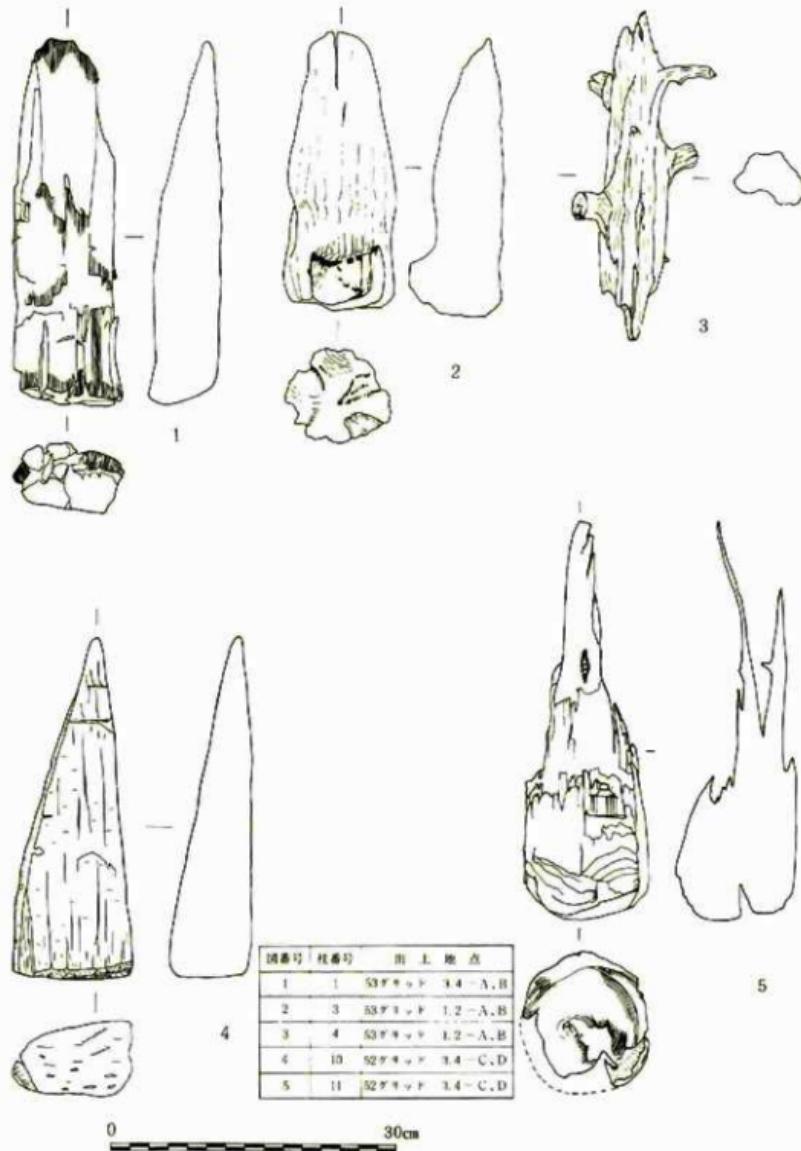
第37図 据立柱建物址模式図 (1:80)



第38図 掘立柱建物址模式図 (1:80)



第39図 グリッド出土柱根実測図 (1:6)



第40図 グリッド出土柱根実測図（1:6）

グリット No.	柱穴 番号	柱穴 の 形狀	柱穴の 深 さ (mm)	柱穴の 最大径 (mm)	柱 番号	柱 の 形狀	柱 の 最大径 (mm)	柱 の 長さ (mm)	柱 底 の 標 高	備考
53	1 (4)	378	900	1	(4)	102	378	272,672		
	2 (4)	317	510	2		38	96	272,950		
	3 (2)	190	500	3 (4)		98	281	272,832		
	4 (4)	197	300	4 (4)		68	344	272,900		
	5 (3)	238	600							
	6 (3)	283	580	6 (4)		117	330	272,772		
	7 (1)	170	400	7 (3)		38	80	272,857		
	8 (4)	172	750	8		30	115	272,895		
	9 (4)	152	640							
52	10 (4)	281	480	10	(1)	121	346	272,741		
	11 (1)	350	340	11 (4)		131	414	272,697		
	12 (5)	223	340							
	13 (4)	110	190							
	14 (4)	330	440							
	15 (4)	234	510							
	16 (4)	306	370							
	17 (4)	163	280							
	18 (4)	270	480							
	19 (4)	468	740							
53	33 (2)	340	520							
	37 (3)	393	580							
	39 (3)	427	880							
	42 (4)	439	520							
	43 (2)	162	260							
	47 (3)	284	220							
	54 (4)	283	310							
	58 (3)	220	450							
	61 (4)	327	1070	61 (4)		—	—	(272,736) ( )内推定		
	42 (3)	167	400							
52	53 (3)	60	560							
	43 (4)	182	580							
	42 (7)	375	340							
	81 (4)	280	430							
	40 (4)	233	740	40 (4)		153	260	273,080		
52	56 (1)	362	620							
	59 (4)	426	520							

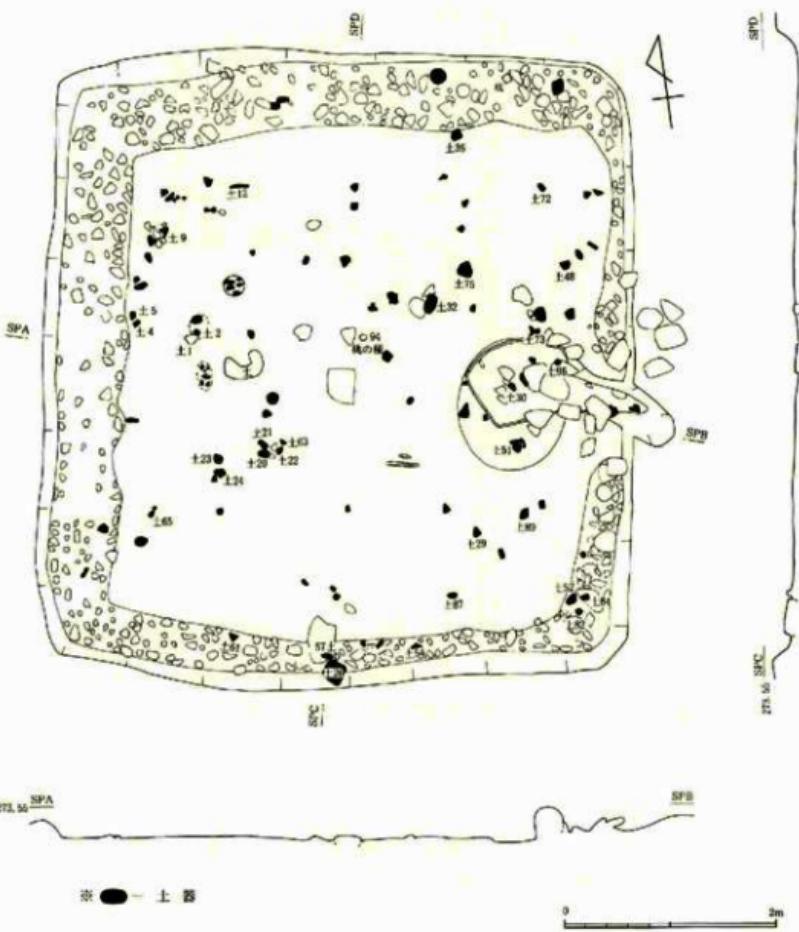
第10表 挖立柱建物址柱穴・計測一覧表

#### 豊穴式住居址と遺物

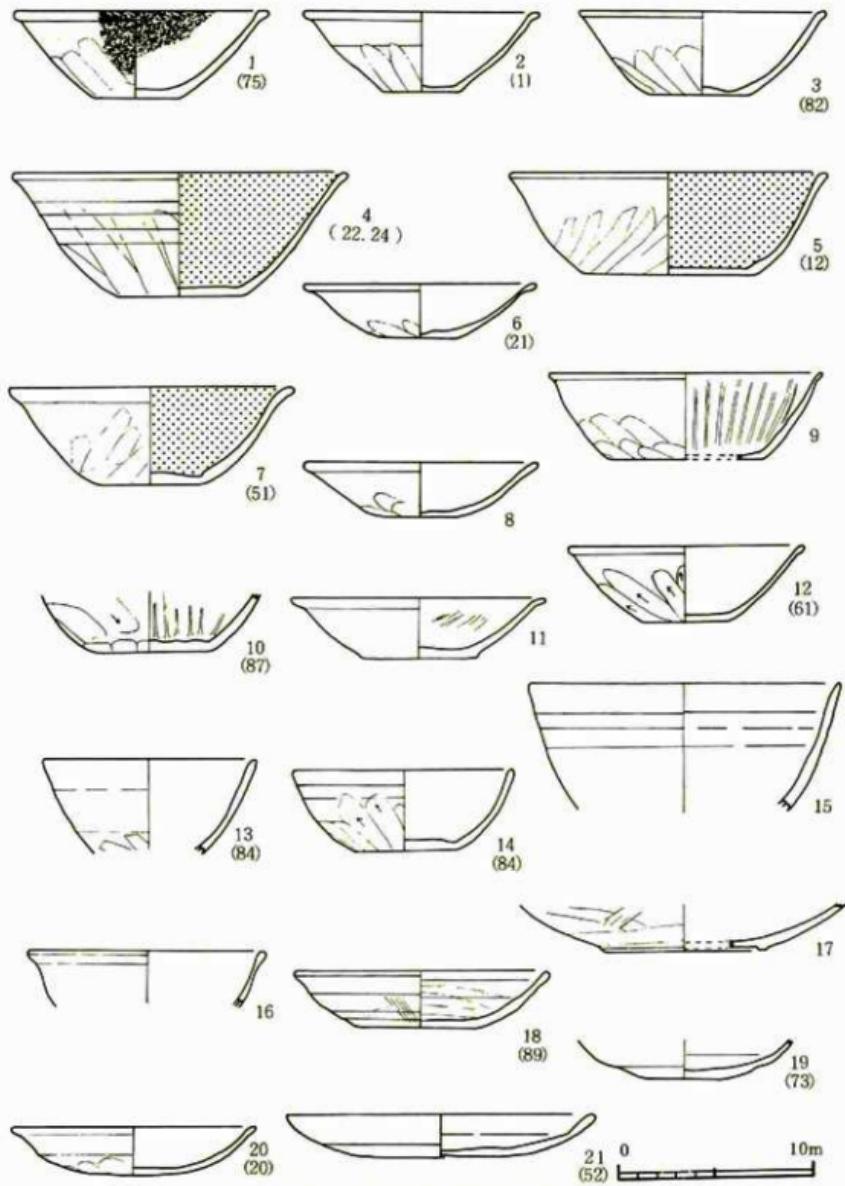
1号住居址付近では、土師器の出土状態等から判断すると他にも何軒かの住居址があったと思われるが、切合や氾濫によって破壊されたのであろう。

1号住居址 規模は最大であって、住居址床面の内周を掘って小礫を埋めた特殊な施設をもつ。この施設は住居内を乾燥させるためのものと考えられる。

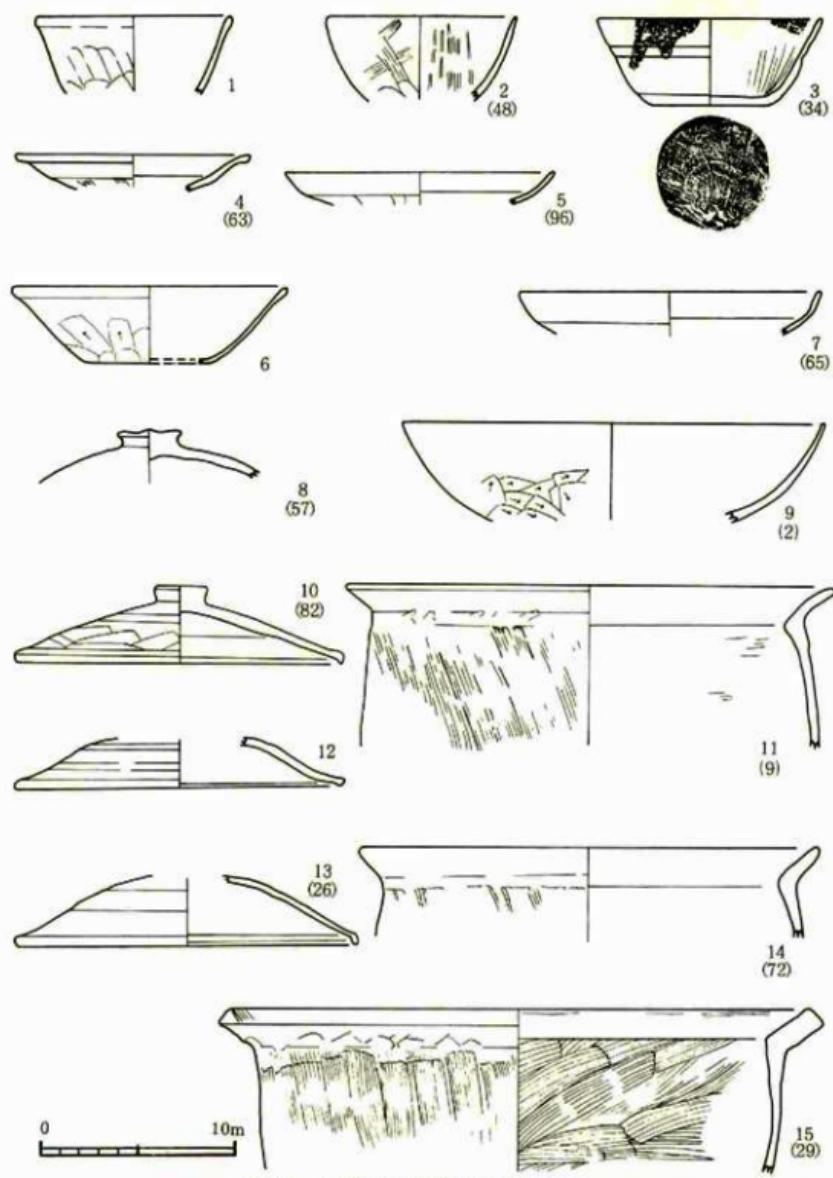
遺物の出土量は、6号、7号、8号住居址に比較して著しく多量で器種も豊富である。中には内面黒色土器や灯明皿、杯の蓋や須恵器等を含む。時期は第42回No.9が9世紀中葉であろうか。他はかまど内出土のNo.6の皿や、No.8等が国分式期の10世紀中葉、No.4、15などが10世紀後半であろう。



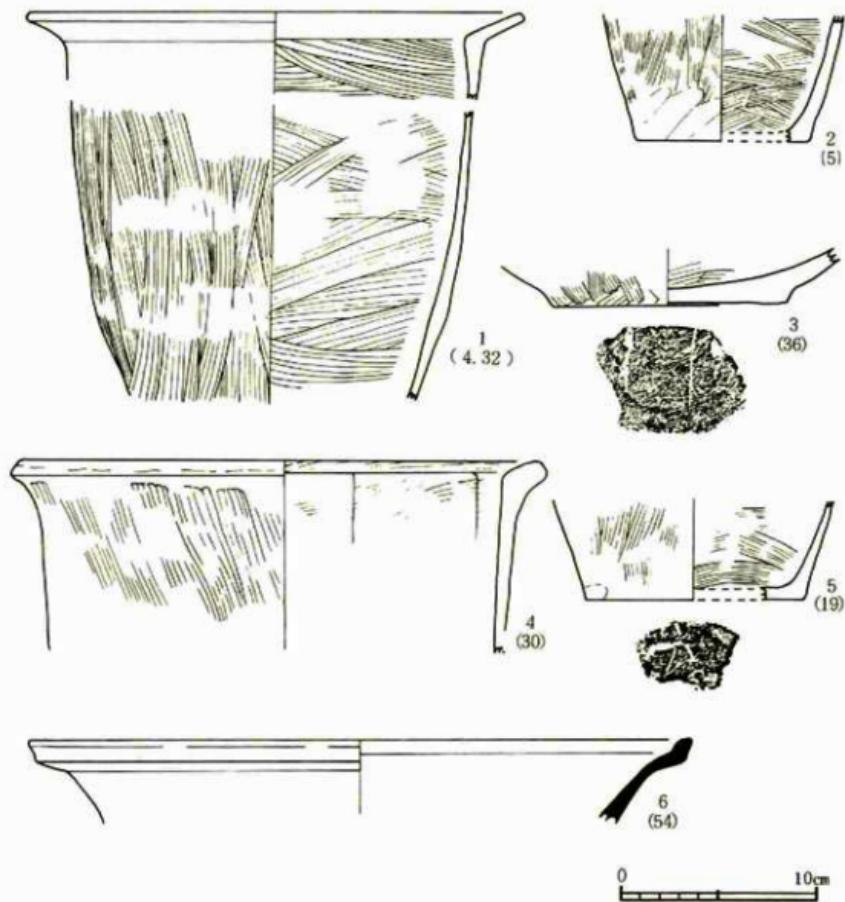
第41図 1号住居址実測図



第42図 1号住居址出土遺物実測図



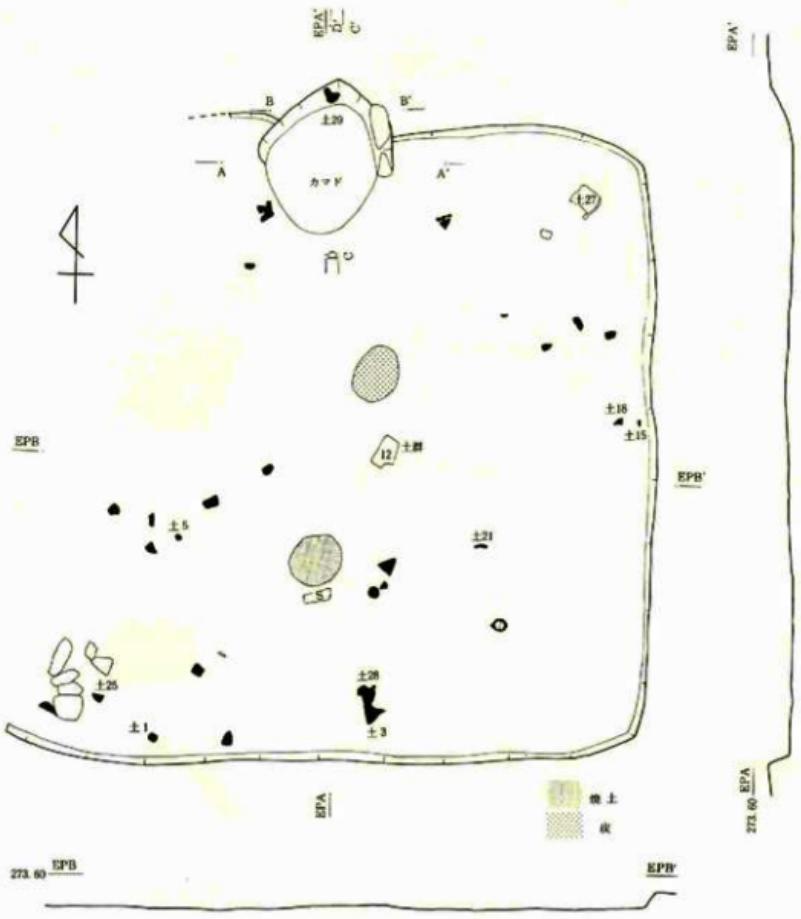
第43図 1号住居址出土遺物実測図



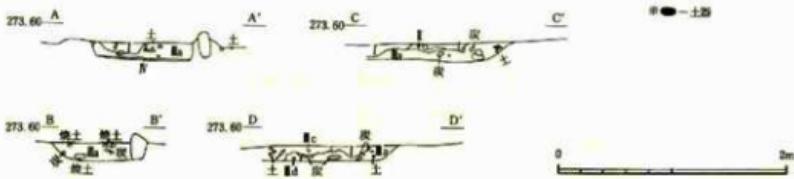
第44図 1号住居址出土遺物実測図

3号住居址 1軒だけ離れて検出されたが、西側が水路で破壊されていた。かまどの周囲には広く焼土が残存し、中央よりやや南寄りにも焼土があって、その近くに25cmの長方形の石が据えてあり、北西隅にも配石らしいものがある。

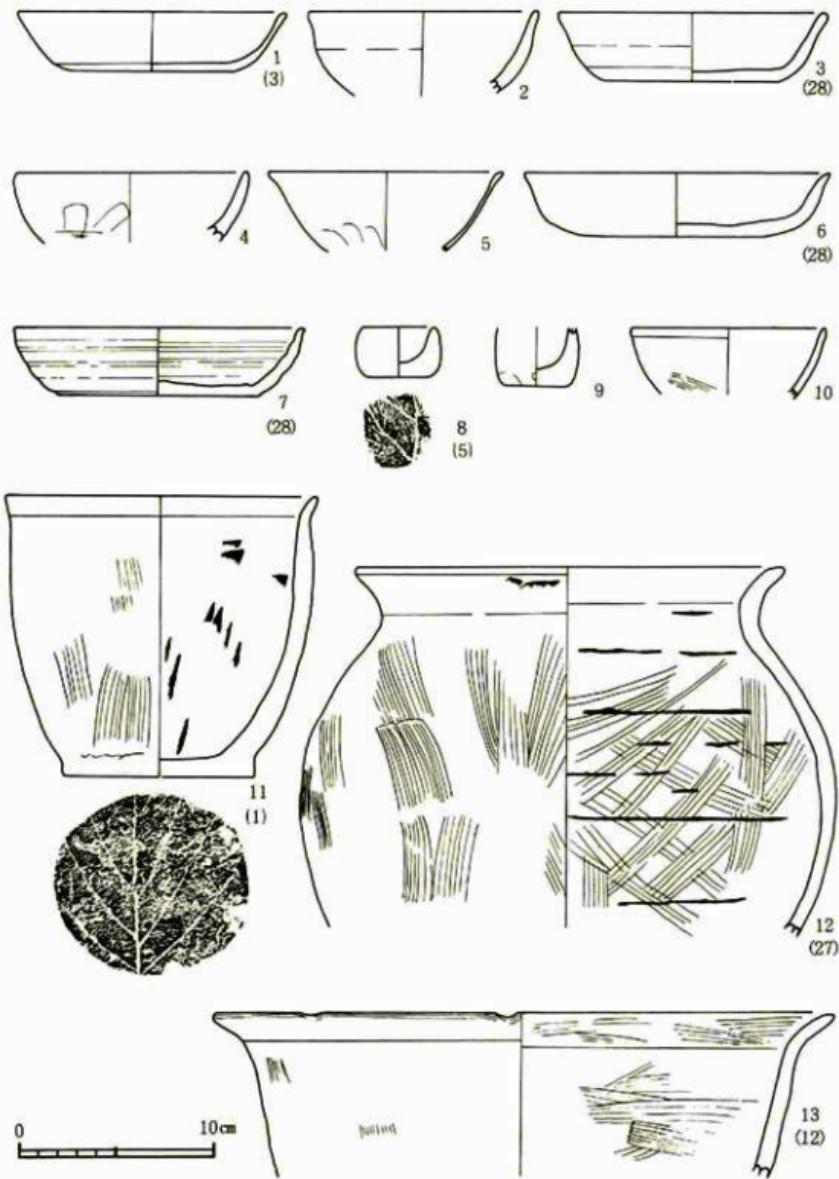
遺物はやや多く、器種も多様で、手捏式土器や片口のある甌などが出土した。時期は鬼高式期後半（古墳時代後葉）から真間式期（奈良時代）のものであろう。



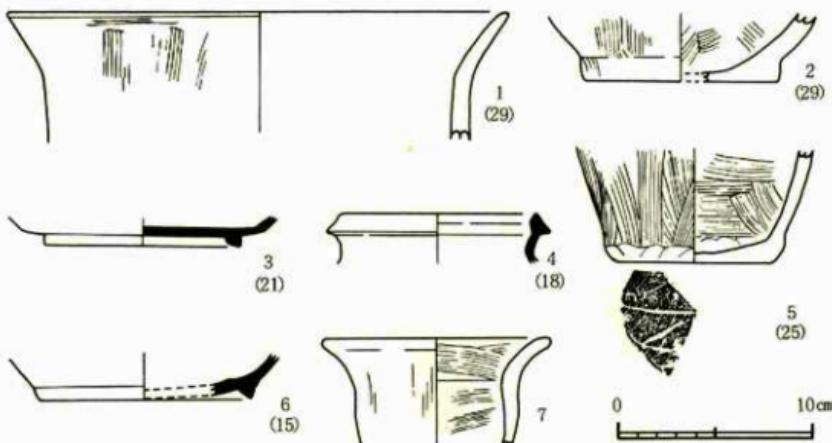
3号住居址カマドセクション



第45図 3号住居址実測図 (1:50)



第46圖 3號住居址出土遺物實測圖



第47図 3号住居址出土遺物実測図

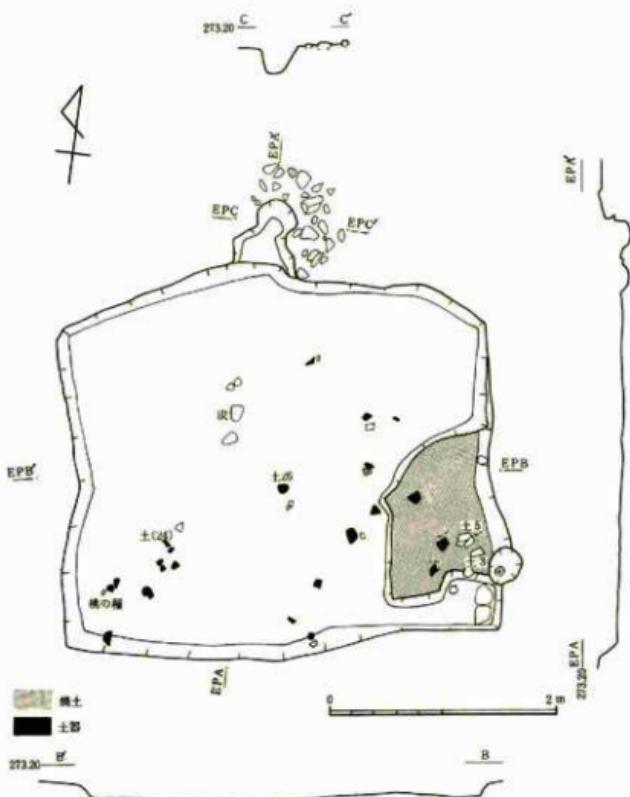
**6号住居址** 北側中央にかまどがあり、東側には焼土を伴うやや高い所がある。全体の形が不整形なのは疊層があったためであろうか。遺物は比較的少なく、鬼高式から真間式期の土師器、須恵器や桃の種子等が出土した。

**7号住居址** 一部は削平されて、破壊されていた。北側中央にかまどがあり、焼土だけが残存していた。遺物は国分式期の10世紀後半から11世紀にかけてのものであろう。

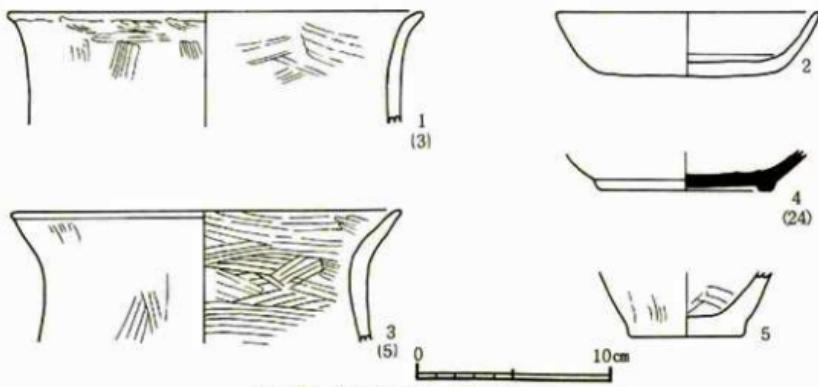
**8号住居址** 一部は削平され、破壊されていた。遺物は国分式9世紀後半から10世紀前半のものであろう。

以上のうち集中している1号、6号、7号、8号住居址の時代推移をみると、6号住居址が8世紀代で最も古く、8号が9世紀後半に構築され、これが廃絶される頃7号が建てられ、11世紀まで続いている。1号は8号よりやや遅れて構築され、後は7号、8号とはほぼ平行して存続したと考えられる。

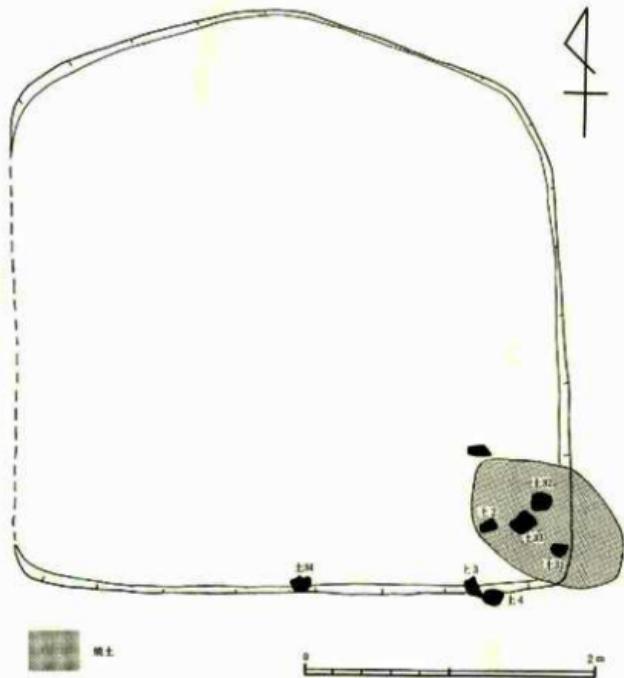
据立柱建物址と住居址から出土した遺物は、それぞれ古墳時代の鬼高式期から、平安時代の国分式期までのものであるから、建替えをしながらも並行して存続したと思われる。



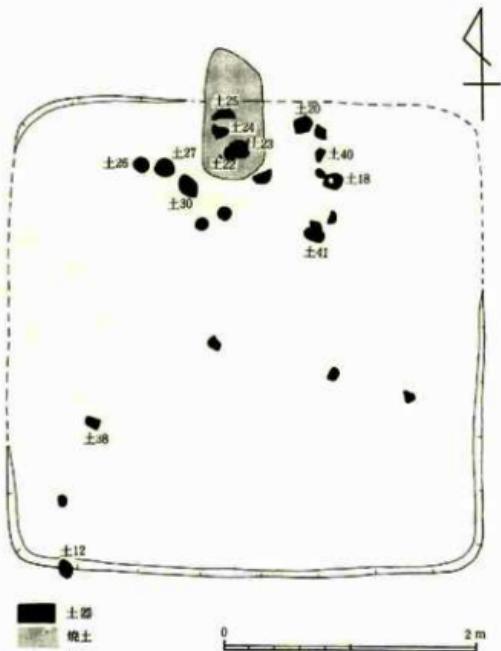
第48図 6号住居址実測図 (1:50)



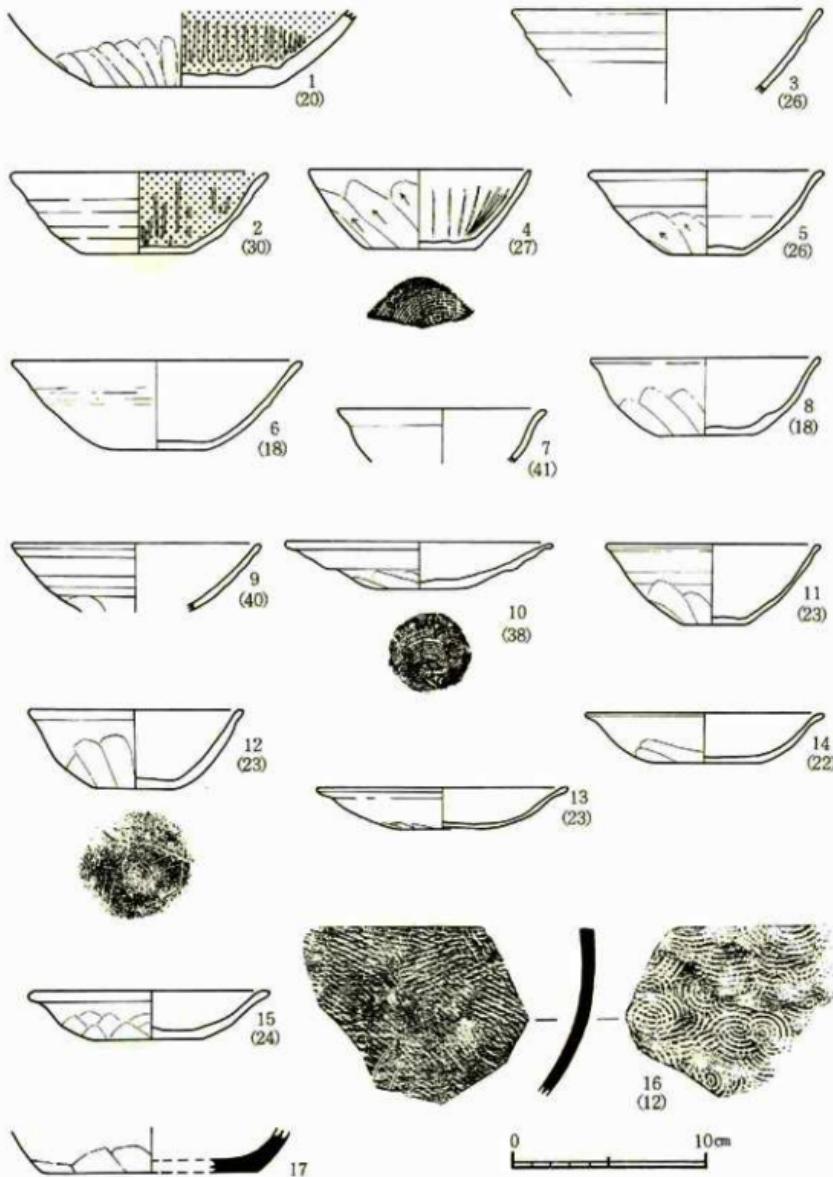
第49図 6号住居址出土遺物実測図



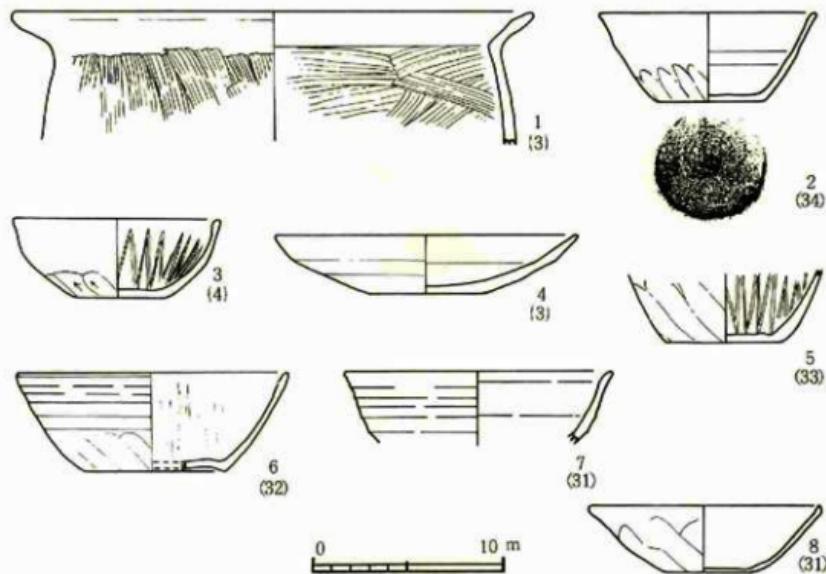
第51図 8号住居址実測図



第50図 7号住居址実測図

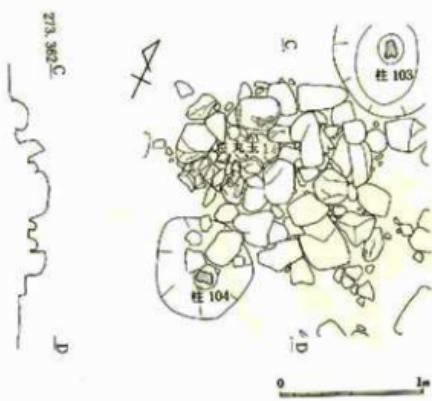


第52図 7号住居址出土遺物実測図



第53図 8号住居址出土遺物実測図

#### 配石造構と遺物



第54図 2号配石実測図

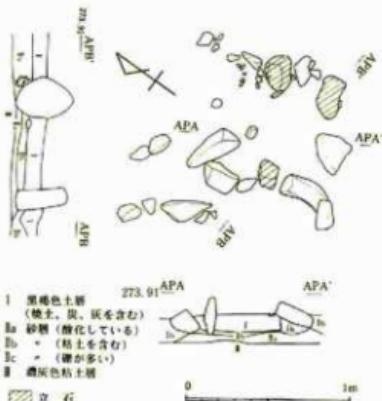
2号配石 2号掘立柱建物址の東側一部が重複している。30~40cmの石が累積しており、一部の104号柱穴の上に重なっているものを除去したところ、炉状に石組されていた。建物より後に構築したと考えられる。遺物は出土しなかった。

**3号配石** 73グリッドにあって、2号溝状遺構群より約80cm下層にある。立石のある粗石で、焼土炭、灰、を伴うのでかまどであろう。遺物は出土しなかった。

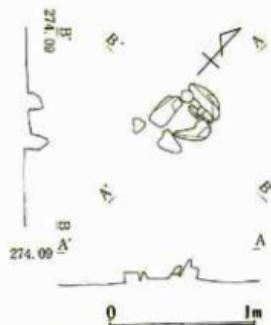
**4号配石** 54グリッドにあり、8、9号列石よりやや下層にあった。西と北側の石は横に立っていて、南に飛石状に配石らしいものがあるのは5号配石に似ている。遺物は出土しなかった。

**5号配石** 72グリッドにあり、南北約80cmの配石である。石を敷いて二隅に立石があり、他の二隅の石は倒れていた。敷石の下には焼土、炭化物、灰と土師器があった。西側に向って飛石状に配石らしいものがほぼ左右対称に五対あり、東にも一対あったが、周囲には砾が多く、配石かどうかは確定出来なかった。遺物は土師器片や、須恵器の底部が出土した。土師器は国分式期前期の10世紀前葉であろうか。

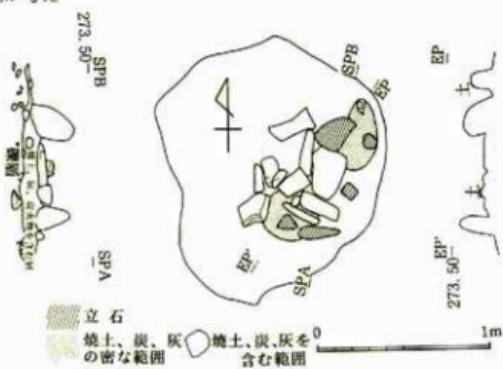
以上の点から祭祀遺構の可能性が考えられる。



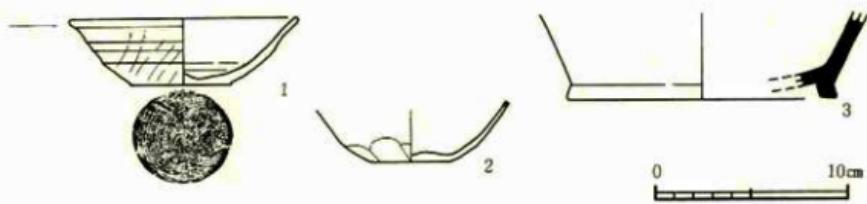
第55図 3号配石実測図



第56図 4号配石実測図



第57図 5号配石実測図

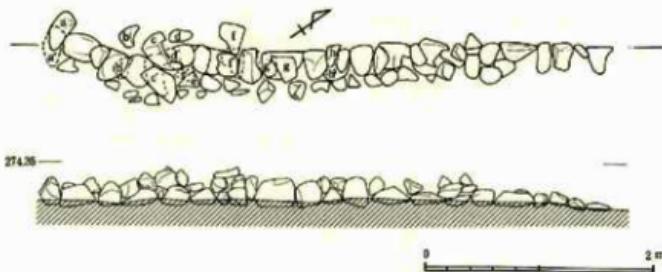


第58図 5号配石出土遺物実測図

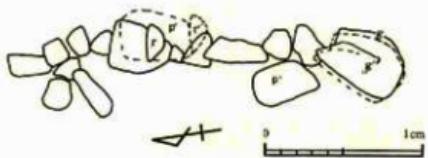
### 列石と遺物

奈良・平安時代のものと考えられる4号、5号列石について説明する。この2基からは遺物が出土しなかったので、その底部、又は上面が他の奈良・平安時代の遺構と一致することを基準とした。

**4号列石** 63、73グリッドにあり、石垣の基部が二段くらい残存しており、その1.5m西にこの続きと考えられるものが、1m程残存していた。上部は破壊されており、その積み方等はわからない。2基とも西に面をもっており、その底部は3号住居址とほぼ生活面が一致している。



第59図 4号列石平面及び側面図 (1:50)



第60図 5号列石実測図

**5号列石** 3号住居址と重複して、その上部にあった。基部が住居址床面の5cm程上にあり、破壊された石が南に散乱していた。面が南にあるので落したものであろう。

### 井戸状遺構と遺物

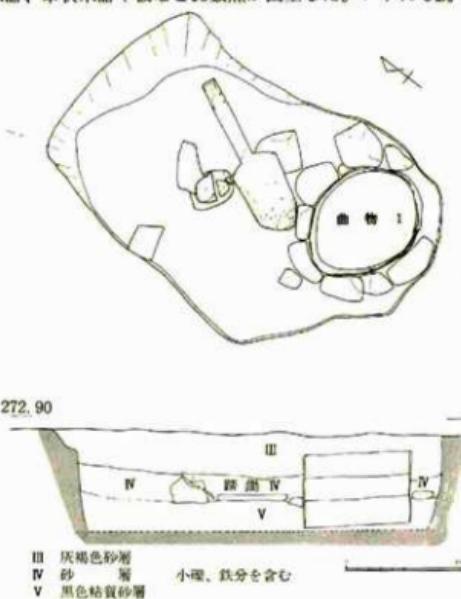
1、2号井戸状遺構は中・近世に、3、4号井戸状遺構は奈良・平安時代に使用されたと思われる。3、4号は1号と同じように湧水を利用して井戸としたものであろうか。発掘した時点では水は湧いていなかった。県外でも『所謂「曲物埋設遺構について』』（南博史昭58古代学叢論）によると、曲物を利用した井戸と考えられる遺構がいくつか発見されており、この例にならって本遺跡でも井戸址とせず井戸状遺構とした。

**3号井戸状遺構** 13号掘立柱建物址と柱穴群との間にあるが、その生活面は柱穴群とはほぼ同一である。

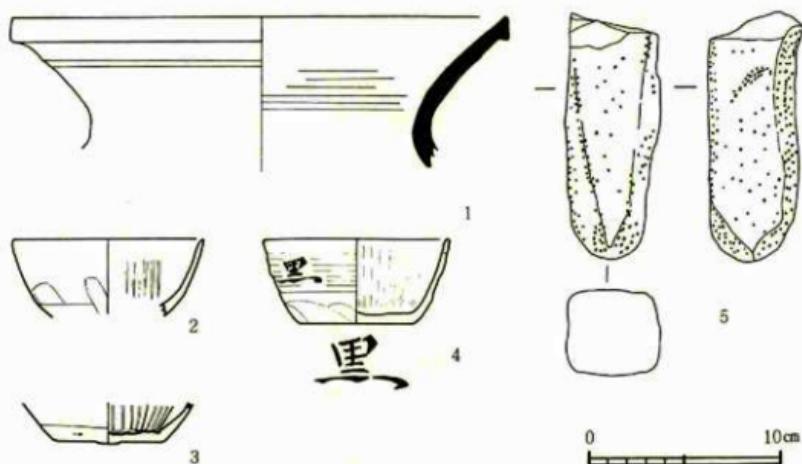
長さ2.8m、深さ35cmの長円形の土壌の中にあり、直径約35cm、高さ8cmの曲物を三段に重ね、周囲を石で一段囲っている。この構築方法は、4号井戸状遺構と酷似している。

遺物は土師器、須恵器と木器・石器とが出土した。覆土下層から出土したN.3の杯の底部破片は8世紀末頃とみられ、「黒」と書かれた墨書き土器は9世紀の初頭、N.2の口縁部はこれより少し後に位置付けられようか。石器は一部研磨されたらしい部分がある。曲物はヒノキ、又はサワラ類の材質の板を2枚重ねて円形にし、サクラの樹皮で3ヶ所を縫って固定している。最上段と最下段の曲物には帯を回している。

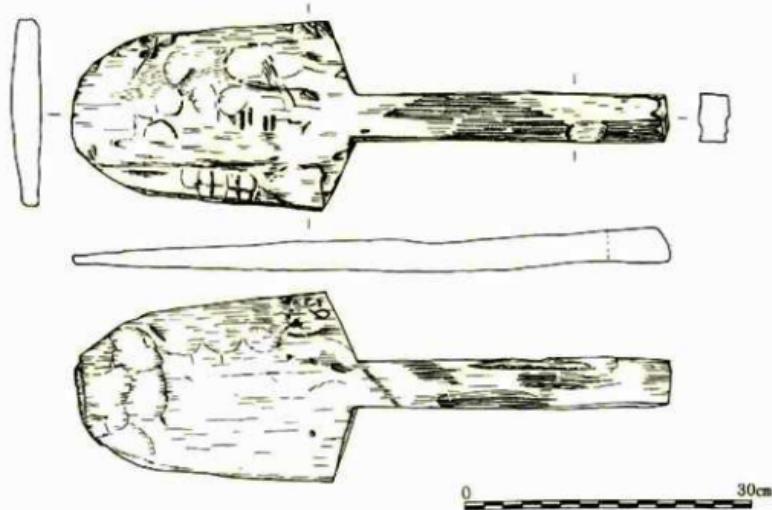
木器は踏躡の柄を初め、くの字形木器、串状木器や板など10数点が出土した。いずれも鋭利な刃物で一部、又は全部が加工されている。踏躡の柄は完形で（実測中1ヶ所折損）、斜め横の状態で出土した。長さは62.5cm、最大幅20cm、最大厚3.3cmで、肩は斜めに削り落している。両面に始刃状工具で削った痕跡があり、発見当初には、その先に半月状に鋸先を付けた跡があった。その他の木器は多くは完形品であるが、用途は不明である。なお曲物、踏躡の柄、くの字形木器等数点を、奈良市元興寺文化財研究所で樹脂含浸による保存処理を行なった。



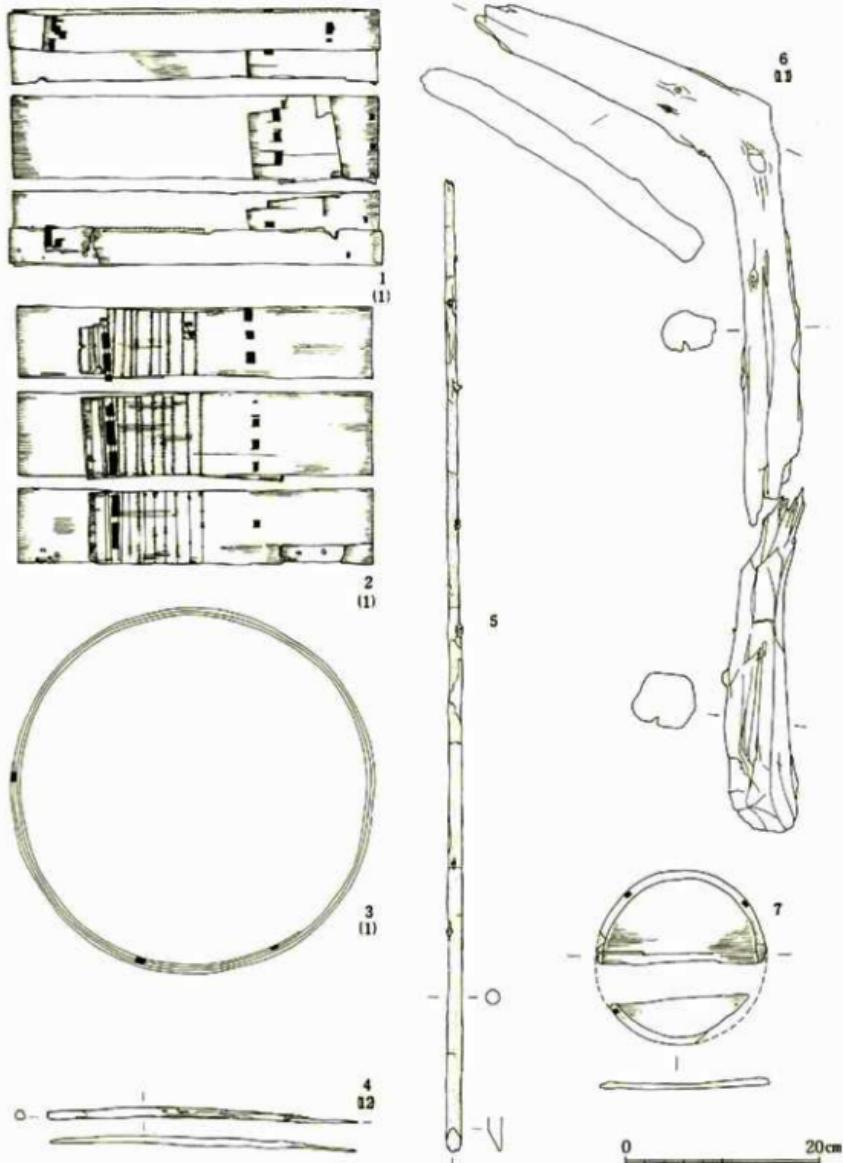
第61図 3号井戸状遺構実測図(1:20)



第62図 3号井戸状遺構出土遺物実測図



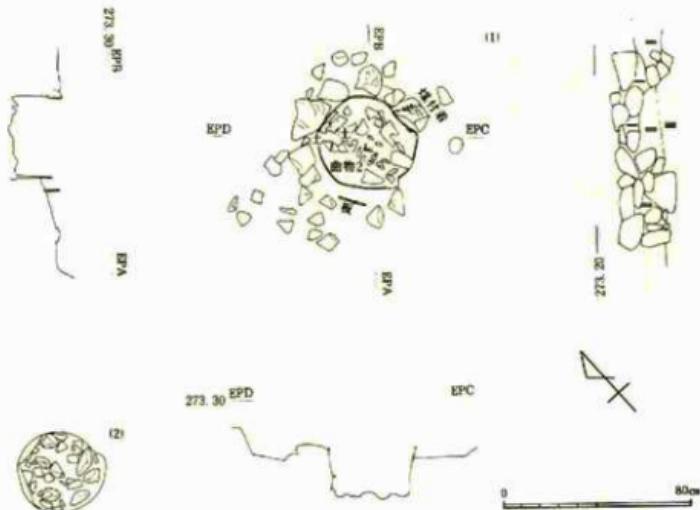
第63図 3号井戸状遺構出土踏刀実測図



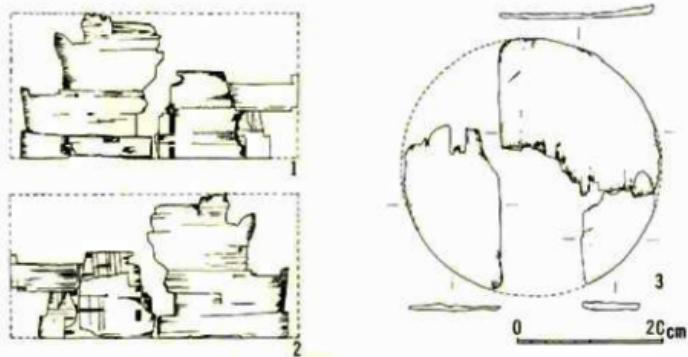
第64図 3号井戸状遺構出土木製品実測図

1 曲物外面、2 内面、3 上面、4 条状木製品、5 棒状木製品、6 ノの字形木製品、7 円形蓋状木製品

4号井戸状遺構 5号掘立柱建物址と6号住居址の間にあり、掘り込み面はこの2建物と同一面上にある。約80cmの土壇の中心に曲物を据え、周囲を石垣で囲んでいる。石垣はいわゆる重箱積みである。内部には円形蓋状の板と板片が入っていたが、他の遺物は出土しなかつた。曲物は直径40cm、高さ20cmの一段で、基底部に帶をまわしている。材質、技法は3号曲物と同じであったが保存状態が悪く、ほとんど現場で崩壊してしまった。時期は前述したように掘込面や構築方法から推定して、平安時代か或いは奈良時代であろう。



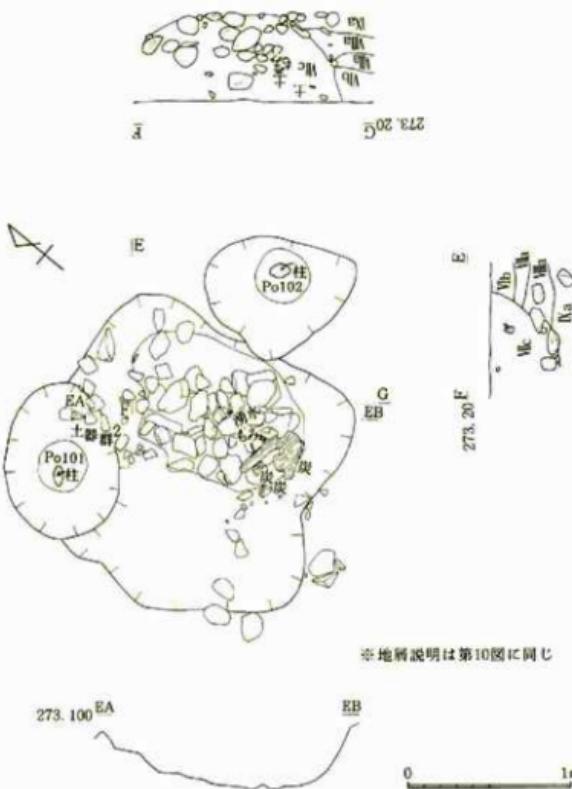
第65図 4号井戸状遺構実測図



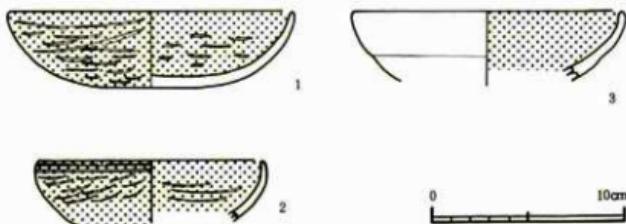
第66図 4号井戸状遺構出土木製品実測図

### 土壤と遺物

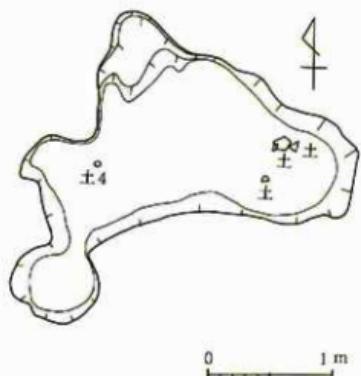
1号土壤 2号掘立柱建物址と重複している。101号柱穴が土壠を掘り込んでいる。一辺約180cmの不整方形を呈し、深さは約45cmである。下層には10cm~30cmの石が投げ込んだような状態で入っていた。遺物は上層と中層から古墳時代鬼高式期の黒色の碗が出土している。



第67図 1号土壤実測図 (1:40)

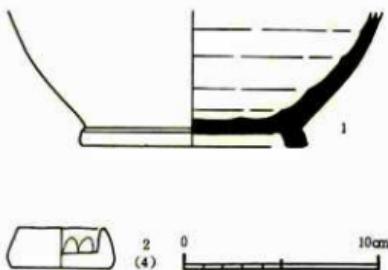


第68図 1号土壤出土遺物実測図



第69図 3号土壙実測図

3号土壙 2号掘立柱建物址の西にあって、長径約2mである。手挽式土器及び須恵器が出土した。

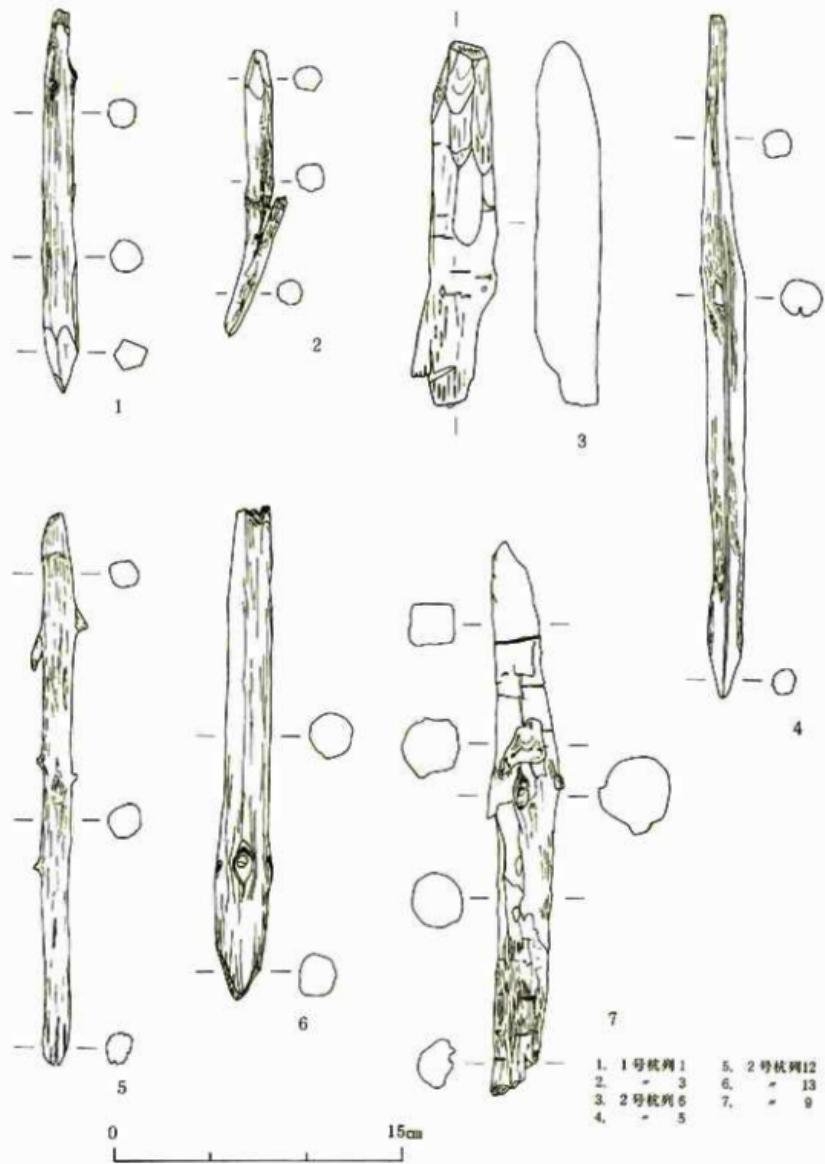


第70図 3号土壙出土遺物実測図

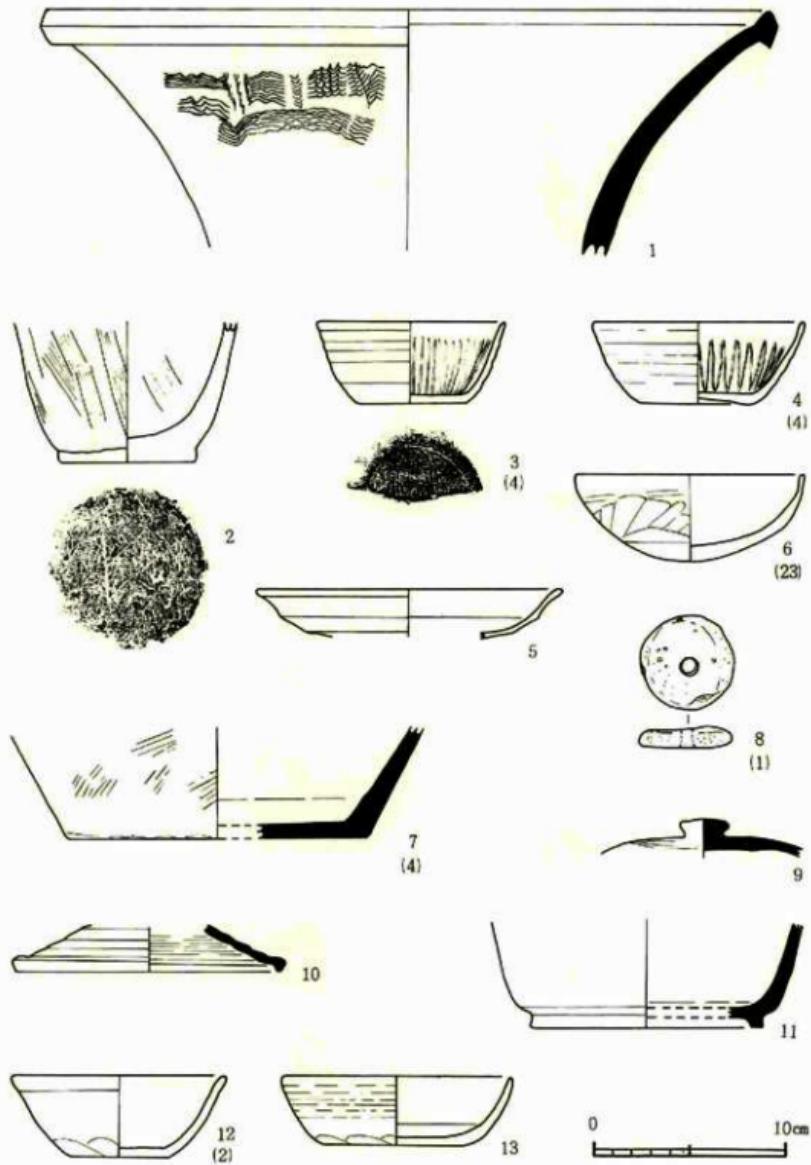


第71図 1・2号杭列実測図 (1:40)

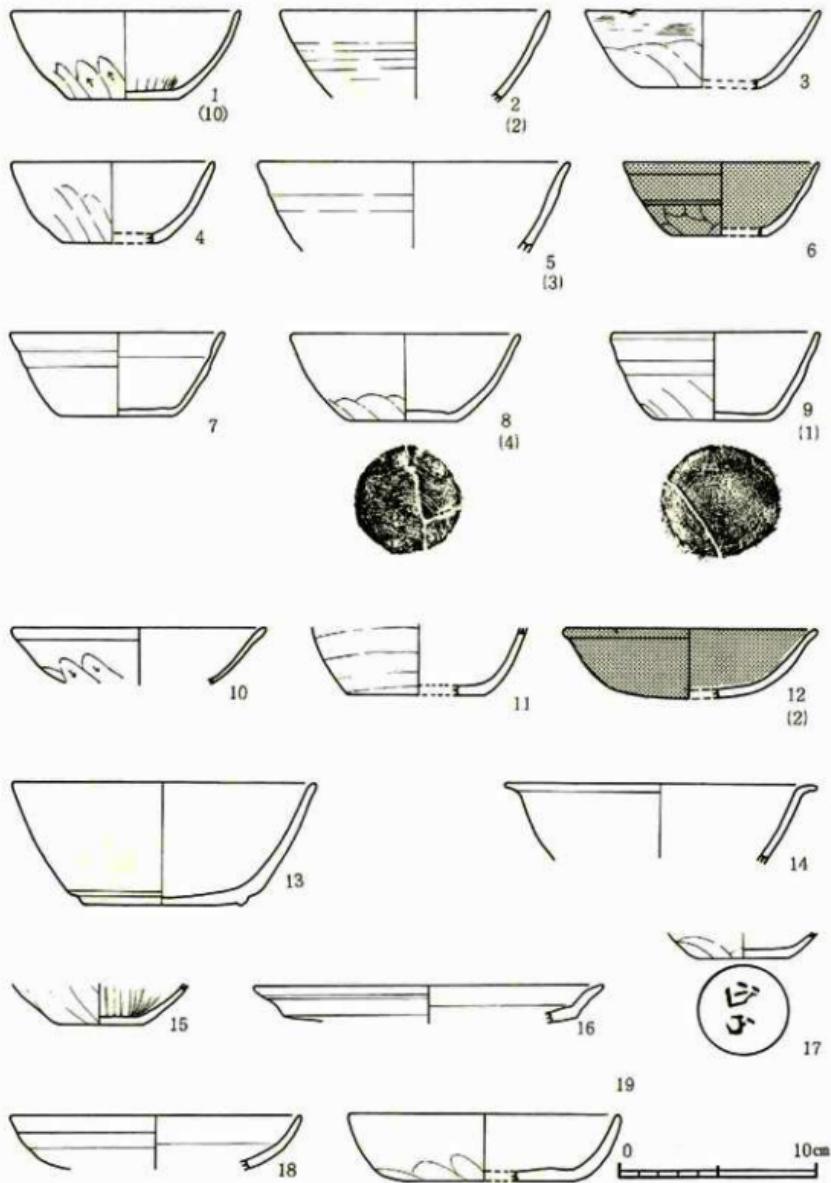
木7 杭列  
11号掘立柱建物址と一部が重複している。2列の杭が対になっていると考えられ、4号掘立柱建物址と同一生活面上にあって、これに向いあっている。1号杭列は4本からなり、長さは90cm、2号杭列は9本からなり長さは1.4mであるが、列外にはみ出しているものもある。杭の太さはいずれも1.5cmから3cmの間で、長さは現状で25cm内外であるが、上部は腐朽していた。先は鋭利な刃物で一刀で切られている。材質はイチイ、カヤなどである。



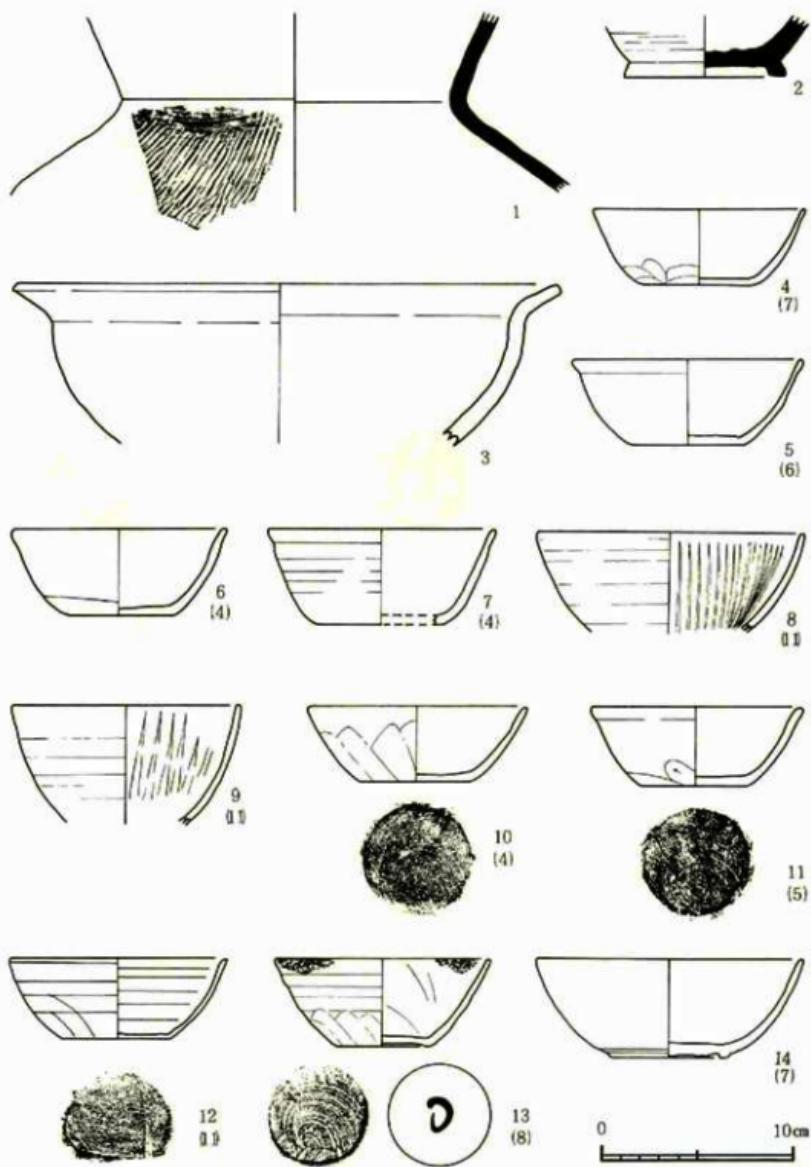
第72図 杭 実 検 図 (1:6)



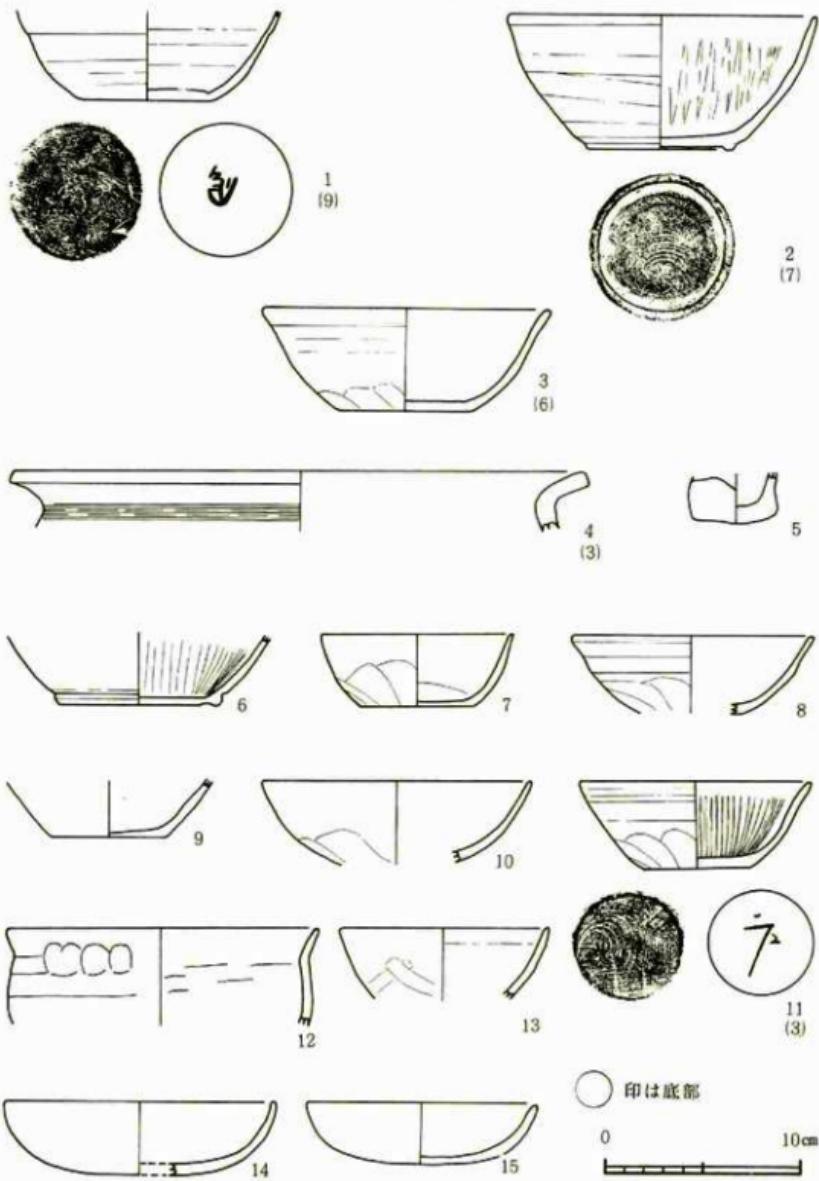
第73図 挖立柱建物址付近出土遺物実測図



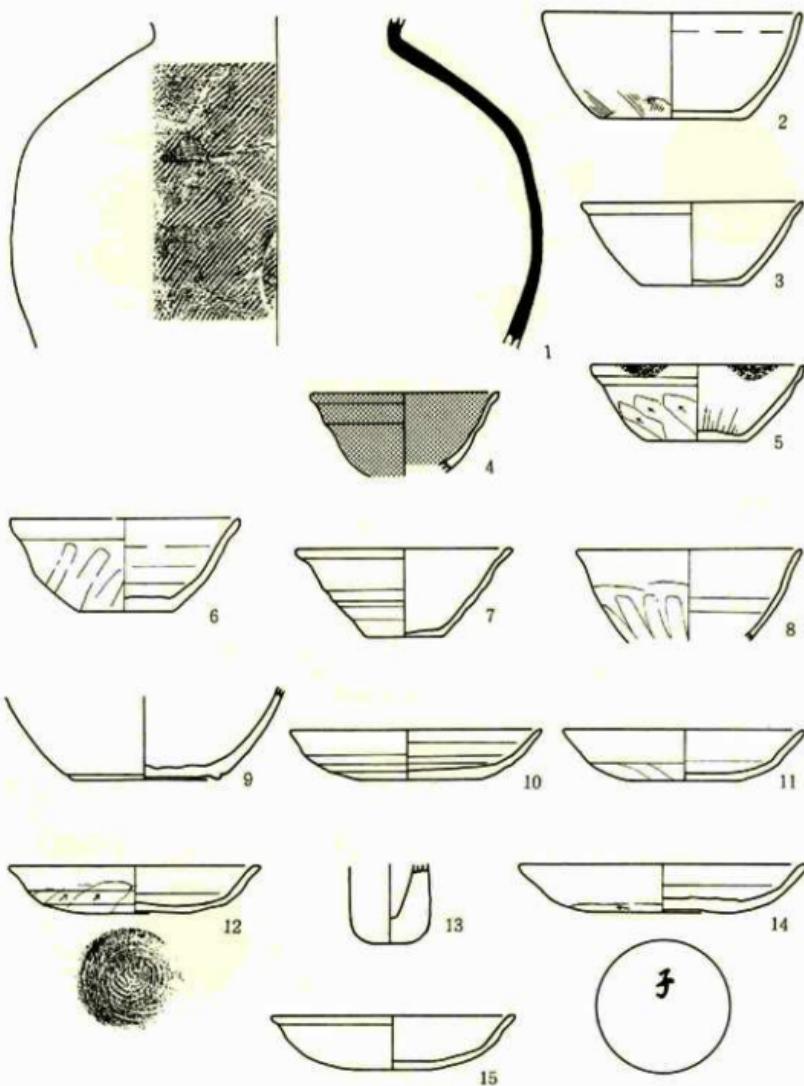
第74図 掘立柱建物址付近出土遺物実測図



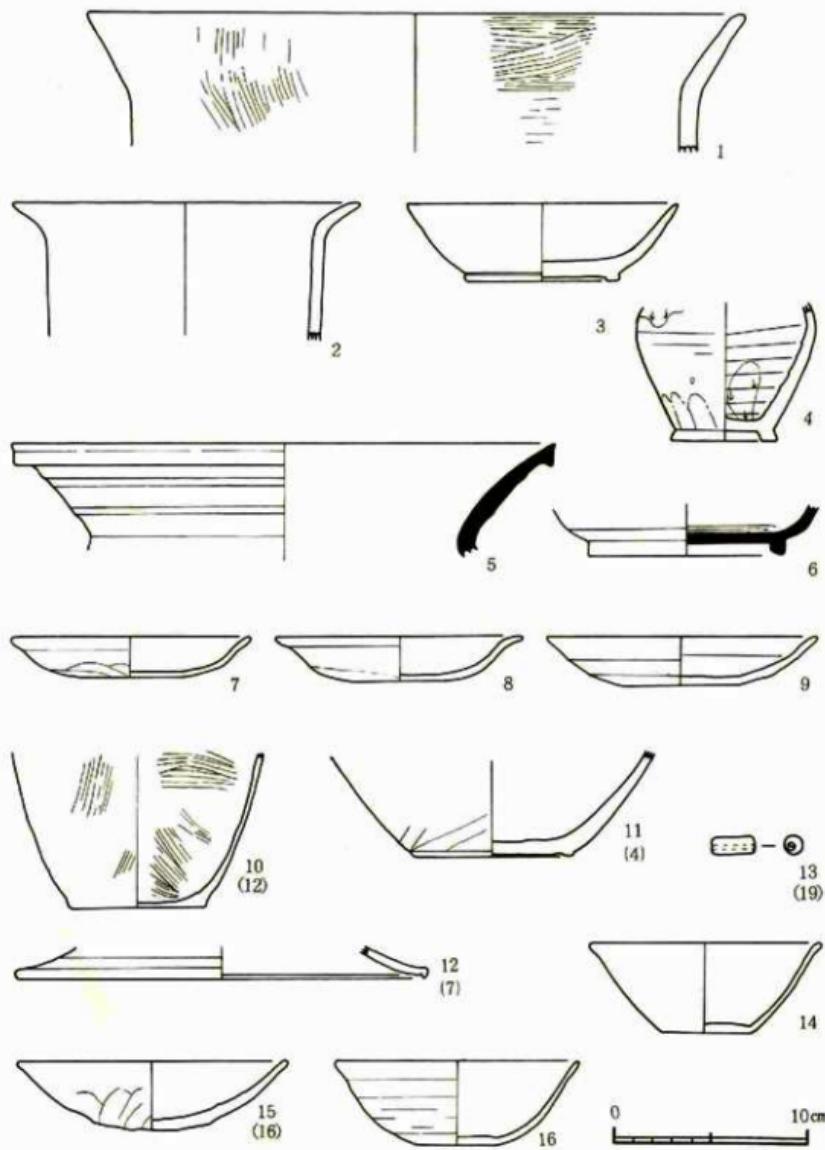
第75图 2号掘立柱建物址付近出土遺物実測図



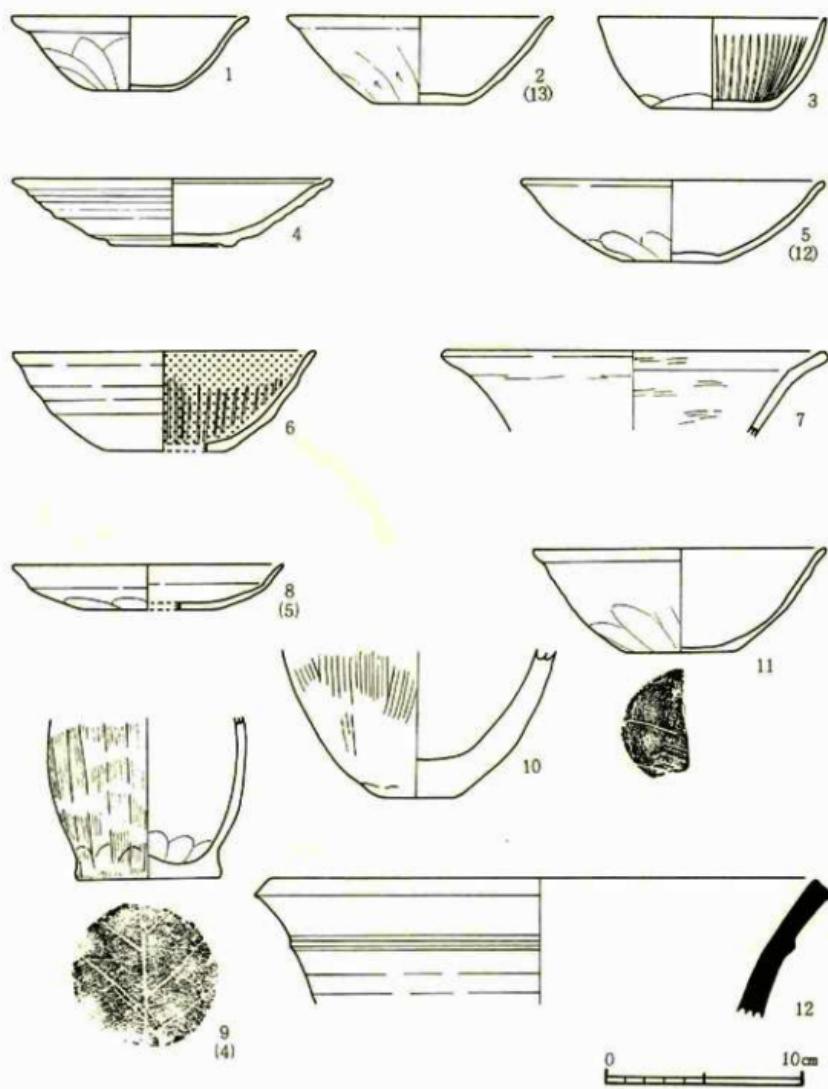
第76図 2号掘立柱建物址付近出土遺物実測図



第77図 5号配石付近出土遺物実測図



第78図 5号配石付近出土遺物実測図



第79图 4号石付近出土遺物実測図

器蔵番号	出土地点	種類	器形	古墳(或古跡)名	調査				胎土色 焼成	備考
					口縁	外面	内面	底		
第121 回	SB — 2 床面直上	土器	管 玉							
* 2	*	*	*							
* 3	*	*	裏 玉							
* 4	*	*	*							
* 5	SB — 2 (PSより)	土器	皿	14.0 — —	隆玉 線	ロクロ水引	ロクロ水引		緑白良 褐色	密色好
* 6	*	*	皿	14.0 — —	玉 線	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引 窓		緑白良 褐色	密色好
* 7	SB — 2 床面直上	*	杯	11.4 4.3 5.0	*	*	ロクロ水引 花井状暗文 底部凹軸窓附		緑白良 褐色	密色好
* 8	SB — 2	*	高台付	— 8.6		ナ デ	ナ デ	雨り出し 高 台	緑白良 褐色	密色好
* 9	*	*	杯	14.2 5.0 —	尖 形		放射状暗文 横ナデ		緑灰良 褐色	
* 10	SB — 2 床面直上	*	*	11.0 4.0 4.6	丸 悪	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引 ナ デ	把柄赤切 窓	緑白良 褐色	墨書「長」
* 11	SB — 2	*	壺	— 7.2		横刷毛 窓押え	箆 附	木 葉 痕	砂粒を含む 褐色	密色好
* 12	SB — 2 床面直上	*	高台付 杯	— 6.0		回転ナデ	ナ デ 放射状暗文?		緑褐良	密色好
* 13	SB — 2	*	蓋	23.0 —		ロクロ水引	ロクロ水引		砂粒を含む 褐色	
* 14	*		砥 石							
第271 回	SB — 4 掘立柱 物内	土器	壺	28.0 — —	薄 長	横刷毛	横刷毛		砂粒を含む 茶褐色	
* 2	* 付近	*	小型壺	6.0 6.8 4.0				木 葉 痕	砂粒を多く 含む褐色	
* 3	*	*	手 捶	3.8 3.0 3.0			指紋押圧	中央あり	砂粒を含む 褐色	
* 4	SB — 4	*	壺	2.6 — —	薄 長	口縁部横ナデ 刷毛	口縁部横ナデ 刷毛		砂粒を含む 褐色	
* 5	SB — 10	*	杯	11.4 4.1 6.4	玉 線	口縁部ロクロ水引 横ナデ	ロクロ水引		緑白良 褐色	密色好
* 6	掘立柱 物付近	*		— 8.0		横刷毛	横刷毛	木 葉 痕	砂粒を含む 褐色	

標因番号	出土地点	種類	器形	法(口徑 底径 高さ 厚さ)	測量				胎色 焼成	備考
					口 線	外 面	内 面	底		
第277 回	SB — 4	*	台付环	18.0 5.4 9.0	玉 線	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位凹版 寬削	ロクロ水引	削り出し	黒灰良 褐	密色好
* 8	獨立柱建物 覆土	*	环	15.8 3.5 8.6	丸 型	*	*	*	黒白良 褐	密色好
* 9	*	*	壺	— 8.1		紙刷毛	横刷毛	木葉痕	妙粒を含む 褐	密色好
* 10	*	*	环	13.6 — —	丸 型	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位凹版 寬削	ロクロ水引 花卉状暗文		黒白良 褐	密色好
* 11	*	*	鉢	20.0 — —	玉 線	ロクロ水引	ロクロ水引			
* 12	*	*	环	12.0 4.0 4.0	*	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位宽削	ロクロ水引		黒茶良 褐	密色好
第421 回	SB 床面直上	*	*	11.2 4.4 5.2	路 玉 線	*	*		黒褐良 褐	密色好
* 2	*	*	*	12.0 4.2 4.0	*	*	*	回転糸切 → 寬削	細かい妙粒 を含む 褐色	剥落あり
* 3	*	*	*	11.6 4.3 5.0	*	*	*		黒褐良好	密色
* 4	SB — 1 床面直上	土師	环	17.0 6.4 6.4	玉 線	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位宽削	ロクロ水引	回転糸切 → 寬削	わずかに妙 粒を含む 褐色	内墨
* 5	*	*	*	16.0 5.4 8.4	*	*	*	寬削	黒褐良	密色好
* 6	SB — 1	*	*	12.0 2.8 4.8	路 玉 線	*	*	回転糸切 → 寬削	妙粒を含む 赤褐色	好
* 7	*	*	*	14.4 5.0 5.0	*	*	*	*	黒褐良	密色好
* 8	SB — 1 床面直上	*	*	12.0 2.8 4.0	*	*	*	*	妙粒を含む 褐色	内墨
* 9	*	*	*	14.0 4.5 8.0	玉 線	*	ロクロ水引 放射状暗文	糸切 → 寬削	黒良	密好
* 10	SB — 1	*	*	— 6.0		新位宽削	放射状暗文		黒褐良 褐	密色好
* 11	*	*	*	13.2 3.2 6.9	路 玉 線	ロクロ水引	寬ナゲ	回転糸切 → 寬削	妙粒を含む 褐色	密色好
* 12	*	*	*	12.0 4.0 4.4	*	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位宽削	ロクロ水引		黒褐良 褐	密色好
* 13	SB — 1 床面直上	*	*	11.0 — —	丸 型	*	*		黒褐良 褐	密色好
* 14	*	*	*	11.4 4.4 5.2	*	*	*		*	

器 種 名 号	出 土 地 点	種 類	器 形	法(口引 基部 の変形)	調 整				土 色 燒 成	備 考
					口 縁	外 面	内 面	底		
第 4215 回	SB — 1 床面直上	土師	杯	16.0 —	玉 總	口縁部ロクロ水引	ロクロ水引		鐵 褐 良	密 色 好
* 16	*	*	杯	12.0 —	玉 總	*	ロクロ水引		*	
* 17	SB — 1	*	杯	— 8.0		斜位刷毛 橫位寬削		削り出し 高 台	*	
* 18	SB — 1	*	*	13.0 3.0 6.0	玉 總	斜位刷毛 器体下半橫位 斜位寬削	ロクロ水引 回転寬削	回転寬削	鐵 褐 良	密 色 好
* 19	SB — 1	*	*	— 4.0		回転横ナデ	回転横ナデ		鐵 褐 良	密 色 好
* 20	SB — 1	*	*	12.5 2.4 4.5	隆 玉 總	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位寬削	ロクロ水引		砂粒を含む 褐 褐 良	褐 褐 色 好
* 21	*	*	皿	16.0 2.2 7.0	玉 總	口縁部ロクロ水引 器体下半橫位 回転寬削	*		鐵 白 良	密 色 好
第 4311 回	SB — 1 カマツ	土師	杯	10.0 —	*	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位寬削	*		鐵 茶 良	密 色 好
* 2	SB — 1	*	*	10.0 —	尖 形	交叉の刷毛 器体下部寬削	花卉状暗文 寬削き		鐵 赤 良	密 色 好
* 3	*	*	*	11.6 4.5 5.8	玉 總	ロクロ水引	ロクロ水引 放射状暗文	回転系切 → 宽削	鐵 褐 良	密 色 好
* 4	*	*	皿	12.0 —	隆 玉 總	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位寬削	ロクロ水引		*	
* 5	*	*	*	14.0 —	丸 形	*	*		鐵 灰 良	密 色 好
* 6	*	*	*	14.0 4.0 6.4	隆 玉 總	*	*		鐵 白 良	密 色 好
* 7	*	*	*	15.6 —	玉 總	ロクロ水引	*		*	
* 8	*	*	蓋	— —		*	*		鐵 白 良	密 色 好
* 9	*	*	杯	22.0 —	丸 形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位寬削	*		わずかに小 石を含む 鐵 褐 良	密 色 好
* 10	SB — 1 床面直上	*	蓋	17.0 4.0 —		ロクロ水引 斜位寬削	*			
* 11	SB — 1	*	燒	25.0 —	薄 長	口縫部横ナデ 網部刷毛	ナデ 横刷毛		石英、光輝 石多 良	
* 12	SB — 1 土	土師	蓋	— 17.0		ロクロ水引 上半ロクロ回転 寬削	ロクロ水引		鐵 褐 良	密 色 好
* 13	SB — 1	*	*	— 17.5		*	*		*	赤 色 顔料?

検査番号	出土場所	種類	基形	透(口)径 深(底) (cm)	調整				土色 調査 焼成	備考
					口縁	外面	内面	底		
第4314 図	S B — 1 床面直上	土師	甕	24.0 — —	薄 長	口部横ナデ 底部織刷毛	横ナデ		黒良 褐	色好
*15	SB — 1	*	*	30.0 — —	肥 厚	口部横ナデ 底部斜位 織刷毛	横ナデ 斜位刷毛		小石と砂粒 を含む 褐色	色好
第441 図	*	*	*	26.6 — —		口部横ナデ 底部織刷毛	*		砂粒が多い 褐色	色好
*2	*	*	*	— 9.0		縦刷毛 斜位窓削	斜位刷毛		石高、黒芸目 が多く、赤じ きり	
*3	*	*	甕	— 12.0		縦刷毛	横刷毛	木葉痕 ↓ 泥垢	砂粒を含む 褐色	色好
*4	*	*	甕	27.0 — —	疊 肥 厚	口縦横ナデ 底部織刷毛	横刷毛		茶良 褐	色好
*5	*	*	*	— 11.0		縦刷毛	横刷毛	木葉痕	茶良 白芸目 を含む 褐色	色好
*6	*	須恵	甕	34.0 — —		ロクロ水引	ロクロ水引		わずかに砂 粒を含む 褐色	色好
第461 図	SB — 3	土師	环	13.8 3.1 8.2	玉 縁	*	*	窓	密	密色好
*2	*	*	*	12.0 — —	*	*	*		わずかに砂 粒を含む 褐色	色好
*3	*	*	*	13.8 3.5 9.0	*	口縦部ロクロ水引 器体下半横位 回転窓削	*		褐色良	密色好
*4	*	*	*	12.0 — —	丸 型	口縦部ロクロ水引 器体下半斜位窓削 横ナデ	*		密質良 白	密色好
*5	*	*	*	12.2 — —	疊 玉 縁	口縦部ロクロ水引 器体下半斜位窓削	*		白良 褐	密色好
*6	SB — 3	土師	环	15.6 3.3 12.8	尖 形	ロクロ水引	ロクロ水引	回転糸切 ↓ 泥垢	褐色良	剥落多
*7	*	*	*	15.0 3.5 12.5	玉 縁	口縦部ロクロ水引 横位回転窓削	ロクロ水引 横位回転窓削	逆回転	褐色良 茶良	密色好
*8	*	*	*	3.8 2.6 3.8	手 捏		指頭押圧痕	木葉痕	砂粒を含む 褐色 亦良	色好
*9	*	*	*	— 3.4		指頭押圧痕			*	
*10	*	*	环	10.0 — —	丸 型	口縦部ロクロ水引 器体下半斜位窓削	ロクロ水引		致 褐色	密色好
*11	SB — 3	*	甕	16.0 14.5 10.0	薄 長	口部横ナデ 底部織刷毛	横ナデ 窓削	木葉痕	砂粒を含む 褐色	色好
*12	*	*		22.0 — —		*	横ナデ 交互の刷毛 窓削の痕あり		わずかに砂 粒を含む 褐色	色好

器 種 類 番 号	出 土 地 点	種 類	器 形	計 量 (口径 及 底 径) mm	調 整				胎 土 色 燒 成	備 考
					口 縁	外 面	内 面	底		
第 4613 回	S B — 3	土師	壺	32.0 — —	薄 長	口縁部横ナデ 底部刷毛	横ナデ 横刷毛	赤褐色	小様を含む 良	口縁整 形が粗 雑
第 471 回	SB — 3 カマド F	*	*	26.0 — —	*	口縁部横ナデ 刷毛	ナデ		小様を含む 良	色好
* 2	SB — 3 床面直上	*	*	— 10.0		刷毛	斜位刷毛	木型焼 成剂	砂粒を含む 良	色好
* 3	*	須恵		— 10.0		ロクロ水引	ロクロ水引		鐵灰良	密色好
* 4	*	*	壺	10.2 — —	*	*	*		*	
* 5	*	土師	壺	— 8.0		刷毛	横刷毛 底部指圧痕	木葉痕	砂粒を含む 赤褐色 も	色好
* 6	SB — 3	須恵	壺	— —		ロクロ水引	ロクロ水引	削り出し 高台	鐵灰良	密色好
* 7	SB — 3 カマド一括	土師	壺	12.0 — —	薄 長	口縁部横ナデ 刷毛	横刷毛		砂粒を含む 良	色好
第 491 回	SB — 6	土師	壺	20.0 — —	薄 長	横ナデ 刷毛	斜位刷毛		砂粒を含む 良	色好
* 2	*	*	*	13.6 3.4 7.0	丸 形	ロクロ水引	ロクロ水引		わずかに砂 粒を含む 良	密色好
* 3	*	*	*	20.0 — —	薄 長	口縁部横ナデ 刷毛	交互の刷毛		鐵灰良	密色好
* 4	*	須恵	壺	— 9.0		ロクロ水引	ロクロ水引	削り出し 高台	鐵灰良	密色好
* 5	*	土師	壺	— 5.6		刷毛	斜位刷毛	木葉痕	砂粒を含む 良	密色好
第 521 回	SB — 7	*	环	— — 9.2		器体下半斜位窓附	放射状暗文 底部凹凸ナデ		鐵灰良	密色好 内黒
* 2	*	*	*	13.4 4.2 5.4	玉 縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引 放射状暗文	糸切 窓附	鐵灰良	密色好
* 3	*	*	*	16.0 — —	*	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引		鐵灰良	密色好
* 4	*	*	*	11.6 4.2 6.6	尖 形	*	ロクロ水引 放射状暗文	糸切	鐵灰良	密色好
* 5	*	*	*	12.0 4.4 4.0	隆 玉 縁	*	ロクロ水引	糸切 窓附	鐵灰良	砂粒を含む 色好
* 6	*	*	*	15.0 4.6 2.5	玉 縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位 窓附	*		鐵灰良	密色好
* 7	*	*	*	10.8 —	玉 縁	ロクロ水引	*		鐵灰良	密色好

編目番号	出土地点	種類	基形	直径 (口徑 +底径) mm	調整				胎色 土調 模成	備考
					口縁	外 面	内 面	底		
第528 回	SB—7	土師	杯	11.7 4.0 4.7	玉 縫	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位寬削	ロクロ水引		砂粒を含む 赤良	
#9	+	+	+	13.0 —	玉 縫	+	+	+	+	
#10	+	+	瓶	13.9 2.4 3.8	隆玉縫	+	+	回転糸切 寬削	致白良	密色好
#11	SB—7 燒土 内	土師	杯	11.0 4.2 3.0	隆玉縫	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位寬削	ロクロ水引	寬削	致白良	密色好
#12	+	+	+	11.0 4.1 4.0	玉 縫	+	+	回転糸切 寬削	致白良	密色好
#13	+	+	皿	12.5 2.2 5.0	隆玉縫	+	+	+	致白良	密色好
#14	+	+	+	12.2 2.6 5.4	+	+	+	+	致灰良	褐
#15	+	+	+	12.5 2.5 5.5	+	+	+	+	致茶良	褐
#16	SB—7	須恵	壺	— — —	平手叩き	同心円叩き 半スリケシ			致灰良	密色好
#17	+	+	杯	— — 11.0	斜位寬削				致灰良	密色好
第531 回	SB—8	土師	壺	24.0 —	薄 長	口縁部横ナデ 副頭部刷毛	横ナデ 横刷毛		墨厚・砂粒 を含む 褐色	
#2	+	+	杯	11.0 4.5 5.5	玉 縫	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位寬削	ロクロ水引	回転糸切 寬削	致白良	密色好
#3	+	+	+	10.8 4.1 4.7	丸 型	+	ロクロ水引 花弁状暗文	糸切 ↓ 寬削	+	
#4	+	+	皿	15.6 3.0 6.0	+	口縁部ロクロ水引 器体下半横位 回転寬削	ロクロ水引	回転糸切 寬削	+	
#5	SB—8 燒土 内	+	杯	— 6.0	—	+	花弁状暗文		+	
#6	+	+	+	14.0 5.1 7.0	丸 形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位寬削	ロクロ水引 花弁状暗文	糸切	致茶良	密色好
#7	+	+	+	14.0 — —	玉 縫	+	ロクロ水引		致白良	褐
#8	+	+	+	12.0 3.5 4.0	+	+	+	回転糸切 寬削	致茶良	密色好
第581 回	5号配石	土師	杯	11.5 3.7 5.0	隆玉縫	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位寬削	ロクロ水引	回転糸切 寬削	致茶良	密色好
#2	+	+	杯	— — 4.2	—	新粒寬削		+	致白良	褐

標	出	種	器	形	法(口) 直(高) 横(底)	調 整				胎 土 色 燃 燒 成	備 考
						口 横	外 面	内 面	底		
第583 回	5号配石	須恵	壺	一 14.0		ロクロ横ナデ	ナデ			砂粒を含む 白色良	
第621 回	3号井戸状 遺構	々	々	26.0 —	折り返し	ロクロ水引	ロクロ水引			鐵灰良	密色好
〃2	〃	土師	环	11.0 —	尖 形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引 花卉状暗文			鐵赤も 褐色	密色好
〃3	〃	々	々	— 7.6		横位窓附	放射状暗文			鐵白良	密色好
〃4	〃	々	々	10.0 4.5 6.0	丸 形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引 花卉状暗文			〃	墨香 「墨」
〃5	〃	磁石									
第681 回	1号土塗	土師	碗	15.0 4.0 6.0	丸 形	窓 ↓ ナデ	窓 ↓ ナデ			砂粒を含む 白色良	内、外 黑色
〃2	〃	々	々	11.6 —	〃	〃	〃			〃	〃
〃3	〃	々	々	14.0 —	〃	〃	〃			砂粒を含む 白色(外)内黑 良	
第701 回	3号土塗	須恵	壺	— 12.0		ロクロ水引	ロクロ水引			砂粒を含む 白色良	内面既 然無
〃2	〃	土師	手 楼	5.2 2.0 4.8			指頭押圧痕			砂粒を含む 白色良	
第731 回	52G 1.2-C,D 2層	々	壺	38.0 —	折り返し	口縁部に波状文 あり ロクロ水引	ロクロ水引			鐵灰良	密色好
〃2	53G 1.2-A,B	土師	壺	— 7.0		縱刷毛	斜位刷毛 底部窓附	木壓痕		砂粒を含む 褐色	
〃3	53G 1.2-A,B 3層	々	环	10.0 4.2 6.0	尖 形	ロクロ水引	ロクロ水引 放射状暗文	静止未切 窓 ↓ ナデ		鐵白良	密色好
〃4	53G 1.2-A,B	々	々	11.0 4.2 6.0	丸 形	ロクロ水引	ロクロ水引 花卉状暗文	回転未切 窓 ↓ ナデ		鐵褐良	密色好
〃5	53G 1.2-A,B	々	々	16.0 —	疊 玉 線	ロクロ水引	ロクロ水引	撚削		鐵白良	密色好
〃6	53G 1.2-A,B	々	碗	12.0 4.4 1.0		口縁部横ナデ 窓附	横ナデ			砂粒を含む 灰褐色	
〃7	53G 1.2-A,B 3層	須恵	壺	— 16.0		平行叩き 平スリケシ	みこみ部から 器体部に刷毛			鐵灰良	密色好
〃8	52G 3.4-C,D 6層	滑石	劫鉢車								
〃9	61G 3.4-C,D	須恵	壺	— —		同心円状に 回転ナデ	ナデ			鐵淡 褐色	密色好

器皿番号	出土地点	種類	器形	計量(重さ kg)	調査				胎土調成	備考
					口縁	外面	内面	底		
第7310 図	61G 3.4—C,D	鏡面	蓋	14.0 —		ロクロ水引	ロクロ水引		融解良 密色好	
	61G 3.4—C,D 4層	+		— 12.0		+	+		砂粒を含む 皮良 色好	
*12	61G 1.2—A,B 5層	土師	环	11.2 4.4 5.2	丸形	口縁部ロクロ水引 下半斜位窓附	ロクロ水引		茶良 褐 色好	漏落あり
	62G 1.2—A,B 2層	+	+	12.3 3.7 8.0	尖形	口縁部ロクロ水引 下半斜位窓附	ロクロ水引		融解良 褐 色好	漏落あり
第741 図	62G 1.2—C,D 6層	+	+	11.4 4.1 5.4	丸形	下半斜位窓附	ロクロ水引 ↓ 放射状暗文		白良 褐 色好	
	62G 1.2—A,B 6層	土師	环	14.0 —	丸形	ロクロ水引	ロクロ水引		融解良 密色好	
*3	62G 1.2—C,D 5層	+	+	12.0 4.0 6.2	+	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	+		黒良 褐 色好	
	62G 1.2—A,B 2層	+	+	10.4 4.1 5.0	+	+	+	回転条切 ↓ 窓附	砂粒を含む 白良 色好	
*4	62G 3.4—C,D	+	+	16.0 —	玉縁	ロクロ水引	+		融解良 密色好	
	62G 1.2—C,D 4層	+	+	10.0 3.8 4.8	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	+		融解良 褐 色好	赤色顔料
*5	62G 1.2—A,B 2層	+	+	11.0 4.4 5.6	玉縁	ロクロ水引	+		融解良 白良 色好	
	62G 1.2—A,B 2層	+	+	11.3 4.5 5.5	丸形	ロクロ水引	+	静止条切	融解良 白良 色好	
*6	62G 1.2—A,B 5層	+	+	10.5 4.5 6.0	丸形	ロクロ水引	+	回転条切 ↓ 窓附	融解良 白良 色好	
	62G 1.2—C,D	+	+	13.0 —	玉縁	+	+	+	融解良 白良 色好	
*7	62G 1.2—A,B 2層	+	+	— 7.0		横位回転窓附	+		砂粒を含む 白良 色好	
	62G 3.4—A,B	+	+	13.0 3.4 5.0	玉縁	ロクロ水引	+		融解良 白良 色好	赤色顔料
*8	62G 1.2—A,B 2層	+	+	15.6 6.4 8.0	丸形	ロクロ水引	+	回転条切 ↓ 窓附	融解良 白良 色好	
	62G 1.2—C,D 3層	+	+	16.0 —	磨玉縁	+	+		砂粒を含む 褐良 色好	
*9	62G 1.2—A,B 4層	+	+	— 4.6		器体下半斜位窓附	放射状暗文		融解良 白良 色好	
	62G 3.4—A,B	+	+	18.0 —	丸形	ロクロ水引	ロクロ水引		赤良 褐 色好	

器 物 名 称	出 土 地 点	種 類	形 状	出 口 部 部 位 名 称	調 整				施 土 色 燒 成	備 考
					口 部	外 面	内 面	底		
第7417 図	62G 1.2-C,D 4層	上歸	环	— — 4.6		器体下半新位範圍			鐵 白良	密 色好
#18	62G 1.2-C,D 4層	+	+	15.0 — —	尖 形	口縫部ロクロ水引	ロクロ水引		鐵 良	色好
#19	62G 1.2-C,D 4層	+	+	14.0 3.4 9.5	丸 形	横ナデ 器体下部範圍	横ナデ		鐵 褐良	密 色好
第751 図	62G 1.2-C,D 4層	須恵	環	— — —		ロクロ水引 平行印き	ロクロ水引 円弧印き 半スリケン		鐵 灰良	白 密 色好
#2	62G 1.2-C,D 63G 5層 1.2-C,D	+	壺	— — 8.4		ロクロ水引	ロクロ水引		砂粒を含む 灰良	内面底 部に自然 模
#3	62G 1.2-C,D 3層	瓦質	鉢	28.0 — —		横ナデ	横ナデ		粉 っぽ 白 灰 も	色 い
#4	62G 土器群	土歸	环	11.0 4.0 6.0	玉 縫	口縫部ロクロ水引 器体下半新位範圍	ロクロ水引	質附	鐵 白良	密 色好
#5	+	+	+	12.0 4.5 5.8	*	*	*		鐵 褐良	密 色好 し
#6	+	+	+	11.2 4.5 5.6	*	*	*	回転糸切 置 剤	鐵 白良	密 色好
#7	+	+	+	12.0 5.0 6.4	*	ロクロ水引	*		鐵 褐良	密 色好
#8	+	+	+	7.0 — —	丸 形	*	放射状暗文		鐵 灰良	密 色好
#9	+	+	+	12.0 — —	*	*	花卉状暗文		鐵 褐良	密 色好
#10	+	+	+	11.7 4.0 5.8	*	ロクロ水引 器体下半新位範圍	ロクロ水引	回転糸切 置 剤	鐵 灰良	密 色好
#11	+	+	+	11.0 4.2 3.4	玉 縫	*	*	*	鐵 褐良	密 色好 一部剥 落
#12	+	+	+	11.4 4.2 5.4	*	*	*	*	鐵 灰良	密 色好
#13	+	+	+	11.4 4.7 5.0	*	*	ロクロ水引 尾ナデ	*	鐵 褐良	密 色好 灯明器 墨書
#14	62G 土器群	土歸	高台付 环	14.0 5.2 6.0	丸 形	ロクロ水引	ロクロ水引	削出高台	鐵 褐良	密 色好
第761 図	+	+	环	— — 6.9		*	*	逆回転 糸切 置 剤	鐵 褐良	密 色好 墨書
#2	+	+	高台付 环	16.0 7.0	丸 形	ロクロ水引 器体下半新位 範圍	ロクロ水引 花卉状暗文	回転糸切 置 剤	鐵 褐良	密 色好
#3	+	+	环	15.0 5.3 7.0	玉 縫	ロクロ水引 器体下半新位範圍	ロクロ水引		鐵 褐良	密 色好 口縫部 内面端 付墨

器物番号	出土地点	種類	器形	主(口部) 副(身部) 側(底部)	調査				胎土 色焼成	備考
					口縁	外面	内面	底		
第764 区	62G 土器群	土師	壺	30.0 —	肥厚	横ナデ	横ナデ		砂粒を含む 褐色良	
#5	63G 1.2-A,B 6層	*	手指	— 4.4		寛ナデ	指頭押痕		砂粒を含む 褐色	
#6	*	*	高台付 环	— 8.6		ロクロ水引	放射状凹文	削出高台	級焼良 褐色好	
#7	63G 1.2-A,B 2層	*	杯	10.0 3.7 6.0	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引		褐色良 褐色好	
#8	63G 3.4-A,B	*	*	12.4 —	玉縁	*	*		級焼良 褐色好	
#9	63G 3.4-A,B	*	*	— 6.0				寛削	褐色良 褐色好	
#10	63G 1.2-A,B	*	*	14.0 —	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引		級白良 褐色好	内底付着
#11	*	*	*	12.0 4.4 5.4	*	*	ロクロ水引 放射状凹文	削出系切	*	墨書
#12	63G 1.2-A,B 5層	*	壺	16.0 —	薄長	横ナデ 口縁部寛ナデ	横ナデ		粗大砂粒を 含む褐色	
#13	*	*	*	11.0 —	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引		褐色良 褐色好	
#14	63G 1.2-A,B 2層	*	杯	14.0 3.9 —	*	寛底	寛底		粗大砂粒を 含む褐色	
#15	63G 1.2-A,B 2層	*	杯	11.0 3.2 4.0	*	寛底	寛底		砂粒を含む 白色良	
第771 区	72G 1.2-C,D	須恵	壺	— — —		平行叩き	布目をスリケシ		やや 灰良	褐色好
#2	72G 1.2-C,D 6層	土師	杯	13.6 7.6 5.5	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位寛削	ロクロ水引	削出系切	級褐良 褐色好	
#3	72G 1.2-C,D 6層	*	*	11.6 4.4 5.2	*	ロクロ水引	*		赤良 褐色	褐色好
#4	72G 1.2-C,D 4層	*	*	10.0 —	玉縁	*	*		砂粒を含む 赤良	赤色顔料
#5	72G 1.2-C,D	*	*	11.2 4.0 5.0	*	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位寛削	ロクロ水引 放射状凹文		級褐良 褐色好	灯明組
#6	72G 1.2-C,D	*	*	12.0 4.8 4.8	*	*	ロクロ水引		級黄良 褐色好	
#7	72G 1.2-A,B 6層	*	*	11.5 4.6 4.2	隆玉縁	ロクロ水引	*		級赤良 褐色好	褐色多し
#8	72G 1.2-A,B 6層	土師	杯	11.8 —	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位寛削	ロクロ水引		級褐良 褐色好	

標 目 番 号	出 土 地 点	種 類	器 形	（山形） 高台付 環	測				色 調 燒 成	備 考
					口 線	外 面	内 面	底		
第 77 9 回	72G 1.2-A,B	土師	高台付 环	— 8.0				回転糸切 削り出し 高台	砂粒を含む 褐色好	
* 10	72G 1.2-C,D 6層	*	环	14.4 3.2 6.6	丸 形	ロクロ水引	ロクロ水引	回転糸切	板 褐色良	密色好
* 11	72G 1.2-C,D	*	*	12.6 2.7 5.4	*	ロクロ水引 器体下半斜位窓削	*		粗 茶良	褐色好
* 12	72G 1.2-C,D 6層	*	*	13.1 2.5 2.6	玉 線	*	*	回転糸切 窓削	板 褐色良	密色好
* 13	*	*	手 溝	— 2.2		指頭押圧痕	指頭押圧痕	窓削	粗 茶良	褐色好
* 14	72G 1.2-C,D	*	皿	14.6 2.4 7.4	丸 形	口縁部ロクロ水引 器体下部斜位窓削	ロクロ水引	糸 切 窓削	板 褐色良	墨書「子」
* 15	*	*	环	12.8 2.8 4.2	玉 線	ロクロ水引	*		*	
第 78 1 回	72G 1.2-C,D	*	壺	17.0 —	薄 長	縱刷毛	横刷毛		小石を含む 黃褐色 良	
* 2	72G 6層	土師	壺	18.0 —	*				小石を含む 褐色 良	
* 3	*	灰釉 陶器	高台付 环	13.6 3.9 7.8	丸 形				粗 灰良	密色好
* 4	72G 1.2-C,D	*	壺	— 5.4		ロクロ水引 器体下部斜位窓削	回転ナデ		*	
* 5	72G 6層	壺	*	28.0 —	折り返し	ロクロ水引	ロクロ水引		板 灰良	密色好
* 6	72G 1.2-C,D 2層	*	高台付 环	— 11.0	*		回転ナデ		*	
* 7	72G 1.2-C,D 生活面灰上	土師	壺	12.4 2.1 5.0	隆 玉 線	口縁部ロクロ水引 器体下部斜位窓削	ロクロ水引	回転糸切 ↓ 回転窓削	砂粒を含む 褐色好	
* 8	72G 1.2-C,D 生活面	土師	*	12.4 2.1 5.0	隆 玉 線	口縁部ロクロ水引 器体下部斜位窓削	ロクロ水引		砂粒を含む 褐色好	
* 9	*	*	*	14. 2.4 6.0	玉 線	口縁部ロクロ水引 器体下部横位 回転窓削	*		粗 茶良	密色好
* 10	*	*	壺	— 7.0		縱刷毛	横刷毛	木葉痕	粗く砂粒を 含む 褐色好	
* 11	*	*	合付环	— 8.2		斜位窓削	底部うすまき暗文	削り出し 高台	粗く砂粒を 含む 褐色良	密色好
* 12	*	*	蓋	11.3 —		ロクロ水引	ロクロ水引		粗 茶良	密色好
* 13	*	滑石	管玉							

標 記 番 号	出 土 地 点	種 類	器 形	法 印 印 名 前 印 印 印	調 整				胎 土 色 燒 成	備 考
					口 縁	外 面	内 面	底		
第 7814 回	73G 2層	土師	环	12.0 4.7 4.7	隆 玉 線	ロクロ水引	ロクロ水引		砂 粒 長	密 色 好 適落多 し
* 15	73G 3.4-A,B 5層	土師	*	14.0 3.6 6.0	玉 線	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	*	飾 削	砂 粒 良	褐 色 好
* 16	73G 3.4-A,B 6層	*	*	12.8 4.4 5.2	隆 玉 線	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附 回転鋸削	*	回 転 糸 切 込 削	褐 色 好	密 色 好
第 79 1 回	73G 3.4-A,B 2層	*	*	12.1 3.8 4.2	*	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	*		砂 粒 良	褐 色 好
* 2	73G 3.4-A,B 5層	土師	环	13.9 4.5 5.0	隆 玉 線	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ引水		砂 粒 含む 良	色 好
* 3	73G 1.2-A,B 6層	*	*	13.9 4.7 6.4	尖 形	*	ロクロ水引 花卉状暗文		砂 粒 含む 良	色 好
* 4	73G 3.4-A,B	*	高台付 环	16.4 3.4 6.4	隆 玉 線	口縁部ロクロ水引 器体下半横位	ロクロ水引	割り出し 高台	*	
* 5	73G 3.4-A,B 5層	*	环	15.6 4.2 4.5	玉 線	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	*		*	
* 6	73G 3.4-A,B 6層	*	*	15.5 5.2 6.2	*	ロクロ水引	ロクロ水引 放射状暗文		砂 粒 良	密 色 好
* 7	73G 3.4-C,D	土師	壺	19.8 —	薄 長	横ナデ	横ナデ		粗く砂粒を 含む 良	色 好
* 8	73G 1.2-A,B 6層	*	皿	14.0 2.4 6.6	玉 線	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引		砂 粒 良	密 色 好
* 9	*	*	甌	— 7.4		織刷毛	底部指押押痕	木葉痕	砂粒を多く 含む 褐	褐色
* 10	73G 4層	*	*	— 4.5		*			砂粒を含む 赤 良	色 好
* 11	73G 6層	*	环	15.0 5.3 5.6	玉 線	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引	窓による 焼結がある。	難 白 良	密 色 好
* 12	73G 1.2-C,D 6層	須恵	甌	28.0 — —		ロクロ水引	*		砂粒を含む 灰 良	色 好

第12表 石橋条里制遺構第I地点出土の種核

番号	種核名	遺物出土直標 またはグリッド	巾 (Wide)	長 (Long)	厚 (Thik)	L/W	備考
1	モモ	SB-1 №94	1.735	2.325	1.425	1.34	16. 自生、尖端、欠損
2	オニグルミ	53G SE-3	2.04	2.575	1.99	1.26	3.
3	オニグルミ	53G SE-3	2.095	3.065	1.09	1.46	4. 半分
4	オニグルミ	53G SE-3	2.535	3.23	1.28	1.27	4. 底部と側面が欠損
5	オニグルミ	53G SE-3	2.165		1.16		1. ○欠損
6	オニグルミ	53G SE-3	2.90	3.22	1.20	1.11	7. 半分
7	モモ	53G SE-3	1.67	2.03	1.53	1.22	
8	クルミ	53G SE-3	2.36	3.065	1.145	1.30	20. 半分、尖部が少し欠損
9	クルミ	53G SE-3	2.51	3.075	1.265	1.23	20. 半分、尖部が少し欠損
10	クルミ	53G SE-3	2.07	2.74	1.22	1.32	20. 半分
11	クルミ	53G SE-3	2.61		1.26		20. 半分、炭化、尖部と底 部が欠損
12	モモ	53G SE-3	2.00	2.525	1.67	1.26	
13	モモ	53G SE-3	2.45	3.11	1.85	1.27	尖部と底部が少し欠損
14	モモ	53G SE-3	1.835	2.20	0.81	1.20	半分尖部が欠損
15	クルミ	53G SE-3	2.43	3.22	1.14	1.33	半分尖部と底部が欠損
16	クルミ	53G SE-3	2.40	2.71	1.12	1.12	上半分が欠損

(注) 1~6 市河三次山梨県立女子短期大学教授鑑定 備考の数字は遺物番号

## 出土木材の同定検査について

## 1 識別方法

- ①出土木材の大部分は、材の老化が進み軟化しているためポリエチレングリコール（カーボワックス）で包埋し、ミクロトームで厚さ5~10ミクロン程度のプレパラートを作り、卵白・グリセリンでスライドグラスに載せ、写真撮影した。
- ②しかし、材が著しく少しく薄いため、プレパラートの作成が困難な材と、炭化や腐朽が進み、木材組織が変化して識別困難な材は除外した。
- ③プレパラートは主に材の横断面（木口面）と、接線面（板目面）から採取した。又半径方向の面（柾目面）からプレパラートを作っても、老化や腐朽により材組織内部の微細を作っても構造部が破壊又は変形しており、材の識別拠点として期待できないものは除外した。

## 2 識別結果

- ①プレパラートによる木材組織の写真と材の識別結果を表に示す。
- ②ほとんどの材が、樹種判定の根拠となる組織内部の微細構造が老化、腐朽、炭化等によ

り変形又は破壊されており、針葉樹、広葉樹とも材の構成要素と各細胞の形状、配列などの特徴から検討するに止った。したがって、どの樹種であるかは確認できず、表に示す程度の結果となった。

同定検査者 山梨県林業試験場

主任研究员 渡辺利一

留登平藤師師技

第13表 石橋条里制遺構第1地点出土木材の識別結果

出 土 遺 物 構 成	遺 試 料 名	材の構成要素 改転木造水槽放置假 方 指向 柔柔 柔柔 柔柔	針 広 葉 樹 名	組織の主な特徴	樹 種
SB-2	Po-7	23 柱	○	針 根胞胞は認められないが、仮道管、徑 及、早・晚材の移行形態からみて	スギ、ヒノキ、 サクランボ
SB-4	N.2	50 伴	○○○○	散孔材道管孔は単股、径小、分布密、 放射状組織幅は1~3列	カツラ、ホオノ キ
SB-4	N.4	6 木棒 (有孔棒)	○○○○	散孔材道管は單壁~房状で径やや小、 分布は密、放射状組織幅は中	カツラ、ミズキ
SB-4	N.8	7 板	○ ○○	早・晚材の移行綫、樹脂胞胞らしきも のが認められるが、不明瞭	スギまたは、モ ミ、シラベ
SB-4	N.9	51 板	○○○○	環孔材、径大~小、配列やや放射状、 放射状組織幅	クリ、シノノキ
SB-4	N.10	1 板	○○○	仮道管内壁にらせん肥厚が認められな い。樹脂胞およそ10以下	スギ、ヒノキ、 ネズコ、イヌマ
SB-4	56	板	○ ○	らせん肥厚なし、年輪の移行綫まん仮 道管径小	キモミ、シラベ
SB-5	46		○○○○	散孔材、道管孔単股、径やや小、分布 密、放射状組織1~3列	カツラ、ホオノ キ
SB-14	Po-78	44 柱	○○○○	環孔材、やや放射状配列、放射状組織幅 大	クメギ、ナツラ
SE-3		52 柱	○○○	らせん肥厚なし、年輪の移行綫、仮道 管径中	ヒノキ、サクラ、 スギ
SE-3		24	○○○○	環孔材、道管径中、分布配列や不明 瞭、放射状組織の幅大	コナラ、クメギ 類
SE-3		25	○○○	仮道管径、早・晚材の移行、放射状組織 高からみて	スギ、ヒノキ、 サクランボ
SE-3	上層	27	○○	道管単股~房状、径はやや中、やや放 射状孔材的な特徴を示す	樹種不明
SE-3		28	○○○○	環孔材道管孔単股~一部房状、径は中、 放射状組織の幅中	ノグルミ、ヤマ ウルシ

出 土 遺 構	遺 物 名	試 料 N.	材の構成要素 放射木道水系放射仮 孔、平底射鉛 粗孔、粗面、道 管、放射粗面 放射経路道放射管	針 広 葉樹 名	組成の主な特徴		樹種
					針	広葉樹	
SE-3		29	○○○○	広	N <sub>o</sub> 28に近似		ノグリミ、ヤマウルシ
SE-3		30	○○○	針	仮道管内壁らせん形厚なし、放射粗面 単列で10細胞高以下		ヒノキ、スギ
SE-3		47	○○○○○	広	散孔材、道管孔單数、径中、分布やや 粗、放射粗縫1~2列		ホオノキ
SE-3		48	○○○○○	広	散孔材、道管孔單数、径中、分布や や粗、放射粗縫1~5列、低い		イタヤカエデ、 カエデ
SE-3		49	○○○○○	広	散孔材、道管孔單数~房状、径やや小、 分布粗		イタヤカエデ、 カエデ類
SE-3		9	○ ○		樹脂細胞が認められない。仮道管断 面が再型、他はN <sub>o</sub> 8と同じ		モミ、シラベ類
SE-3	中層	10	○○○○○	広	樹心部の材、環孔材、道管径中柔細胞 は適合質状、放射粗縫の幅中		エンジュ、ノグ ルミ
SE-3		11	○○○○○	広	N <sub>o</sub> 10に近似		エンジュ、ノグ ルミ
SE-3		12	○○○○○	広	環孔材、道管径やや大、道管孔單数、 放射粗縫の極大		ミズナラ、コナ ラ類
SE-3		13	○○○○○	広	環孔材、道管径やや小、放射粗縫幅や や小、道管の分布粗		フジキ?
SE-3		3	○○○○○	広	環孔材、道管は单軸、大炎状配列、径 大、放射粗縫幅大、仮道管?		コナラ、ミズナ ラ、クメギ
SE-3	下層	4	○○○○○	広	散孔材道管は房状、径は中、分布密度 中、放射粗縫の幅中		カンバ、ミズメ、 サクランボ類
SE-3		5	○○○○○	広	散孔材道管は房状、径は中、分布密度 中、放射粗縫の幅中		カンバ、ミズメ、 サクランボ類
SE-3		8	○ ○	針	樹脂細胞が認められない。放射粗縫高 が高い。		モミ、シラベ類
SE-3		18	○ ○	針	樹脂細胞が認められない。放射粗縫高 が高い。らせん形厚なし		セミ類
S-SGR1		43	○ ○○○	針	年輪幅の移行級、仮道管径小、らせ ん形厚なし		マツ、トウヒ類
52G	Po-11	21	柱	○	小口面の写真のみでやや不明瞭、仮道 管配列からN <sub>o</sub> 18に近似		セミ類
53G	Po-1	22	柱	○○○○○	環孔材道管径大、環状配列密、放射粗 縫幅小(單列)分布は粗		シオジ、タモ、 クリ
53G	Po-7	45	柱	○○○○○	環孔材、道管径大、放射粗縫單列一複 列		クリ、タモ
53G	N <sub>o</sub> -6	53	杭	○ ○	らせん形厚が認められる。晚材部仮道 管壁が厚い。		イチイ、カヤ

## 第2節 中・近世の造構と遺物

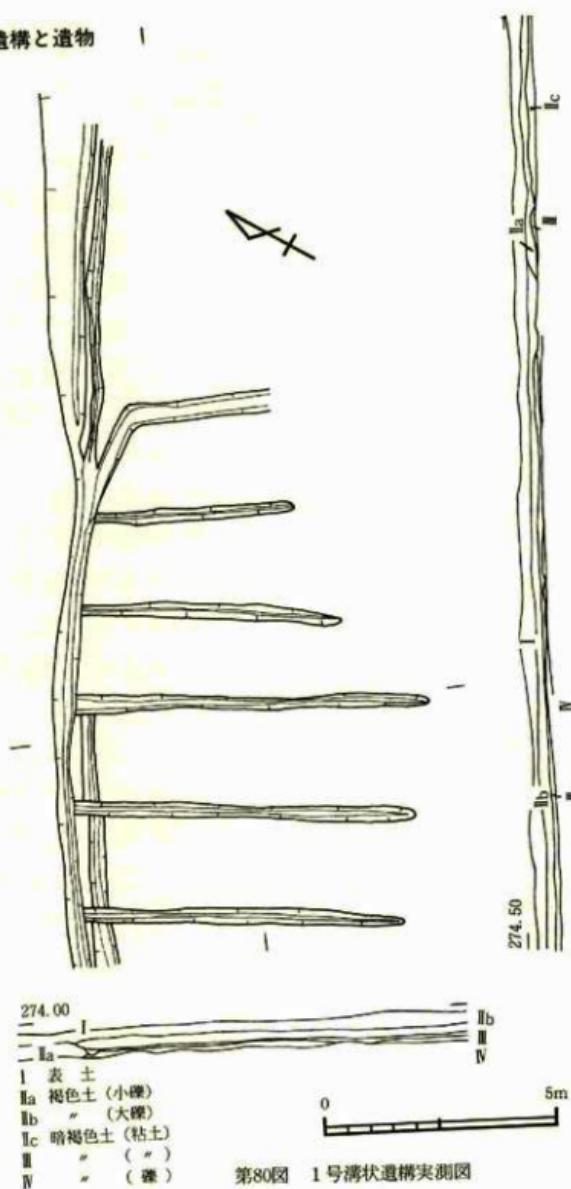
### 1号、2号溝状造構

1号・2号・3号・6号・  
8号・9号・10号・11号・  
12号列石、1号・2号井  
戸状造構、3号・4号集  
石列等がある。

この中で遺物を伴出し  
ない造構は、層序と生活  
面でその時期を決定した。

### 溝状造構と遺物

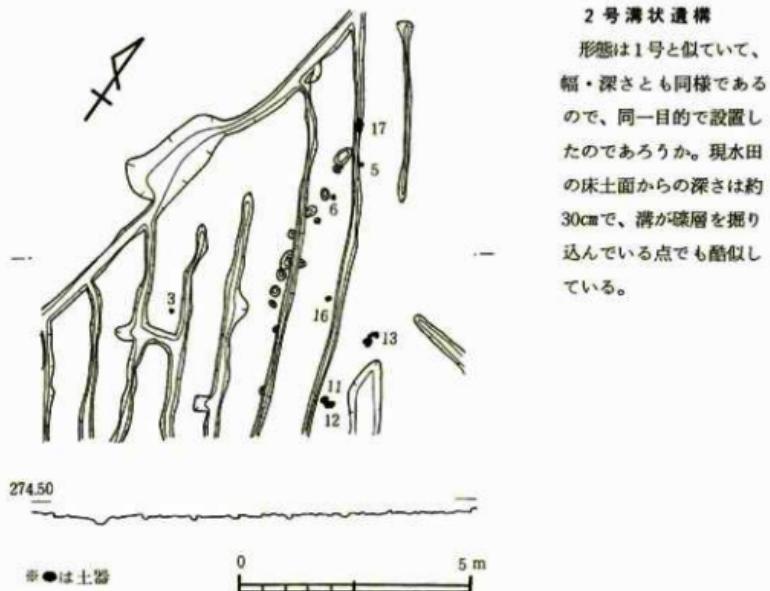
1号溝状造構 この遺跡  
の北端で、現水田床面下  
約30cmの層で検出した。  
溝の幅は20~30cm、深さ  
は5~10cmである。短い  
溝は全て北西で止まり、  
これにつながる長い溝は  
北東と南西に延長し、一  
部は2本が並行する。長  
い溝の南東部は平面にな  
っていて溝はなく、北西  
より約21cm高く、ほぼ水  
平である。溝の底の比高  
は、長い溝では南西端よ  
り北東端が約5.3cm高い。  
短い溝を北東のものから、  
1~6とすると、その底  
は南東が北西端より、1  
が1.2cm、2が1.7cm、  
3が3.7cm、4が8.2cm、  
5が8cm、6が1.5cm高  
い。短い溝は全て北西端  
が低くなっている。



第80図 1号溝状造構実測図

水を流した溝であろうか。仮に水田に関係する遺構であるとしても、この溝の掘られている地層は小礫層で水田の床土にはならないであろう。ただ溝の掘込面が上層にあったとすれば別であるが、確認は出来なかった。また現水田とはその方向や、占めるスペースは一致しない。

遺物は土師質土器少量とともに、貫入のある志野系陶器の碗の破片が出土した。



第81図 2号溝状遺構実測図 (1:120)

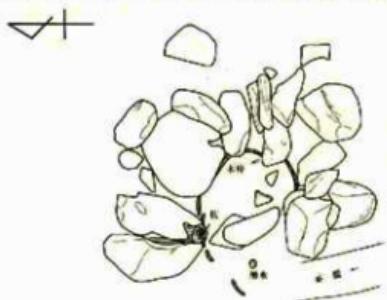
#### 列石と遺物

**1号列石** 北西端で、水田床土面より約40cm下層から検出した石垣である。全体的に円弧を描き、現水田区画線とは全く一致しない。南東に面があるのは、現在の地形とは逆で下方が高くなっている。発見時には1～2段積になっていたが、崩れ落ちている石を積み直すと3段くらいになる。一部は重箱積になっているので、甲斐地方での石積方法を考慮すると、江戸中期以前に構築されたのであろう。第87図No.6、8、11、12の天目茶碗、黄瀬戸、青磁等が上部(北西側)生活面から出土している。

**2号・3号列石** 現灌漑用水路の東に2列に並行している石垣である。現在の水路には石垣はないが、西側に面があるのでかつては石垣のある水路であったと考えられ、3号が使われた後、西側に水路が移ったため、さらに2号を積んだと考えられる。いずれも一部が重箱積になっているので江戸中期以前に積まれたと思われる。したがって1号井戸もこの時期と考えられよう。

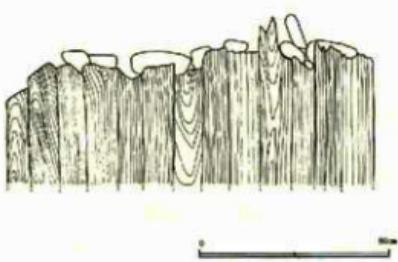
**6号・10号列石** 遺跡の中央部に2列に並行する短い石垣である。面は2列とも北にあって、2段積になっている。遺物は第87図N<sub>o</sub>1、4、10の陶磁器が出土した。

**8号・9号・12号列石** 現在の畠の区画線に沿って検出した石垣と飛石状列石である。8号は復元して2～3段の北に面をもつ石垣となり、全体的に重箱積である。9号、12号は石の間隔が1.5mから3mあり、径20cm～30cmの上に平な石を使用しているところから、壠のようなものと飛石石と考えられよう。遺物は少なくN<sub>o</sub>5の黄瀬戸の碗が出土したのみである。



#### 井戸状遺構

**1号井戸状遺構** 遺跡中央南端にあり、昭和の初期まで使用されていたという。現在も灌漑があり使用出来る状態であった。木の板で囲み、周囲には石垣を積んでおり、深さは1m以上である。遺物は出土しなかった。

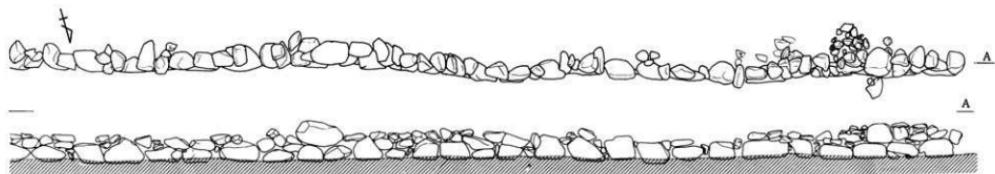
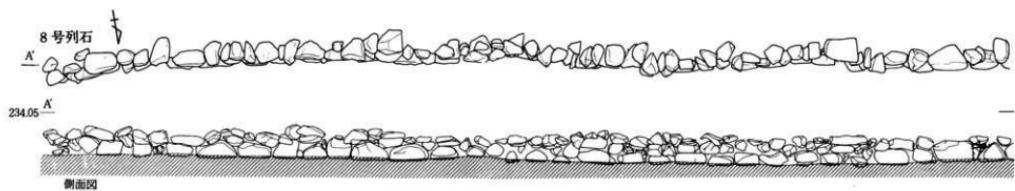
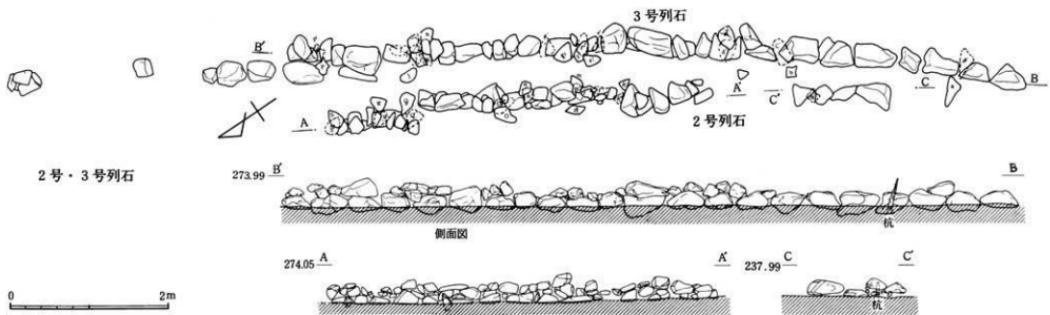


**2号井戸状遺構** 遺跡の中央南端にあり、ここから水路が南に延長している。井戸は一辺約30cmで方形に石が2段積んでおり、上には石の蓋が載せてあった。遺物は出土しなかったが、層位は中世にはほぼ同じである。

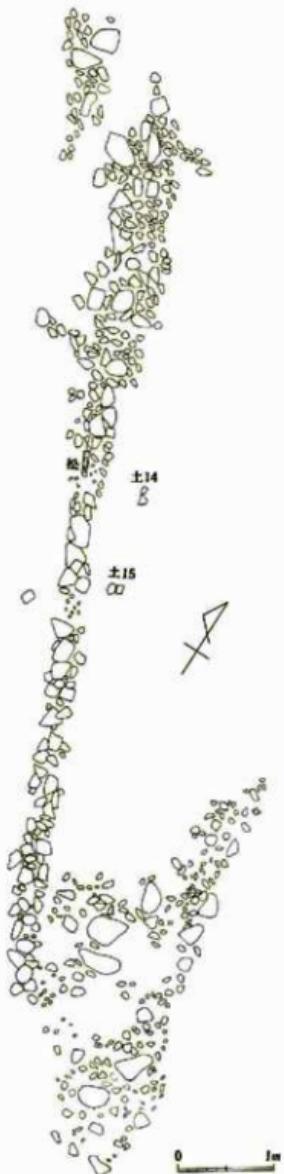
第82図 1号井戸状遺構実測図(1:20)



第83図 列石平面図及び側面図



第84図 列石平面図及び側面図



第85図 3号集石列実測図

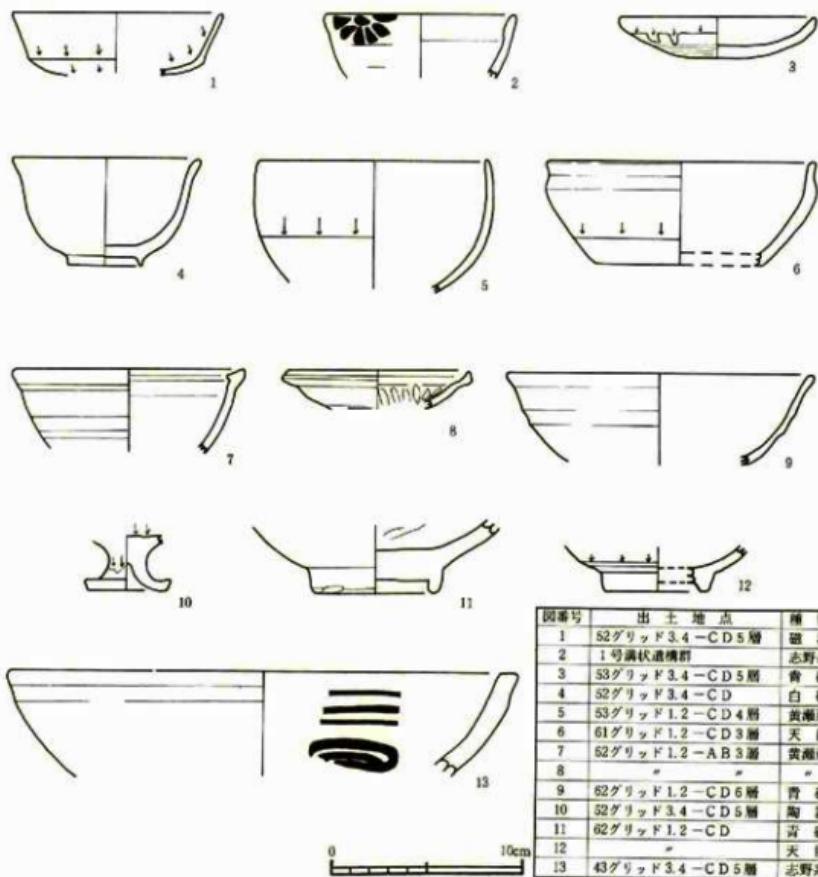
### 集石列

3号、4号集石列 73グリッドにあり、3号は礫の列で、4号は石垣の破壊されたものようである。

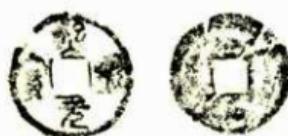
以上のように中・近世の遺構は石垣が多く、他の遺構は少ないが、井戸状遺構や礫石状列石があり、遺物も陶磁器等が出土した。



第86図 4号集石列実測図



第87図 中・近世遺構出土遺物実測図



第88図 73グリッド出土銭貨拓影

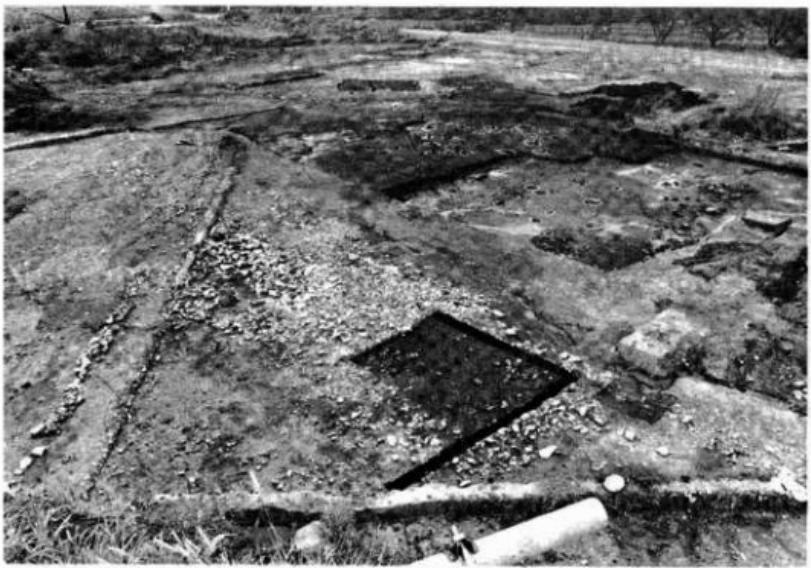
## 第5章 まとめ

石橋条里制遺構第Ⅰ地点は甲府盆地南東部に広がる境川扇状地扇端にあって、主に奈良時代末から平安時代中期にかけての集落の一部及び中世の石垣、溝群や井戸などを検出した遺跡である。主な遺構は平安時代の竪穴住居址5軒、祭祀的な性格をもつと思われる据立柱建物址9棟と配石遺構4基、井戸状遺構2基があり、ここから主に国分寺土師器や木製品が出土した。この集落は石橋条里制遺構の南端に接してあってこれと不可分の関係にあると考えられ、今後の本県条里制遺構の研究に資することが出来れば幸である。

# 図 版



東より西を望む



東より南西を望む



63-4 C グリッド試掘セクション



発掘参加者

圖版 3  
2号櫛立柱建物址柱穴断面



Po 101



Po 102



Po 103



Po 104



Po 105



Po 106

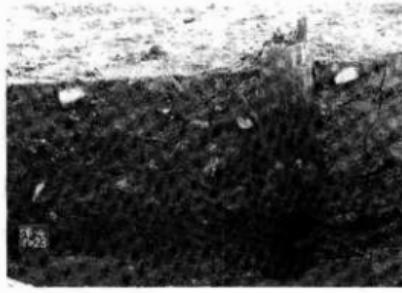
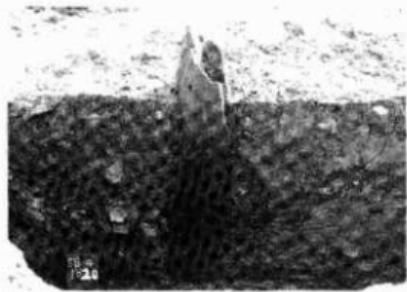
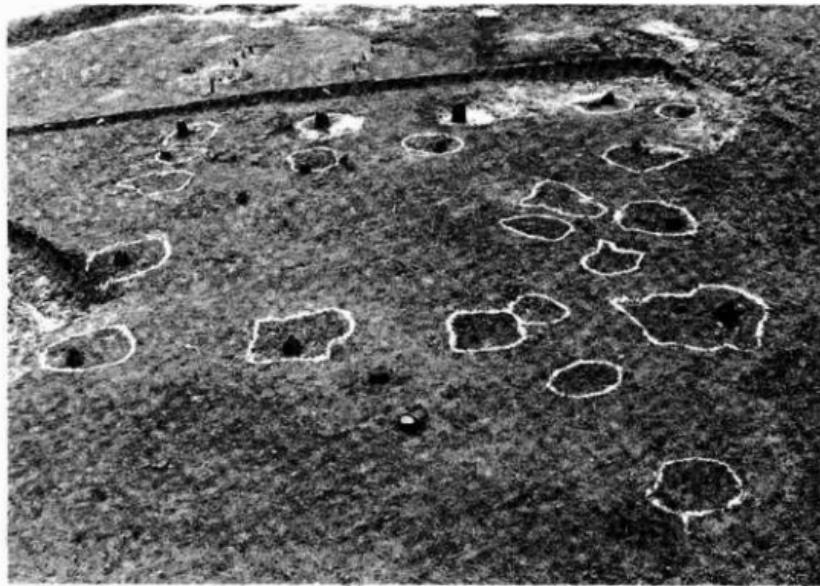


Po 108



Pit 109

圖版 4 4號掘立柱建物址柱穴斷面



図版 5 4号掘立柱建物址柱穴断面





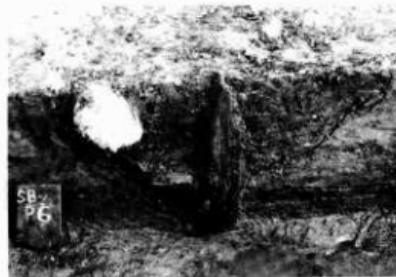
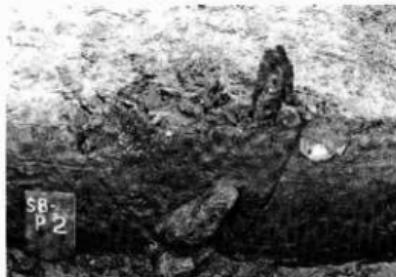
1號住居址

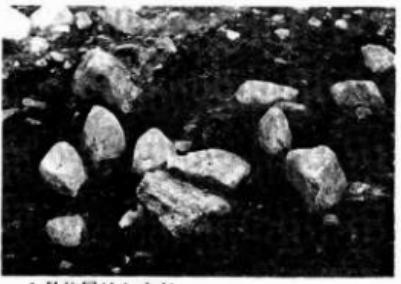
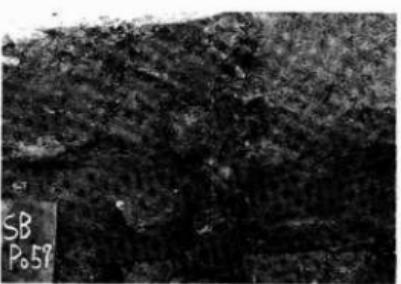
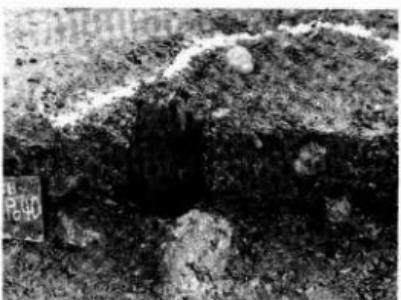
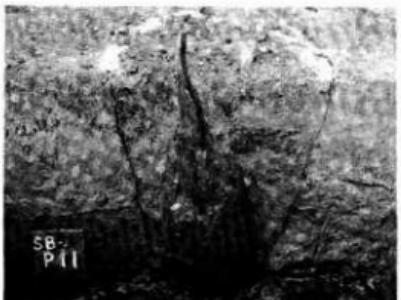


3號住居址

図版7

柱穴断面





1号住居址かまど



2号配石



3号配石



4号配石



5号配石①



5号配石周围



5号配石②(復元後)



4号列石

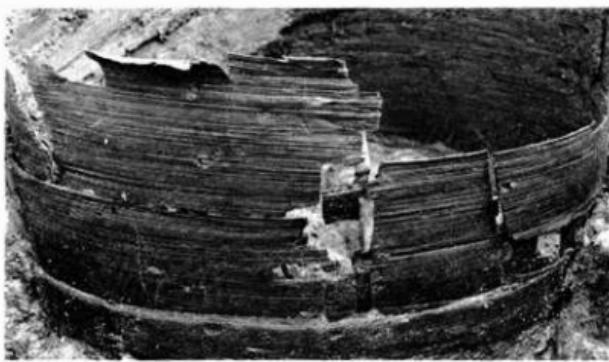
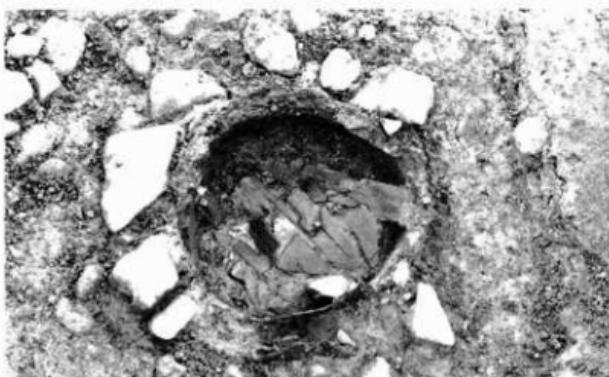


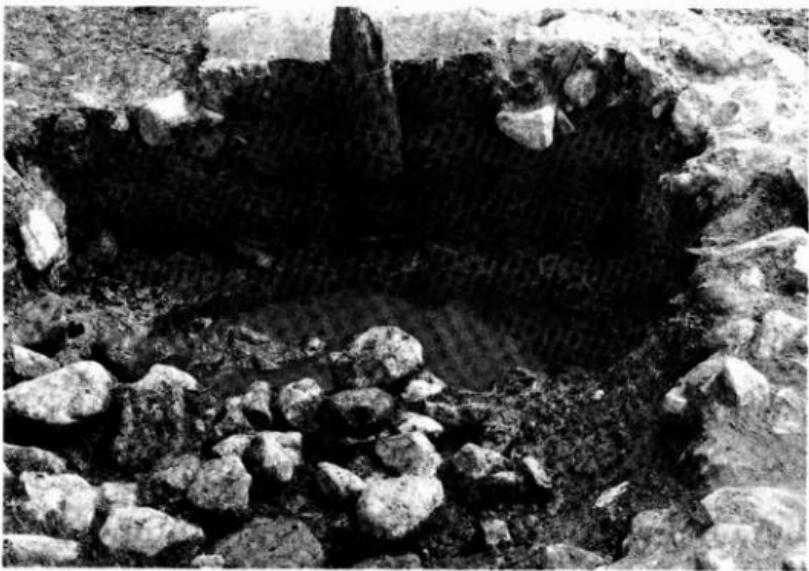
5号列石

3号井戸状遺構出土遺物状況 上層よりくの字形木器出土状況 曲物と踏跡出土状況 曲物(一)

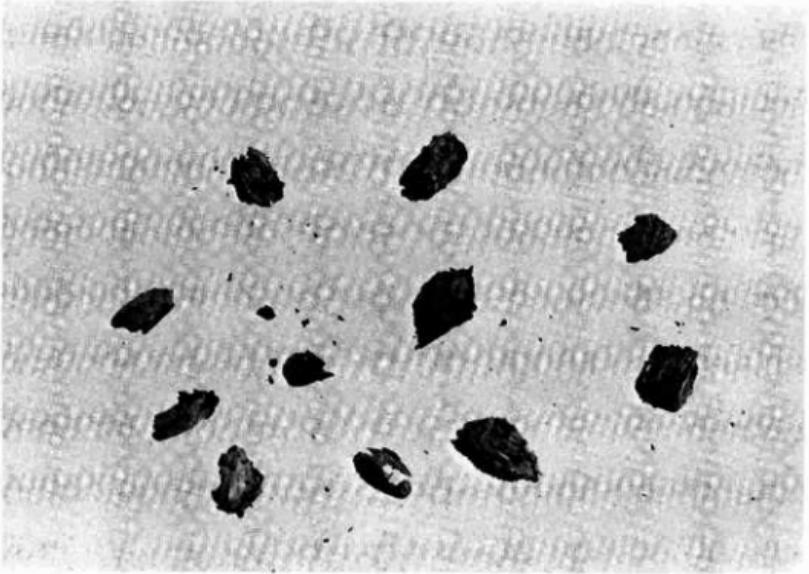


図版11 4号井戸状遺構遺物出土状況（曲物を開む粗石、曲物出土状況 曲物）

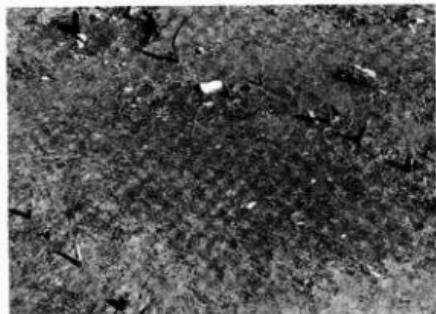




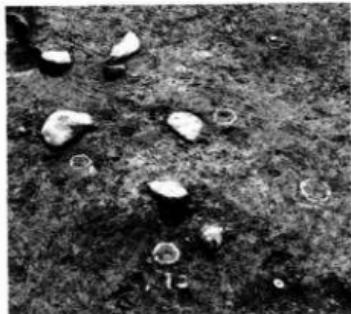
1号土坡



1号土坡出土炭化粮



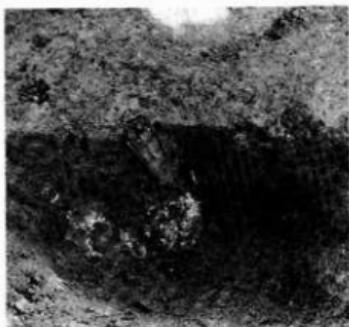
1号・2号杭列



紡錘車と竹杭



1号溝状遺構



竹杭



2号溝状遺構



62グリッド土器群



1号列石



6号列石



1号列石



6号列石



7号列石



8号列石



8号·9号·12号列石



10号列石



4号集石列



1号井戸状遺構

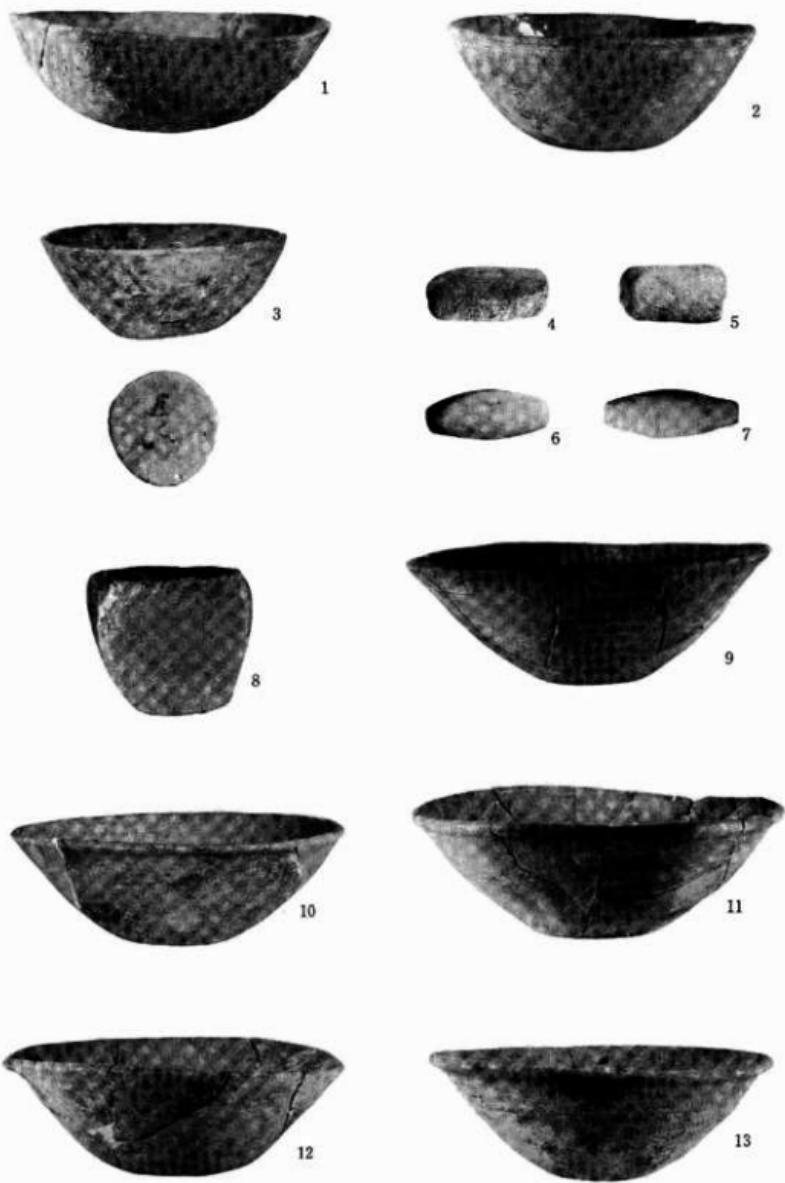


2号井戸状遺構



2号井戸状遺構 内側石積状況

圖版 16  
2号・4号掘立柱建物址、  
1号住居址出土遺物

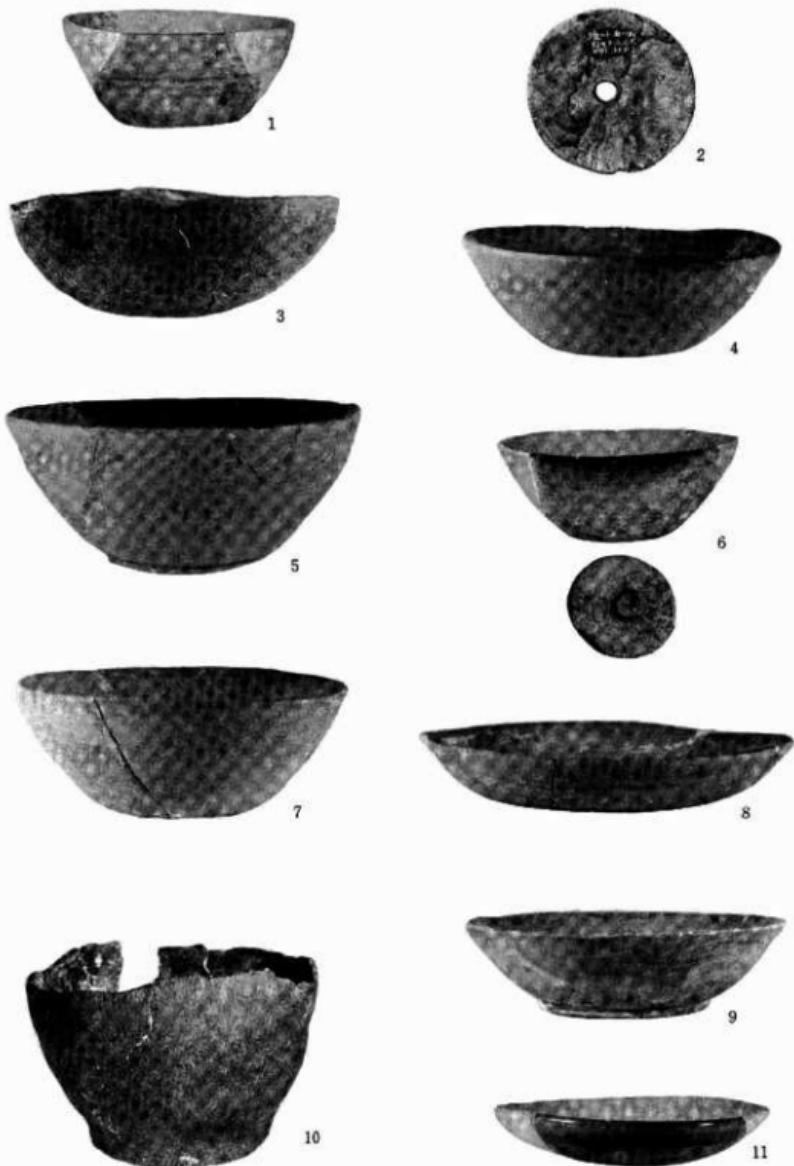


2号(1~7) 4号(8) 1号(9~13)

1号・3号・7号・8号・住居址、  
5号配石出土遺物



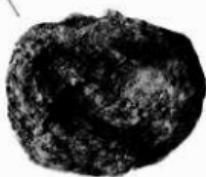
1号（1～3） 3号（4～7） 8号（10） 5号配石（11）



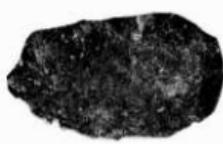
1 (3号井戸)、2 (52G)、3

11 (53G, 中・近世)

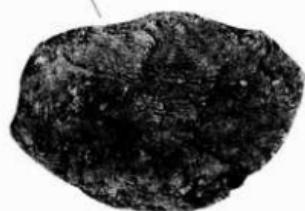
Po-101



Po-102



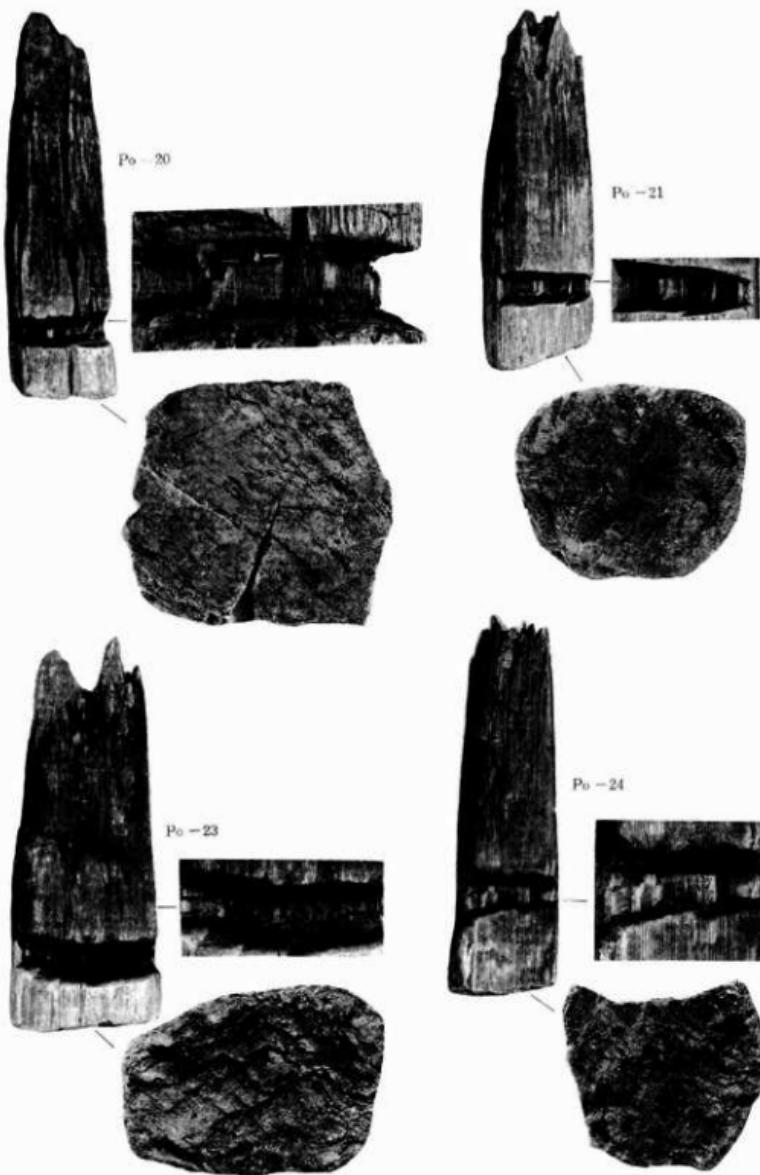
Po-103



Po-104





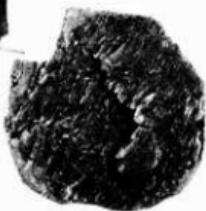




Pn-27



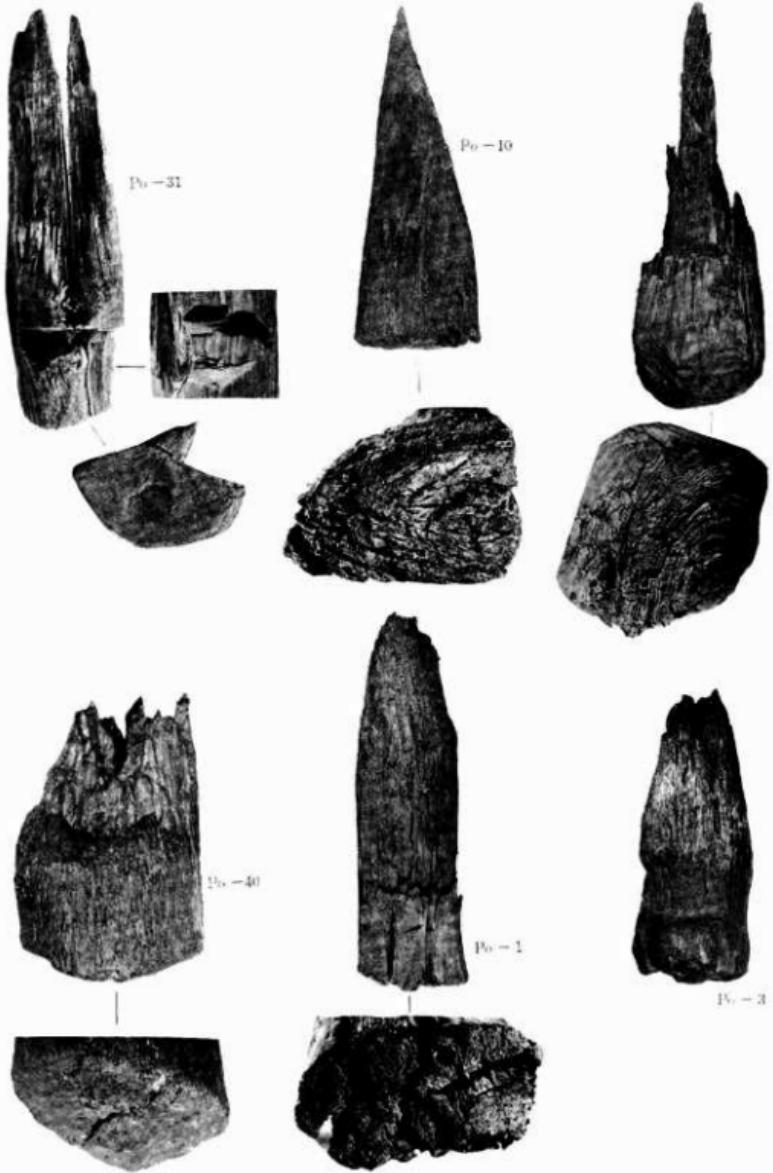
Pn-28

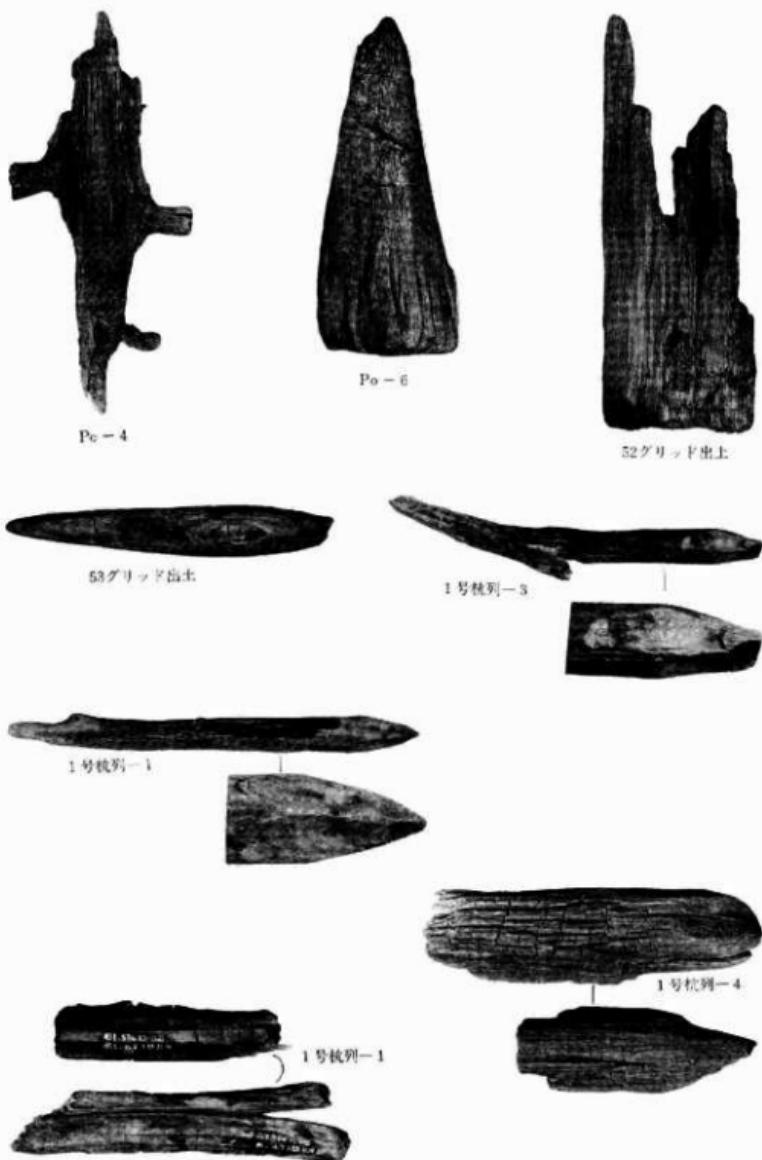


Pn-29

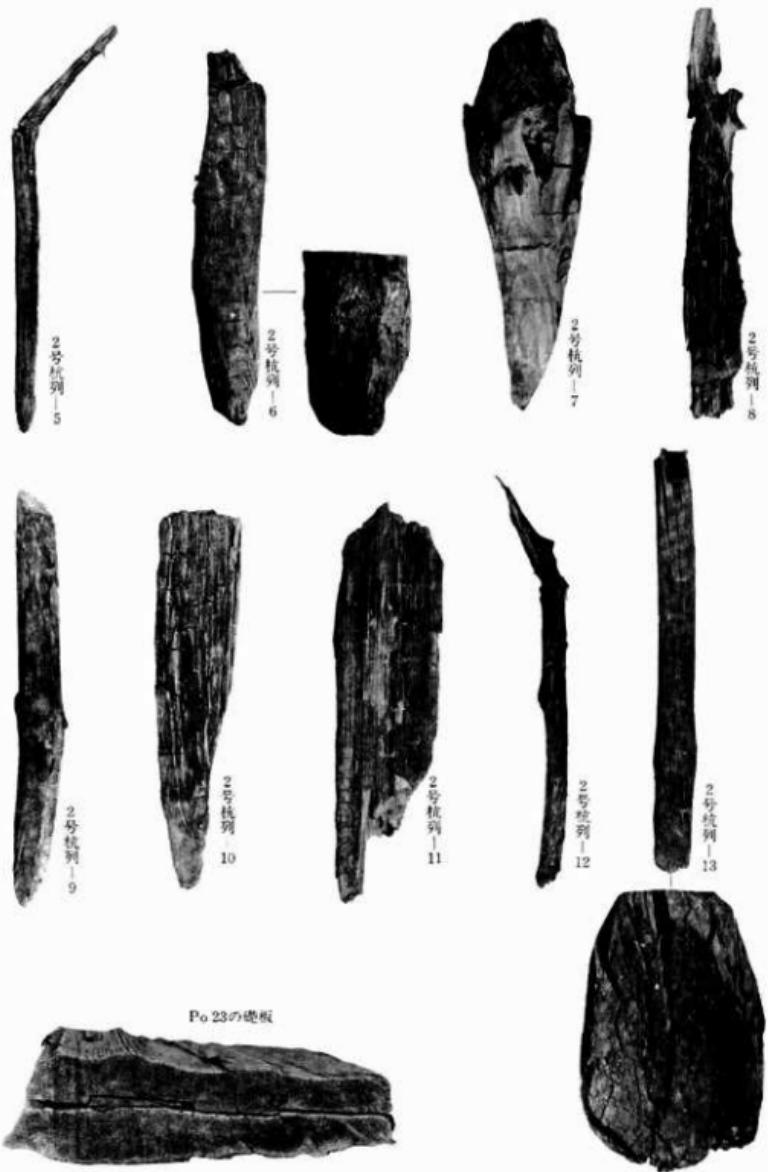


圖版 23  
柱根

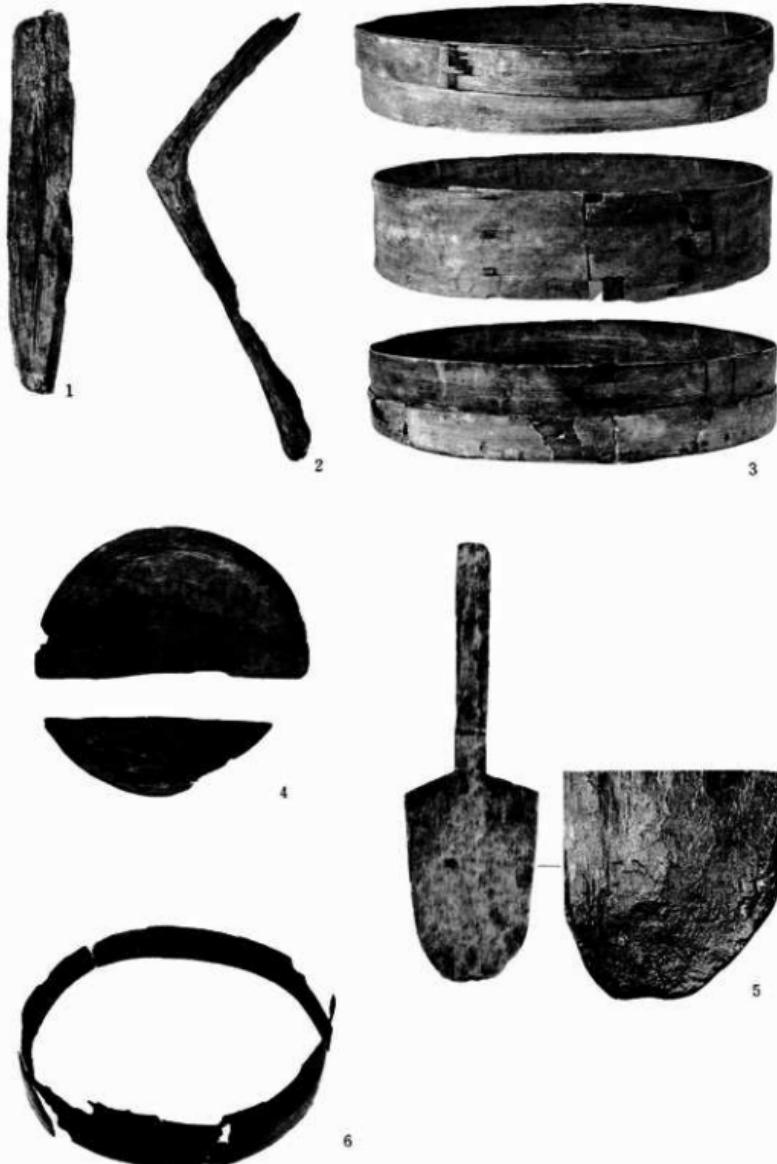




図版 25  
2号杭列  
柱の礎板



圖版 26  
3号・4号井戸状遺構内出土遺物



1(3号井戸)、2(52G)、3(53G)、4~8(62G)、9(72G)、10(73G)、11(53G.中・近世)



SE-3 上層出土木片

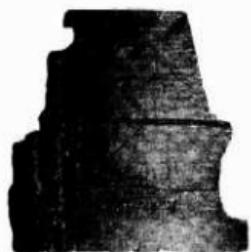


SE-3  
下層出土木片



SE-4 内出土木片





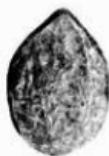
SE-4 曲物 2



SE-4 内部出土木片



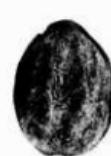
73グリッド出土



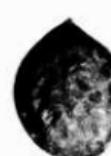
8



9



10



2



11



4



5



6



15



16



1



3



7



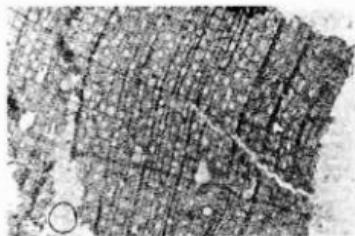
12



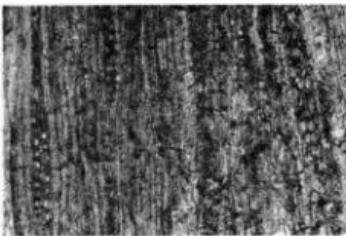
13



14



21 木口 32×

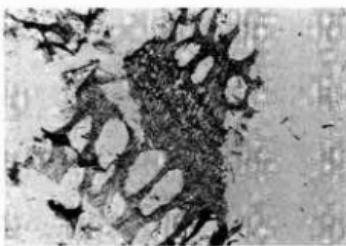


6

板目 115×



22 木口 32×

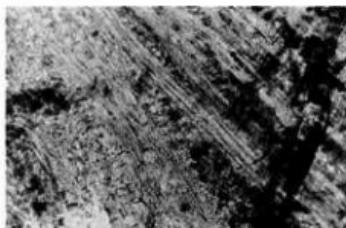


23 木口 32×



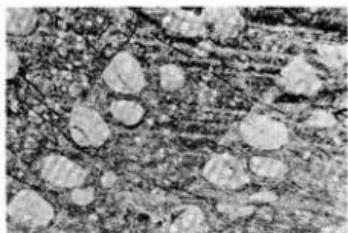
木口 32×

44



板目 115×

番号は第13表資料番号

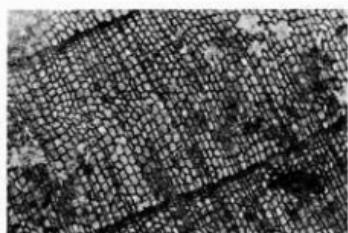


木口 32×

45

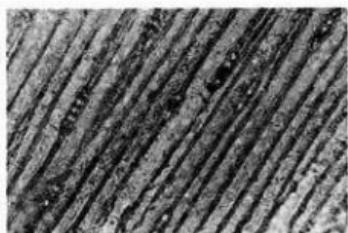


板目 115×



木口 32×

52



板目 115×

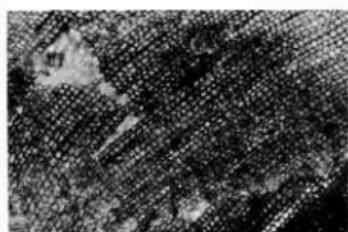


木口 32×

53



板目 115×



木口 32×

56



板目 115×

番号は第13表資料番号

## 2. 石橋条里制遺構第II地点

### 第1章 遺跡の位置と環境

#### 第1節 位 置

石橋条里制遺構第II点の所在地は、東八代郡境川村三門字東畠町184番地の2、及び同183番地とその付近にあって、中央道中心杭S・T・A №466+60の両側に広がっている。東経138度36分52秒、北緯35度35分35秒の位置にある。

相対的位置は、石橋条里制遺構第I地点の所在地から約150m北にあり、同第III地点はここより約300m北にある。

詳細については、石橋条里制遺構第I地点の第1章第1節位置の項を参照されたい。

#### 第2節 環 境

##### イ、自然環境

遺跡は、甲府盆地東部にある境川扇状地扇尖に存在する。扇状地及びその付近の自然環境については、石橋条里制遺構第I地点第1章第2節イ自然環境の項に記した通りである。

遺跡付近の微地形は次のようにある。

発掘した畑は、長さ約50m、幅約30mの舌状に張り出した地形になつていて、西と東は50cm位低い水田になっており、北はだらかに低くなっている。東はほぼ平坦で三門の部落に続いている。

表土から150cmより下まで拳大以下の小礫が多い地層になつていて、土より礫が多いという感じである。

水位は地表下120cm位の高さにあって、よく乾燥する土地である。

このことは、この遺跡の性格を表わす埋石遺構・埋石船状遺構と密接な関係があるものと考えられる。

##### ロ、歴史的環境

石橋条里制遺構第I点と150mしか離れていないので、歴史的環境についてはこれと同じといってよい。石橋条里制遺構第I地点の第1章第2節ロ歴史的環境を参照されたい。

### 第2章 調査の経過

石橋条里制遺構第II地点の発掘は昭和56年5月15日に開始し、同年7月4日に終了した。日曜日と祭日を休み、延約1ヶ月半にわたって行なった。

発掘予定面積330m<sup>2</sup>を発掘し、ほぼ全面で遺構を検出した。

発掘地区全域に、中央道の中心杭を基準としてグリッドを設定した。

まず、発掘予定地における遺構の分布状況を把握するためにグリッド設定基準線の A ラインと C ラインを十文字にトレンチを掘り、遺構の包含層を確認した。これによって、耕作土の下層が包含層であることがわかったので、20cm～40cm の耕作土をバックホーとダンプクローラーを使って除去した。これを除去しながら、遺構の構築面を出し、プランを全面的に検出した。5月下旬に埋石遺構 N.2 のプランを検出した。6月8日には全面の耕作土を除去し終った。この時点で、遺跡の周囲に壠状の掘り込みがある事がわかった。3-A グリッドをトレンチ（5号トレンチ）で試掘したところ、国分期の完形壺が出土した。

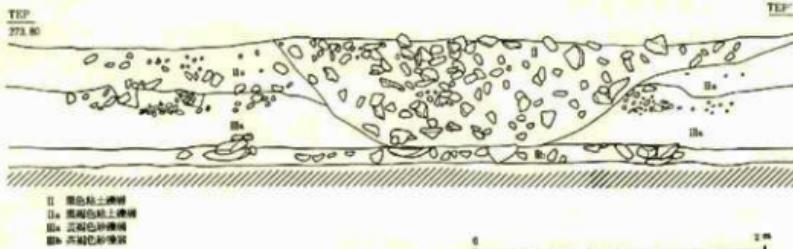
6月中旬から多数の竪穴式住居址や配石遺構が検出され始めた。5-A・B グリッド、4-C グリッドでは住居址が破壊されていて、かまどだけが残っていたものも数基あった。住居址は少しの黒色腐食土が混入する小礫層に構築されていて、住居址の覆土も包含層に似ているため、プランもその切合（前後）関係も判定し難い。かまどだけのものについては、周囲の遺構との前後関係はほとんど決め難い。数基の配石遺構には、すべて国分式土器器を伴っていたので、その時期を決定出来た。数ヶ所検出された集石は、人工のものか自然のものか迷ったが、最終結論として、遺跡の周囲にあった壠状の埋石遺構と 2 号埋石遺構及び北西隅にあった 11 号埋石壠状遺構を人工のものと判断した。これらはすべて国分期住居址とはほぼ同一の掘込面にあるので同一時期のものと考えられる。但し切合関係にある埋石壠状遺構と 5 号住居址の前後関係は 5 号住居址を前とした。2 号埋石遺構の下にあった住居址は特殊な性格を帯びるものであるかも知れない。

この遺跡における地下水位は地表下 120cm 位で周囲に比較し、著しく低いことが特徴である。この地理的条件を生かして、遺構を構築したこととも考えられる。そのために特殊な遺構があり、性格不明で使用目的のわからないものが多いのかも知れない。

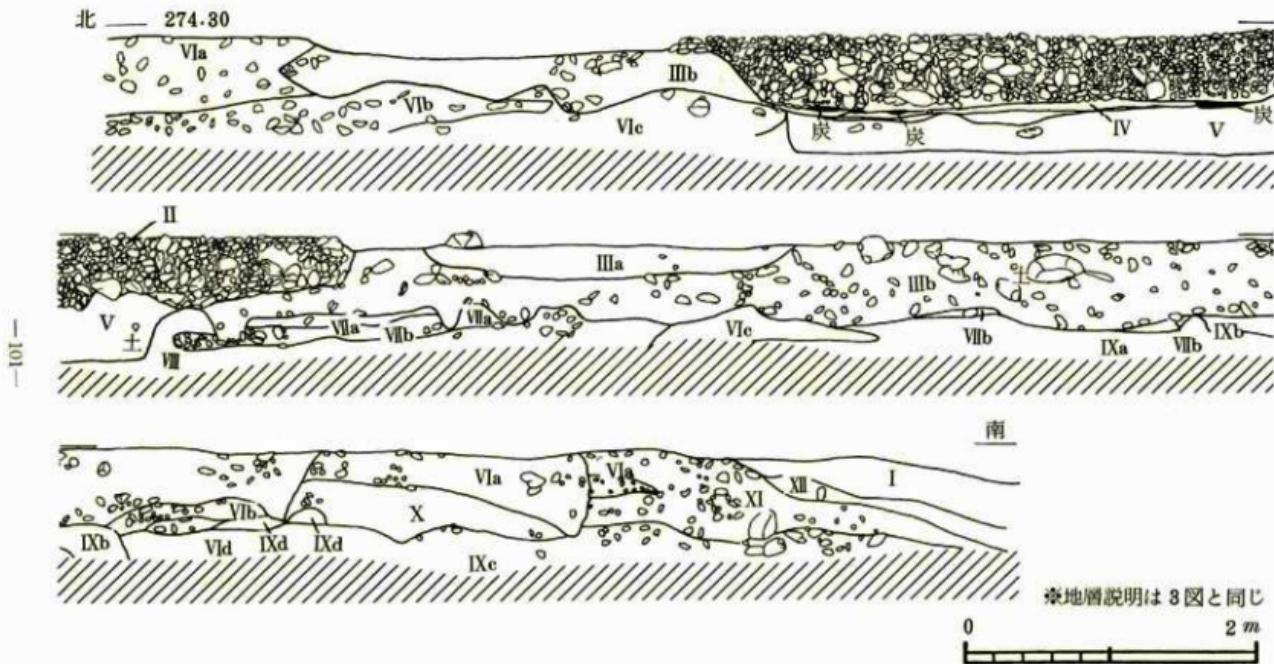
なお発掘調査速報「石橋田園条里一第Ⅱ地点」N.1 を昭和 56 年 11 月 17 日に発行した。

### 第3章 層序

標準層序を定めるために、発掘調査地域内に十文字にトレンチを設定した。他に遺構の層序

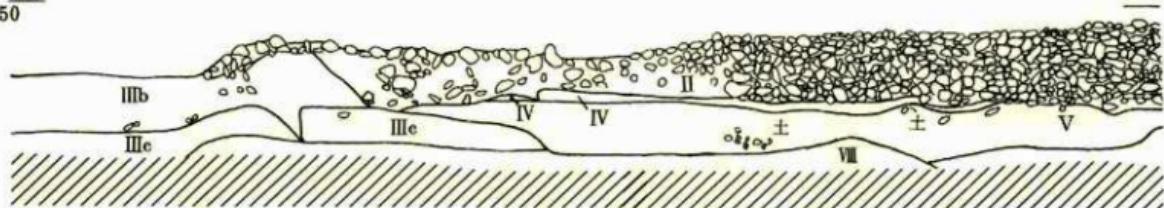


第1図 4号トレンチ地層図 (1:40)



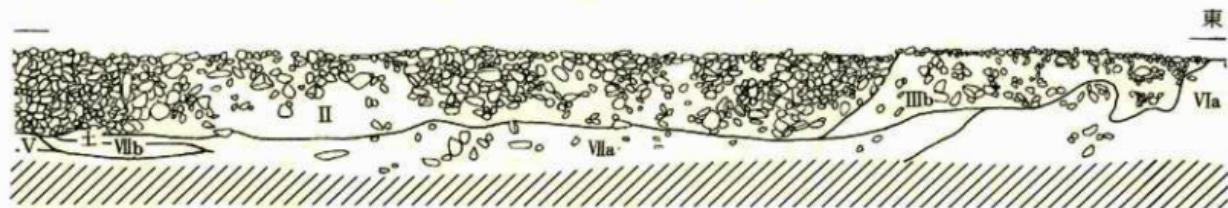
第2図 6号トレント地層図(1:40)

西  
274.50

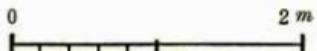


- 102 -

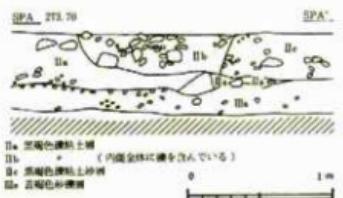
東



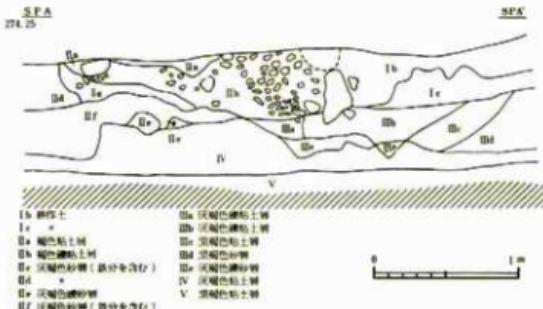
I 耕作土	VIIc 黄褐色砂層(粒子が粗い)
II 円礫層	VIIa 黒褐色砂礫層
IIIa 黒褐色粘土層(SB2の覆土)	VIIla 暗褐色砂層
IIIb タ (礫を含む)	VIIb タ
IIIc 黒褐色砂層	VIII 黄灰色砂礫層
IV 粘土層(炭、焼土、灰を含む)	IXa 黄褐色細砂層
V 灰色粘土砂層(遺物包含層)	IXb タ (小礫を含む) X 暗褐色砂層(粘土を含む)
Vla 黑褐色砂礫層	IXc タ (砂礫層) XI 黑色砂礫層
Vlb 赤褐色砂礫層	IXd タ (砂層) XII 灰色細砂層



第3図 7号トレンチ地層図(1:40)



第4図 3号トレンチ地層図(1:40)



第5図 5号トレンチ地層図(1:40)

ら50cm西に1号と4号の住居址がかかり、西端では埋石壠状遺構の断面となる。

2号トレンチは等高線に平行しているので、表土の深浅はあまりなく、その厚さは約30cmである。

## 第4章 遺構と遺物

石橋条里制造構第Ⅱ地点は、条里制に関する遺構はない。その概略は埋石壠状遺構に囲まれた中に住居址、配石遺構や埋石遺構などがある平安時代後期の遺跡である。

### 埋石壠状遺構と遺物

**6号埋石壠状遺構** この遺跡の南端にあり、その西端を小川で切られているために広さは不明であるが、深さは約1mである。埋石は人頭大から拳大のものがあり、比較的大きめの石が多い。

**8号埋石壠状遺構** 西側を石垣で切られているため広さは不明であるが、その深さは約50cmであった。埋石は比較的小さかった。北端は120cm位の幅で埋石がない所があり、その北側に3号列石があって、あたかも入口のようであった。ここから11号埋石壠状遺構が延長している。

**9号埋石壠状遺構** 北側を区切り、やはり少し石垣で切られていたが、他より幅が広く約37

を記録したがそれは各遺構毎の項で説明する。

層序は極めて単純であって、表土と遺構包含層の2層だけである。耕作土は直径1cm位から10cm位の小礫が非常に多くて、礫層といった方が適当である。その下の第Ⅱ層は表土より礫が多く、人頭大の石も混在している。このような状態であったので、前項に記したよ

うに、水はけがよく、水位も低かった。

1号トレンチの東半分は表土が約30cmと薄く東端では7cm位となり、西半分は約55cmから60cmとやや厚かった。東半分に遺構がないのは表土が薄かったために、耕耘によって遺構が破壊されたためかも知れない。1号と2号トレンチの交点か

0cm、深さ75cmである。埋石の状態は4号トレンチ地層図に示した。このⅢ層とⅡ層の下層から須恵器の頸部破片がそれぞれ出土している。

**10号埋石堀状遺構** 東側を区切るが、水路掘削工事のために片側を破壊されていた。埋石状態は5号トレンチ地層図に示した通り比較的小さい石である。ほぼ中央に南北に柵の境界用列石がある。ここから国分式土師器の壺の破片が出土し、11世紀に比定されるものであった。

**11号埋石堀状遺構** 他と性格を異にするものと思われる。幅は約1m、深さ30cmで埋石も小さい。8号へ続いている。

埋石堀状遺構の性格は結論づけられないが、廻ではないかと考えられる。石が埋められているのは、廃絶後ここに多い泥塗原の石を投げこんだようにも考えられる。

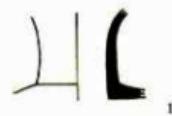
その時期は遺物が少ないため、正確にはわからないが、11世紀後半頃に比定される。

#### 住居址と遺物

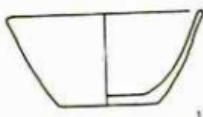
発掘地域内の西側半分から7基の竪穴式住居址が発見され、その他にかまど用芯石が数基検出された。東側半分になかったのは、西側を埋めて平にするための土を削り取る際に破壊されたのではないだろうか。

**1号住居址** 遺跡の中央部にあって、4号住居址の上に構築されている。氾濫した疊層で囲まれている。形状は隅丸方形で、やゝ南北に長い。規模は東西3.3m、南北の中心が4m、深さ30cmで床面の標高273.45mである。主軸方向はN-12°-Eである。かまどは南東の隅にあり、構造は石を立てて袖の芯とし、中央に細長い石を立てている。このように細長い石を中心よりやゝ外側に立てる構造のかまどが多くある。

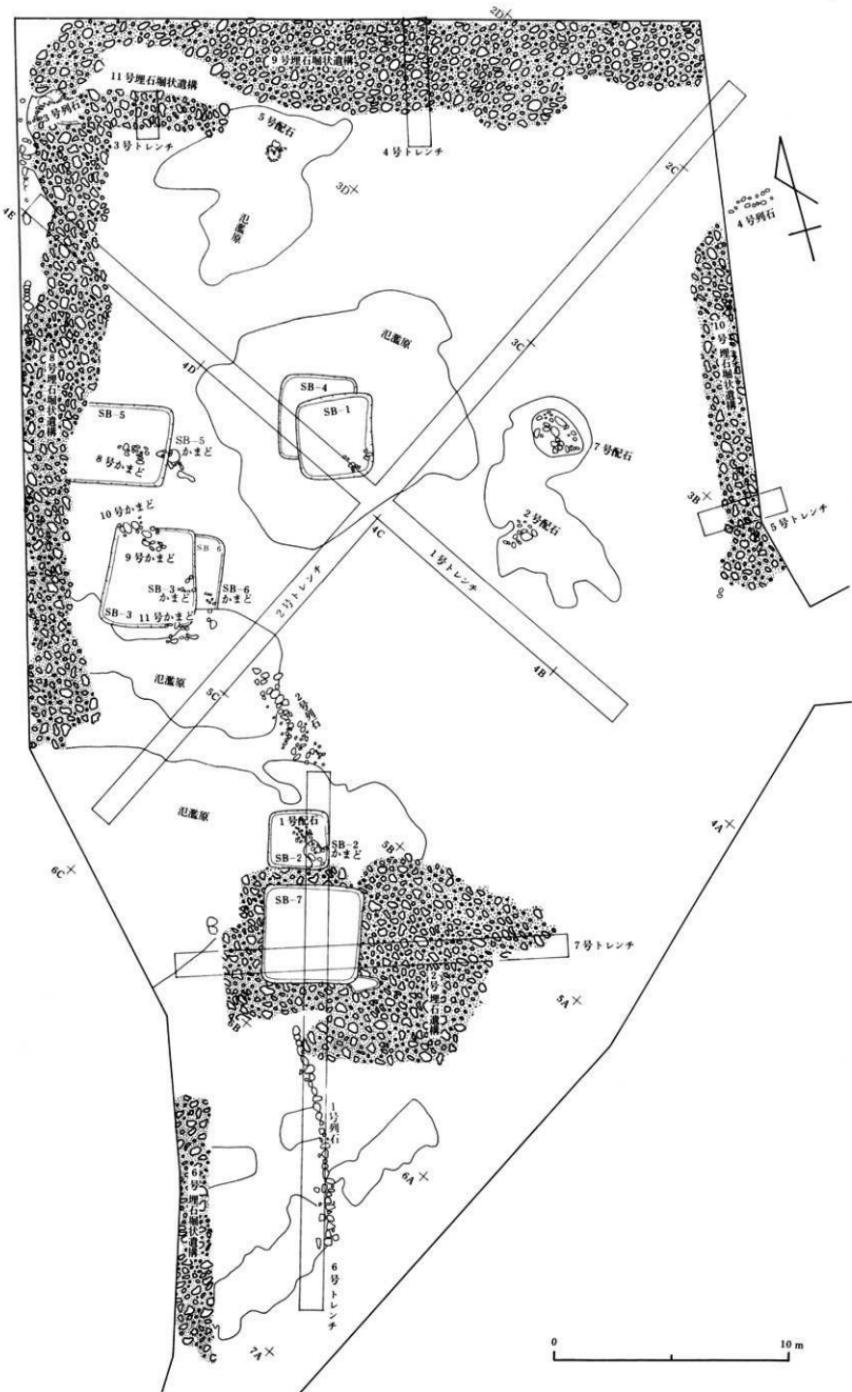
**遺物** 初期の国分式土師器の壺が多く、第10図N<sub>1</sub>、N<sub>2</sub>のように灯明皿もある。またN<sub>6</sub>の壺は真間期頃と思われ、かまど内より出土した。



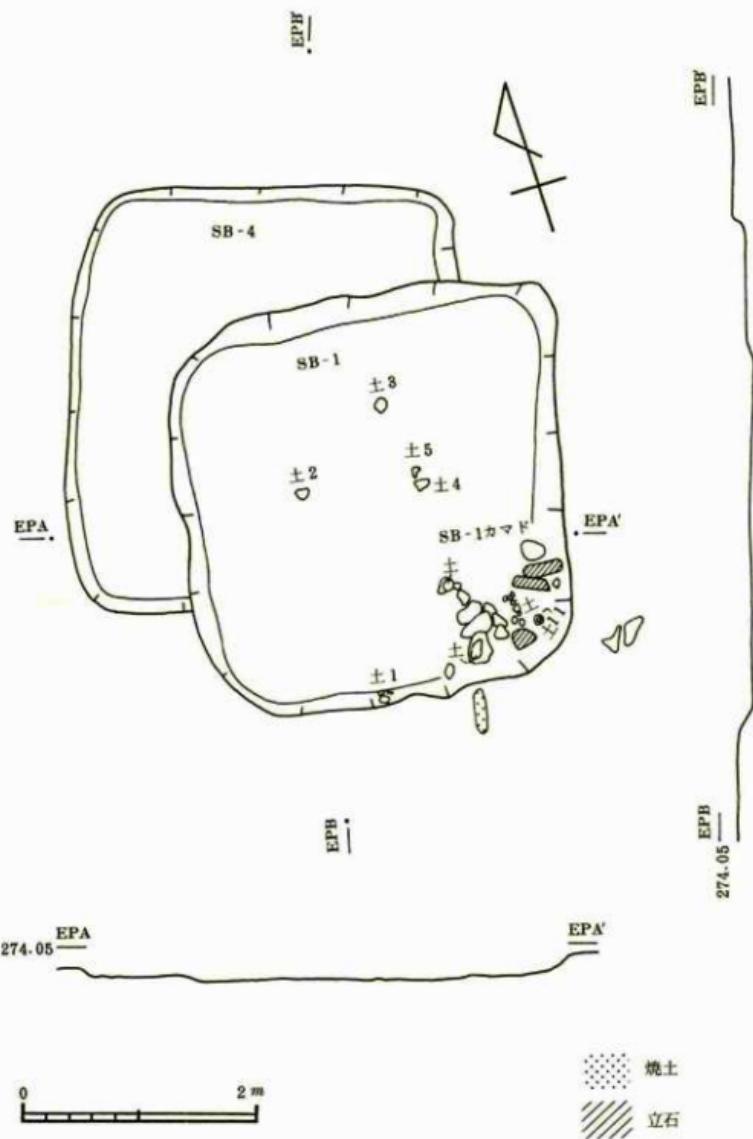
第7図 9号埋石堀状遺構  
出土遺物実測図



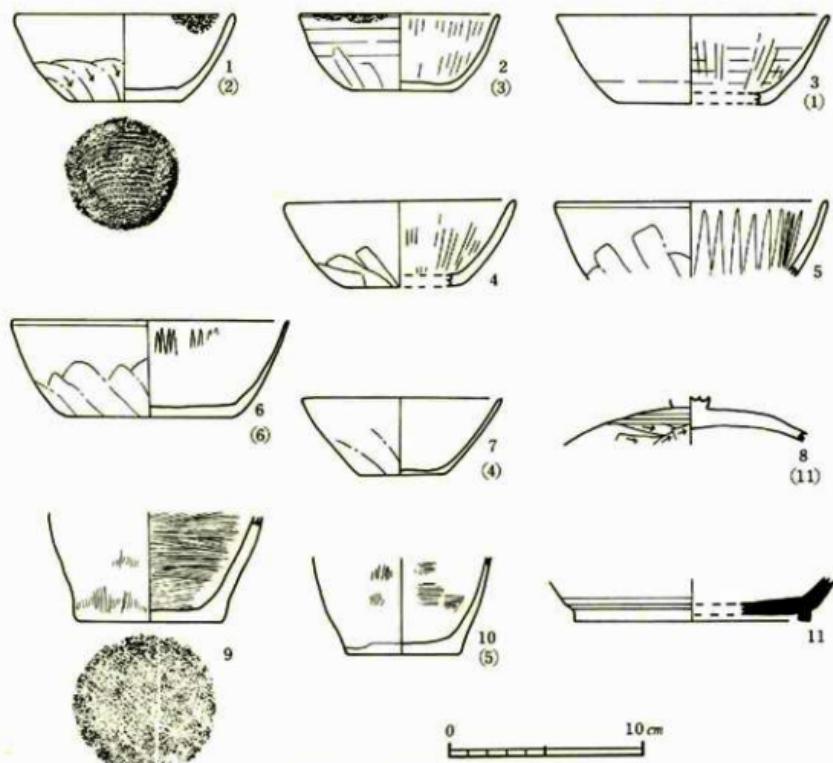
第8図 11号埋石堀状遺構  
出土遺物実測図



第6図 石橋条里製造構II地点全体図



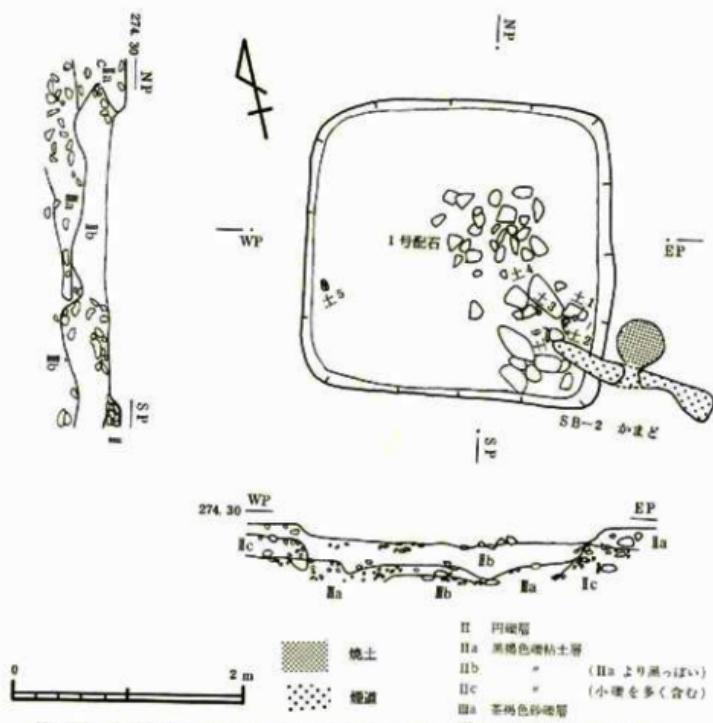
第9図 1号・4号居住址実測図 (1:50)



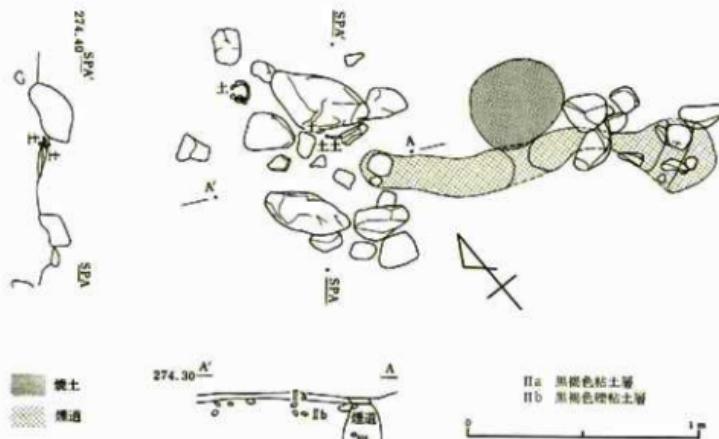
第10図 1号住居址遺物実測図

**2号住居址** 遺跡の南部にあって、最小のものである。氾濫した疊層に囲まれ（疊層を掘って）、南の2号埋石構造をわずかに切っている。形状は隅丸方形で、規模は東西2.55m、南北2.70m、深さ20cmで床面の標高273.85mである。主軸の方向はN-16°-Eである。かまどは南東の隅にあり、構造は石を立て袖の芯とし、中央に低い石を埋めて立ててある。炊き口の芯石は特に大きい。住居址の中央に1号配石があるが、住居址との関係は不明である。

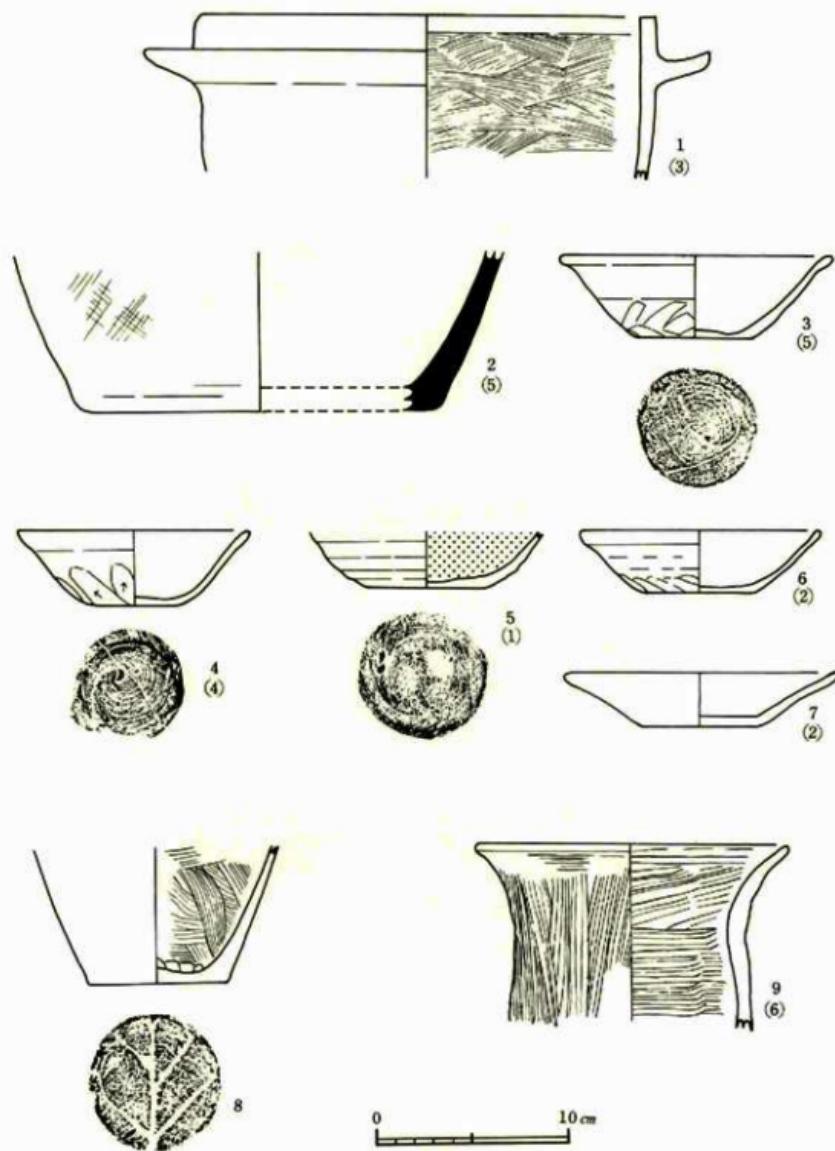
**遺物** 国分式中葉の皿・杯・壺の底部・羽釜口縁部破片が、又かまどから鬼高期の壺の口縁部破片が出土している。杯の内、1個は内面黒色土器である。全部の杯は床面直上から出土しているので、これが住居址廃絶の時期を示すと考えられる。



第11図 2号住居址及び1号配石実測図 (1:50)

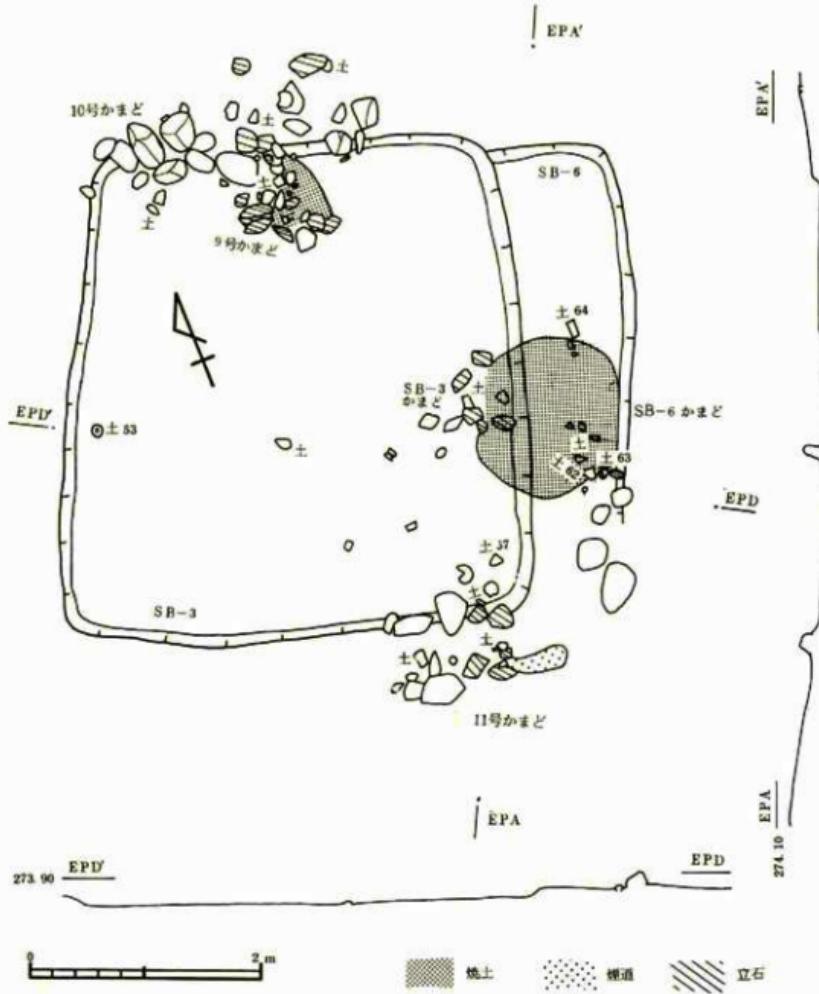


第12図 2号住居址かまと実測図 (1:40)



第13圖 2號住居址出土遺物實測圖

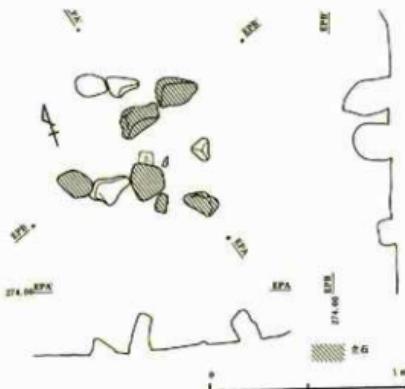
3号住居址 6号住居址の上にある。形状は隅丸方形であるが、北側がやゝ狭くなっていて、歪んでいる。規模はその中心点で東西3.9m、南北4.2m、深さ21cmで、主軸の方向はN—21°—Eである。床面の標高273.30mである。かまどは東側にあり、構造は石を立てて袖の芯としている。この外にも南側の壁に接する所と、北西の隅に他の住居址のかまどがあるが、



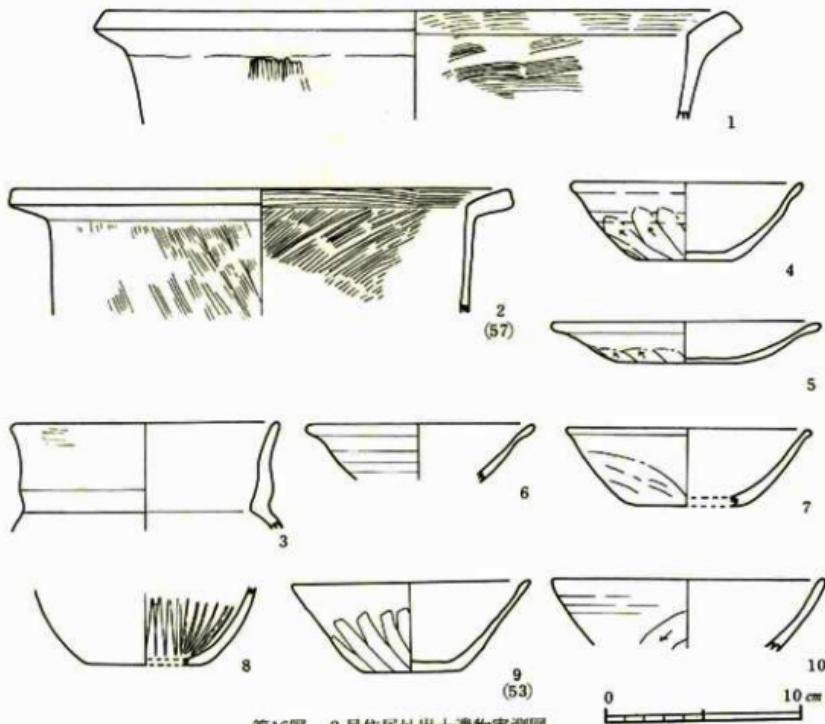
第14図 3・6号住居址実測図

その住居址のプランは検出できなかった。このいずれのかまども石を立てて袖の芯とし、中央に石を立てている。

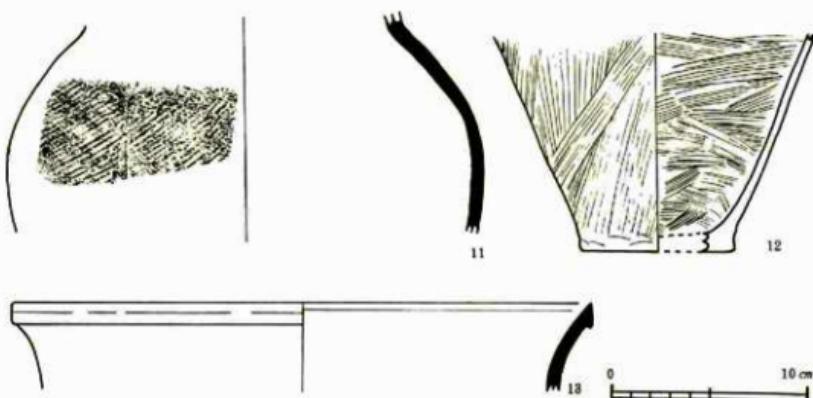
遺物 床面直上から出土したものあげる。土師器の皿、杯、甕の口縁部等があり、遺物量は多いが、いずれも山梨県土師編年（48年・坂本）の国分Ⅲ式後半に属するものであろう。須恵器の甕の破片も出土した。



第15図 3号住居址かまど実測図 (1:30)



第16図 3号住居址出土遺物実測図

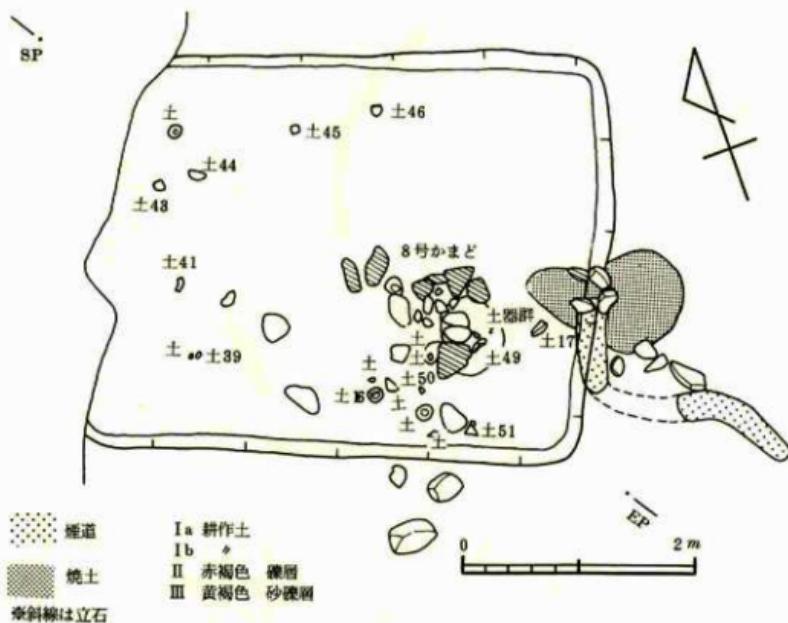


第17図 3号住居址出土遺物実測図

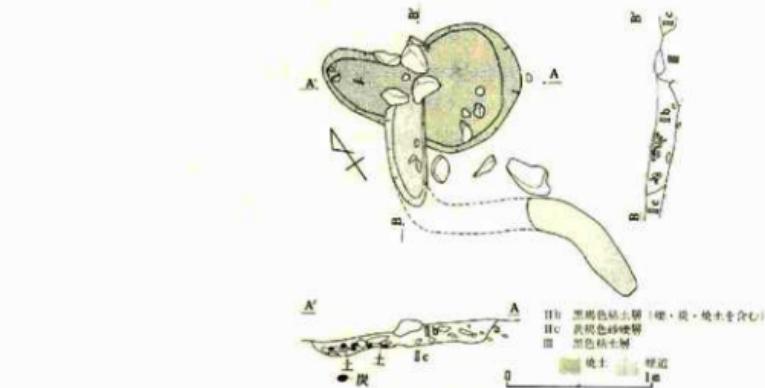
**4号住居址** この遺跡の中央部に位置し、1号住居址の下にあって、その一部は4号住居址によって切られている。形状は隅丸方形である。規模は推計であるが、南北3.6m、東西3.3m、深さ25cmで、主軸の方向はN-20°-Eである。床面の標高273.55mである。かまどは1号住居址によって破壊されたものと思われ、住居址の東側にあったと考えられる。遺物は全く発見されなかった。

**5号住居址** この遺跡の西端に位置し、8号埋石構造遺構によって、住居址の西側をわずかに切られている。形状は隅丸方形であるが、やゝ東西に長い。規模は東西が推計4.5m、南北3.4m、深さ15cmで、主軸はE-19°-Sである。床面の標高は273.60mである。かまどは東側中央にあるが、破壊されていて、わずかに袖の芯の石が4個残っていただけである。袖石に続く外側に焼土があり、その南側を回るように煙道が半分検出された。住居の中央部にもかまどの袖の芯石があったが、これに伴う住居址は耕耘によって破壊されたものと思われ、検出できなかった。周囲はかたく踏み固められていた。

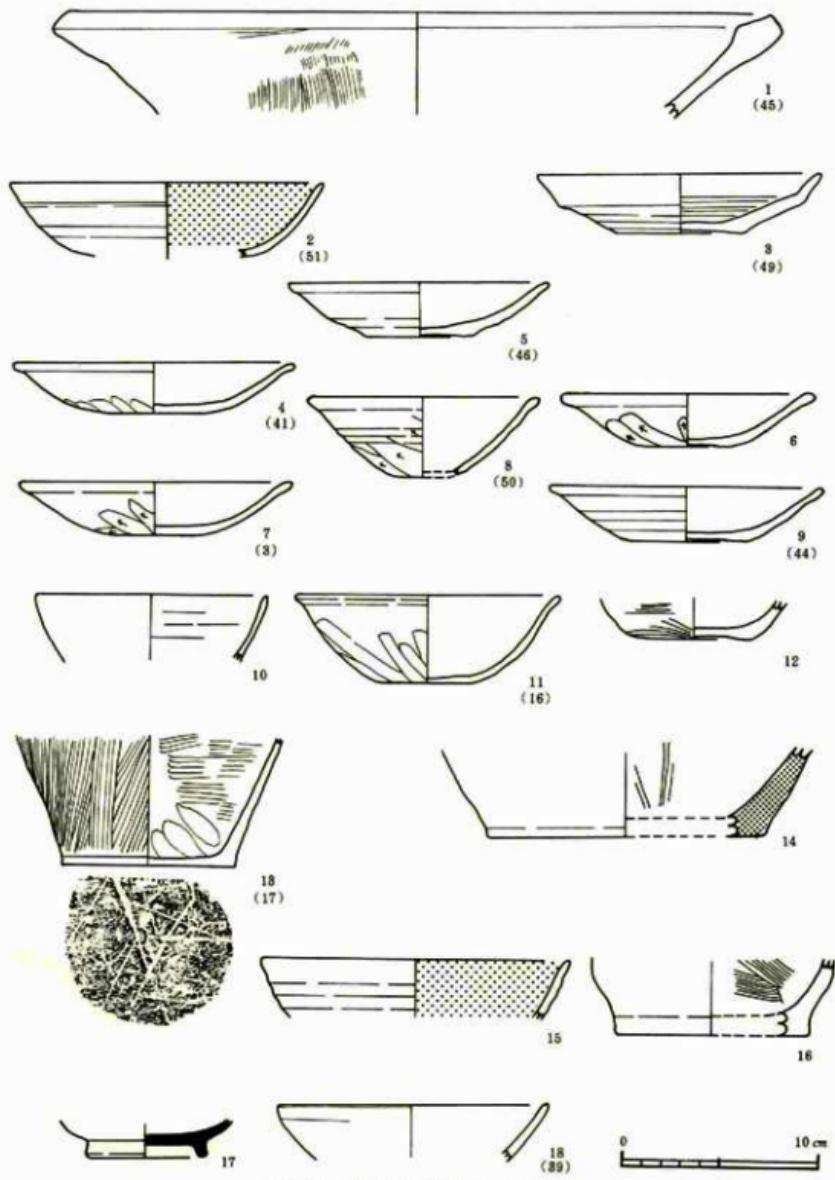
**遺物** 土器器の皿、杯、壺の口縁部や底部の破片、羽釜の口縁部の破片、瓦器質の溜鉢等が出土した。杯の中には、わずかに高台をもつ内面黒色土器や、灯明皿の破片が1片ずつあった。これらは国分Ⅱ式後半からそれ以後のものと思われ、又壺の口縁部はそれより後のものであろう。瓦器質の溜鉢片は、沈線が2本単位で2個所入っているもので、床面直上から出土した。瓦器質土器は他の遺構からも数点出土しているので、この遺構の時期に使用されていたと考えてよいのであろうか。川越俊一氏による「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」（『文化財論叢』昭和58年・国立奈良文化財研究所）によれば、近畿地方では瓦器質碗は11世紀、瓦器質羽釜は12世紀末から13世紀初頭にかけて出現したようである。他に変形な皿も1個出土している。



第18図 5号住居址実測図 (1:50)



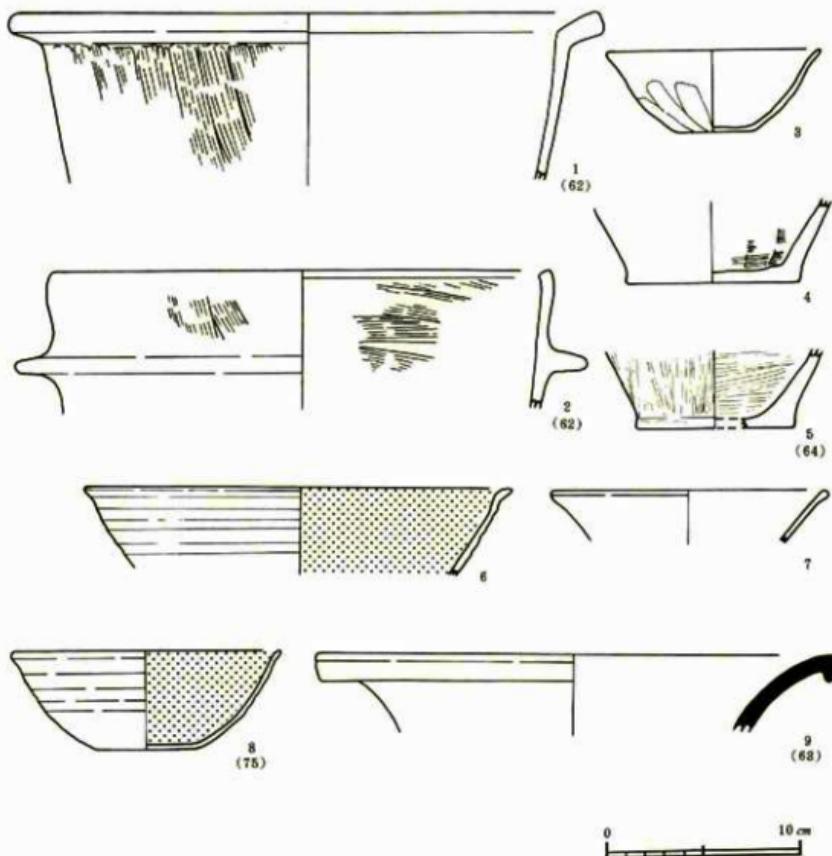
第19図 5号住居址かまど実測図 (1:40)



第20図 5号住居址出土遺物実測図

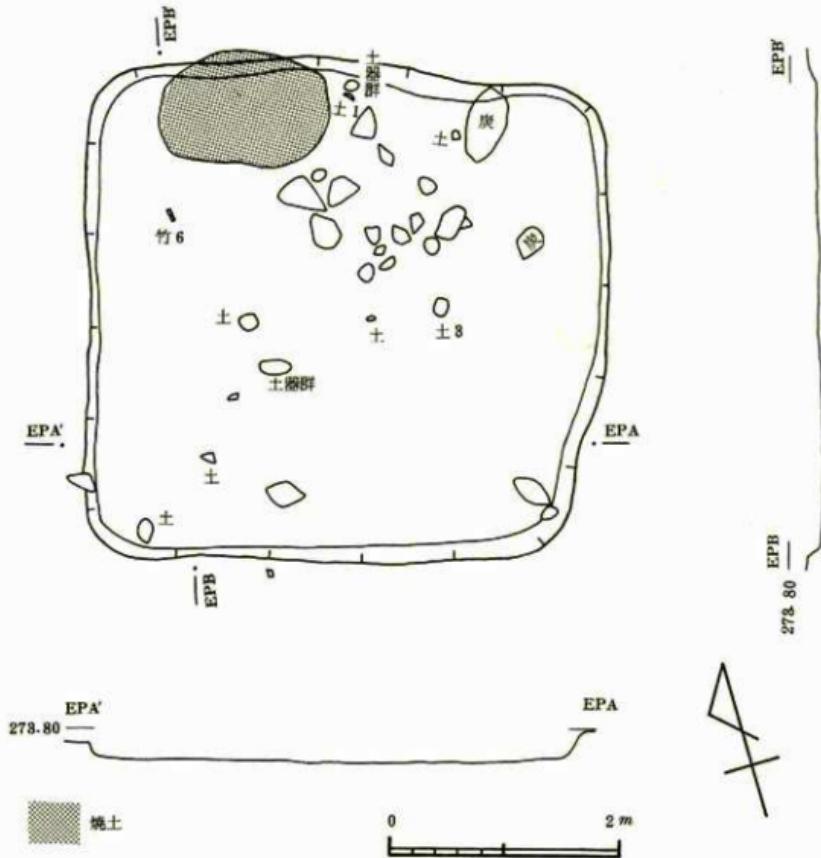
**6号住居址** 3号住居址によって、そのほとんどが破壊されているために、規模は不明であるが、深さは15cm、形状は隅丸方形のようである。床面の標高は273.35mである。かまどは南東隅よりやゝ北にあるが、破壊されて袖の芯石が残っているにすぎない。焼土がかまどの前部に径1m位の範囲に広がっている。

**遺物** かまどとその付近から土師器片と須恵器片が出土している。土師器は坏、甕、羽釜があり、坏の内2個は内面黒色土器である。いずれも11世紀のもので、国分Ⅱ式とそれ以後に比定されよう。



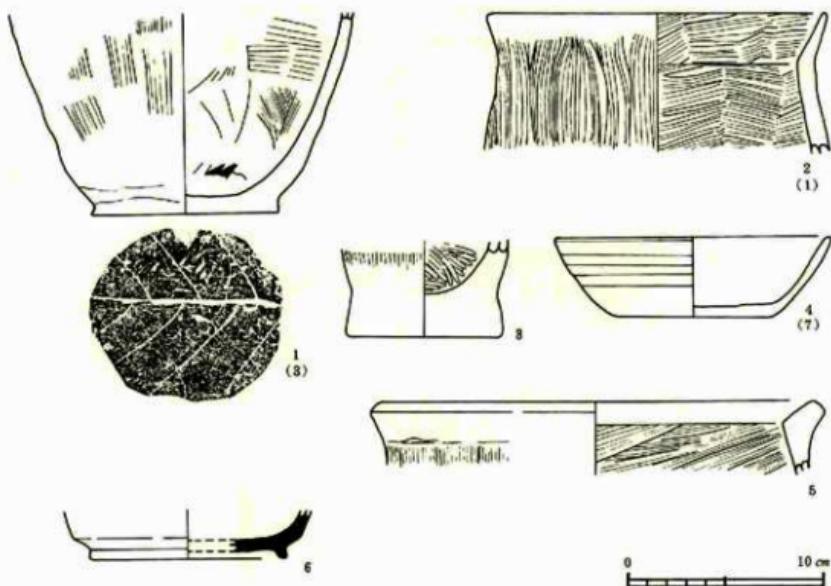
第21図 6号住居址出土遺物実測図

7号住居址 2号埋石遺構の下から検出されたもので、他の住居址より一時期古い土器器が出土している。埋石遺構の下にあったのは偶然であろうと考えられる。形状は隅丸方形であり、規模は東西4.45m、南北4.3m、深さ20cmである。主軸の方向はE-17°-Sである。床面の標高273.3mである。かまどは南東の隅にあったと考えられ、袖の芯石らしい石が3個と、黄白色の砂が落込みの中に堆積していたが焼土はみられなかった。住居址内には焼土と炭の層があり、自然石が床面に散乱しており、覆土はほとんど単1層で、レンズ状堆積がないことから、住居は人工的に埋められたことも考えられる。



第22図 7号住居址実測図 (1:50)

遺物 土師器の杯、壺の口縁部、底部破片などが出土し、いずれも8世紀から9世紀の真間期から国分期にかけてのものであろう。



第23図 7号住居址出土遺物実測図

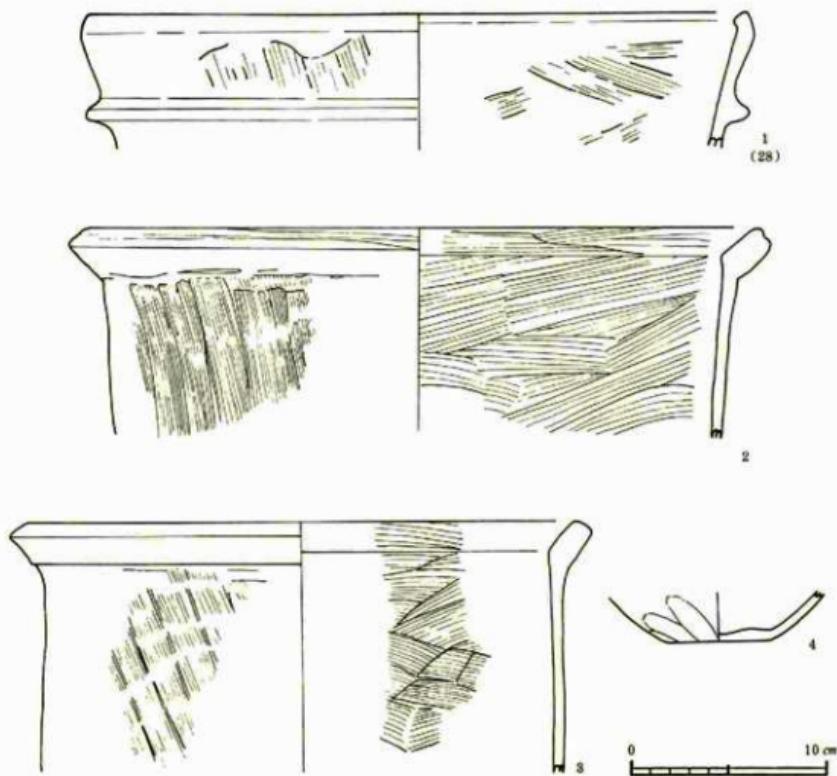
#### かまと遺物

8号かまと 5号住居址の中にあって、片袖の芯石は立石として残存していたが、そのプランの検出は出来なかった。

遺物 かまと内で出土した遺物は国分式期後葉の10世紀後半のものであろう。



第24図 8号かまと実測図 (1:40)



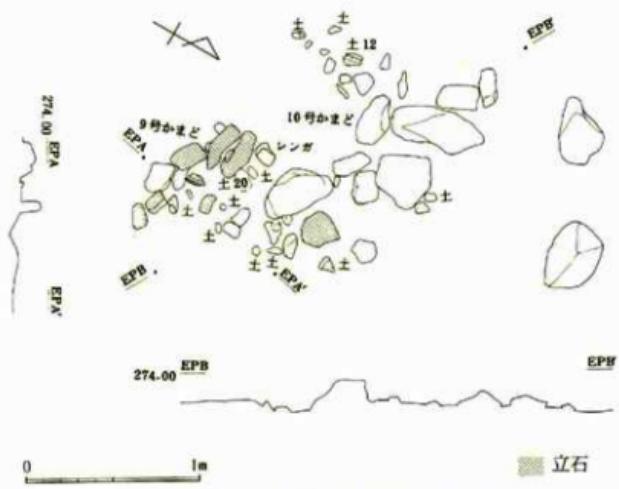
第25図 8号かまど出土遺物実測図

9号かまど 3号住居址の中にあって、片袖の芯石は立石として残存していたが、他の片袖は全くない。プランは検出できなかった。

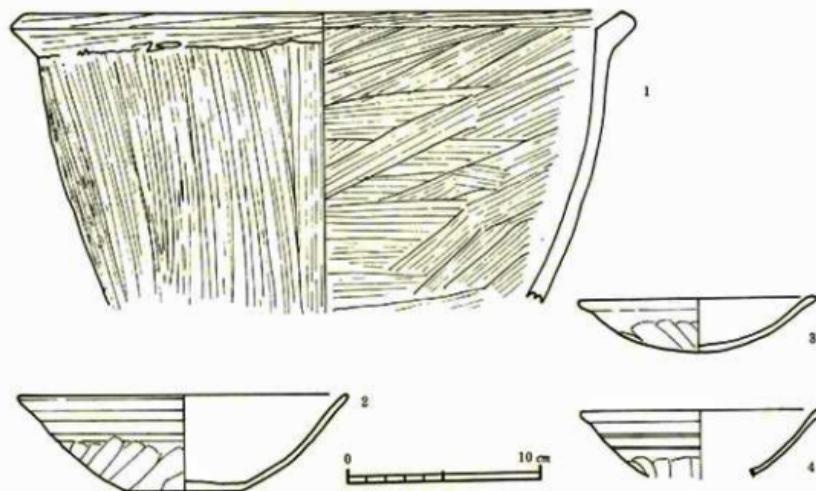
遺物 かまど内での出土遺物は、国分式期後葉のものであろう。

10号かまど 9号かまどに隣接していて、ほとんど破壊されている。プランは確認出来なかった。

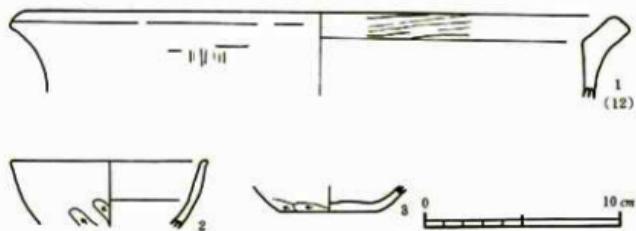
遺物 かまど内で出土した遺物は国分式期後葉のものであろう。



第26図 9・10号かまと実測図 (1:40)



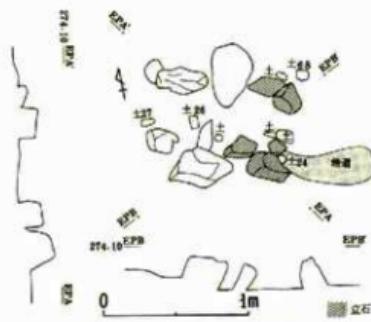
第27図 9号かまと出土遺物実測図



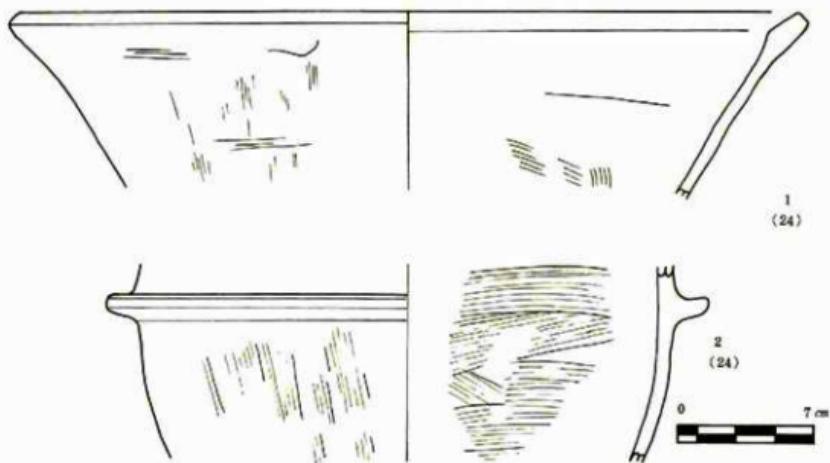
第28図 10号かまと出土遺物実測図

11号かまと 3号住居址内にあって、両袖に使用された立石と煙道の1部を検出したがプランは確認出来なかった。

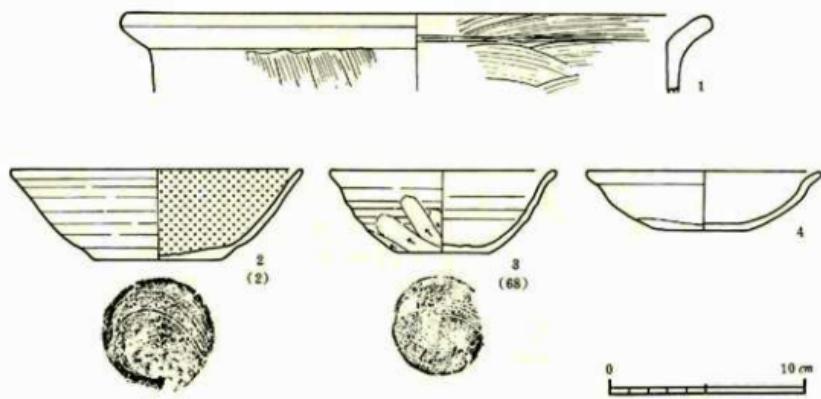
遺物 かまと内での出土遺物は国分式期中葉から11世紀初頭くらいのものであろう。



第29図 11号かまと実測図(1:40)



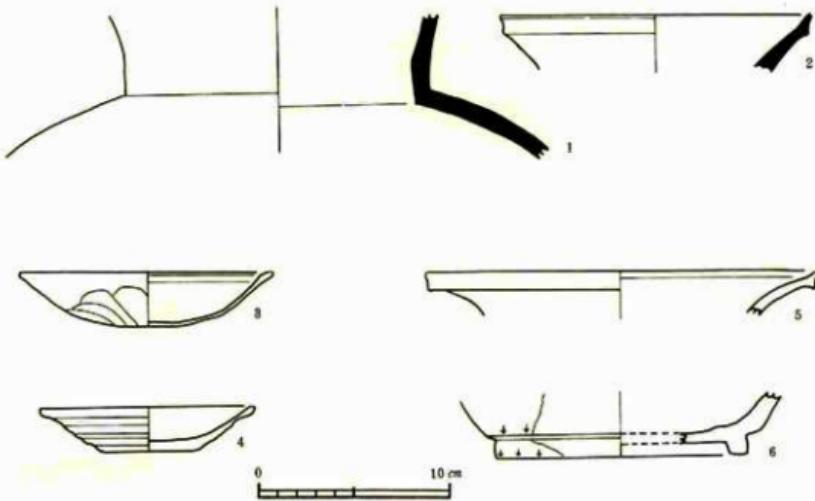
第30図 11号かまと出土遺物実測図



第31図 11号かまど出土遺物実測図

#### 埋石造構と遺物

**2号埋石造構** (1号は欠番) 7号住居址の中にある。石を密に埋めた部分はやゝ方形を呈しており、東西約9.5m、南北約6mである。埋められた石が少ない部分は東で約2.5m、西で2.1mで、ここ之上には自然石が1段並べられていて、深さは約50cmである。埋められている石は拳大から30cm位の石で小礫はほとんど混入していないから明らかに人工的に埋めたものである。埋石の底には5cm位の焼土や炭化物・灰の層が所々にある。



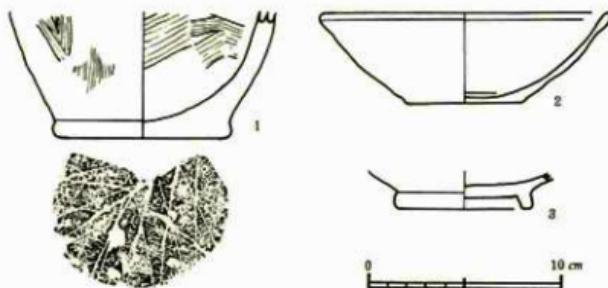
第32図 2号埋石造構出土遺物実測図

**遺物** 墓石の中から土師器の杯、皿、壺や須恵器の壺、壺や灰釉陶器の破片などが出土した。杯、皿は11世紀の国分寺式位に比定出来る。その他、土師質の磚状遺物が3個出土した。その最も大きいものは長さ24cm以上、厚さ約10cmである。

使用目的は全く判明しない。

#### 配石構造と遺物

3基の配石構造を検出したが、5号配石構造以外は1部が破壊されていて、完全な形ではなく、原型の推測は出来ない。これらはほぼ同一生活面上に構築されており、その出土遺物も時期が近いものである。いずれもその機能を判定し難く、性格が不明な構造である。

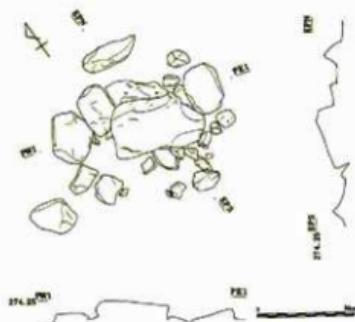


第33図 1号配石出土遺物実測図

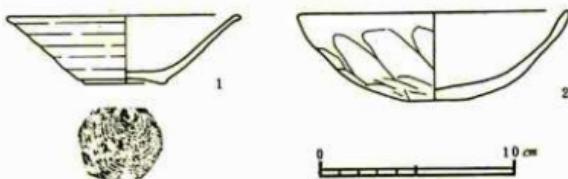
**2号配石構造** 7号配石構造の約3m南西にある。石で炉状に囲ってあり、その上に長さ47cmの石を載せてある。

規模は東の1部は破壊され、石がなかったのでわからないが、南北の長さは約120cmである。セクションでみるとわずかに掘り込んで埋めた石と、そのまま配置したとみられる石があり、内はやゝ掘り凹めて焼土等はなかった。

**遺物** 土師器の杯が2個出土した。時期は国分寺初期のものであろう。



第34図 2号配石実測図 (1:30)



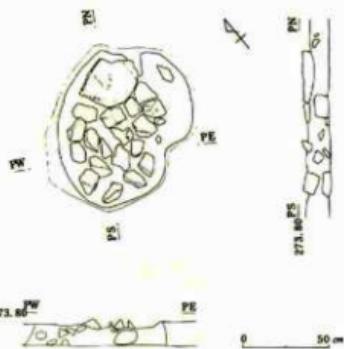
第35図 2号配石出土遺物実測図

5号配石遺構 直径約30cmの偏平な石の平面部分を上にして置き、その前に14cmくらいの比較的大きさの揃った石を並べて、長径約90cm、短径約60cmの長円形の遺構を作っている。小石は必ずしも上が平ではなく、凹凸しているが、原形は上面が平であったことが、その状況から考えられる。掘込みは浅く覆土には炭化物や灰が混入して、黒色となつてゐるが焼土は見られない。この黒色土の範囲は配石の中と周囲5cm位の所まで広がっている。

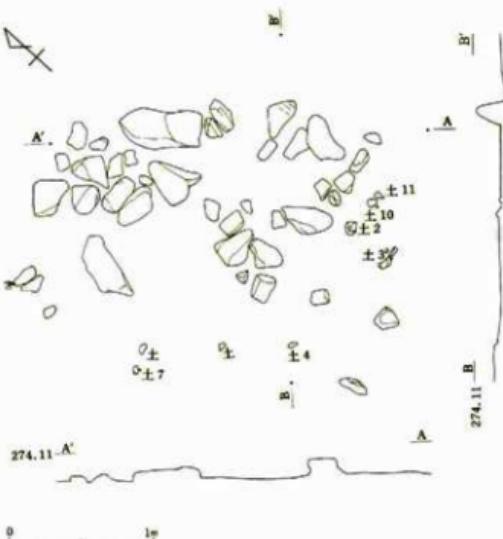
遺物 出土しなかつた。

7号配石遺構 2号配石遺構の北東3mの地点にある。配石の全体は不整円形を呈するが、半数以上の石が取り去られたと思われ、原型を残していない。北側中間には列石があり、これを囲むように配石されている。約20cm掘込んで、その上部に石を埋め込んでいて、覆土は炭火物を含んだ黒色土であるが焼土はない。

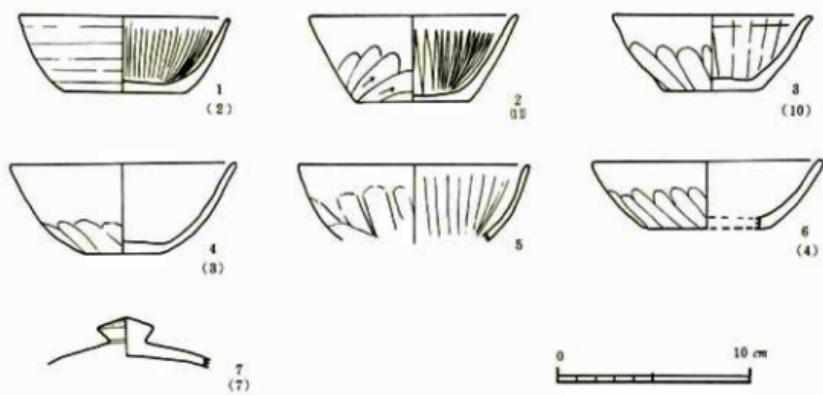
遺物 土師器の壺、皿、蓋などが出で、いずれも平安時代前期にあたるものである。1枚の皿は外面に煤が付着している。



第36図 5号配石実測図 (1:30)



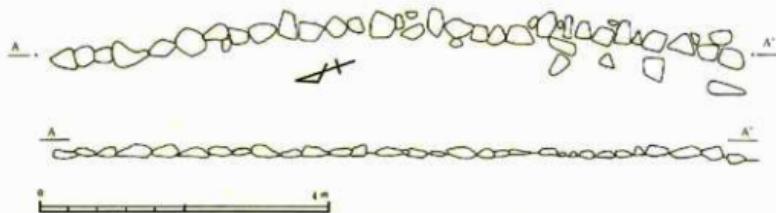
第37図 7号配石実測図 (1:40)



第38図 7号配石出土遺物実測図

#### 列石と遺物

2列の列石と用途不明の3基の配石と思われる遺構がある。いずれもレベルは前述した各種の遺構とはほぼ同じであるが、構築や使用時期は確定出来ない。



第39図 1号列石実測図

**1号列石** 遺跡の南端にあり、列石の北端は2号埋石遺構に接している。構造は1段構築で、その面は西側にあり、東は石の上面に生活面、西は下面が生活面となっている。東側には道状に踏み固められた場所があり、これは2号埋石遺構の上面とほぼレベルは一致する。列石の長さは約9.5mである。

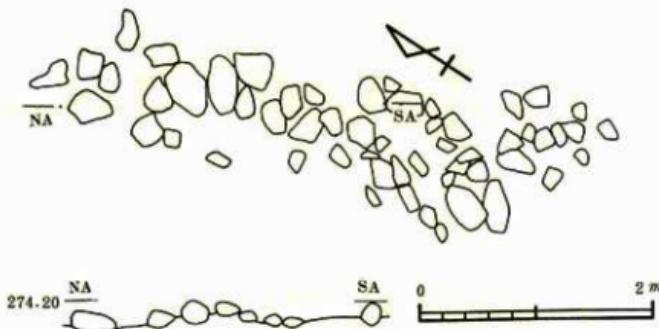
**遺物** 列石の南側生活面から瓦器質の搗鉢、羽釜と鉢の破片が出土した。この製作時期については、確定出来ない。この他に土師器壺の底部が出土している。

**2号列石** 2号住居址の北側にあり、これとレベルはほぼ同じである。ほとんど破壊されていたが、約3mあり、一段構築で列石と認められる程度に並んでいた。周囲には破壊されたと考えられる石が散乱していた。

**遺物** 遺物はなかった。



第40図 1号列石出土  
遺物実測図



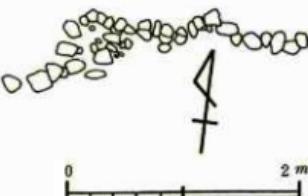
第41図 2号列石実測図(1:50)

**3号列石** 北西の隅にあって、埋石堀状遺構が入口状に切られている北側辺に沿って、2段積になっている。乱雑な積み方で、しかも屈曲しているが、面は南側になっている。西端は破壊されていて、石が散乱している。構築状況から判断すると埋石堀状遺構と同時期のものではないかと考えられる。

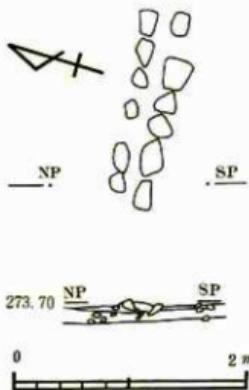
**遺物** 伴出遺物はない。

**4号列石** 東側にあって、中央道の路線外へと延長していたと思われるが、水路工事で破壊されていた。水路状に2列に並行しており、1段構築である。

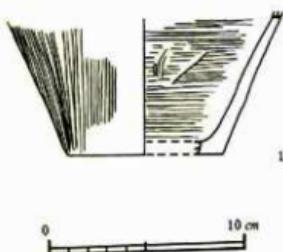
**遺物** 壺の底部が出土した。



第42図 3号列石実測図



第43図 4号列石実測図

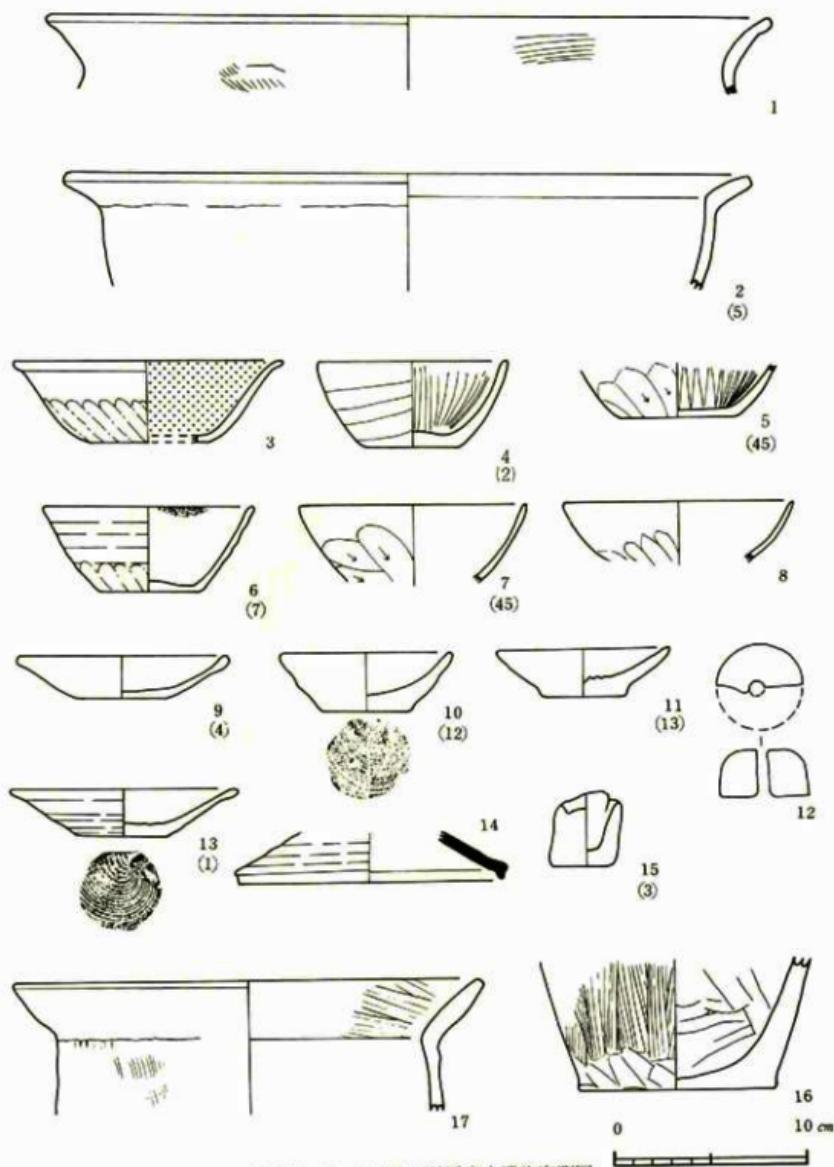


第44図 4号列石出土遺物  
実測図

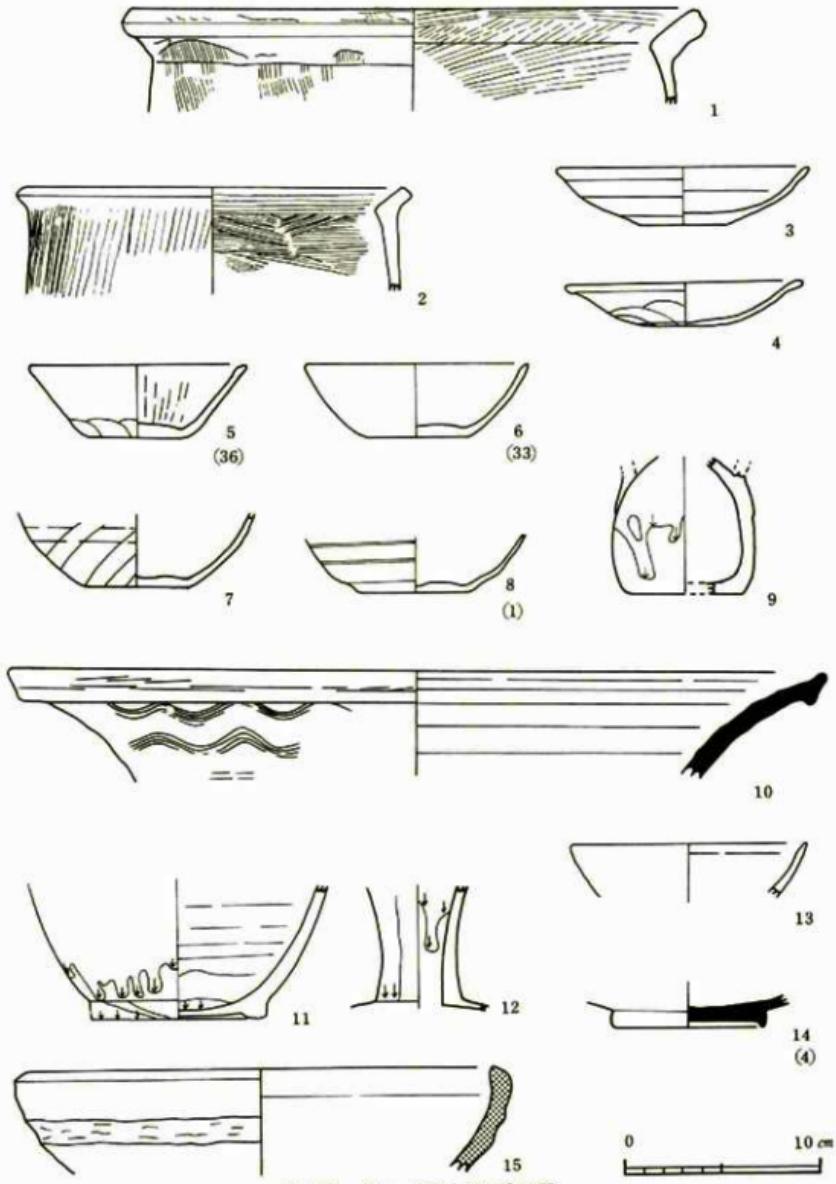
#### その他の遺構と遺物

8号及び10号埋石堀状遺構の上に、南北の列石が2列あり、約16mと14mを計ることが出来る。古い時期の畠の境界用のものかも知れない。

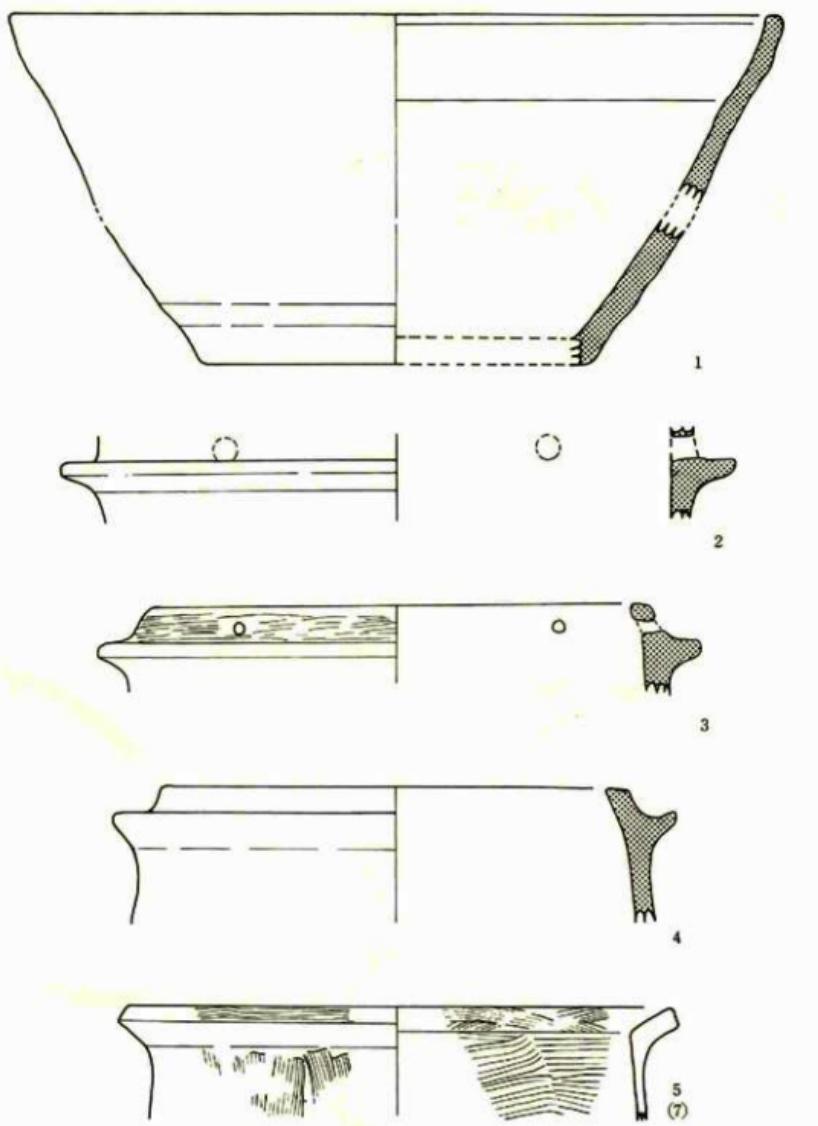
**遺物** 土器の壺の底部が出土している。



第45図 2・7号配石付近出土遺物実測図

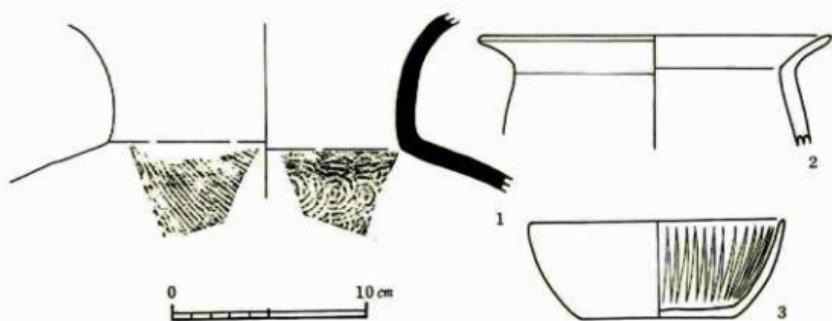


第46図 グリッド出土遺物実測図

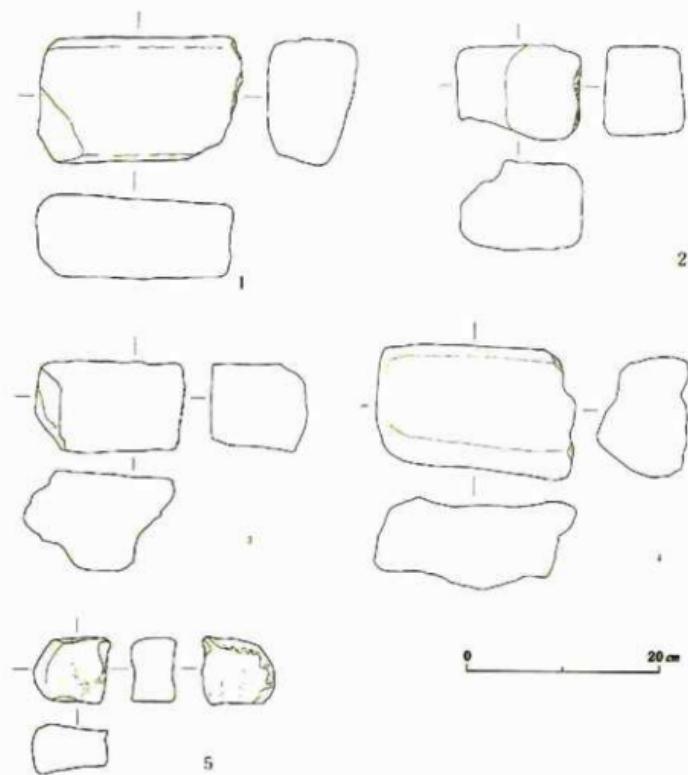


第47図 1号列石付近出土遺物実測図





第48図 9号埋石棚状遺構出土遺物実測図



第49図 磚状遺物実測図 (1:6)

最後に瓦器質土器、土師質土器と青磁、灰釉陶器について説明しておく。瓦器質土器については「5号住居址」の項で若干説明したように、壺鉢や羽釜の破片が数片出土している。器の内外面に灰色の化粧粘土を1～2mm貼り付け、芯は白色の粗い胎土であるものが多い。出土地点は遺跡の南側に集中している。他からも瓦器質土器は数10片出土していて、中には須恵器と瓦器の中間的なものもかなり多い。これらは出土状況などからも確かにこの遺跡の終末期のものと考へてよいであろう。土師質土器は極めて少量で、ほぼ完形のものが3-Bグリッドの生活面直上から2枚重なって出土した。第45図No.10とNo.11であるが、2枚とも器肉が厚く、糸切り底で内面に回転指ナデ調整痕がある。青磁は2号埋石遺構の覆土から出土した底部である。内外面に施釉した優品であって、中国製のものようである。灰釉陶器も若干出土している。

第1表 出土・遺物一覧表

番号	出土地点	種類	器形	出土地點 （年月日）	調査				胎土 色焼成	備考
					口縁	外面	内面	底		
第71 回	9号埋石 罐状石器	須恵	長頸壺	— —		ロクロ水引	ロクロ水引		黒白良 褐色 密色好	
第81 回	11号埋石 罐状石器	土師	杯	10.0 4.7 5.5	丸形	*	*		黒白良 褐色 密色好	
第101 回	SB-1 床面直上	*	ク	12.0 4.4 6.0	*	ロクロロクロ水引 器体下半斜位窓附	*	静止赤切 窓附	黒茶良 褐色 密色好	灯明組
*2	*	*	ク	10.4 4.0 5.6	*	*	ロクロ水引 放射状竪文	赤切 窓附	黒褐色 褐色 密色好	*
*3	*	*	ク	13.8 4.8 7.0	*	ロクロロクロ水引 器体下半斜位窓附	*		黒褐色 褐色 密色好	
*4	SB-1 床面直上 右	*	ク	12.0 4.4 6.0	*	ロクロロクロ水引 器体下半斜位窓附	*		黒褐色 褐色 密色好	
*5	SB-1 床面直上 左	*	ク	14.0 — —	*	*	花卉状暗文		*	
*6	*	*	ク	14.0 5.0 8.6	尖形	*	*		黒白良 褐色 密色好	
*7	SB-1 床面直上	*	ク	10.4 4.0 4.8	丸形	*	ロクロ水引		黒茶良 褐色 密色好	
*8	SB-1 覆 土	*	蓋	— —	ロクロロクロ水引 斜位窓附	*	*		黒褐色 褐色 密色好	
*9	SB-1 左	*	壺	— 7.4	綫刷毛	横刷毛	木葉痕		砂粒を含む 褐色 密色好	
*10	*	*	ク	— 6.0		*	*	*	砂粒を含む 褐色 密色好	
*11	SB-1 左 床面直上 居	須恵	ク	— 12.0	ロクロ壺ナデ	ロクロ壺ナデ			黒茶良 褐色 密色好	
第131 回	SB-2 床面直上	土師	羽釜	23.4 — —	ロ錐痕ナデ	壺ナデ 横刷毛			砂粒を含む 褐色 密色好	外側 若下部 付着
*2	*	須恵	鉢	— 17.6	格子叩き スリケシ				砂粒を含む 褐色 密色好	
*3	SB-2 床面直上	土師	杯	14.0 6.0	隆玉縁	ロクロロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引	赤切 窓附	黒茶良 褐色 密色好	
*4	SB-2 床面直上	*	杯	12.0 3.9 4.5	*	*	*	回転赤切	砂粒を含む 褐色 密色好	
*5	*	*	*	— 6.0	回転壺ナデ	*	*	赤切 窓附	砂粒を含む 褐色 密色好	内黑
*6	*	*	*	12.2 3.2 6.0	ロクロロクロ水引 器体下半斜位窓附	*	*	*	砂粒を含む 褐色 密色好	
*7	カマド	*	ク	14.0 2.8 6.8	ロクロ水引	*	*	*	砂粒を含む 褐色 密色好	

標印番号	出土場所	種類	器形	調 整				土色調成	備考
				口 線	外 面	内 面	底		
第138回	SB-2	+	壺	— 7.0			交互の刷毛 底部挽押え	木炭灰	砂粒を多く 含む 褐色
*9	SB-2 カマド	F	+	16.0 —	薄 長	口縁部横ナデ 横網毛	口縁部横ナデ 横刷毛		砂粒を含む 褐色 良
第161回	SB-3 床面直上	+	+	32.0 —	肥 厚	+	+		砂粒を含む 褐色 良
*3	*	+	壺	14.0 —	薄 長	横ナデ	横ナデ		砂粒を含む 褐色
*4	*		环		隆 玉 縫	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引		鐵 褐 密色好
*5	*	*	*	14.0 2.0 6.0	—	+	ロクロ水引 底部回転ナデ		鐵 褐 密色好
*6	*	*	*	12.0 —	—	+	ロクロ水引		鐵 褐 密色好
*7	*	*	*	12.6 4.0 6.0	—	+	+		*
*8	*	*	*	— 6.0		横位回転窓附	花卉状暗文		*
9	*	土師	环	12.5 4.7 5.7	玉 縫	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引	赤 切 窓 附	砂粒を含む 茶色 良
*10	*	*	*	14.0 —	丸 形	+	+		鐵 褐 密色好
第1711回	*	須恵	壺	— —		格子叩き、スリケ シ	豊押え		鐵 褐 色好
*12	SB-3 カマド	土師	+	— 8.0		斜位刷毛	横刷毛		砂粒を含む 褐色 良
*13	SB-3 床面直上	須恵	+	30.0 —	折り返し	ロクロ水引	ロクロ水引		鐵 褐 密色好
第201回	SB-5 床面直上	土師	+	36.0 —	隆 肥 厚	口縁部横ナデ 刷毛網毛	口縁部横ナデ		砂粒を含む 褐色 良
*2	*	*	壺	16.0 —	丸 形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位回転 窓附	ロクロ水引		*
*3	*	*	*	14.4 3.1 6.6	尖 形	+	+		鐵 褐 良
*4	*	*	*	14.4 3.6 7.2	隆 玉 縫	+	+		鐵 褐 良
*5	*	*	*	14.0 2.7 5.0	丸 形	+	+		鐵 褐 良
*6	*	*	环	13.0 2.7 4.3	隆 玉 縫	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	+		砂粒を含む 褐色 良

標	出	種	器	形	法口径 底面 高さ (cm)	調				胎 土 色 調 燒 成	備 考
						内	外	面	底		
第207 回	SB—5 床面直上	土師	环	14.0 2.8 4.5	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓削	ロクロ水引			砂粒を含む 褐色良 色好	
*8	*	*	*	12.0 4.0 3.2	*	*	*	*		砂粒を含む 褐色良 色好	
*9	*	*	*	14.0 3.0 5.5	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下横斜位窓削	*	*		砂粒を含む 褐色良 色好	
*10	—	括	*	12.0 —	尖形	ロクロ水引	*			砂粒を含む 褐色良 色好	
*11	SB—5	土師	环	14.0 4.5 5.0	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓削		赤切 窓削		砂粒を含む 褐色良 色好	
*12	SB—5 床面直上 括	*	*	— 6.0	横ナデ 斜位窓削					砂粒を含む 茶褐色 色好	
*13	SB—5	*	盤	— 9.0		横刷毛	横刷毛 底部窓削	木葉痕	赤褐色 色好		
*14	SB—5 床面直上 括	瓦質	挖り体	— 14.0					柔軟が3 木	外白 褐色、内灰 色、良 好	
*15	SB—5 覆	土	环	16.0 —	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半横斜位窓削	ロクロ水引			わずかに砂 質を含む 褐色良 色好	
*16	SB—5	*	甕	— 10.0			斜位刷毛			砂粒を多く 含む 茶褐色内黑 色良	
*17	SB—5 覆	土	高台付 环	— 6.0		ナデ	ナデ			致灰良 密色好	
*18	SB—5 床面直上	灰陶	环	14.0 —		黄灰色	黄灰色			致白良 密色好	
第211 回	SB—6 床面直上	土師	壺	30.0 —	肥厚	口縁部横ナデ 横刷毛				砂粒を含む 褐色良 色好	
*2	*	*	羽釜	27.0 —		横刷毛 ↓ 横ナデ	ナデ 横刷毛			砂粒を含む 褐色良 色好	
*3	*	*	环	11.0 4.2 4.0	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓削	ロクロ水引			致白良 密色好	
*4	SB—6	*	甕	— 9.0			横刷毛	木葉痕	致良 褐色 色好		
*5	SB—6 床面直上	*	*	— 8.0		横刷毛	*	*		砂粒を含む 褐色良 色好	
*6	SB—6 床面一括	*	环	22.0 —	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半横斜位窓削	ロクロ水引			致白良 密色好	
*7	*	*	*	14.0 —	玉縁	*	*			致良 褐色 色好	
*8	SB—6	土師	环	14.0 5.1 5.0		口縁部ロクロ水引 器体下半横斜位窓削	ロクロ水引			わずかに砂 粒混 褐色良 色好	

器 種 類	出 土 場 所	器 形	計 量 目 名 称 及 量	調 整				動 土 周 囲 境 成	備 考
				口 線	外 面	内 面	底		
第 219 回	S B — 6	環	27.0 —	折り返し	ロクロ水引	ロクロ水引		堅赤良	褐色好
第 231 回	S B — 7 床面直上	土師	壺	—	粗刷毛	横刷毛	木葉模	砂粒を多く含む褐色	
× 2	S B — 7 床面直上	土師	壺	17.0 —	肥厚	口縁部ナデ 脚部横刷毛	横刷毛		砂粒を含む褐色好
× 3	S B — 7 土	土	壺	— 8.0	—	粗刷毛	斜位窓附		砂粒を多く含む褐色好
× 4	S B — 7 床面直上	土師	壺	14.0 4.2 8.0	尖 形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引	赤 ↓ 黄 素	砂粒を含む褐色好
× 5	S B — 7 土	土	壺	22.0 —	肥 厚	口縁部横ナデ 横刷毛	口縁部横ナデ 斜位刷毛		砂粒を多く含む褐色
× 6	—	須恵	—	— 10.0	—	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		褐色好
第 251 回	8号カマド	土師	羽 盆	34.0 —	—	粗刷毛 横ナデ	ナデ 斜位刷毛		小石を含む褐色好
× 2	—	—	壺	34.6 —	階 肥厚	—	—		褐色好
× 3	—	—	—	30.0 —	肥 厚	口縁部横ナデ 脚部斜位刷毛	横刷毛		合青母・砂 粒を含む褐色好
× 4	—	—	壺	— 5.0	—	器体下半斜位窓附		赤 ↓ 黄 素	砂粒を含む褐色好
第 271 回	9号カマド	—	壺	30.6 —	肥 厚	口縁部横刷毛 脚部横刷毛	口縁部横ハケ 斜位刷毛		わずかに砂 粒を含む褐色好
× 2	—	—	壺	17.0 5.0 6.0	玉 縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引	赤 ↓ 黄 素	褐色好
× 3	—	—	壺	12.0 2.8 —	階 玉 縁	—	—		褐色好
× 4	9号カマド括	土師	壺	12.0 —	玉 縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引		褐色好
第 281 回	10号カマド	—	壺	30.0 —	肥 厚	口縁部横ナデ 脚部横刷毛	横刷毛		砂粒を含む褐色好
× 2	—	—	壺	10.0 —	玉 縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引		褐色好
× 3	—	—	—	— 5.0	—	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	—	赤 ↓ 黄 素	褐色好
第 291 回	11号カマド	—	鉢	41.0 —	肥 厚	荒磨き	横刷毛 粗刷毛		相黒良 い色好
× 2	—	—	羽 笠	— —	—	横ナデ 粗刷毛	横刷毛		小石を含む褐色好

番号	出土地点	種類	器形	法(口面 底面 側面)	調査				土色 焼成	備考
					口縁	外 面	内 面	底		
第311 回	11号カマド	土器	甕	30.6 —	肥 厚	口縁部横ナデ 底刷毛	横刷毛		砂粒を含む 褐色良	
*2	*	*	杯	15.0 4.7 7.0	丸 形	口縁部ロクロ水引 器体下半横位回転 窓附	ロクロ水引	回転糸切 窓削	黒褐色良	密色好 内黑
*3	*	*	*	12.0 4.3 5.0	隆 玉 線	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	*	回転糸切 窓削	黒褐色良	密色好
*4	*	*	*	12.0 3.1 4.5	*	*	*	回転糸切 窓削	黒褐色良	密色好
第321 回	2号埋石遺 構造 土	陶器	壺	— — —		ロクロ水引	ロクロ水引		黒灰良	密色好
*2	*	*	壺	16.0 — —		*	*		黒白良	密色好
*3	*	土器	杯	13.0 2.8 4.2	隆 玉 線	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	*		黒褐色良	密色好
*4	*	*	壺	11.0 2.3 4.6	*	器体下半横位回転 窓附	*	ホ 切 窓削	黒褐色良	密色好
*5	*	*	壺	20.0 — —		横ナデ	横ナデ		黒褐色良	密色好
*6	2号埋石遺 構造 陶器	甕	甕	— 13.0		灰緑色の點			黒灰良	密色好
第331 回	1号配石	土器	*	— — 9.2		横刷毛	斜位刷毛	木葉痕	砂粒を含む 褐色良	密色好
*2	1号配石 括	*	杯	15.0 4.7 6.0	隆 玉 線	ロクロ水引	ロクロ水引	窓削	黒褐色良	密色好
*3	*	*	高台付 杯	— — 7.0		回転横ナデ	横ナデ		砂粒を含む 褐色良	密色好
第351 回	2号配石	*	杯	12 3.5 4.0	隆 玉 線	口縁部ロクロ水引 器体下半横位回転 窓附	ロクロ水引 底部回転ナデ	回転糸切 窓削	黒灰良	い色好
*2	*	*	*	14.0 4.5 5.0	丸 形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引	窓削	砂粒を含む 褐色良	密色好
第381 回	7号配石	*	*	11.0 4.0 6.0	*	口縁部ロクロ水引 器体下半横位回転 窓附	ロクロ水引 放射状暗文	ホ 切 窓削	黒褐色良	密色好
*2	*	*	*	11.0 4.5 6.0	*	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引 花卉状暗文	ホ 切 窓削	黒褐色良	密色好
*3	*	*	*	11.0 4.8 5.0	*	*	花卉状暗文 放射状暗文	ホ 切 窓削	黒褐色良	密色好
*4	*	*	*	12 4.7 4.0	*	*	ロクロ水引	ホ 切 窓削	黒灰良	密色好
*5	*	*	*	12.0 — —	*	*	ロクロ水引 放射状暗文		黒褐色良	密色好

番号	出土 地點	種 類	器 形	土口法 則	測 量				胎 土 燒 成	備 考
					口 縫	外 面	内 面	底		
第36 回	7号配石	土師	环	12.0 3.5 6.4	丸 形	口縫部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引		磁 白良 褐色 密色好	
#7	ク	ク	蓋	— —		ナデ	ナデ		磁 白良 褐色 密色好	つまみ 部に深 付窓
第40 回	1号列石	ク	壺	— 8.0			横刷毛	木製痕	砂粒を含む 褐色 良	砂粒を含む 茶褐色 好
第44 回	4号列石	ク	ク	— 8.0		横刷毛	ク	ク	砂粒を含む 茶褐色 好	砂粒を含む 茶褐色 好
第45 回	2・7号配 石付近	ク	壺	38.0 —	薄 長	横ナデ 横刷毛	横刷毛		砂粒を含む 茶褐色 好	砂粒を含む 茶褐色 好
#2	ク	ク	ク	32.0 —	ク	横ナデ	横ナデ		赤 褐色 好	
#3	ク	ク	环	14.0 4.3 6.3	隆 玉 縁	口縫部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引		磁 白良 褐色 密色好	内黒
#4	ク	ク	ク	10.0 4.5 5.0	丸 形	ロクロ水引 回転窓附	放射状暗文	窓附	褐 良	褐色 好
#5	ク	ク	ク	— — 6.0		器体下半新位置附	花卉状暗文	糸 切 窓 附	磁 赤良 褐色 密色好	
#6	ク	ク	ク	11.0 4.5 5.4	丸 形	口縫部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引	糸 切 窓 附	磁 白良 褐色 密色好	灯明皿
#7	ク	ク	ク	12.0 —	ク	ク	ク		磁 白良 褐色 密色好	
#8	2・7号配 石付近	ク	ク	12.0 —	ク	ク	ク		磁 白良 褐色 密色好	
#9	2・7号配 石付近	ク	环	11.0 2.2 5.0	隆 玉 縁	口縫部ロクロ水引 器体下半横位回転 窓附	ク		磁 茶良 褐色 密色好	
#10	ク	ク	环	9.0 3.0 5.0	丸 形	窓附		糸 切 窓 附	砂粒を含む 茶褐色 好	
#11	ク	ク	ク	9.0 2.5 4.0	ク	ク	回転ナデ	糸 切 窓 附	砂粒を含む 茶褐色 好	
#12	ク	ク	動輪車							
#13	ク	ク	皿	12.0 2.5 4.4	隆 玉 縁	口縫部ロクロ水引 器体下半横位回転 窓附	ロクロ水引 回転窓附	糸 切 窓 附	磁 赤良 褐色 密色好	
#14	ク	領惠	蓋	— — 14.0		ロクロ水引	ロクロ水引		磁 白良 褐色 密色好	
#15	ク	土師	手 橋	3.2 3.8 3.2		窓附			砂粒を含む 茶褐色 好	
#16	ク	ク	壺	— — 10.0		横刷毛 窓附	窓附	木製痕	砂粒を含む 茶褐色 好	

標本番号	出土地點	種類	器形	出入口(底面)	調 整				胎土 色調 焼成	備考
					口 線	外 面	内 面	底		
第451 件	2, 7号配石 近	土師	壺	24.0 — —	薄 長	口縁部横ナデ 縱刷毛	横刷毛 ナデ		砂粒を含む 赤褐色 良	
第461 件	4 グリッド	C	+	トト	30.0 — —	肥 厚	口縁部ナデ 縱刷毛 斜押え	口縁部ナデ 斜位刷毛	砂粒を含む 赤褐色 良	
* 2	*	*	*	20.0 — —	*	口縁部ナデ 縱刷毛	*		粗面 褐	い 色好
* 3	*	*	环	12.8 — —	王 瓶	口縁部クロ水引 器体下半横位回転 露附	ロクロ水引		粗面 良	密色好
* 4	*	*	*	12.0 2.2 2.4	略 玉 瓶	口縁部クロ水引 器体下半斜位露附	*		粗面 良	密色好
* 5	*	*	*	11.0 4.8 5.0	王 瓶	*	ロクロ水引 放射状露文		砂粒を含む 赤褐色 良	
* 6	*	*	*	12.0 4.0 5.3	尖 形	ロクロ水引	ロクロ水引	赤 ↓ 白 削 削	粗面 褐	密色好
* 7	4 C グリッ ド 2 層		*	— 5.0		ロクロ水引 斜位露附	ロクロ水引 回転ナデ	*	粗面 褐	密色好
* 8	*	*	*	— 5.6		横位回転露附	*	赤 ↓ 白 削 削	粗面 褐	密色好
* 9	4 C グリッ ド — 括	灰釉 陶器	*	— 6.0		茶緑色釉			粗面 良	密色好
* 10	4 C グリッド	須恵	壺	42.0 — —	折り返し	ロクロ水引 口縁部に2条の波 状文あり	ロクロ水引		砂粒を含む 灰褐色 良	
* 11	4 C グリッド F 2 層	灰釉 陶器	*	— 9.0		淡緑色釉	淡緑色釉		粗面 良	白 密色好
* 12	4 C グリッド 1 層	灰釉 陶器	長頸壺	— —		淡緑色釉	淡緑色釉		粗面 良	白 密色好
* 13	5 B グリッド	土師	环	12.0 — —	尖 形	ロクロ水引	ロクロ水引		粗面 良	白 密色好
* 14	6 A グリッド	須恵		— 8.0		回転ナデ	回転ナデ		粗面 良	白 密色好
* 15	1号列石南	瓦質	体	24.0 — —		側部に沈線あり			粉白 良	い 色好
第471 件	1 列石付 近	*	すり鉢	40.0 — 20.0					砂粒を含む 黄褐色 良	
* 2	*	*	羽釜	— — —					砂粒を含む 白褐色 良	
* 3	*	*	*	26.0 — —		横ナデ			粉白 良	い 色好
* 4	6 A グリッド	*	*	29.0 —		回転ナデ	回転ナデ		粗面 良	い 色好

井筒番号	出土場所	種類	器形	調査				胎色	土色	調査成	備考
				口縁	外面	内面	底				
第475 回	6B グリッド	土師	壺	28.0 — —	肥厚	横ナデ 横刷毛	横ナデ 横刷毛		砂粒を含む 褐色	褐色 良好	
第481 回	9号埋石堀 状直構	須恵	壺	— — —		ロクロ水引 平手印き	ロクロ水引 円弧印き		砂粒を含む 褐色	褐色 良好	
*2	*	土師	*	18.0 — —	薄長	横ナデ	横ナデ		砂粒を含む 赤褐色	褐色 良好	
*3	*	*	壺	13.0 05.0 8.0	丸形	ロクロ水引	ロクロ水引 花弁状暗文		砂粒を含む 褐色	褐色 良好	

## 第5章 まとめ

石橋条里製造構第Ⅱ地点には、東西約90m、南北約180mの埋石堀状遺構に囲まれた範囲に住居址7基をはじめ、数基の配石遺構や特殊な埋石遺構などがある。遺物は国分期終末の土師器とこれに時期的に続く土師質土器が若干あり、本県では未だ編年が試みられていない瓦質土器もある。また土師器と瓦質土器の中間的な質を有する土器や須恵器と瓦質土器の中間的な質を有するものもある。これらは土師器の編年では11世紀前半にあたるが、今後瓦質土器の編年がなされ、解決されるべき問題も内包している。

この遺跡は埋石堀状遺構で囲まれたまとまりのある特殊な小地域社会的な生活空間であったように考えられる。

# 図 版



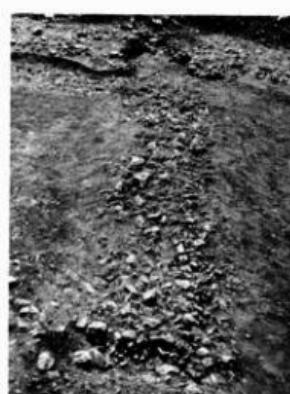
石橋條里製造構第Ⅱ地點全景



8号塊狀埋石遺構



9号塊狀埋石遺構



11号塊狀埋石遺構



1号、4号住居址



2号住居址



3号、6号住居址



5号住居址



2号埋石遺構



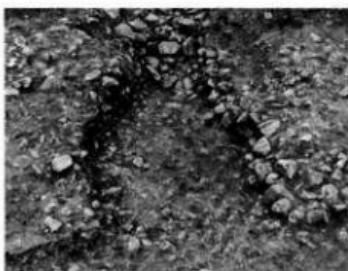
2号埋石遺構断面



7號住居址



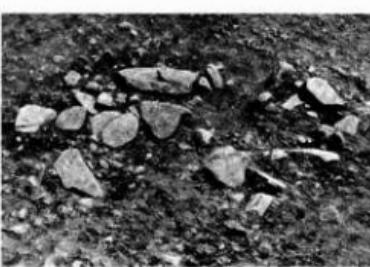
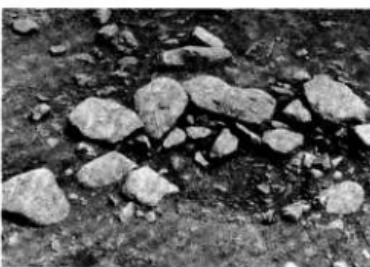
2號列石



3號列石

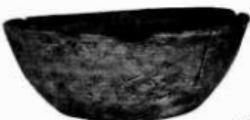


4號列石





1 (4)



2 (3)



3



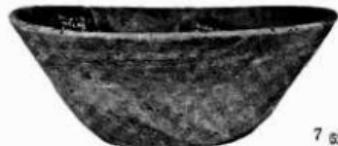
4 (4)



5



6  
(6)



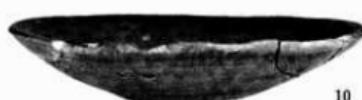
7  
(5)



8  
(4)



9  
(6)



10  
(6)

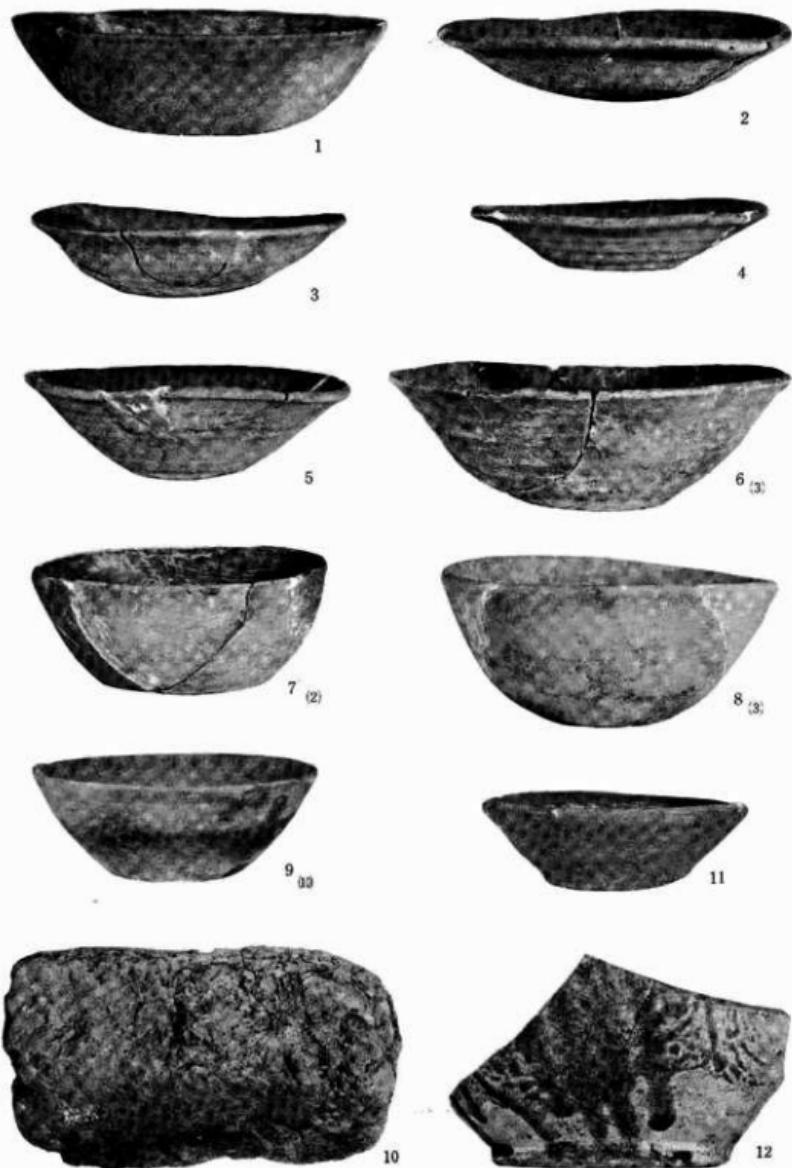


11  
(6)

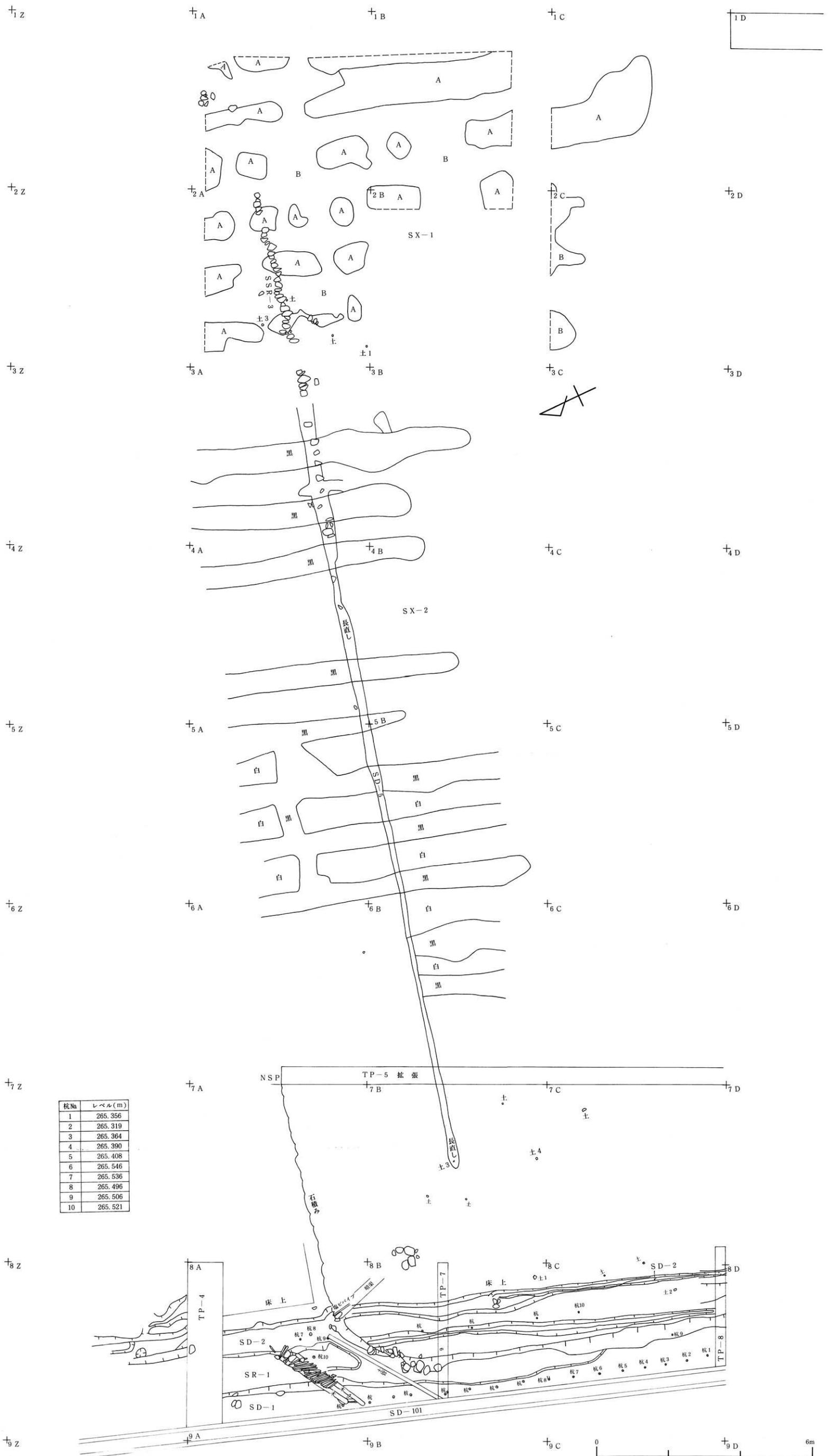


12  
(6)

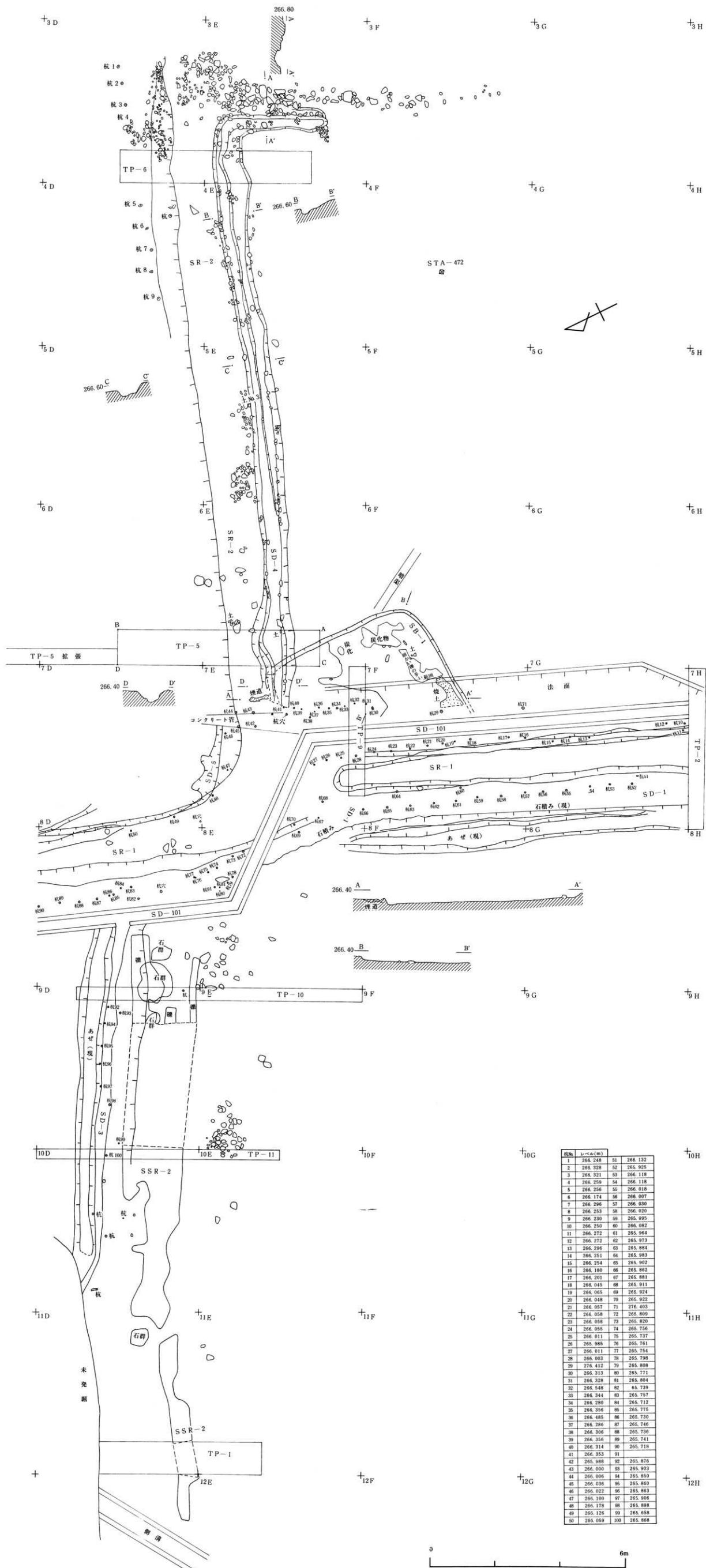
1号 (1~2) • 2号 (3~5) • 3号 (6~7) • 5号 (8~12)



7号住居址(1)・9号カマド(2)・11号カマド(3)・2号埋石(4・10)・2号配石(5)・7号配石(6~9)・3Bグリッド(11)・4Cグリッド(12)



第1図 石橋条里制遺構第3地点遺構実測図



## 第2図 石橋条里制遣構第3地点遣構実測図

### 3. 石橋条里制遺構第III地点

#### 第1章 遺跡の位置と環境

##### 第1節 位 置

石橋条里制遺構第III地点の所在地は、東八代郡境川村石橋字尺田1012番地と久保田950番地にあって、中央道中心杭S・T・A №472にある。東経138度37分09秒、北緯35度35分52秒の位置である。

相対的位置は、甲府盆地東部にある。境川扇状地扇端にあって、狐川が北150mに西流している。ここから南400mに石橋条里制遺構第II地点がある。

西550mに条里制遺構名に起源があるといわれる境川村大坪部落があり、南300mに石橋部落がある。

なお詳しく述べは序章及び石橋条里制遺構第I地点第1章第1節位置を参照されたい。

##### 第2節 環 境

###### イ、自然環境

第III地点は甲府盆地東部にあるが、東部については、石橋条里制遺構第I地点第1章第2節イ自然環境の項に記した通りである。

発掘地点付近の微地形は次の通りである。発掘地点は境川扇状地の扇端にあって、扇頂に向って中央より左に位置する。勾配は1,000分の22.5（傾斜角1.3度）で、土地は北西に傾斜していて、標高は267mである。

条里制遺構の調査報告があるので、特に水利について解説を加えておくこととする。

傾斜方向を言いかえると、直角方向の道路（条線=東西線）を、等高線は扇頂に対して、右側が上るように斜めに横切るわけである（序章第1図参照）。斜めに横切る角度は約15度である。水流は必然的に左扇端に向って流れることになり、堰（灌漑用水路）の水利大系もこの方向になっている。

また湧泉は至る所にあり、地下水も多い。地域の人達は序章第2図に示した、中央道路線下にある溜池と、その南側一帯は、旱魃で湧水が涸竭することはないという。

第III地点の北には狐川が150mの所を、さらに北200mの所を浅川が流れ、北西300mで合流している。現地形では、発掘地点は境川、狐川、浅川各扇状地の逢合線に近い場所にある。地表面では境川の供給物であろうが、深い層では、狐川や浅川の供給物であろうとも言える。

###### ロ、歴史的環境

大宝元年（702）大宝律令を施行し、律令を諸国に頒布、度量衡を定め籍帳を整備して、班田収授法は確立されたと一般的に考えられている。

条里制遺構とは班田収授法によって、水田（口分田）を、一町四方に区画整理し、一筆毎

に面積を定めた遺構をいうことは周知の通りであるが、本県の場合、畿内と同じような方法で行なわれたかどうか、またその時期についても、今まで明らかにされたものはなかったといつてよい。

長野県更埴市で行なわれた調査で明らかにされたように、9世紀から11世紀に整備された条里制遺構が、鎌倉時代以後に施かれた条里制の下に埋没していた例もある。（『更埴市条里遺構の研究』長野県教育委員会・昭43）

このような例もあって、甲府盆地でも、条里制遺構の分布を、確実に線引きすることは現状ではまず不可能といってよい。

しかし、今まで先学諸氏が研究されてきた成果を土台として、嶺東地方（甲府盆地東部）における市町村の地図10,000分の1等や航空写真によって、おおよその分布を調べてみた。

これを、南西の方向から、個所数と面積だけ順次掲げるところのようである。

中道町2、境川村1、境川村・八代町にまたがって1、御坂町1、一宮町4、山梨市2、の合計11ヶ所である。この総面積は約10,799.800m<sup>2</sup> (10,909反) である。

甲斐国の中府所在地は、二転し3ヶ所にあったことが通説になっている。すなわち、第1は甲府盆地北東の春日居町国府、第2は盆地東部の一宮町国分付近、第3は同じく東部の御坂町国衙といわれている。ここに見られる条坊線の南北線は、真北から2°西に偏向しているという。（『史蹟名勝天然記念物調査報告』第8輯、山梨県、昭10）

条里線が敷かれていらない地域には、前述した国府推定地と、条里制施行時に既に集落があったと考えられる地域がある。例を上げて少し詳しく説明して、甲府盆地における条里制遺構が成立した過程を理解するための資料として提供しておきたい。

まず、第二移転地といわれる一宮町国分付近である。ここは金川と御手洗川に挟まれた扇状地である。国分寺があった国分集落、国分尼寺があった東原集落、国学址があったといわれる覺堂集落など遺構が残っているものを含む多くの遺跡がある。これらを中心として北東約2,000m、北東約3,500mにわたって、条里制遺構がほとんど見られないものである。時期的に考えても、ここにはこれらの遺構と集落があったので、条里制が敷けなかつたのではないかと考えられるのである。

平安時代の土師器の分布圏は著しく大きく、しかも濃密になってくる。昭和56年までには、この地域で平安時代遺跡の発掘が数ヶ所行なわれていて、多くの成果を上げ、これらの事を裏づけている。

次に、既に集落があったため、条里制が施行されなかつた地域の例として、八代町増田集落をあげてみよう。

増田集落は、境川村と八代町に続いている条里制遺構の中にある。この集落の中を通る道は不規則になっていて、周囲にある条里制の道に続いている。集落の中には弥生時代終末の遺物出土土地や散布地が4～5ヶ所あり、古墳時代のものとしては八幡さん古墳がある（『八代町誌』、八代町、昭50）。奈良・平安時代の遺跡、遺物散布地はまだ発見されていないが、

後の集落の歴史を考えると、奈良・平安時代にも引続いて集落があったものと思われる。また集落がある地帯は自然堤防状に周囲より、比高2~3m位高くなっているので、集落が引続いてあったことは確かであろう。

集落の中の道が不規則になっているのは、条里制の道が敷けなかつたため、既に使用されていた道が、そのまま残ったためかもしれない。

増田集落の南側に広がる条里制遺構の中を、東から西に向って、浅川とその支流である孤川が流れている。この両岸地域では、条里制の道が乱れている。その河道変遷史（前掲『八代町誌』）をみると、現在の河床は、条里制施行以後に移ったと考えられるので、その氾濫の影響によるものと考えられる。

このように、八代町と境川村に広がる条里制遺構は、現状では、地図や航空写真でみると、断絶しているように見えるが、開発当時は、連なっていたものと思われる。

最後に第Ⅲ地点にしほって、その歴史的環境を見てみよう。

石橋条里制遺構で、道路の交差点（四ツ角）の多くは、互にすれていって、筋違いになっている。その理由として、道路上に沿って、流れる用水堰（灌漑用水路）の水を、交差点で分流する際、その配分をスムーズにするためであろうか。扇状地では、その地形によって、水は放射状に流れることになるのであるが、水源が偏っていれば、水流の方向を変えて、水源のない地域へ水を送りなければならないからである。そのためには、用水堰の交点をすらし（筋違いとして）堰の壁にぶつけて水勢を変え、水源のない地域へ水を送りやすくなる。

またこうすれば、交点では、三方向に流れる水は比較的平等に配分しやすいわけである。

また、境川扇状地の水田は水口（入水口）は扇頂方向に開き、尻水口（出水口）は扇端方向につけている。

発掘計画は、道路の交差点をそのポイントとして、道路、水路のあり方、水田の配置を把握しようとした。

水田の明治以後の合筆（長直し）の歴史についてみると、例えば交差点の南東（字尺田）では、明治26年の分間図作製以前に、3筆に分かれている（1筆平均183坪）。交差点の南東（字道光）の1坪（条×里）では、合筆が、明治26年以後今日までに、数か所みられる。この内で最も小さい水田は、その面積が3.4坪である。このように合筆は、恐らく水田が開かれた当時からなされ、順次合併されながら、小面積の水田から大面積の水田へと変ってきたものと考えられる。従って、開田当時の1枚の水田面積は、現在の水田より小さかったことは確かである。

これを分間図によってみると、次のことが観察される。水田の横の区画線（畦畔）は、縦の区画線が屈曲している点から出ているので、横線が出ていない屈曲点から横線を引くと、長直しされて広げられた水田を図上復元出来る。また、扇状地の傾斜に対して、水田は直角方向に長くなっている通りが2~3通りおり、その間に狭い通りがあることである。

これによって、開発当時における1筆ごとの水田の広さがある程度推定出来る。

## 第2章 調査の経過

石橋条里制遺構第Ⅱ地点の発掘は昭和56年3月11日から開始し、同年5月13日に終了した。日曜日と祭日を休み、延2か月間にわたって行なった。

発掘予定面積は2,300m<sup>2</sup>であったが、このうち遺構を検出した範囲は約1,600m<sup>2</sup>であった。発掘しなかったグリッド9・10・11・12～Z・A・B・Cの400m<sup>2</sup>は発掘区内の道路交差点北西にある深い湿地帯で、湧泉があったため、発掘できなかつたものである。

グリッドは条里の方向に合わせて、5m正方形の方眼とし、東から1・2・3～12まで、北からZ（拡張部）・A・B～Hまでとした。中央道の中心杭（STA・472前後）は基準にはしなかつた。

条里制遺構と考えられている現在の道路を、その施行された当時から引続いて現在まで使用されているものと想定して、順次全面を掘り下げた。また道路に接する耕作地は、過去の水田の状況を調査するために、やはり全面を徐々に掘りさげた。なお耕作地は、道路交差点の南東の区域は畑であったが、昭和20年代までは水田であり、北東と南西および北西の区域は現在まで水田であった。

道路と耕作地に、その推移を断面で知るために、トレンチを掘った。

東西の2号道路には、交差点の西に、西から、1号トレンチ、10号トレンチの2か所を、その東に、西から、5号トレンチ、6号トレンチ、3号トレンチを、南北の1号道路には、交差点の南に、南から2号トレンチ、9号トレンチを、その北には、南から8号トレンチ、7号トレンチ、4号トレンチを設定した。

耕作地には5号トレンチを北に延長した。この南は現在の耕作土を除去したところ、自然堆積層になったので延長しなかつた。

主要な遺構と遺物の検出を日を追ってみてみると次のようである。

まず道は、各トレンチに表われた地層のうち、同層序と見られるものを上から掘り進みながらつなげようと試みた。1号道の4号トレンチ各最下層の路面はほぼ同一時期のものと判定出来た。しかしその上層から現在に至るまでの層位では、4号トレンチを除いて、ほとんど、明確な路面はなく層序も不一致であった。この間の層は堅く踏み固められていたので、道路敷設時から引続いて、現在まで交通があったものと推定出来る。したがって平面上から道路を追っても、路面・路側は時代順に確定出来るものではなかった。図面上に線で表わした路側は、やゝそれらしく平面上と断面に表われたものである。これによると古くなる程度は狹くなっている。遺物は昭和・大正・明治・江戸時代・中世の陶磁器等や下層ではわずかであるが、国分式土師器も出土した。

つぎに道路に沿って掘られた灌漑用水路は道路の発掘と併行して進めた。結局、道路の場

合と同じように、昭和40年代に造られたコンクリート側溝と4号溝以外の水路の、その掘られた年代を明らかにすることは困難であった。4号溝は4月9日頃、現在は水路のない2号道路の南に沿って検出された。これは4月15日に出土した銭貨（熙寧元寶）により、また1号住居址との切合関係から、鎌倉時代か平安時代後期にその掘られた時期が遡るものと考えられる。

1号住居址は4月24日に、道の交差点で発見された。後代につくられた水路や道路で著しく破壊されていたが、明らかに竪穴式住居址であった。水田と重複している部分が比較的よく残されていて、その掘込面は最下層の水田床土と道路面より下にあった。遺物は11世紀後半から12世紀前半に比定出来る土器破片が1片出土しただけであるが、これによって、この場所での条里制道路施行の時期を決定出来た。この石橋条里制遺構の条里型地割は水田開発が行なわれるに従って出来たとも考えられ、1号住居址は道の延長上に偶然にもあったために、立ち退きをされたものと推定出来る。

その他に、5月に入ってから、A～1・2・3グリッドで中世頃のものと思われる性格不明の列石を1条検出した。これに重複して、A・B・C～1・2・3・4・5・6グリッドで、降雨の後に島状と筋状に乾くのが遅い部分があることがわかったが、その性格、時期も明らかに出来なかった。

### 第3章 層序

層序については第1節と第2節とに分けて説明する。

第1節は境川扇状地における地層の堆積状況と土地の含水比とをリモートセンシングによつて調査した結果である。これは日本道路公团が東日本航空株式会社に委託して調査されたものである。内容に若干推定の域を出ない所もあるが、そのまま掲載した。

なお、この調査箇所は、当該発掘調査箇所より南西約200m（中央道中心杭N470）から400m（同N468）付近までの間のもので、現状では条里制の道路ではなく、乱れている場所のものである。

第2節は発掘箇所の層序であつて、条里制遺構が中央道敷地内では最もよく現われている場所であった。遺構包含層は扇状地特有な不整合な地層である上に、道が敷設された当時から現在まで引続いて交通に供されてきたので、層序的に分けること自体に無理があるが、遺構に包含された遺物は少量であったが、平安時代中期の国分期の土器から中世・近世を経て現在までの陶磁器類が下層から上層まで出土した。

条里制遺構の場合は特に、遺構と層序とは切離すことが出来ないので、第4章で道・灌漑用水路（堀）・水田・住居址・列石などの遺構と、土器・陶磁器・杭などの遺物とともに説明する。

## 第1節 リモート・センシングによる石橋条里製造構に関する報告書

当該発掘箇所より200m～400mの間で行った調査報告である。石橋条里製造構には直接的な資料ではないが、参考として載せておく。（第22図～第26図）

### 第2節 調査地区の層序

トレンチを道路に対して直角に11本入れその層序によって使用の変遷を明らかにしようと試みた。また5号トレンチは水田の中に延長し、その構築状況や長直し等が行なわれたかどうかをつかもうとした。

道路に設定したトレンチで判明した概略は次の通りである。

遺構の包含層では、すべてのトレンチに共通する基準地層はないが、道の交差点で東西南北に別れた四方の道（4本）には、それぞれI層、又はII層の類似した地層があった。このような状況であったので、地層番号は共通番号とせず、各トレンチ毎に付した。

遺構包含層より下層はすべて氾濫層で、主に砂礫層となっていた。その状態は深く掘った1号と2号トレンチ地層図に示した通りである。

以下詳細については第4章遺構と遺物の項で併せて説明することとする。

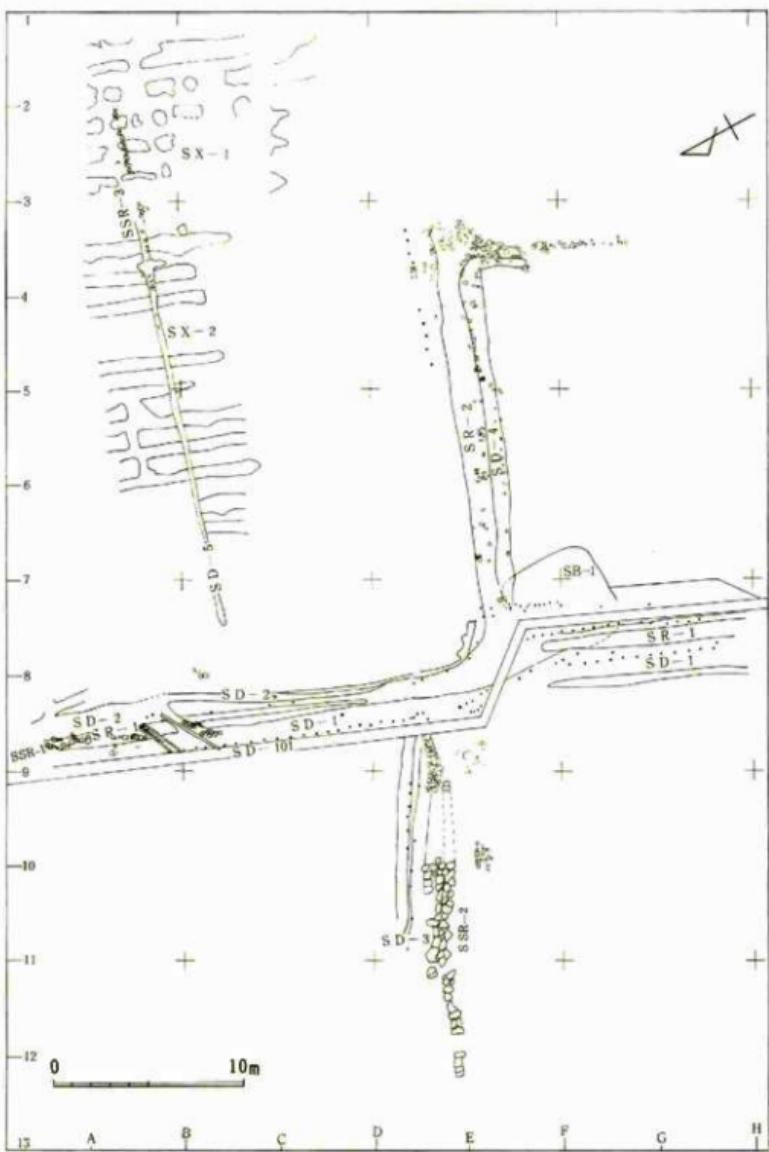
## 第4章 遺構と遺物

先ず、発掘する前、及び明治26年12月に作製された分間図に現われた道、灌漑用水路・耕地等について説明しておこう（第3図全体測量図・第4図分間図参照。）

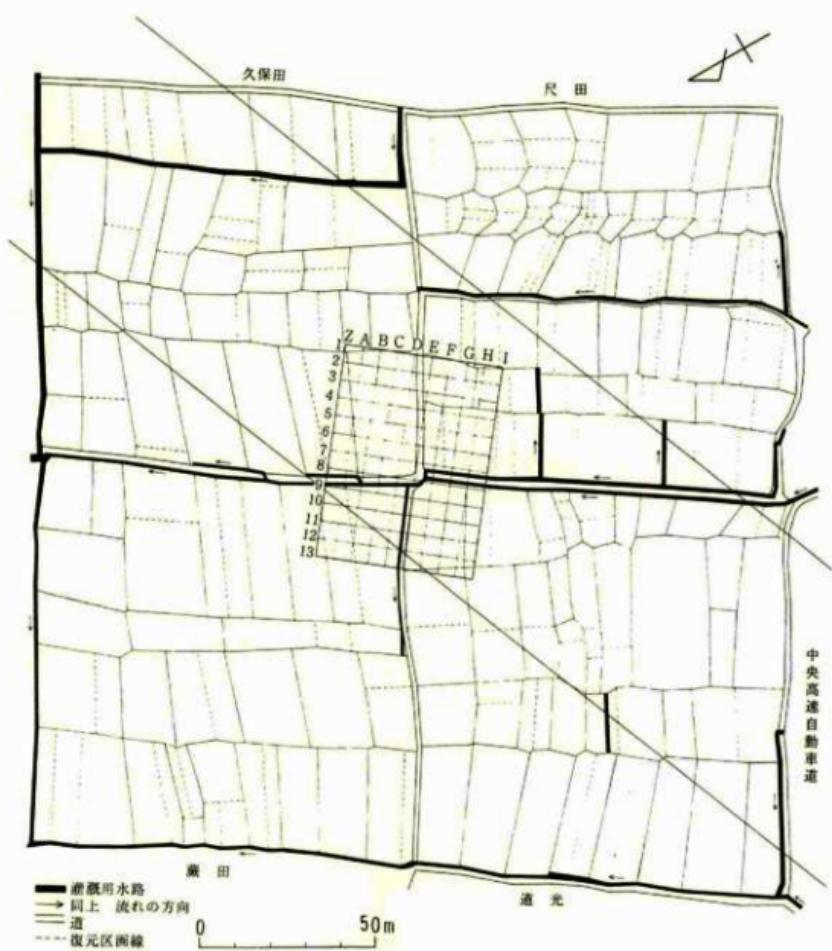
石橋条里製造構第Ⅱ地点の道は北-13.4°一西で、本県で条里製造構の道といわれているもの北-10°一西（『史蹟名勝天然記念物調査報告』第8輯、昭和10年山梨県、広瀬無声）と方位はやう違っている。道の交差点において、南北の道、東西の道はそれぞれ筋違いとなっていることも、本県でよくみられるものと同じである。分間図でも、この状態は同じである。

道に添って敷設されたこの付近の灌漑用水路の水系は南を上流としている。所々で分流させて水田に引込んでいるが、発掘前の地目は小字蕨田1172番地の水田を除いては、桑園であり、さらにこの周囲も畠となっていたので、灌漑用水はあまり必要でなくなっていた。分間図では条里製造構のある地域内はほとんどすべてが水田である。この時点から灌漑用水路はほとんど変更されていない。分間図では水路の多くは道に沿っており、分水路を設けていない。1筆毎の水田に灌漑するには順次上方の水田から水を落したものであり（オサビキ）、この方法は現在でも行なわれており、伝統的方法であろう。

耕地は明治26年（1893）から昭和56年（1981）の88年間に小字尺田1,073と1,083が、小字道光1,129と1,132と1,131とが合算されている。水田を合わせて大きくするために長直しをしたものである。



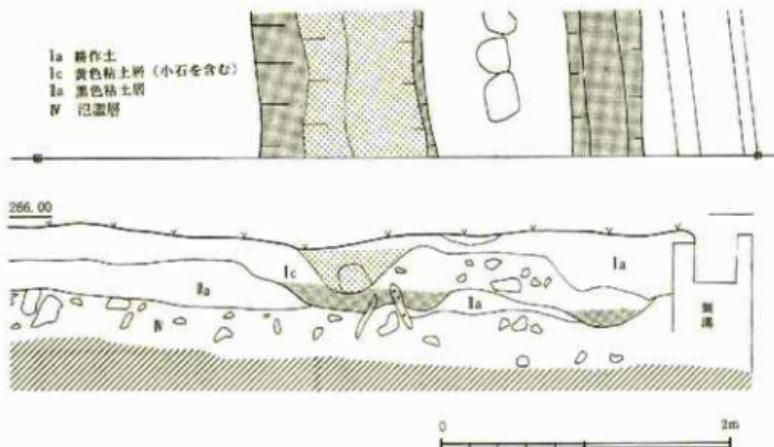
第3図 石橋条里遺構第II地点遺構全体図 (1:300)



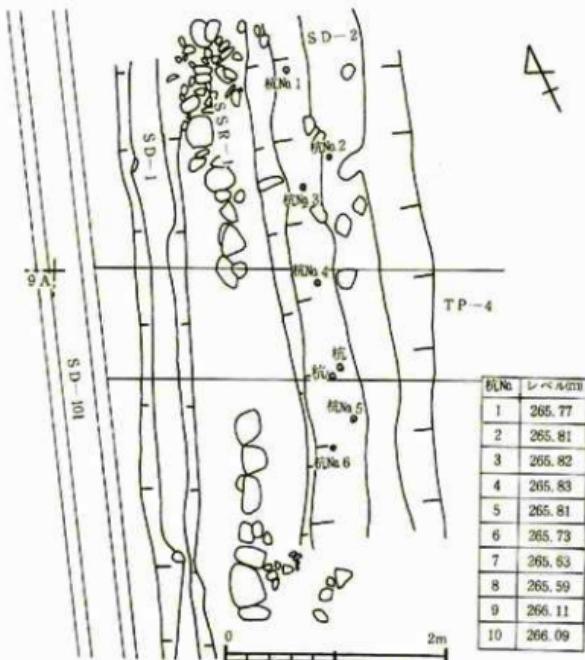
第4図 分 間 図(古水田復元)

#### 道と灌漑用水路・杭列

1号道(南北)、北から4・7・8・9・2の5本のトレンチを道に直交して設定し、平面とセクションを合せながら道を使用した経過をみた。しかし前述したように、路面や路側等を明確に判別し難く、各トレンチを連続することはかなり困難であった。



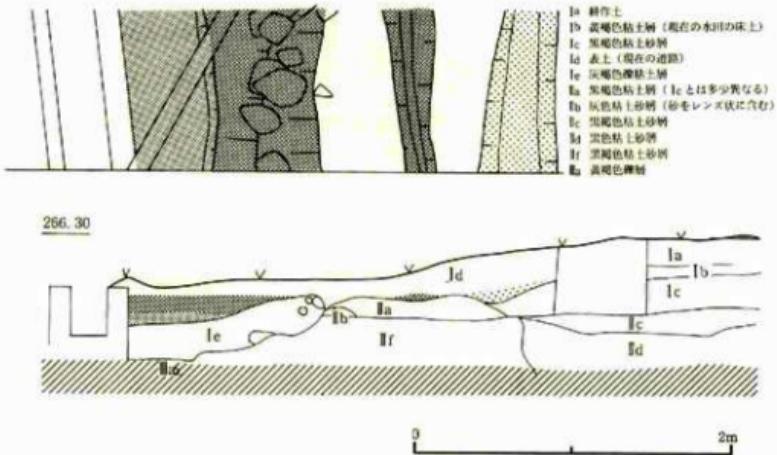
第5図 4号トレンチ平面図及び地層図(1:40)



第6図 4号トレンチ付近実測図(1:50)

スクリーントーンを使用した図は、平面と地層の関係を示したものである。

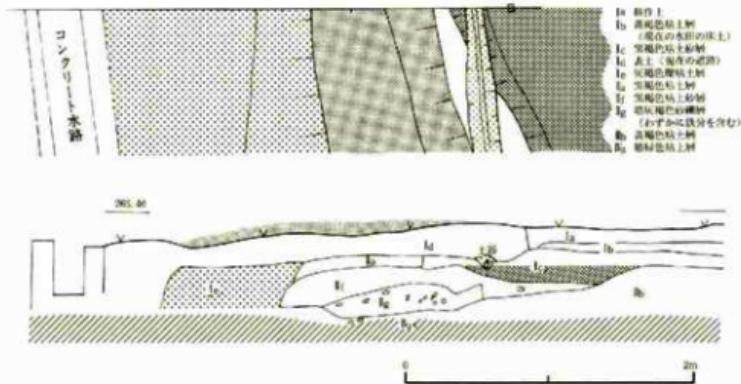
**4号トレンチ** 両側の壁の地層がほぼ合っていて、最下層のⅣ層は砾を含む氾濫層であった。その上層のⅢa層（現在の道の下）の上が最古の道となっていて、西側には土留用の列石があった。列石の長さは約8.5mあるが、1部は後世に敷設された暗渠によって破壊され、トレンチの部分は不用意に取り除いてしまった。道の幅はトレンチの南面では約50cmと狭く、北面では約1mである。Ⅲa層の両側は灌漑用水路があり、低くなっている、底にはわずかに砂の堆積層があった。東側の水路は約1mと広いが、西側の水路は約60cmである。東側の水路の中には9本の丸太杭が残っていて、偶然に4号トレンチの南面で検出した。これは水路の中に入り、最古の路面よりやう上に出ているので、その後に打ち込んだものであろうが、それ程新しくもないと考えられる。この杭は道の土留用に打ち込んだものであると思われるが、これに対応する路側は検出出来なかった。道の西側で検出された最古の水路の西側には現代のコンクリート堰が構築されていた。東側では水路は完全に埋没して、その形跡はほとんどなかった。Ⅲa層の上部には砾を含むⅢc層があり、その上が路面となっていて、幅は南側面で約60cm、北側面では約1mである。この時点でも両側には水路があり、その幅も前者と同様東側が広くなっている。さらにこの上が現在の道となっており、幅2.2mである。ここでみられた最古の道の直上からは11世紀頃の国分式土器片が出土している。上部の路面を使用した時期は明確に出来なかったが、中世から近世、近代までの染付等が出土しており、水路からもこれらが出土している。



第7図 7号トレンチ平面図及び地層図(1:40)

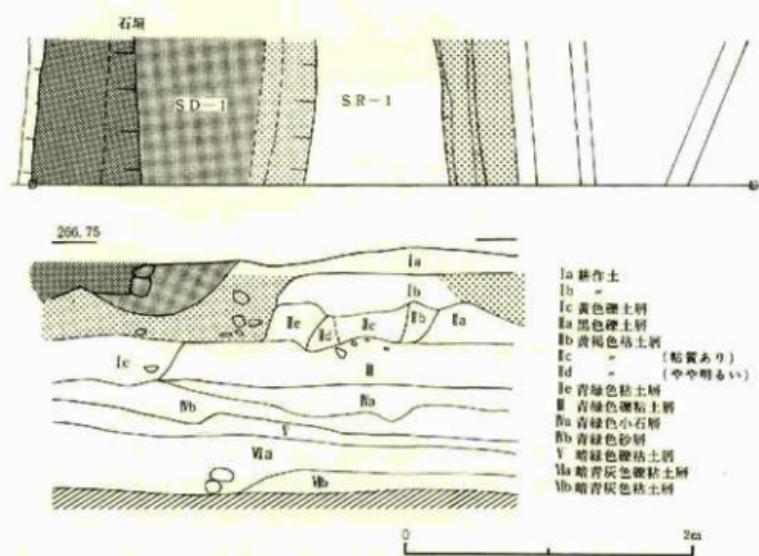
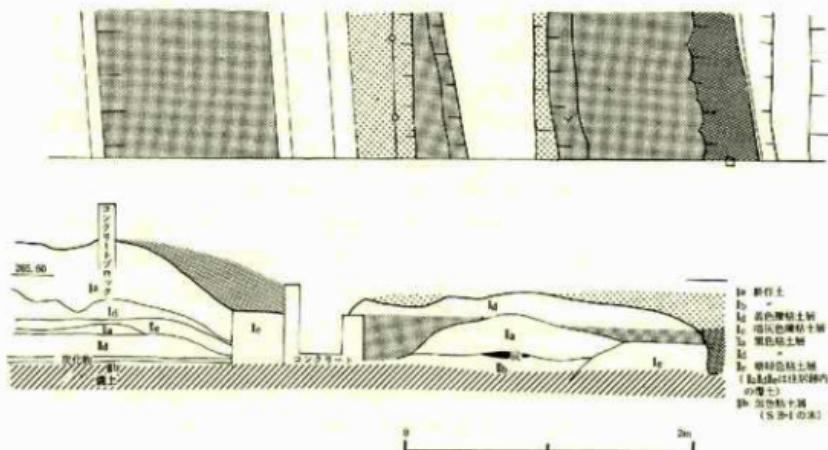
**7号トレンチ** Ⅱa層の上が最古の路面と考えられ、幅が約80cmである。4号トレンチの地層のⅡa層に続いていて、西側の路側はこの北にある列石と直線でつながる。西の水路も現在のコンクリート壁との間にあり、続いている。コンクリート壁の東には約6本の杭が交差点まで直線に打込んでおり、水路の西側の土留めとなっている。この杭列の時期は判定の基準となるものがないので不明である。道の東側には浅い水路（Ⅲc層）があり、4号トレンチの東側に続いている。Ⅱa層の上はⅠd層でこの上が現在の路面である。

**8号トレンチ** 地層図のⅡg層は氾濫層であるから、遺構はこれより下層ではないと考えられる。この上のⅡf層は西側の落んでいる点から5号溝までの幅約130cmが最古の道の路面とみられる。その上部のⅡa層とⅠc層に掘られた溝までは中・近世の道と考えられ、その後西に80cm位広げてⅠe層の部分を道にしたものであろう。Ⅱf層及びⅡa層が路面となっていた時期にはⅠe層の下が水路となっていた。この水路は北にある列石とほぼ一直線となって続く。Ⅱa層及びⅠc層の1部が道になっていた時点にはその東に幅10cm位の狭い5号溝が南北に走っている。この路面から西に延長するとⅠb層となり、この下面が水田の床土となっていた。



第8図 8号トレンチ平面図及び地層図(1:40)

**9号トレンチ** 1号住居址の中央部にかかっていた。1号住居址は最下層の遺構で、床面は1号道とその東の水田下で検出された。住居址の覆土であるⅡa層の上面が最古の道であって、2号トレンチの方向（南）に続いている。従って条里製造構の道と考えられるこの道は1号住居址より新しいものである。この付近では道の上面の幅は約60cmで南方では80cmになっている。その両側は水路となっていて、杭列があり、これは土留用として打込んだものと考えられるが、その時期は確定出来なかった。最古の道との間隔が狭いので比較的古いと考えられる。さらに杭列の外側が現在の水路となっている。



**2号トレンチ** 下部の地層を知るためと、遺構の有無を確認するために165cmと他のトレンチより深く掘った。Ⅱ層からⅢa層までは砂層や砾層であるから境川の氾濫層であろう。この間には遺構は認められなかった。

Ⅲ層は粘土層で、土師器破片が検出される遺物包含層である。この上面はやゝ平になり踏み固められた状態で、9号トレンチに検出されたⅢa層から続いている最古の路面である。この路面から両端は落ち込んでおり、その底には砂の堆積層があるので水路と思われる。この上層のⅠb層上面も路面となっていて、この面では路面は西に広くなっている。最上層のⅠa層は現在の路面で、路幅は更に広くなり、3.2m位となっている。

次に東西に走る道2号道に設定したトレンチ1・11・10・5・6・3について説明する。これらに現われた道の部分の地層は単純で、路面は現在のものを含めて、Ⅲ層或いはⅡ層である。交差点から西に延長する道の北側には当初から水路があったと思われる。

**1・11・10号トレンチ** 現在の道は水路の法面が緩傾斜のため、かなり南に寄っている。その下の道、すなわちⅡ層の上面の路面は確定し難かったが、水路から南へ、150cm～300cmの間にあったような形跡があった。しかし地層からみたところでは次のようである。1号トレンチⅢ層・Ⅲb層・11号トレンチⅠb層・10号トレンチⅢa層の水路寄りに共通して50cmから100cmのやゝ平らな場所があり、続いている。ここは発掘した時点では踏み固められた状態ではなかったが、地層では道状である。これらの面から南はほぼ平であるから水田の床土面とみることも出来るのである。



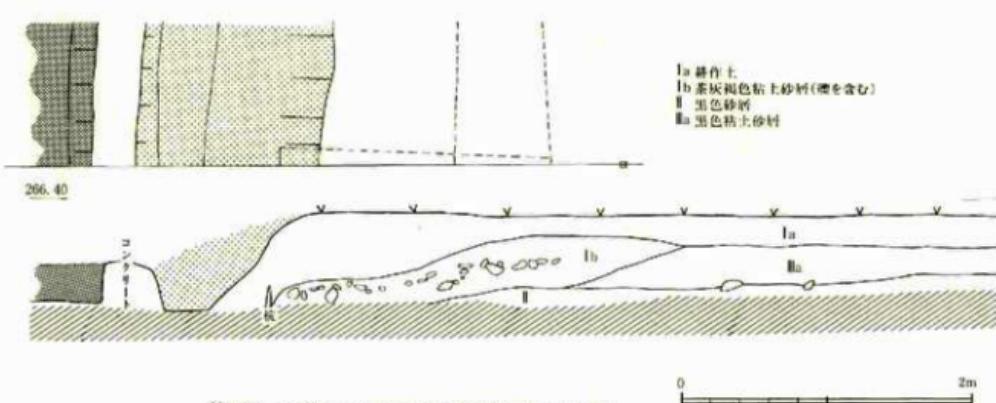
第11図 1号トレンチ地層図 (1:40)

道の交差点から東のトレンチでは次のようにある。

**5号トレンチ** Ⅳ層は氾濫層であり、その上部のⅤb層は粘土層（腐食土）であるが道はみられなかった。ⅤcとⅤa層の上面に幅約100cmの路面があったがその時期は確定出来なかつた。路面は凹凸が激しく、これは後世の擾乱によるものと思われた。その上部20cmの面が現在の道となる。道に接して南側が埋没した水路となっており、2時期に分けることが出来る。初期の4号溝の底から熙寧元寶（北宋）が出土したから1068年より遡るものではないと考



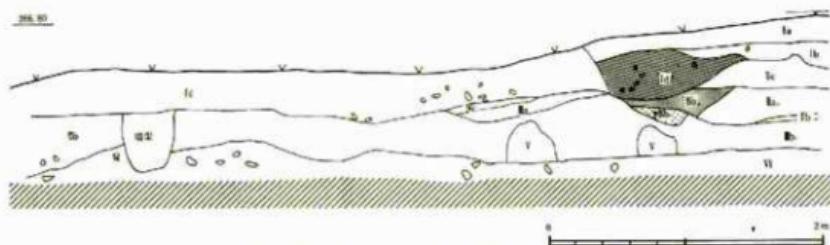
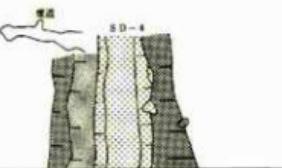
第12図 10号トレンチ平面図及び地層図 (1:40)



第13図 11号トレンチ平面図及び地層図 (1:40)

えられる。水路は3Eグリッドから南に曲り、ここでは幅10cm、深さ5cm位となり、下流で幅180cm、深さ20cm位となる。5号トレンチにかかった1号住居址と4号溝の関係を地層でみると、4号溝がやゝ上にあり、若干後期のものである。4号溝の南は立上っていて、それが水田の床土となっているから、平安時代後期頃のものと推定出来る。

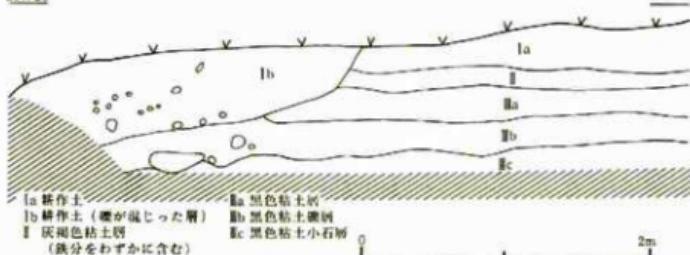
- Ia 農作土
- Ib -
- Ic -
- II 黒色粘土層
- IIa 黒色粘土層 (鐵分を含む)
- IIb 黑色粘土層
- IIc 黑色粘土層
- III 黑色粘土層
- IIIa 黑色粘土層
- IIIb 黑色粘土層 (鐵分を含む)
- IIIc 黑色粘土層 (鐵分を含む)
- V 灰褐色粘土層
- VI 單孔黑色砂質土層



第14図 5号トレンチ平面図及び地層図(1:40)

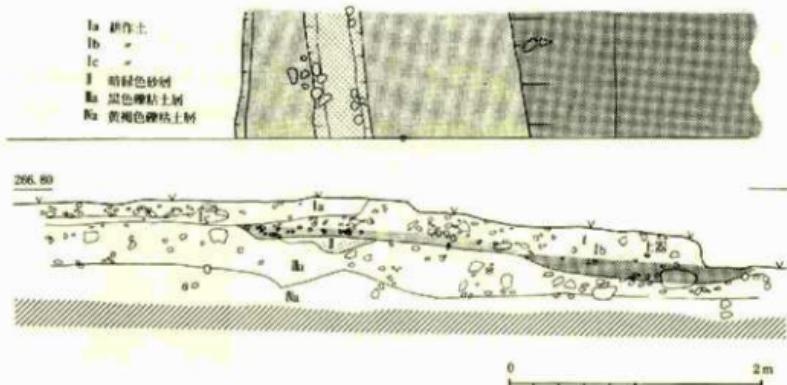
3号トレンチ I b層から I a層にかけて幅約270cmの現在の道がある。その下層では II層、IIIa層、IIIb層の上面が路面と考えられるから、I a層の交点から南となり、現在の道より南に寄っていたと考えられる。この線はそのまま水田の床土と続いている。

267.20



第15図 3号トレンチ地層図(1:40)

以上であるが、最古の道は現道より20~50cm位下層にあり、南北道はほとんど動いていないが、東西道は徐々に下方(北西)に動いていることがわかる。



6図 6号トレンチ平面図及び地層図(1:40)

### 水田

発掘区内の水田の全容を、経過を追って明らかにする事は出来なかった。発掘区内の水田はこの周囲のものより比較的広いから、長直し（2枚以上の水田を平にして1枚にし、作業効率をはかる工事）を数か所行なったことは考えられる。少なくとも道の交差点の南東の水田では1回は長直しをしている。

而で水田の状況がとらえられなかつたので、道に設定したトレンチの地層で、その状況をみてみることとする。

東西道では、1号、11号、10号トレンチで道の南側において現在の水田面を含めて3層を数えることが出来る。最も古い面が1号トレンチⅡb層上面の標高265.92m、11号トレンチⅡ層上面の265.9m、10号トレンチⅡb層の265.93mがある。その上の水田面は1号トレンチⅠ層の標高266.08m、11号トレンチⅢa層の266.1m、10号トレンチ266.07mがある。現水田面は平均266.3mとなっている。

交差点の東では、5号・6号・3号トレンチで、道の南側において、現在の水田面を含めてⅢ～Ⅴ層あるが、共通する面は5号、6号トレンチの現水田面標高平均266.7mの他にならない。5号トレンチではその最下層Ⅲb上面標高266.5m、Ⅲc層上面266.58m、Ⅲa層上面267.7mがそれぞれ高くなっているので、この水田はかつては東西に2枚以上になっていたことが推定出来る。さらに3号トレンチではⅢa層上面標高266.64m、Ⅲa層上面266.78mがあり、やはり6号トレンチより高くなっている。

南北道では4号トレンチでⅣa層上面標高265.67mと現水田面265.88mがある。ここは7号トレンチのある水田より一段低くなった水田になる。

7号、8号トレンチでは現水田面は標高平均266.29mである。その下に7号トレンチⅠc

層上面標高266.19mと8号トレンチⅠb層266.18mが共通している水田面と考えられる。8号トレンチではその下部にⅠc層上面266.18mとⅢb層上面266mがあり、それぞれ水田面と考えられる状況であった。7号トレンチではその下にⅠc層上面265.86mとⅡa層上面265.77mがあり、やはりそれぞれ水田面とみられた。7号トレンチの下層が8号トレンチの下層より低くなっているのは、3号列石から西へ延長した線が古い長直しの線となっているとみられるので、ここから低くなっているためである。

父差点から南では、9号、2号トレンチの東で現水田面標高266.72mだけが共通した水田面である。9号トレンチでは1号住居址の上にⅡd層上面266.2m、Ⅱa層上面266.24m、Ⅱe層上面266.3mであろう。

2号トレンチではⅠb層上面266.55mとその下層のⅡa層266.23mが水田面であろう。これらはいずれも9号トレンチの下層水田面より高くなっている。

#### 住居址と遺物

1号住居址 道の交差点で1基だけ検出された。9号トレンチでみられる最下層の水田床土と考えられるⅡa層の下層にあり、地表面から約76cmの下、標高266.04mが床面となる。推定プランは南北530cmの隅丸方形の堅穴であるが、道や水路工事のためにその約3分の2は破壊されていた。堅穴の深さは約15cmで、北側の東寄りに煙道があるが柱穴等は検出出来なかつた。北側と南東隅に稻茎と思われる敷物が約7m検出され、南側には焼土と小砾を敷いたと思われる場所がある。遺物は1片検出されただけなので、この住居を廃棄する時点で持ち去ったのであろう。外的な条件によって廃棄したことが考えられるが、もしそうであれば、条里制の道を敷設する際に立退きをさせられたものとも考えられるのである。

遺物 壁の口縁部1片だけが出土し、上平出5号（国分V期）の遺物位に比定出来る。11世紀後半か12世紀にならうか。

#### 列石

1号列石 1号道の北端下層で検出された。最古の道の西路肩に並べられており、土留用と考えられるものである。道の項を参照されたい。

2号列石 2号道の南側にあり、30~50cmの集石列となっている。一部分の石は破壊されなくなっているが、東端は道の交差点近くまで連なっていて、石は小さくなっている。列石は、10号トレンチではⅠa層（表土）の下部にあり、11号トレンチではⅠb層上部に傾斜して並べられている。構築時期は伴出遺物がないのでわからない。

3号列石 A・B-2~7グリッドにある。人頭大のや、細長い石が一列に並べられており、長さは12mある。西側の3分の1は破壊されたのか、飛石状に並んでいるだけである。列石は普通土留の用途で構築されるので、低い方に石の面が揃うのであるが、この場合は面がどちらにもない。飛石状の部分は5号溝に続いている。

### その他の遺構（SX-1・2）

その形状によって1号・2号に分類した。いずれも発掘区の北東部水田のⅡ層（現耕作土の下層）に現われたもので、その状態は同じようであった。降雨の後で2層上面が、乾き始める際にやゝ遅れて乾くところがあることを偶然に発見した。SX-1は島状に南北の列をなし、SX-2は帯状になり、規則的に並ぶ。しかし乾くと全く区別がつかなくなるものである。一般的には腐食土は保水力が高いので、このようになる事が考えられるのであるが、注意深く発掘しても、土壤の差が全くなかった。

用途は不明で今後類例調査が増加して、解明されることを期待する。

**遺物** 出土した遺物は少量で、遺構に伴出したものは4～5点にすぎないので、一括して説明する事とする。その時期は古墳時代前期の五領式土器を始めとし、現代に至るまでのものが検出されているので、水田が引続いて現代に至るまで使用されたことを証するものであろう。

なお近世、現代に属する遺物、磁器やガラスが多量に道や水路で発見されたが、ここでは掲載しない。

1号道では第17図に示した次の数点の遺物が出土した。8Cグリッドで第17図4に示した古墳時代初頭の五領式期の小型丸底壺が出土したが、道とは時期的に違うものであろう。第17図3は同グリットの道の直上（標高265.918m）Ⅲb層上面から出土した壺で、国分Ⅱ式に比定される11世紀のものであろうから、ほぼ初期の道と同時期となる。第17図2の壺もほぼ同時期と考えられる。

2号道からは第18図7は3EグリッドⅠ層から出土した。外国製品とみられる染付の茶碗である。中世末か近世に比定出来ると思われる。

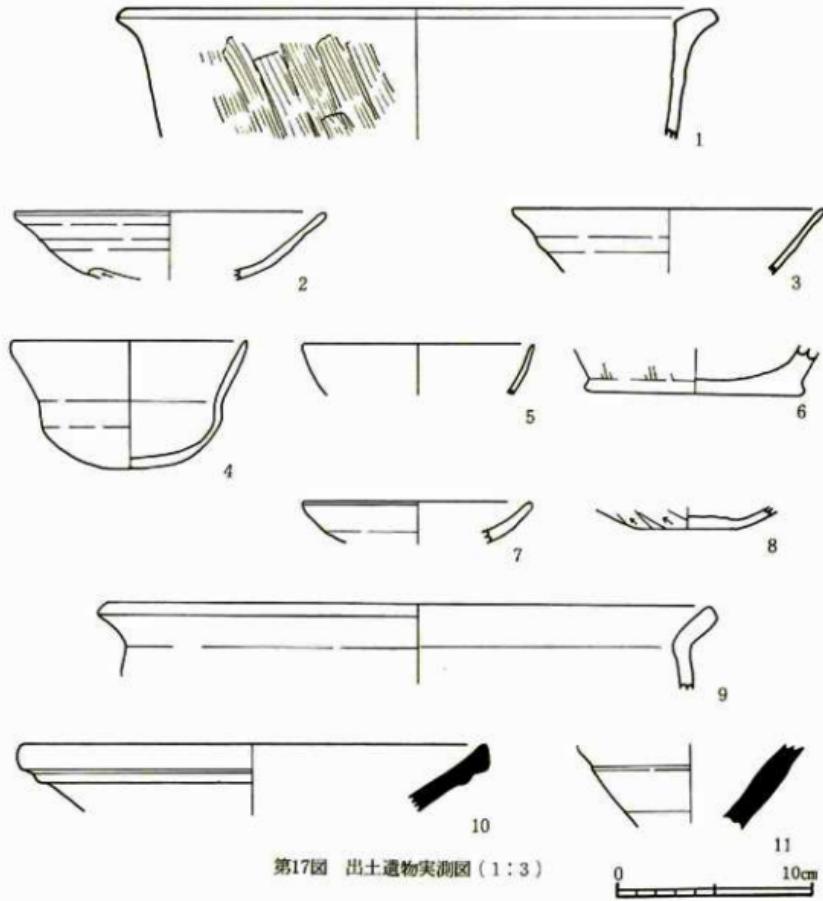
1号水路から出土した次の3点を掲載する。Ⅲ層からは先が尖った断面方形の鉄製品が出土した。Ⅱ層からはキセルの銅製金具が検出された。また外国製品とみられる染付の茶碗がⅠ層から出土したが、これも中・近世のものであろう。

4号水路からは2点の遺物が出土した。3Eグリッドで水路の底に堆積した砂層から第20図の熙寧元寶一個が出土した。これは中国北宋時代の神宗熙寧時代（1068～1077年）のものであろうから、この水路が使用された時期は11世紀以後となる。良質である。5Eグリッドの覆土から外国製品の染付の深皿が出土したから、中世か近世まで4号水路は使用されていたと考えられる。

3号列石からは江戸時代のものと思われる第19図3の施釉された陶器が検出された。

1号住居址からは第17図1に示す甕の口縁部破片が1個だけ床面直上（標高266.06m）から出土した。11世紀後半か12世紀に比定出来る。

その他石鏃1個、土製筋錐車1個や平安時代後期以後の土師器破片、天目釉陶器片、志野系陶器片や磁器等が出土したが、直接遺構との関係を明らかに出来るものは少なかった。

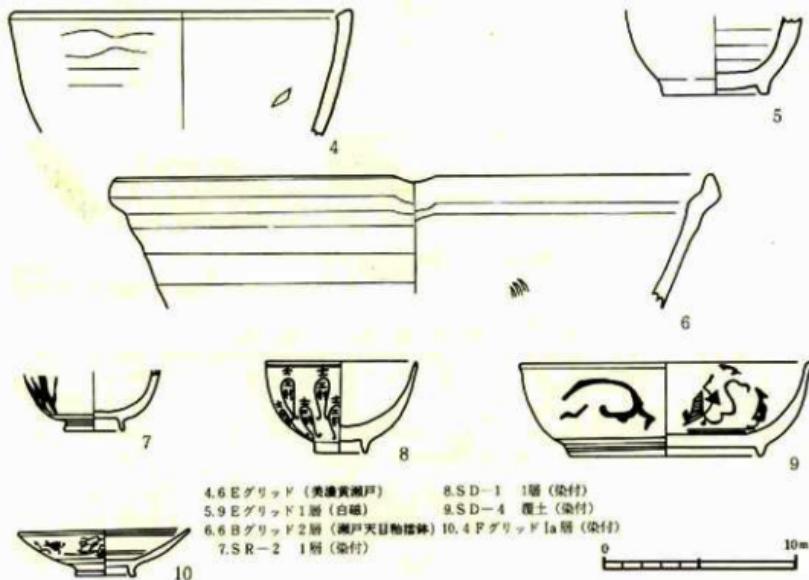


第17図 出土遺物実測図 (1:3)

第1表 出土遺物一覧表

器 種 名 号	出 土 地 点	種 類	器 形	出 口 部 (内 外 面 延 長 度)	調 整				胎 土 色 調 成	備 考
					口 縁	外 面	内 面	底		
1	SB-1 床面直上	土師	壺	33.6 — —	肥	横ナデ 新位刷毛	横ナデ		砂板土含む 灰 暗良	
2	S R - 1 2層	玉	縁	16.0 — —	玉	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位窓附	ロクロ水引		織 模 暗良	
3	S R - 1	玉	縁	16.0 — —	*	ロクロ水引	*		砂板土含む 灰 暗良	

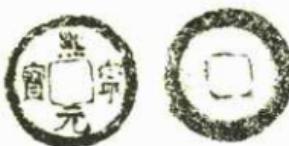
番号	出土場所	種類	器形	調査				粘土色 焼成	参考
				口縁	外面	内面	底		
4	S R - 1	土器	盃 (小型底)	12.0 6.6 —	尖形	ロクロ水引	ロクロ水引	砂粒を含む 茶褐色 良	
5	7 B G	*	环	12.0 — —	*	ロクロ水引	*	白色良	褐色好
6	2 A G	*	甌	— — 11.0	網刷毛		木葉模	砂粒を多く含む 茶褐色 良	褐色好
7	*	*	皿	12.0 — —	丸形	ロクロ水引	ロクロ水引	茶褐色 良	褐色好
8	8 B G	*		— 5.0		斜位窓附	回転ナデ	凹板系切 窓附	褐色好 良
9	2 F G	*	甌	30.8 — —	肥厚	横ナデ	横ナデ	砂粒が多い 茶褐色 良	
10	S D - 3 2 層	須恵	甌	24.0 — —		ロクロ水引	ロクロ水引	茶褐色 良	褐色好
11	2 F G	*		— — —	*	*	ナデ	砂粒を多く含む 褐色 良	褐色好



第18図 出土遺物実測図(近世)(1:3)



第19図 出土遺物実測図（近世）



第20図 4号水路覆土出土鉄貨拓影

## 第5章 石橋条里遺構の坪割について

条里を形成したと思われる主要な道路は、名称、地図や航空写真によって考えると、図の二重線のようになり、ほぼ中央で東西に大きく分割することが出来る。南北の二重線は現在の県道塩山一市川大門線である。南北に延長する道路は3町あるいは2町の間隔を置いている。これらの道路による区画を図のように、それぞれ第1区画、第2区画……第12区画と呼ぶことにする。各区画における坪数は6坪～14坪と不規則なものとなる。坪の数え方は、図のように現在の小字に数詞を冠したものが、当初の数え方と関連をもつものとして考察することにする。

第1区画では、北東隅に「老町田」なる小字があり、南に向って数えると5番目に「六反田」があるが、南北に分けられているので「六反田」一つで第5、第6坪とする。小字「七反田」が西側に隣接しているので千鳥式で数えるものと思われる。

第2区画では「四反田」を第4坪とするために、北端の「東沢向」を第1坪「えぼし切」



第21図 石橋条里遺構坪命名図

を第2坪として千鳥式が適用できる。別の考え方として、第2区画を南北6坪ずつに分ける方法も考えられ、「朔月田」を第1坪、「しま田」を第4坪と考えて、千鳥式で南北に進むような方法である。しかし他の区画において第2区画を二つに分ける分割線を延長して設けることは不自然であるから、前述の分割は妥当なものではない。

第3・4・5・8区画も同じように千鳥式で数えられる。

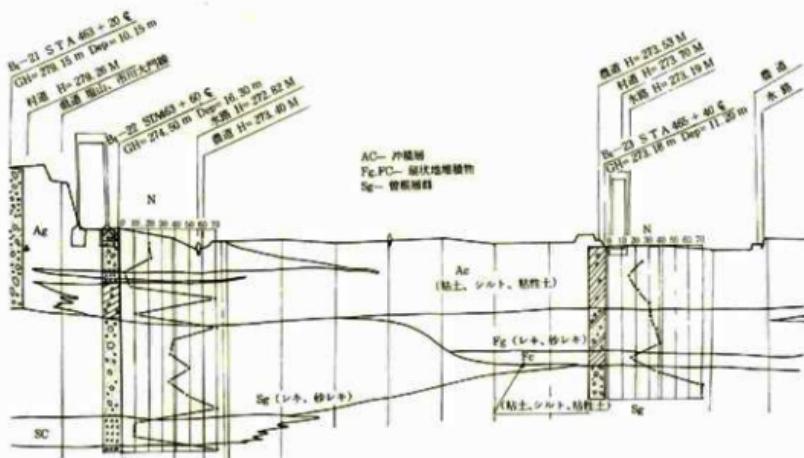
第4区画には「七反田」があるので、これを第7坪とするには、図のように北西隅から始めて千鳥式にて、東西の向きに数えなければならない。

第9、10、11区画では、境川の氾濫のため、坪の区画は見当らない。

第11、12区画では、南側の一部をカットすれば「五反田」あるいは「一町田」を生かすことが出来そうである。

なお、第9画には「八反田丁」「八溝田」があるが、それぞれ第8坪とするには無理がある。第6、7区画には数詞を冠した小字がないため数える事は不可能と思われる。

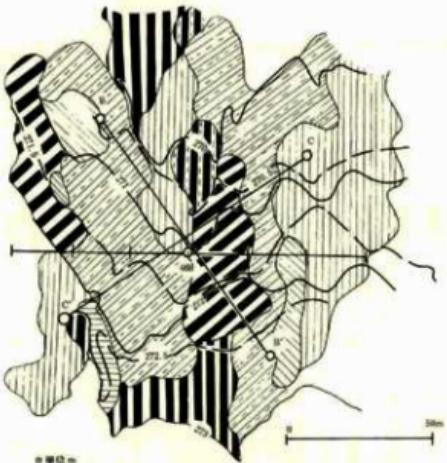
以上のように石橋条里製造構では、千鳥式数え方を基本としているようであり、下流から上流に向って、坪名を命名した可能性がある。中央の道路を境として、上流より下流の方が数字が小さい傾向があるのは、水田を下流から上流に向って開拓していくために、後になつた上流が数字が大きいとも考えられる。これによって推測すると、灌漑用水が豊富な地域から水田化されていった。境川扇状地は11世紀後半には、そのほとんどが水田となっていたのではないであろうか。



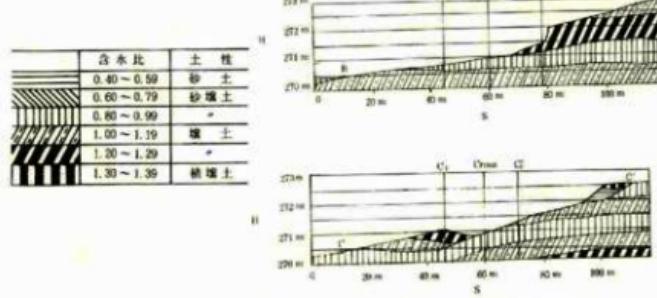
第22図 中央道中心柱N.463～465付近地層図

第2表 リモート・センシングによる地層表

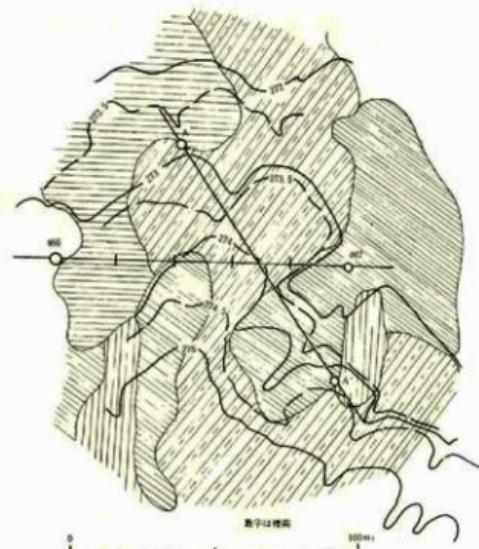
柱 状 図	土質分類	色 調	観察事項	試料採取	
				採取深度(m)	試料番号
		暗茶褐色	0.00~0.20m間 暗茶褐色より粘性土 0.20~0.50m角利 0.50m~1.40m間 5%~10%のレキである。 1.40m以降より暗灰色に変わる。 1.40~2.30m間角利少量化。	1.00 1.30 2.00 2.30 3.00 3.30 4.00 4.30 5.00 5.30 6.00 6.30 7.00 7.30 8.00 8.30 9.00 9.30 10.00 10.24 11.00 11.20	S R - 1 S R - 2 S R - 3 S R - 4 S R - 5 S R - 6 S R - 7 S R - 8 S R - 9 S R - 10 S R - 11
	レキ混り 粘性土	茶褐色	所々に角利の部分有り 45%~40%位最大20%のレキである。	5.00 5.30 6.00 6.30 7.00 7.30 8.00 8.30 9.00 9.30 10.00 10.24 11.00 11.20	S R - 1 S R - 2 S R - 3 S R - 4 S R - 5 S R - 6 S R - 7 S R - 8 S R - 9 S R - 10 S R - 11
	粘性土 混り角利	暗灰褐色	0.5~20%のレキ若干混る。	1.00 1.30 2.00 2.30 3.00 3.30 4.00 4.30 5.00 5.30 6.00 6.30 7.00 7.30 8.00 8.30 9.00 9.30 10.00 10.24 11.00 11.20	S R - 1 S R - 2 S R - 3 S R - 4 S R - 5 S R - 6 S R - 7 S R - 8 S R - 9 S R - 10 S R - 11
	粘性土	暗灰褐色	8.20~9.20m間角利混り粘性土である。 5~10% (最大80%のレキである) 10.40~10.60m角利。 10.60~10.90m粘性土質を挟む。	1.00 1.30 2.00 2.30 3.00 3.30 4.00 4.30 5.00 5.30 6.00 6.30 7.00 7.30 8.00 8.30 9.00 9.30 10.00 10.24 11.00 11.20	S R - 1 S R - 2 S R - 3 S R - 4 S R - 5 S R - 6 S R - 7 S R - 8 S R - 9 S R - 10 S R - 11
	角利	茶褐色	50~100%の角利とロームの混合である。	1.00 1.30 2.00 2.30 3.00 3.30 4.00 4.30 5.00 5.30 6.00 6.30 7.00 7.30 8.00 8.30 9.00 9.30 10.00 10.24 11.00 11.20	S R - 1 S R - 2 S R - 3 S R - 4 S R - 5 S R - 6 S R - 7 S R - 8 S R - 9 S R - 10 S R - 11
	角利	灰褐色	5~40%の角利で上部角利層付近ロームを含む。 下部粗角利、有機物を層底に含む。	1.00 1.30 2.00 2.30 3.00 3.30 4.00 4.30 5.00 5.30 6.00 6.30 7.00 7.30 8.00 8.30 9.00 9.30 10.00 10.24 11.00 11.20	S R - 1 S R - 2 S R - 3 S R - 4 S R - 5 S R - 6 S R - 7 S R - 8 S R - 9 S R - 10 S R - 11
	シルト	暗灰褐色	有機物、浮石多量に混入。	1.00 1.30 2.00 2.30 3.00 3.30 4.00 4.30 5.00 5.30 6.00 6.30 7.00 7.30 8.00 8.30 9.00 9.30 10.00 10.24 11.00 11.20	S R - 1 S R - 2 S R - 3 S R - 4 S R - 5 S R - 6 S R - 7 S R - 8 S R - 9 S R - 10 S R - 11
	角利	暗綠色	石炭の風化された角利を多量に混入。角利50~100%が点在する。 珊瑚層付近有機物、浮石混入する。 砂分も含んだ有機物、浮石が層底にある。 50~100%の角利が点在する。	1.00 1.30 2.00 2.30 3.00 3.30 4.00 4.30 5.00 5.30 6.00 6.30 7.00 7.30 8.00 8.30 9.00 9.30 10.00 10.24 11.00 11.20	S R - 1 S R - 2 S R - 3 S R - 4 S R - 5 S R - 6 S R - 7 S R - 8 S R - 9 S R - 10 S R - 11
	角利混り 粘性土	灰褐色	5~40%の角利でシルト分挑み柔い。 角利50~100%が点在する。 下部層々に5~20%程度の粘土を含む。 粘土層は層底に薄くあるためN値が非常に不規則である。 5~40%の角利 (最大角利100%程度) である。 粘土層を薄く挟む。	1.00 1.30 2.00 2.30 3.00 3.30 4.00 4.30 5.00 5.30 6.00 6.30 7.00 7.30 8.00 8.30 9.00 9.30 10.00 10.24 11.00 11.20 12.00 12.30 13.00 13.30 14.00 14.30 15.00 15.30 16.00 16.20	S R - 1 S R - 2 S R - 3 S R - 4 S R - 5 S R - 6 S R - 7 S R - 8 S R - 9 S R - 10 S R - 11 S R - 12 S R - 13 S R - 14 S R - 15 S R - 16
	角利	暗綠色	火山灰質で浮石多量に混入する。5~10%の角利が10~30cmの層底に挟む。 粘着性がある。	1.00 1.30 2.00 2.30 3.00 3.30 4.00 4.30 5.00 5.30 6.00 6.30 7.00 7.30 8.00 8.30 9.00 9.30 10.00 10.24 11.00 11.20 12.00 12.30 13.00 13.30 14.00 14.30 15.00 15.30 16.00 16.20	S R - 1 S R - 2 S R - 3 S R - 4 S R - 5 S R - 6 S R - 7 S R - 8 S R - 9 S R - 10 S R - 11 S R - 12 S R - 13 S R - 14 S R - 15 S R - 16
	シルト	黑灰色	5~40%の風化角利で石炭、安山岩、花崗岩等である。	1.00 1.30 2.00 2.30 3.00 3.30 4.00 4.30 5.00 5.30 6.00 6.30 7.00 7.30 8.00 8.30 9.00 9.30 10.00 10.24 11.00 11.20 12.00 12.30 13.00 13.30 14.00 14.30 15.00 15.30 16.00 16.20	S R - 1 S R - 2 S R - 3 S R - 4 S R - 5 S R - 6 S R - 7 S R - 8 S R - 9 S R - 10 S R - 11 S R - 12 S R - 13 S R - 14 S R - 15 S R - 16
	角利	青灰色	5~40%の風化角利で石炭、安山岩、花崗岩等である。	1.00 1.30 2.00 2.30 3.00 3.30 4.00 4.30 5.00 5.30 6.00 6.30 7.00 7.30 8.00 8.30 9.00 9.30 10.00 10.24 11.00 11.20 12.00 12.30 13.00 13.30 14.00 14.30 15.00 15.30 16.00 16.20	S R - 1 S R - 2 S R - 3 S R - 4 S R - 5 S R - 6 S R - 7 S R - 8 S R - 9 S R - 10 S R - 11 S R - 12 S R - 13 S R - 14 S R - 15 S R - 16



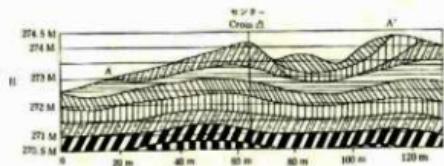
第25図 BB' CC' 横断平面等高線図及び土壤含水比分布図



第26図 BB' CC' 横断面土壤堆積模式図



第23図 AA' 横断平面等高線図及び土壤含水比分布図



第24図 AA' 横断面土壤堆積模式図

## 第6章 まとめ

本県において、班田収授法による条里制施行についての研究は、昭和10年に廣瀬広一氏が発表した「条里遺跡」（『山梨県史蹟名勝天然記念物調査報告』第8輯）によって開かれたといわれている。その後の研究の成果はあるものの、その全体像はとらえられていないし、また発掘による調査でも、その具体的な内容が判るまでに至っていない。

石橋条里第Ⅱ地点の発掘では、道路、灌漑用水路のあり方や歴史はある程度解明出来たが、施行時の水田の状態や発展経過は判らなかったに等しい。

道路は現在から遡って、引続いて施行時まで、同一場所の下層で確認出来た。道幅は古くなる程狭くなり、当初は3尺（90cm）位であったと考えられる。水路は改良、廃止を繰り返されているが、当初から道路に沿って敷設されていたものようである。

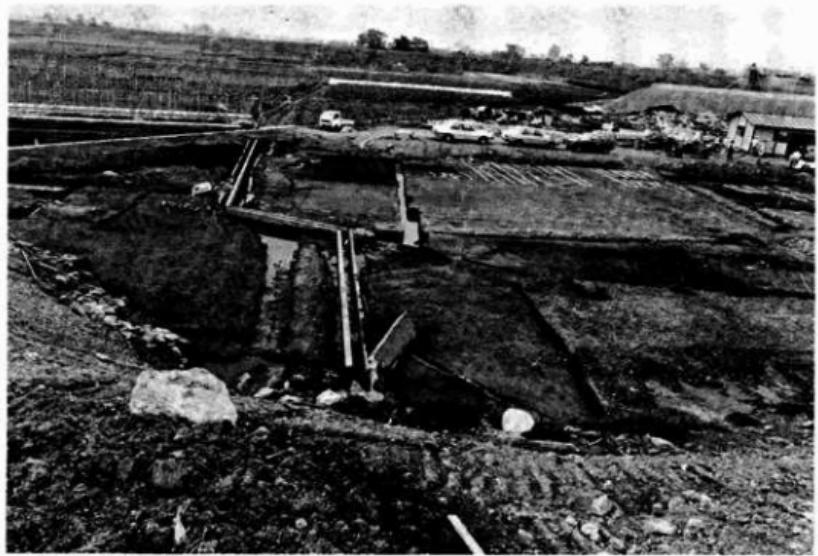
遺物は、現代・中世・古代のものがある。最も古い遺物として、一片だけ五領式期の小型丸底壺があるが、これだけでは考察の充分な資料とならない。

特に1号住居址直上、1号道直上から出土した土師器、4号溝から出土した錢貨はほぼ時期が一致する。1号住居址が条里制の道路を新設するために廃棄されたものすると、ここから出土した壺形土器の口縁部破片の時期と、条里制の施行時期とが一致すると考えられる。これによると11世紀後半から12世紀までの間であろう。

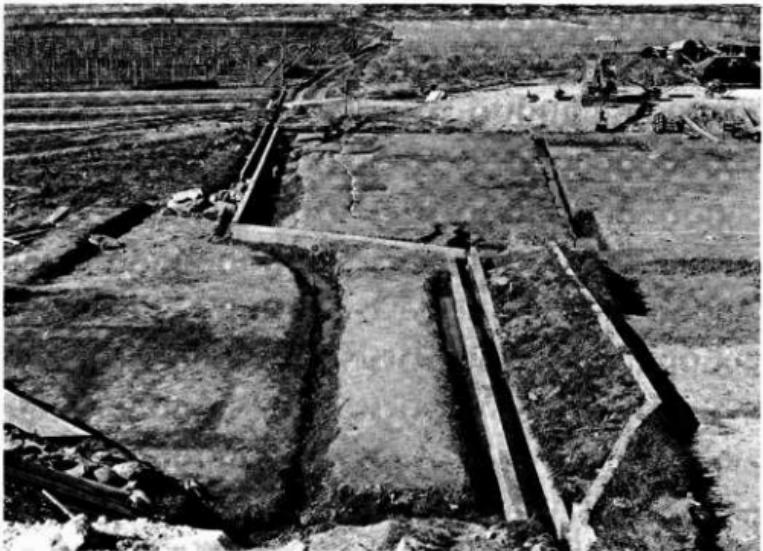
# 図 版



石橋条里製造構第Ⅲ地点発掘前全景

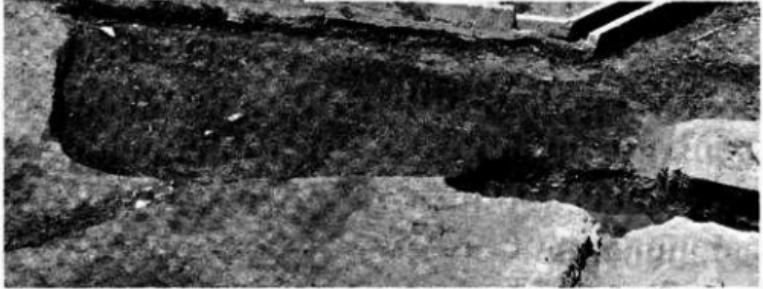
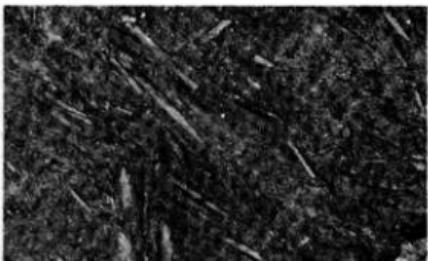


発掘後全景



南方より 1号溝を望む

住居址内炭化物出土状況



1号住居址



一号溝にかかる暗渠

一  
号  
溝  
と  
杭  
列





4号溝付近



4号溝

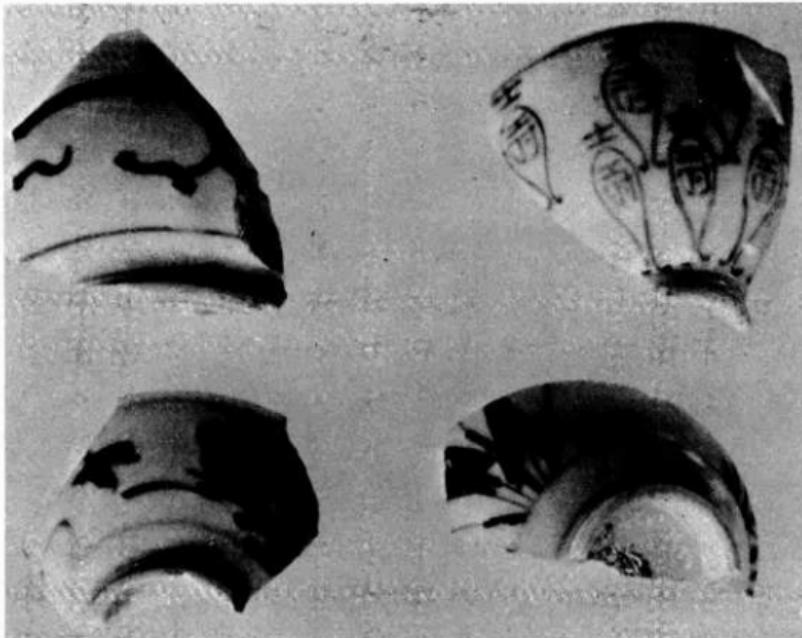


3号列石とSX-1.2



2号列石付近

5断面



出土遺物（中近世）



紡錘車 5Bグリッド出土



4号溝出土古銭

藏 福 遺 跡

## II 蔵福遺跡

### 第1章 遺跡の位置と環境

#### 第1節 位 置

藏福遺跡の所在地は、東八代郡八代町永井字藏福536番地、535番地の1とその周辺にあって、中央道中心杭S・T・A480の付近にある。東経138度37分44秒、北緯35度36分41秒の位置で、浅川扇状地の末端にある。

次に相対的な位置を示す。

甲府市から南東約8kmにあり、西約130mから増田部落に、東550mから永井部落になる。増田部落を越して1,000mに笛吹川が南流し、南340mに浅川が西流し、さらに南の狐川と接して境川村となっている。

町道16号線に接して、北側に広がる遺跡である。

なお、伊ノ下遺跡第1章第1節を参照されたい。伊ノ下遺跡はここから北1,200mの地点に存する。

#### 第2節 環 境

##### イ 自然環境

藏福遺跡は、甲府盆地南部にある浅川扇状地の末端にある。

浅川扇状地は、甲府盆地を東から南にかけて連なる御坂山脈から流出している浅川で形成されている。浅川扇状地は甲府盆地南東部にある諸扇状地のうちでも、よく発達し、標式的なものの一つである。甲府盆地内東部における広域的な地形、地質については、石橋条里制遺構第1地点、及び伊ノ下遺跡の第1章第2節、イ自然環境で詳述したので、ここでは省略する。

次に遺跡付近の微地形についてふれておく。

遺跡が存する扇端の勾配は1000分の17.5（傾斜角1度）である。ここは、幅約100mのかまぼこ型自然堤防になっていて、南は町道16号線を挟んで比高約1.3mの深い谷となっており、北も比高80cmくらい低い、幅100mくらいの深い谷に開拓されている。

この自然堤防は、150mくらいの長さがあり、発掘地点はその末端にある。発掘地点から下は、その幅が広くなり、微高地状地形となっている。遺跡のすぐ西（下）は落差約1mの急勾配があるので新しい浅川の氾濫原の末端になるのであろうか。遺跡の標高は268mである。

現在は、付近一帯はわずかの水田を除いて、20年ほど前から農作目転換がなされ、ぶどう桃などの果樹園や蔬菜畠となっているが、それ以前は、すべて水田であったので、比高30cmから1mくらいの段々畑になっている。

自然堤防に占める遺構の位置は、中・近世のものは中心よりやや北寄りの斜面に、また水田は北側にある深い谷で検出した。

## 口 歴 史 的 環 境

藏福遺跡で検出した遺物と遺構は、2時代に分けることが出来る。

その一つは、中・近世の陶磁器、土師質土器と木器などを伴う据立柱建物群、溝群、集石遺構などで寺院に關係する遺構と思われるものである。

他の一つは、土師器を伴う水田址と考えられるものである。

ここでは主に、この二者に關係する歴史的環境について説明することとする。

最初に前者について説明する。

この遺跡付近に増福山利最寺があり、浅川の洪水で流されたので、その地名が残ったという伝説がある。

現在利最寺は、遺跡の西（下）に続く自然堤防状の高地に展開する増利の集落の北西にあり、ここからの距離は約600mである。増利の集落は現在地に弥生時代から引き続いて営まれたと考えられ（石橋条里第Ⅱ地点調査報告書、第1章第2節「ロ、歴史的環境を参照」）、この間に水害を受けた利最寺が、現在地に移転した可能性はであろう。

この遺跡がある土地の字名が「藏福」であるのは、ここにこの寺があったことを充分示唆するであろう。

また、『八代町誌』（下巻）第12編の伝説に、ここはかつて増利村の領分であったとの言い伝えがあるという。歴史地理的な環境は、あまり詳しいことがわからないが、増福山利最寺の関係資料は別項で示す。

次に、水田址と考えられる遺構の歴史的環境について説明する。

境川村にある条里制遺構が八代町まで続いている、序章第2図に見られるように藏福遺跡は、八代町にみられる条里制遺構の中でも、最もよく整備された地域の真中にある。ここは1坪（1里×1条）ごとによく区画整理されていて、すべて、1坪ごとに字名が付けられているのは境川村と同様である。藏福の周囲だけでも条里制に関係すると思われる字名に、1丁田、角田、福田、1丁五反、五反田、反田、桜坪などがある。蛇足であるが、この地域の北は、字名が4坪（2里×2条）を1単位として命名されている。このことは条里制遺構を研究する上で、重要なことのように思われる。

以上のような環境の中にあるこの水田址も古い歴史をもつものと考えられる。

境川村の場合と同じように、こここの条里制遺構の道路の交差点が少しずれて筋違いになっている。また、古くから水田が合併され、大きい水田へと広げられてきた。例えば、字藏福地内（1坪=1条×1里）では、明治25年10月に調整された分間図では29筆（枚）の水田が、昭和54年に作成された中央道の図面では、17筆（枚）に合併されている。地域では、この合併することを長直しと言っている。水田を長直しするということは、床土を切り盛りすることになるので、現状が変更され、以前の水田址は破壊されてしまうことになる。ここでも、このような経過をたどってきたために、水田址としての確証を得られなかった。しかし、検出した状況から水田址と判断したものである。

## 第2章 調査の経過

歳福遺跡の発掘期間は、昭和54年11月26日から翌年3月20日までの約4ヶ月間であった。休日は日曜日、祭日と年末、年始の約15日間を当てた。

発掘予定面積は約7,800m<sup>2</sup>であったが、このうち、遺構を検出した範囲は1,100m<sup>2</sup>で、内訳は中・近世のものが約1,000m<sup>2</sup>、水田状遺構が約100m<sup>2</sup>であった。

地区全域を、グリッド方式によって発掘することとし、その名称は図のようである。

グリッドの設定は中央道の中心杭を基準として、東西にそれぞれ一辺を10m×10mとして72区画をつくる。その1区画にさらに2m×2mの小グリッドを25つくり全部で、1800グリッドを設定した。グリッドの名称は南から北に10、20、30……台とし、東西を11、12、13……グリッドとした。小グリッドは南北を1～5まで、東西をA～Eまでに分け、1A、1Bのように標示する。

まず、発掘予定地における遺構の分布状況を把握するために、大・小グリッドとも、1つおきに千鳥に試掘を行った。その結果、1月下旬に120台のグリッドに水田状遺構が、2月の初旬に、50台、60台、70台、80台のグリッドに土師質土器や、染付、天目茶碗等の陶磁器を作り中世末か、近世初頭と考えられる遺構を検出した。

土師器を作り水田状遺構は、櫻乱が多く、少範囲にとどまった。

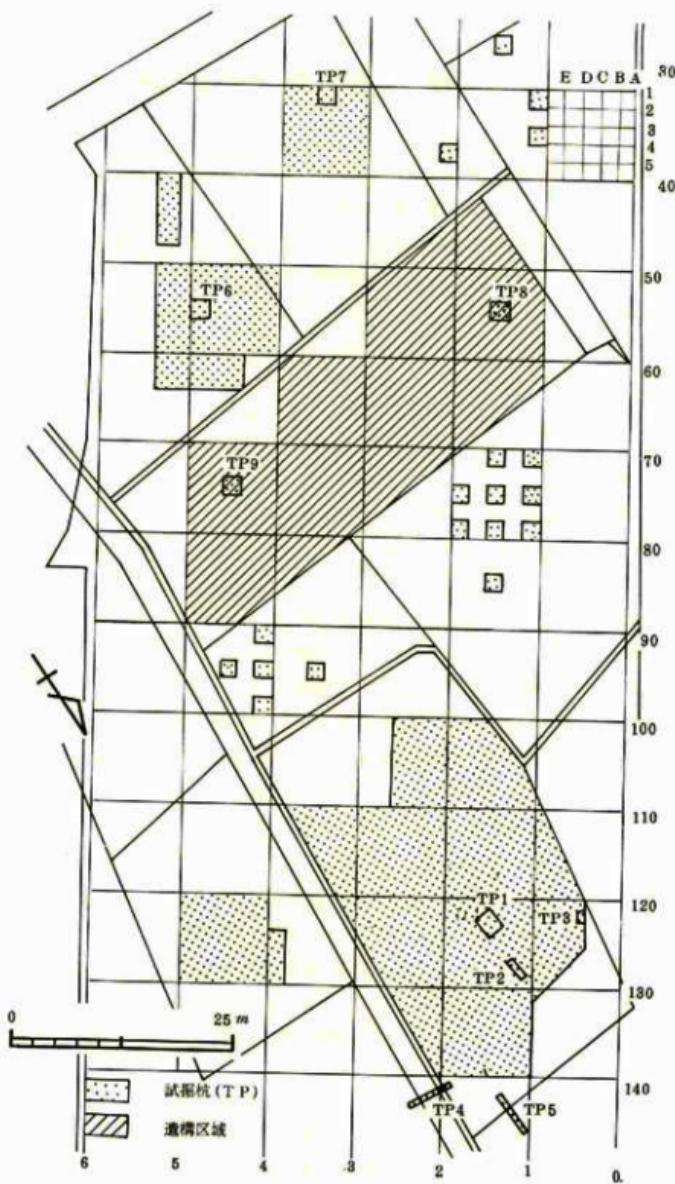
中・近世の遺構は掘立柱建物群、溝群や配石遺構であった。73グリッド付近で、多量に前記の遺物が出土はじめたのが2月2日頃からであった。慎重に掘り進めていったが、遺構らしきものは、黒色土の中からは検出出来ず、7日頃になって、砂層上で始めて柱穴群と溝群がほとんど同時に検出出来るようになった。2月中旬に84グリッドで配石1号や、62グリッドから3足碗形土器（線香立て）等の仏具も多く出土した。

3月18日の終りに近い頃、67号溝から、碗2、錢貨3、板片など、埋葬行事に使用されたと考えられるものや、やや離れた所から下駄などを検出した。

また近世初頭頃作られたと思われる多くの暗渠（地域では「冷抜き」という）も発見した。自然科学的分析資料として、<sup>14</sup>Cによる年代測定資料を54E-3第13層（地表下約150cm）から茎状植物を、また花粉分析資料を74C-3第5層から泥炭層を採取した。結果は前者ではBC3400±330年となり、後者では、ほぼ14種の植物が抽出され、最も多いものは、picea（トウモ、バラモミ）の20、5%であった。

以上のように3分の1の前半期は試掘に費し、1月中旬で試掘面積は全体の約20%であった。その後は、掘立柱群、溝群を集中的に発掘調査し、終了した。

なお、この概略について、中央道発掘調査速報「歳福遺跡」№1（1月18日発行）と同№2（3月7日発行）に発表した。



第1図 藏福遺跡グリッド配置図 (1:500)

発掘前の予想として、この下（西）方に弥生時代後期の遺跡が広がっているので、その関連遺構があるものと考えていたが、全く検出出来なかった。

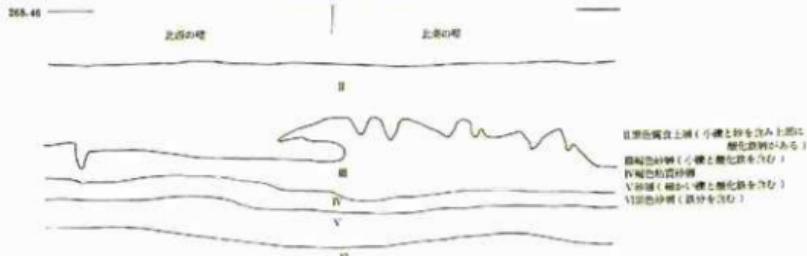
この遺跡の発掘は、終始寒風吹きすさぶ中で行なわれた。降雨、降雪の後は、発掘区は水に浸り、それが朝零下7~8度になって凍結したことは、遺構、遺物の検出に非常な支障をきたしたことを付け加えておきたい。

### 第3章　層序

扇状地特有の地層の乱れがあるため、基準層序は定められないが、深く掘った試掘坑6、7、8、9では共通する地層もある。なお各試掘坑の地層番号は必ずしも共通ではない。

試掘坑16では、I、II、IV層は腐食土層で水平面がある。これはかつては水田の床土であった可能性があり、試掘坑9のIII、IV、V層などが、ほぼこれに比定出来そうである。

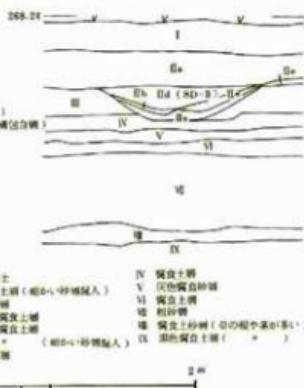
7号試掘北西、北東壁



8号試掘南東壁

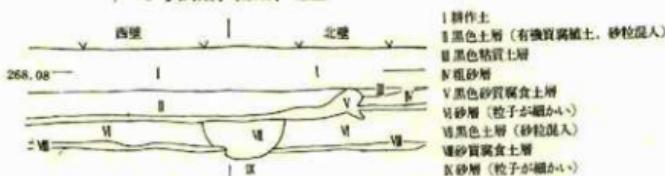


9号試掘北西壁

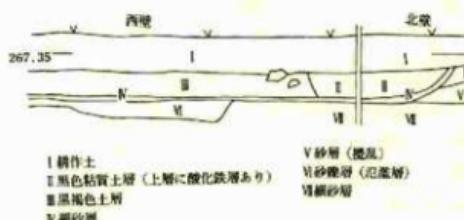


第2図 7号・8号・9号試掘地層図 (1:40)

1) 1号試掘、西壁、北壁



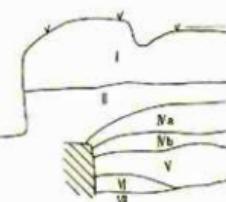
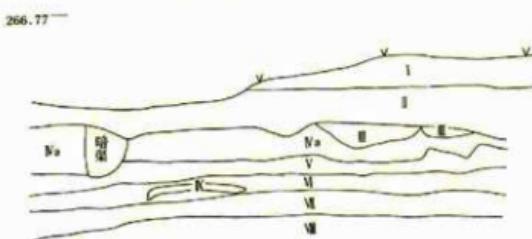
2) 2号試掘、西壁、北壁



3) 3号試掘、西壁、北壁



4) 4号試掘、東壁



5) 6号試掘、南東壁



第3図 1号・2号・3号・4号・6号試掘地層図(1:40)

条里製造構の中にある藏福遺跡のこの水田面と考えられるものは、試掘坑4で示す道路の地層と合わせると、その施行当時まで遡ることもあり得る。この高食土層の下層Ⅶ、Ⅷ層は砂層となっていて、後述する中、近世遺構の掘込層と考えられるのであるが、試掘坑6、9では、現地表面の高さ（水田面）が約40cmくらい後者が低いので、正確な比較は出来ない。さらにこの下層は黒色粘質腐食土層となり、試掘坑6のⅩ層、8のⅨb層や、9のⅨ、Ⅹ層のように禾本科系統の植物が多量に残存している層となる。試掘6では表土から約150cm下の第Ⅺ層黒色粘質腐食土層から採取した茎状の草で放射性炭素による年代測定を学習院大学木越邦彦研究室に依頼して、次のような結果を得た。

#### 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

山梨県教育委員会教育庁文化課

1981年4月2日

1980年4月9日受領致しました試料についての<sup>14</sup>C年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は $\beta$ 線計数値の標準偏差 $\sigma$ にもとづいて算出した年数で、標準偏差（one sigma）に相当する年代です。試料の $\beta$ 線計数率と自然計数率の差が $2\sigma$ 以下のときは、 $3\sigma$ に相当する年代を下限とする年代値（B.P.）のみを表示しております。また試料の、 $\beta$ 線計数値と現在の標準炭素について計数率との差が $2\sigma$ 以下のときには、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}$ %を付記しております。

#### 記

CodeNo. 試料 B.P. 年代（1950年よりの年数）

Gak-9112. Plant remains from zofuku 5350±330

Site.Yamanashi Pref. 3400 B.C. 以上

木越邦彦

これによると、この付近では約150cm下の地層が縄文時代中期に形成されたことになる。この時代には浅川扇状地では、前述したように茎状植物包含層が広くあり、草原となっていた地域が広くあったことが推定出来るのである。森林相というより草原相といってよいかも知れない。

中・近世の遺構は試掘坑9のⅢ層と、試掘坑8のⅤ層の砂層直上から掘り込んでおり、その上に所によって薄い砂層が載っているので、この遺構の上層で水害にあっていていることも考えられるが、伝説のように、建物が流された程の洪水によって廃絶したものでもないであろう。

次に、発掘地区の北に掘った試掘坑1、2、3の地層についてみると、1の西と北壁では、表土下約46cmのⅣ層と、約68cmのⅥa層が水田の床土と思われ、Ⅳ層は北壁でその上層（表土）まで上っている。これは長直しをする以前の水田の区画線であろう。試掘坑2、3でも1

と同じ現象がみられる。古い水田面からは遺物が検出されなかつたので、その時代は不明であるが、水田開発當時にまで遡れる可能性はあろう。

最後に道路を切ったトレンチの地層をみると、ここでも現路面より約48cm下に水路のⅢ層が検出された。Ⅲ層が二筋あるのは、水路の付け替えによるものと考えられる。その東側にはⅣa、Ⅳb、V、VI層に道らしい盛り上った幅約80cmの所がある。石橋条里制遺構第Ⅲ地点にみられる最古の道幅とほぼ同じ広さをもっている。

以上のようにこの地域では、巨視的には砂層と粘質腐食土との互層になっているので小さい氾濫が繰返され、徐々に地層が堆積したものと考えられる。

## 第4章 中・近世の遺構と遺物

遺構は第1図の斜線で示した1枚の水田から集中的に検出された。ここは遺構群の南端で、北側に遺構が広がっていたと考えられるが、北側は水田にする際、削平のために破壊されたと思われる。この遺構群が廃絶した後は、再び水田となり現在に至つたのであろう。

遺構は掘立柱建物址、溝、配石、列石などがあり、相互に重複している。このうち掘立柱建物址の棟数は非常に多くあったと思われ、連結できた13棟の他にも柱穴と思われる穴は数百に及び、柱穴以外の掘り込みも含めると400基以上となる。これらの多くは重複していて特に東域は著しい。多数の溝も大小のものが互いに切合っているので、埋め戻したり、新設したのであろう。また列石が破壊されて溝の中に廃棄された状況のところもあるが、これらの遺構の前後関係は、平面上でも層序でも、一部を除いて判断する資料が得られなかつた。

第1表 掘立柱建物柱間距離表

### 掘立柱建物址と遺物

掘立柱建物址の場合は、その遺構内にある遺物でも伴出遺物として確定出来ない要素があるが、ここでは一応建物址の項で取扱い、溝の項ではその覆土から出土したものだけを取り上げることとする。

建物址は13棟確認できたが、柱穴の数から推測すれば、少なくとも数十棟になるはずである。ただ柱穴が濃密に分布しているために、建物として確実に連結出来なかつたものは除外した。

この中で最大の4号掘立柱建物址は東西6.5m(約3間3尺)、南北7.1m(約4間)であつて、ほぼ正方形を呈する。その

建物番号	東西間		南北間		方 向
	m	尺	m	尺	
1	5.9	19.7	4.9	16.3	N→ 18°→ E
2	5.8	19.3	4.4	14.7	N→ 16°→ E
3	2.8	9.33	3.1	10.3	N→ 8°→ E
4	6.5	21.7	7.1	23.7	N→ 12°→ E
5	7.5	25.0	3.6	12.0	N→ 15°→ E
6	5.6	18.7	3.6	12.0	N→ 17°→ E
7	4.2	14.0	3.4	11.3	N→ 16°→ E
8	7.0	23.3	4.2	14.0	N→ 16°→ E
9	3.4	11.3	4.6	15.3	N→ 16°→ E
10	3.0	10.0	3.5	11.7	N→ 28°→ E
11	4.5	15.0	3.7	12.3	N→ 35°→ E
12	3.4	11.3	3.2	10.7	N→ 8°→ E
13	3.1	10.3	3.0	10.0	N→ 5°→ E

● 一柱穴

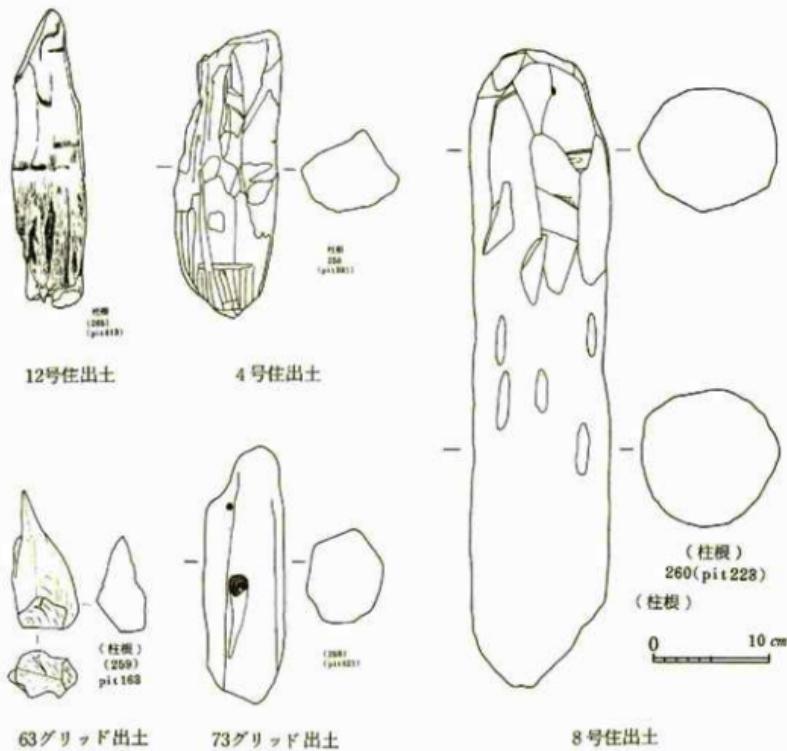
◎ 一柱の残っている柱穴



第4図 藏福遺跡遺構全体図 (1:100)

他の正方形のものは、10号、13号建物址だけで、他は東西に長い長方形を呈する。建物の間口、奥行とも、6尺（1間）を単位としていない端数がある。また柱間距離も非常に不統一であり、柱も正しく一直線上に並ぶものが少ない。このような建物に類するものに4号、5号、6号、7号、8号、11号、12号、13号建物址がある。

遺物は、柱根と土師質土器、瓦質土器、陶磁器類がある。

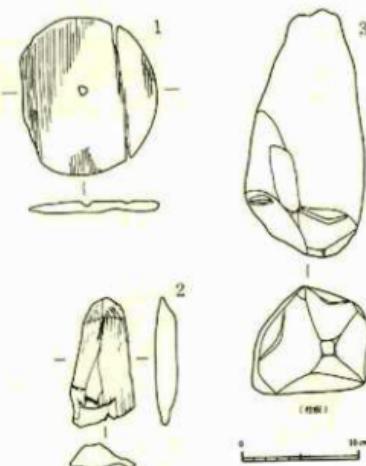


第5図 柱根実測図

柱根は8本あり、そのうち3本は4号建物址のN.331、8号建物址のN.223、12号建物址のN.265で、他の4木は建物にならない。柱根の断面形状は円形で、丸太をそのまま使用していることがわかる。ただ1木を除いて、すべてが鋭利な刃物で根本を切って尖らせてい

ることが特徴である。樹種は別表に示したとおり、広葉樹を利用していることが注目される。

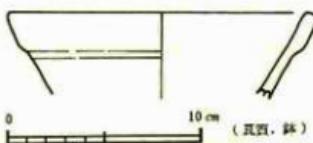
次に土器類を各グリッド毎に上げると、51グリッドでは磁器、陶器が出土し、この内1片は16世紀の青磁染付の底部で、その内面には白釉の地にコバルトの絵画があるものである。また陶器では瀬戸系の、14～15世紀の瀬戸天目茶碗の底部があり、52グリッドからは、同時期の常滑系の鉢破片が出土した。62グリッドから出土した土師質土器のうち、その一つは口縁部がやや外反し、他の一つは器外胴部が有段状になっている。瓦質の描鉢の底部破片も2個出土しており、内面の条線が8本のものとないものがある。63グリッドからは染付破片と高台付き土師質皿が出土している。73グリッドからは土師質皿の破片が6個、土師質の小型手捏土器と中国製染付破片が出土している。土師質皿は外面胴部が有段のものとそうでないものとがあり、口唇部が尖りぎみのものと、丸味のあるもの



第6図 73グリッド出土遺物実測図

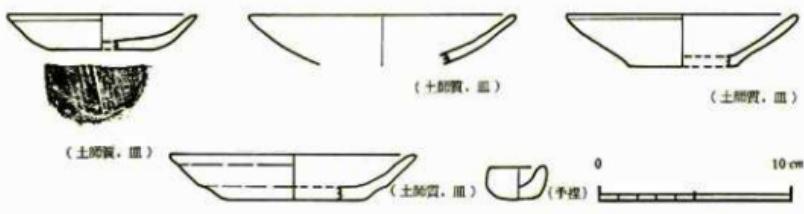
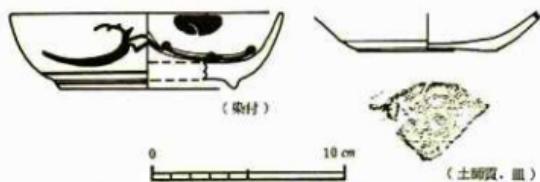
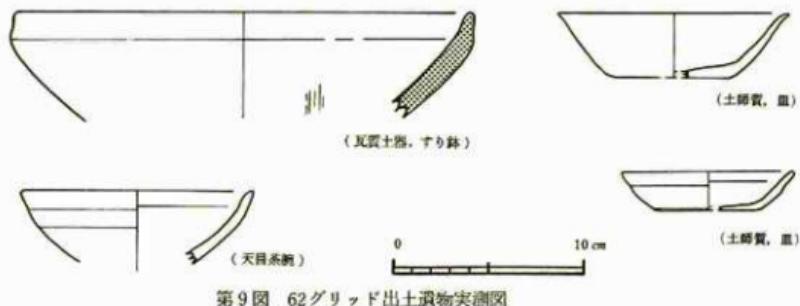


第7図 51グリッド出土遺物実測図



第8図 52グリッド出土遺物実測図

とがある。74グリッドからは土師質土器、7本・5本・3本の条線のある瓦質溜鉢と3本条線の瓦質溜鉢破片、瓦質火鉢様の底部、中国製染付破片2個、鉄釉を施した小壺形陶器、土師質の3足碗形土器と砥石破片3個が出土している。



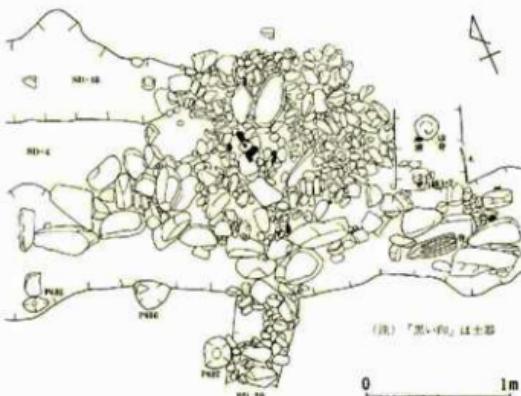
## 土 壤

3基あり、その内2基は径約1mの円形、他の1基は縦約3.4m、横約1.2mの方形である。出土遺物もなく性格も不明である。

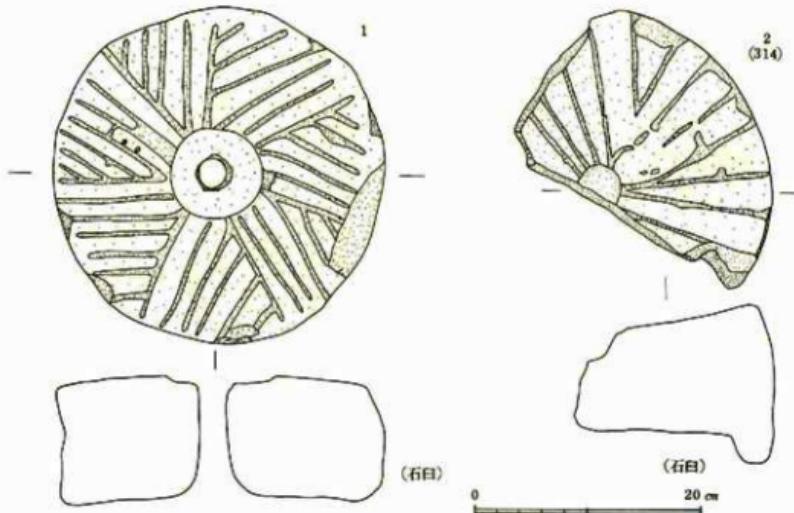
## 配 石

1号配石 84グリッドにあって、直径約1m、深さ約40cmの土壇を石で埋めてある。石の大きさは約40cmから拳大である。ここから4号溝と30号溝が、また東に集石列が続いている。

配石の中から石臼が1個出土した。



第12図 1号配石実測図(1:40)



第13図 1号配石・61グリッド出土遺物実測図(1:5)

**2号配石** 建物や溝等の遺構群から離れて74グリッドで検出した。規則性がないので、備蓄しておいたものか捨てたものかも知れない。

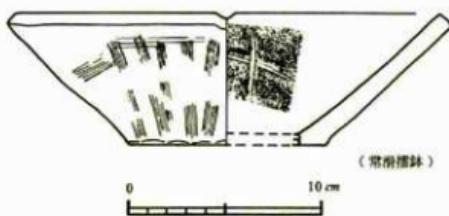
**3号配石** 1号配石の北にあり、意図的に並べたものかどうか若干疑問がある。  
遺物は出土しなかった。

**4号配石** 3号配石の更に北にあって、その状態は3号配石に似ている。  
遺物は出土しなかった。

## 列 石

**1号列石** 遺跡の南西隅にあり、長さは約17mである。旧状を留める部分は少ないが残された部分で判断すると列石の面は南にあったようである。

擂鉢の破片が1片出土した。



第14図 1号列石出土遺物実測図

**2号列石** 1号列石の北にある12号溝の底にある。これは1号列石が崩れ落ちたのかも知れない。遺物は出土しない。

## 集 石 列

**1号集石列** 中央北側にある約9mの暗渠排水施設(冷抜き、水道)である。直径5cmくらいの丸太に石を立てかけて、さらにその上に拳大の礫をのせている。この種の暗渠排水施設や若干形態の異なるものも他にあったが、代表的な1号集石列だけ掲載した。

遺物は出土しなかったが、時期は江戸時代か、それ以前になろうか。

**2号集石列** 北西隅にある69号溝の中とその西端にあって、幅50~60cm、長さ約6.3mで大小の石によって構成される。石垣が崩落したもののように、12号列石と同時期であったかも知れない。遺物は出土しなかった。

## 溝 と 遺 物

掘立柱建物址と重複している。複雑に枝があり、溝幅も広い所は3m近くあり、狭い所は

20~30cmであり、深さも一定していない。しかし自然に掘られた溝とは考えられない。

遺物は陶器、土師質土器、瓦質土器などが出土した。陶器は69号溝から天目茶碗破片が、64号溝から14~15世紀の瀬戸天目釉を施釉した灯明皿が出土した。土師質土器は46、64、69号溝等から破片が出土した。これらは他に比較してやや器肉が薄く、口唇部が尖っている。

中にはわずかに有段状のものや底の中央部が凹んでいるものもあり、この遺跡から出土した土師質土器に共通している点を有している。瓦質土器は火鉢と思われるものの底部、口縁部破片と擂鉢の底部破片が出土している。



(土師質・皿)



(天目茶碗)



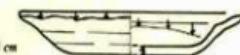
第15図 69号溝出土遺物実測図



(土師質・皿)



(土師質・皿)



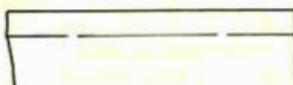
(瀬戸天目釉・灯明皿)

第16図 64号溝出土遺物実測図

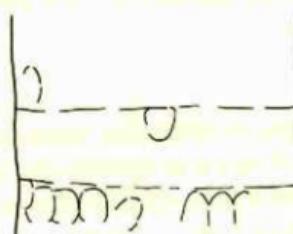
擂鉢は内部の条線が擦り減  
っていない。

他に瓦質の内耳土器の内  
耳部分が出土している。

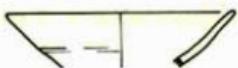
その他に74グリッドから  
瀬戸天目釉の急須形陶器胴  
部があるが、15~16世紀に  
なろう。また121グリッド  
から16世紀の瀬戸天目茶碗  
の半分が、また111グリッ  
ドからも同時期の瀬戸天  
目茶碗の底部が出土している。  
51グリッドからは、江戸時  
代末期の灯明皿の破片も出  
土している。



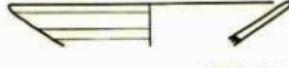
(土師質・内耳)



(土師質・内耳)

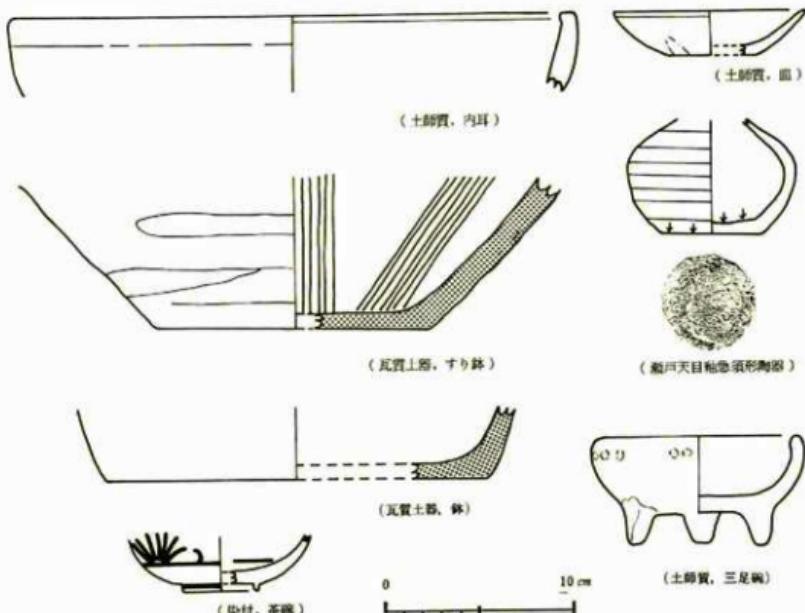


(土師質・皿)

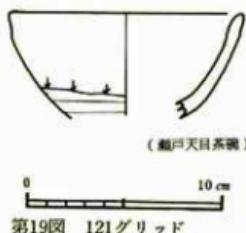


(土師質・皿)

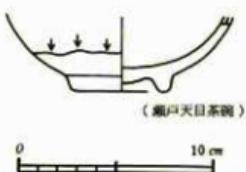
第17図 46号溝出土遺物実測図



第18図 74グリッド出土遺物実測図



第19図 121グリッド  
出土遺物実測図



第20図 111グリッド  
出土遺物実測図

遺物からみた藏福遺跡について若干考察を加えておこう。

土師質土器の皿類は、勝沼町の岩崎氏館跡（13世紀頃と推定されている）と同町勝沼氏館跡上層（16世紀中葉）出土の皿類の間の形態に比定出来ると考えられる。ただ器肉の厚さ、口縁部胸部が有段状になっている点などは、岩崎氏館跡出土の皿によく似ている。陶器類は瀬戸、美濃系と考えられるので、14世紀以前には遡らず、14世紀から16世紀末までであろう。また磁器類は染付がそのほとんどを占め、これらは中国の明（1368～1615年）代製作品であるといふ。

以上から考えると藏福遺跡は、出土した早期の土師質土器に与えられる年代（13～15世紀）から、美濃黄瀬戸の終る14世紀から16世紀初頭の間と思われるが、15世紀的要素の方が多いと言える。

この他特殊遺物に木製品、青銅製品等がある。主なものをあげると次のとおりである。

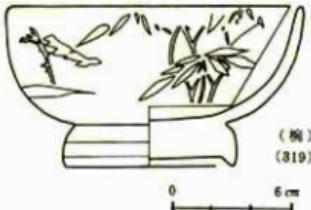
42グリッドから人骨らしい物を伴出した。67号溝からは、

漆塗り椀が2個出土し、材質はナラ、クヌギ類で、2個とも内面は黒塗り、外面は黒地に朱で山を遠景とし、近景に広葉樹を配している。51グリッドで出土した下駄は材質はノグルミで、鼻緒の穴はやや内側に片寄り、横緒の穴間は狭い。女性用であろうか。41号溝から出土した、有孔方形板は長辺が15cmあり、孔は7mmである。品名は不明であるが、民俗例としては、これに棒をつけて、醤油や味噌を造る際に桶の中をかき廻す用具に似ている。

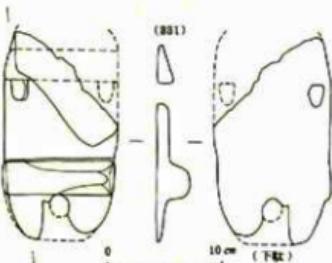
これに似る円形板も73グリッドから出土している、直径13cmで中央に凹みがあり、材質はオニグロミカ、サワグルミ類である。



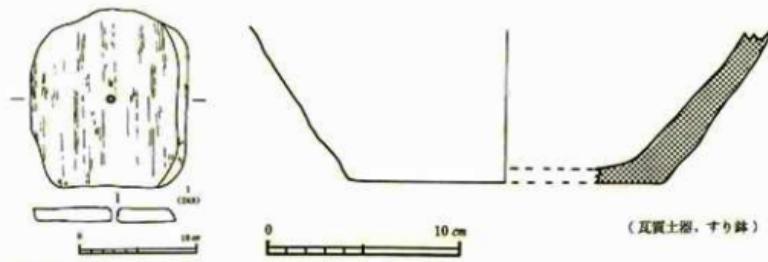
第21図 67号溝遺物出土状況(1:40)



第22図 67号溝出土遺物実測図

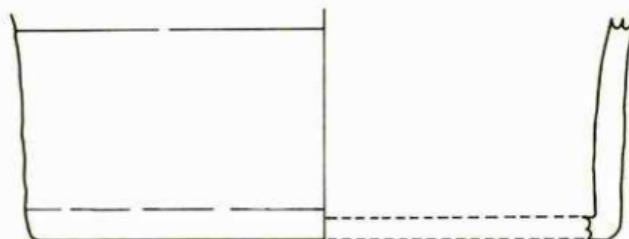


第23図 51グリッド出土遺物実測図(1:5)



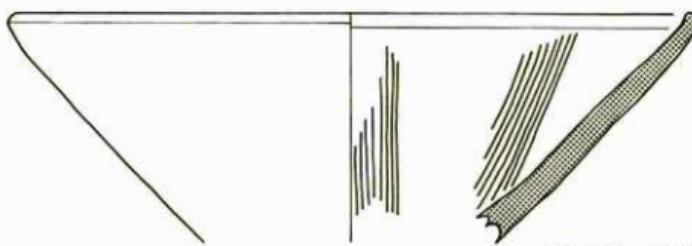
第24圖 41號溝出土遺物  
實測圖(1:5)

第25図 59号溝出土遺物実測図

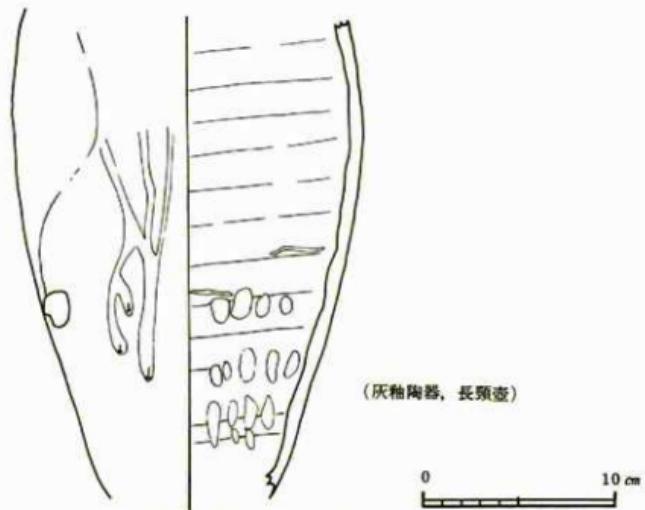


第26図 11号溝出土遺物実測図

(土師質、内耳)

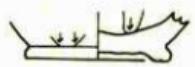


(瓦質土器、すり鉢)

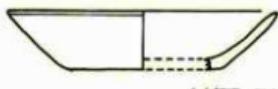


第27図 12号溝出土遺物実測図

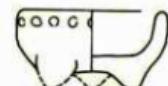
(灰釉陶器、長頸壺)



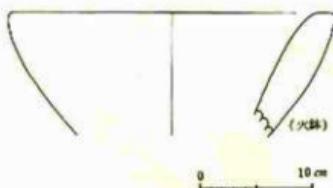
第28図 42グリッド出土  
遺物実測図



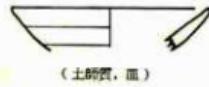
第29図 83グリッド出土  
遺物実測図



第30図 84グリッド出土  
遺物実測図



第31図 84グリッド出土遺物実測図



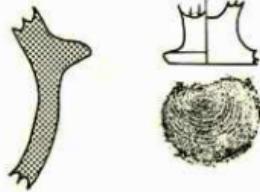
（染付、皿）



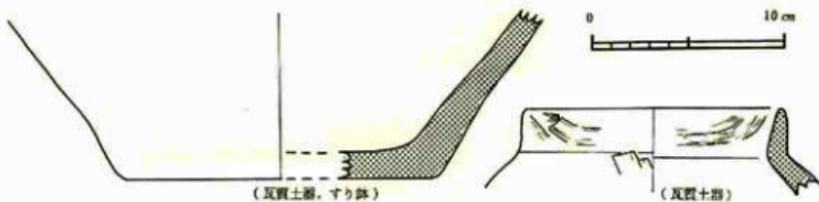
第32図 123グリッド出土  
遺物実測図



（瓦質土器、羽蓋）



（瓦古）

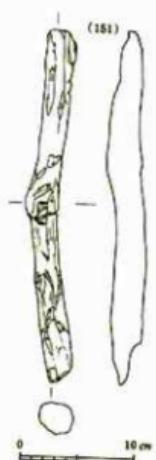


（瓦質土器、すり鉢）

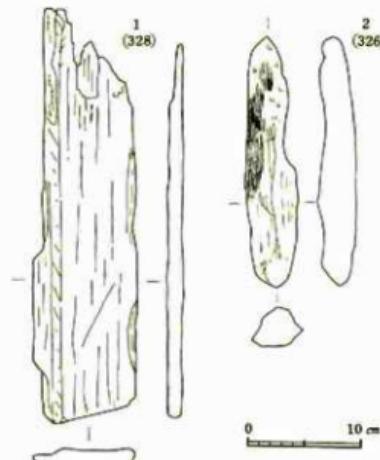


（瓦質土器）

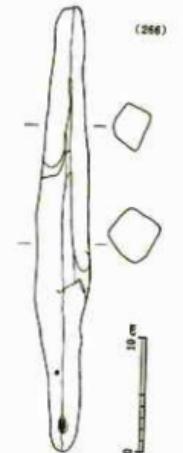
第33図 102グリッド出土遺物実測図



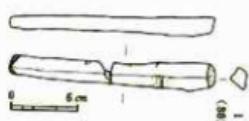
第34図 2号溝出土  
遺物実測図



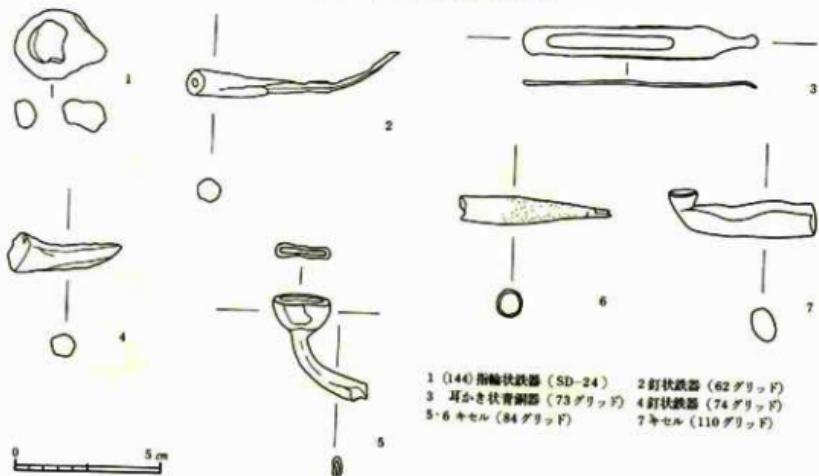
第35図 67号溝出土遺物実測図



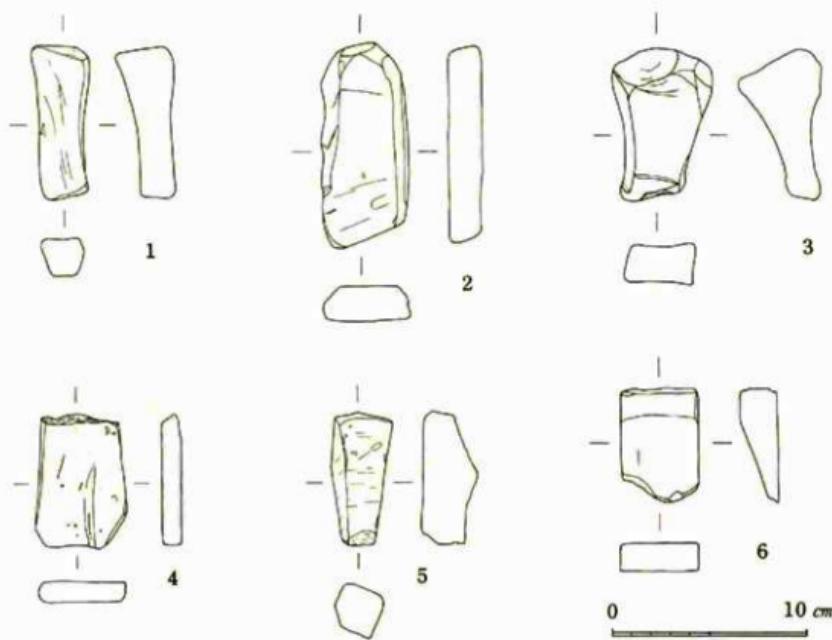
第36図 83グリッド出土  
遺物実測図(1:5)



第37図 62グリッド出土遺物実測図

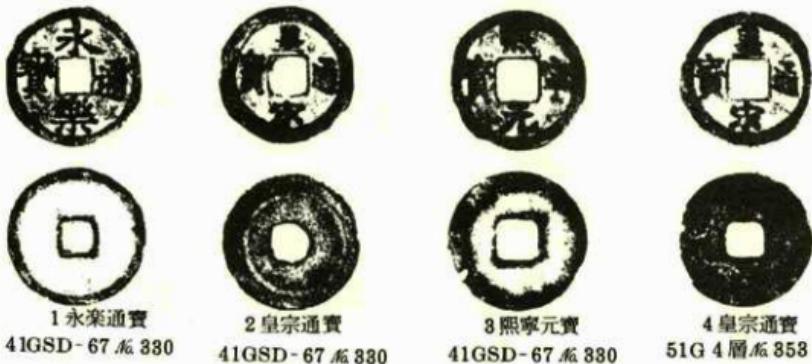


第38図 鉄製品実測図(1:2)



第39図 砥石実測図 (1:3)

1. SD-1 (154), 2. SD-64 (302), 3. 72グリッド (268)  
4. 73グリッド (212), 5. 74グリッド 6. 74グリッド



第40図 錢貨拓影



5 景德元寶  
61G 5層 #316

6 圓通寶  
62G 2層

7 文圓通寶  
78G 3層

8 圓通寶  
78G 3層 SD-46  
#208



9 圓通寶  
78G #262

10 開元通寶  
74G 3層

11 永樂圓通寶  
84G 人骨の上 (1号集石) ①

12 圓通寶  
84G 人骨の上  
(1号集石) ②



13 元圓通寶  
84G 人骨の上  
(1号集石) ③

14 圓通寶  
102G

15 永樂通寶

## 第5章 増福山利最寺の関係資料について

一般的に知られる資料を掲載しておく。

1、『甲斐国志』巻77、仏寺部第5、八代郡小石和筋では次のとおりである。

増福山利最寺（増利村）同宗同末黒印三百廿四坪、本尊・釈迦、  
創造未審<sup>さう</sup>、旧牌一基增生院利山淨運居士元暦二（乙巳）年  
六月十五日 伝・云 田谷大納言ト云、人本村ニ來、住セリト、  
其旨趣ヲ知ラズ世、亂ヲ避ケシ人ナルベシ、文様中真言・規ヲ  
改・テ当宗トナルト云、

注「同宗同末」は「曹洞宗竜安寺末」の意である。

2、『甲斐国社記・寺記』第3巻では次のとおりである。

上 八代町増利村曹洞宗 利最寺

覚

- |          |                                    |
|----------|------------------------------------|
| 一、本堂     | 豎七間 横五間                            |
| 一、廊下     | 豎式間 横七間                            |
| 一、庫裡     | 豎七間 横四間                            |
| 一、雪隠     | 豎式間 横七間                            |
| 一、境内黒印   | 三百廿四坪                              |
| 一、開闢     | 開闢之儀記録無之ニ付相分リ不申候事                  |
| 一、開山宗印和尚 | 寛永三丙寅年四月二十八日入寂仕<br>当曆造式百四拾三年ニ相成申候事 |

四奉行黒印証文之写

御寺内覚

三百廿四坪 増利村之内

右御寄進候国家之御祈念寺中御造営肝要候重而御朱印申調可進之候以上

桜井安芸守信忠書判

慶長八癸卯 石原四郎右衛門尉昌明書判

三月朔日 小田切大隅守茂富書判

跡部九郎右衛門尉昌忠書判

理西寺

右之通相違無御座候以上

慶應四戊辰年 八代郡米倉村竜安寺末

七月 同郡増利村

曹洞宗 利 最 寺圓

寺社御役所

3、『八代町誌』（昭和50年、八代町役場）では次のとおりである。

1、所在地 八代町増利門ノ内1,762番地

1、宗派 曹洞宗竜安寺末

1、本尊 祀迦牟尼仏

脇士 文殊及普賢菩薩

1、鎮守 白山権現

1、開基 内藤資料に「増生院殿利山淨蓮大居士 是ハ往古五内人ニも候外田谷大納言と申伝へ当所ニ住居被致候より当村元祖之人也と申伝候得共当寺ハ勿論村内ニテも書記等一向相見へ不中然共当村元祖之人成と申伝へ候元暦二巳年6月15日逝去」とある。

1、開山 鉄山宗印。寛永3年（1626）4月28日遷化。ただし内藤資料は六月とあり。

1、開闢 享禄元戊子年…当山の記録 一に云永禄2未年創立…東八代郡誌 創造八年曆相知不申候……（内藤資料・甲斐国志）

1、境内 163坪

1、旧寺領 境内324坪 黒印地

甲斐志料集成は302坪

横徒戸数 19戸

利最寺檀徒に末木氏を名乗る1戸があり、その墓地に次の1基がある。

正面	田多信濃守之奥 紋 理西寺殿法雲常慶大禪定尼 祖先累代諸精靈位高顯	紋は丸にタカの羽ちがい
----	-----------------------------------------	-------------

右面 元暦元年辰6月

（筆者註・墓誌名「田多」は「田谷」のことであろう）

左面 大正14年3月 末木強藏建之

また末木氏の屋敷付近を田谷屋敷と言い伝え、豪族の屋敷であるといふ。

以上のように増生院殿、理西寺殿の役年や伝説からも、開山の時期は12世紀後半と考えることが出来そうであるが、この遺跡と現利最寺と関係あるとしても、遺物の上では年代がかけ離れていると考えざるを得ない。

また文禄時代の改宗が現在地に移転した時期だとすれば、遺物の年代決定が出来る資料となる。

第2表 藏福遺跡出土の種核

番号		遺物出土遺構 またはグリッド	巾 Wide	長 Long	厚 Thick	$\frac{L}{W}$	備考
1	オニグルミ	41G S D—67N.320			1.20		5. 欠損、炭化
2	モモ	41G S D—67N.325	1.95	2.835	1.45	1.45	14. 自生
3	オニグルミ	41G S D—67N.327					2. 半分以下に欠損
4	モモ	52G 表土	1.455	2.18		1.50	11. 自生、内側欠損
5	モモ	52G 表土	1.98	2.30	1.56	1.16	11. 自生
6	モモ	83G 2層	1.70	2.20	1.40	1.29	10. 自生
7	モモ	83G 2層	2.00	2.62	1.43	1.31	10. 自性、尖端が少し欠損
8	モモ	84G 3層	1.68	2.20	1.33	1.31	18. 自生、炭化 欠損
9	モモ		1.80	1.97	1.06	1.09	12. 自生
10	モモ		1.36	1.925	1.20	1.42	12. 自生
11	モモ	51G	1.77	2.05	0.74	1.16	半分、側部欠損
12	モモ	51G	1.53	2.20	1.00	1.44	欠損
13	モモ	51G	1.52	2.15	1.27	1.41	
14	モモ	51G	1.56	2.24	0.77	1.44	半分
15	モモ	51G			0.66		半分、ひどく欠損
16	モモ	51G					周辺炭化、ひどく欠損
17	モモ	51G	1.70	2.49	0.65	1.46	半分
18	モモ	51G	1.86	2.57	0.73	1.38	半分
19	モモ	51G		2.07	0.67		半分、側面欠損
20	クルミ	51G	2.64	3.50	1.29	1.33	半分
21	モモ	52G	1.83	2.68	1.29	1.46	欠損
22		52G	1.56	1.33	0.78	0.85	種核名不明
23	モモ	73G溝の中	1.35	1.91	1.22	1.41	
24	モモ	73G溝の中	1.81	2.03	1.06	1.12	少し欠損
25	モモ	73G 3層	1.93	2.27	1.39	1.18	
26	モモ	73G 3層	2.00	2.56	1.52	1.28	
27	モモ	73G 3層	1.42	2.26	1.01	1.59	
28	クルミ	73G 3層	2.62	3.05	1.20	1.16	半分
29	ヒメグルミ	73G 3層		2.19	0.70		欠損
30	モモ	74G 3層			0.79		欠損、炭化
31	ヒメグルミ	74G S D—23②			0.89		欠損
32	ヒメグルミ	74G S D—23③	2.39	3.28	1.20	1.37	半分

番号		遺物出土遺構 またはグリッド	巾 Wide	長 Long	厚 Thick	$L/W$	備考
33	モモ	84G溝中E5	1.66	2.10	1.23	1.27	
34	モモ	84G溝の中E5	1.84	2.50	1.30	1.36	
35	モモ	84G溝の中E5	1.98	2.46	1.45	1.24	
36	モモ	84G溝の中E5	2.27	2.785	1.66	1.23	
37	モモ	84G 2層	1.59	2.21	1.23	1.39	24.
38	マツカサ	74G S D-23②		3.28	1.35		炭化

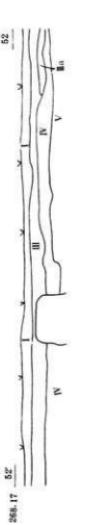
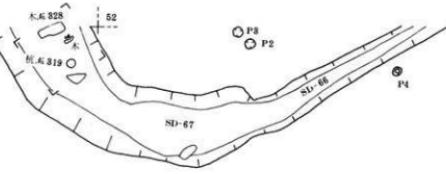
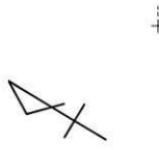
(注) 1~10 市河三次教授鑑定

第3表 藏福遺跡出土木材の識別結果

出 土 遺 構	遺 物 名	試 料 名	遺 物 名	材の構成要素		組織の主な特徴	樹種
				放輪木道水系放輪板 射方向 粗糸 織紋経管道通路	広 平直射出 葉物 通路 名		
D-3	N.145	31	木片	00000	広	散孔材、通管孔単独一房状、径中、分 布密、放射組織細胞複列	カツラ、ホオノキ
SD-67	N.319	17	桿	00000	広	環孔材、道管径大、やや火炎状、放射 組織の幅は大	ナラ、クメガ類
SD-4	N.328	42	板	○ ○	計	らせん肥厚なし、放射組織細胞高低い らせん肥厚なし、放射組織細胞高低い	セミ、シラベ類
73G	N.260	41	柱	00000	計	道管配列や放射状、径大~小、放射 組織単列細胞高い	シイノ倒し、ナラ クメガの可能性あり
SD-12	N.352	39	杭	○ ○	計	仮道管径小、年輪移行緩、放射組織細 胞高や高い、らせん肥厚なし	セミ、シラベ類
52G		69	木片	00000	広	散孔材道管孔房状、径中~小、分布中 木織維径小、年輪移行緩	オニグルミ、トチノキ
73G	N.258	34	柱	○	計	木口面のみ、樹脂細胞が認められない 仮道管径小、年輪移行緩	セミ、シラベ類
73G	N.253	36	柱	○ ○	計	N.34に近似するも樹脂細胞垂直樹脂道 らしきものが認められる	マツ類又はセミ 類
83G	N.266	40	杭	00000	広	環孔材、道管径大~小、火炎状配列、 放射組織単列	クリ、シイノ倒しナラ クメガの可能性あり
83G	N.264	32	木の根	00000	広	散孔材道管孔単独——徑房状、径中、 分布密、放射組織細胞複列	カツラ、ホオノキ
51G	N.331	14	げた	○ ○ ○	広	環孔材、道管径大、道管孔単独へ房状 柔組織接続状、放射組織幅中	ノグリミ
73G		15	杭	00000	広	散孔材、道管径小、單独~房状、放射 組織細小、單列~複列	フジミ、ヤナギ、トチ ノキ、ホオノキ
73G 3	N.240	16	丸い板	00000	広	散孔材道管孔小、單独~房状、分布や 粗で放射状、放射組織細胞	オニグルミ、サ サワグルミ類

## 第6章　ま　と　め

藏福遺跡は中世後半の寺院址と考えられる。遺構は中央道路線外の下（西）か上（東）に広がっていると考えられ、今回の発掘した範囲は極く限られた部分で、しかも遺物の編年も、一般化されていないため充分な考察は出来なかった。主な遺構は掘立柱建物、配石、集石列、溝群や墓壙があり、遺物は土師質土器、陶器、磁器や木製品があり、この中には仏具も含まれている。現増福山利最寺に関する洪水伝説もある遺跡である。



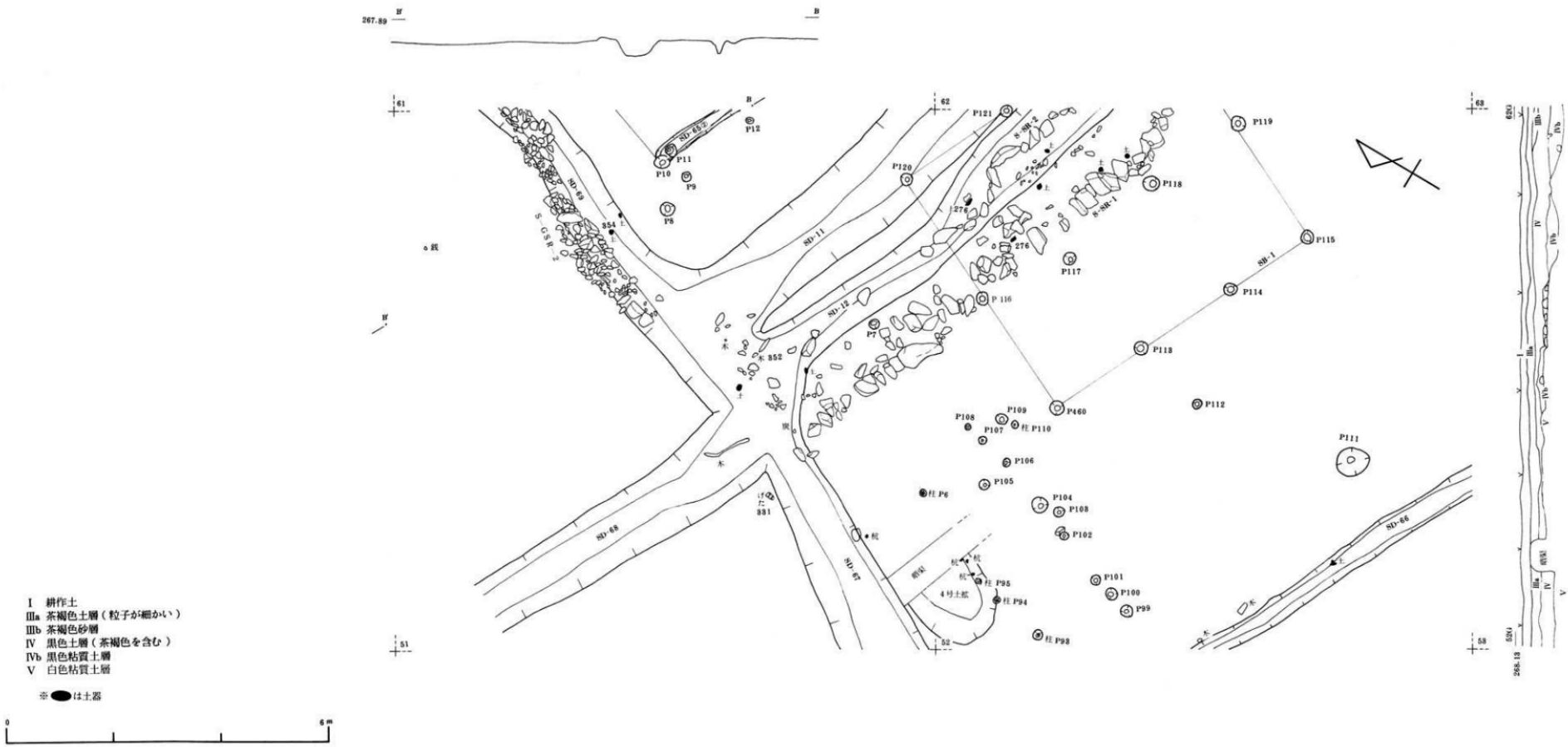
- I 耕作土  
III 茶褐色土層（粒子が細かい）  
IIIa 茶褐色砂層  
IV 黒色土層（茶褐色を含む）  
V 白色粘質土層

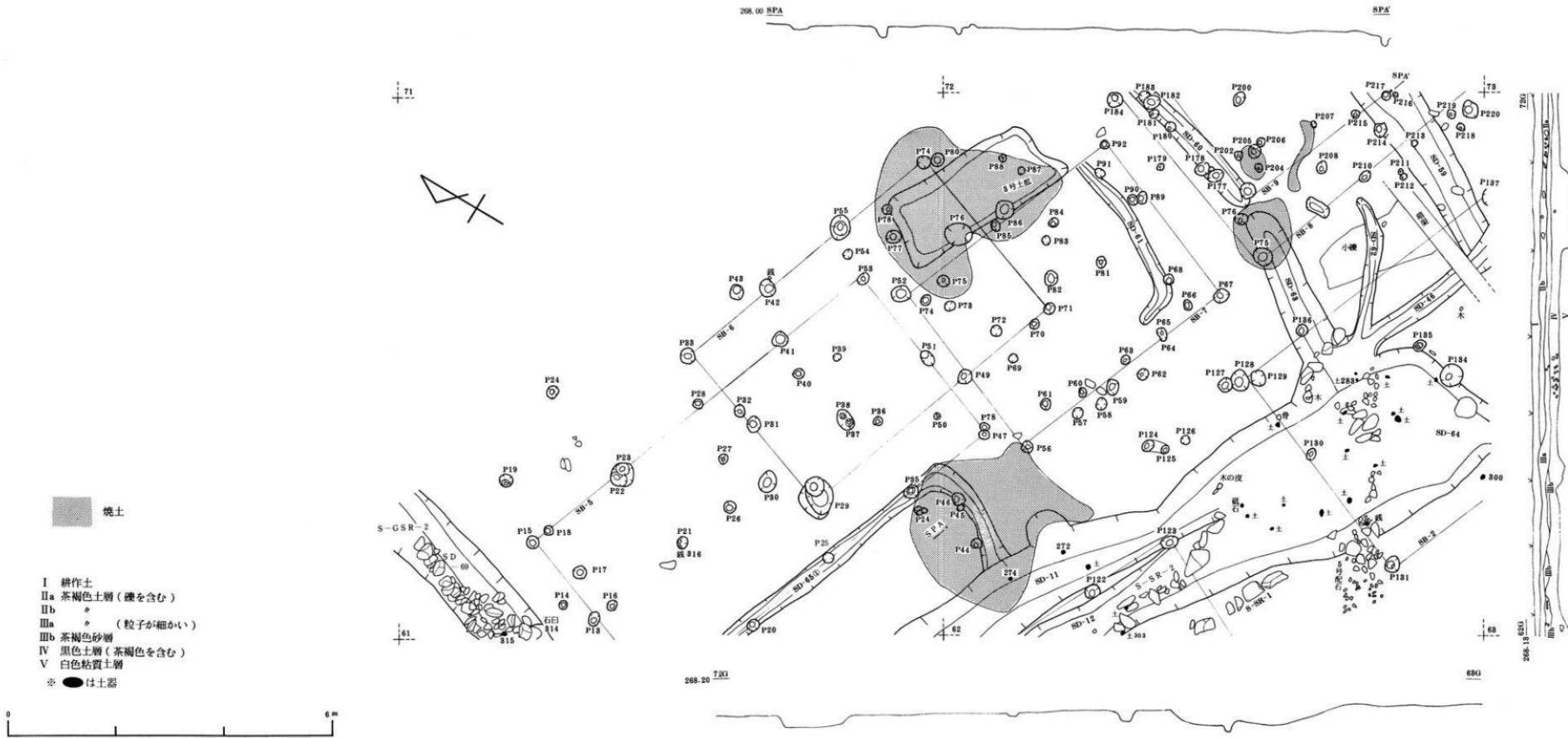


+ 41 -

+ 42 -

+ 43 -





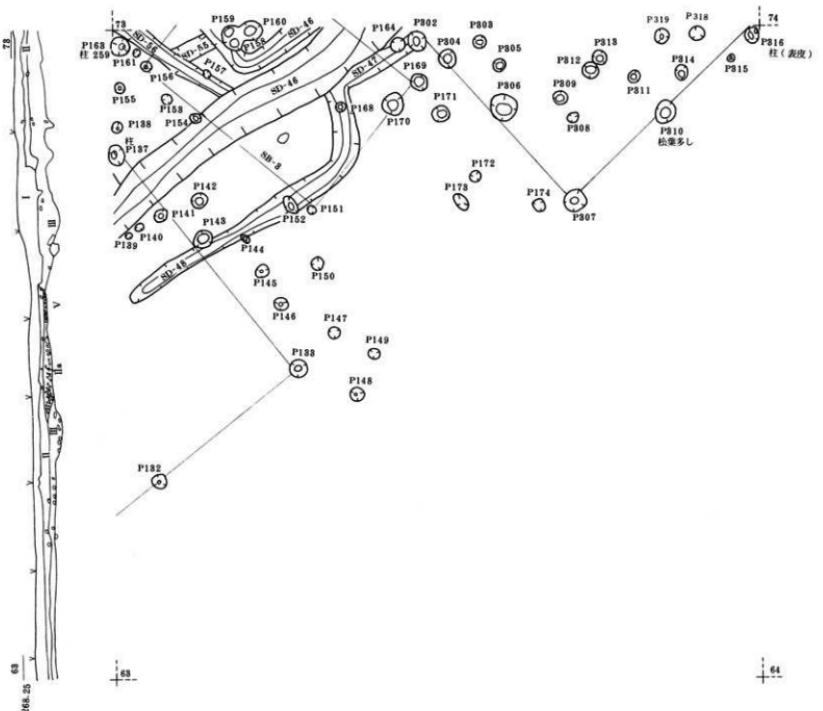


+ 65

+ 64



+ 75



- II 苦褐色土層  
 IIa " (礫を含む)  
 III 黒茶褐色粘質土層  
 IV 黑色土層  
 V 白色粘土砂層 (砂層に酸化鉄を含む)  
 ※ ●は土器



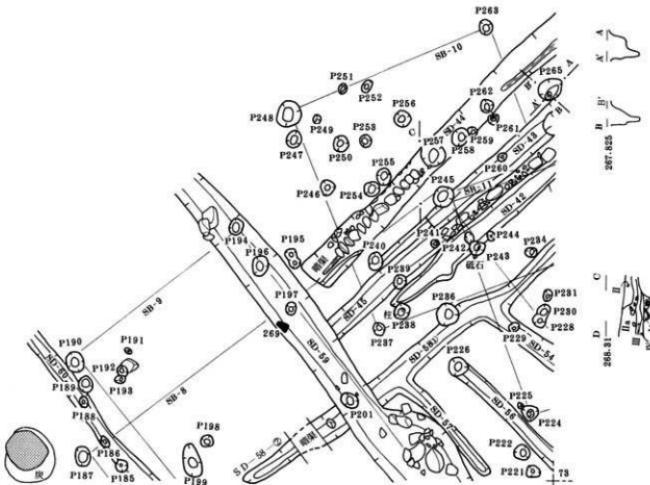
+ 71 -

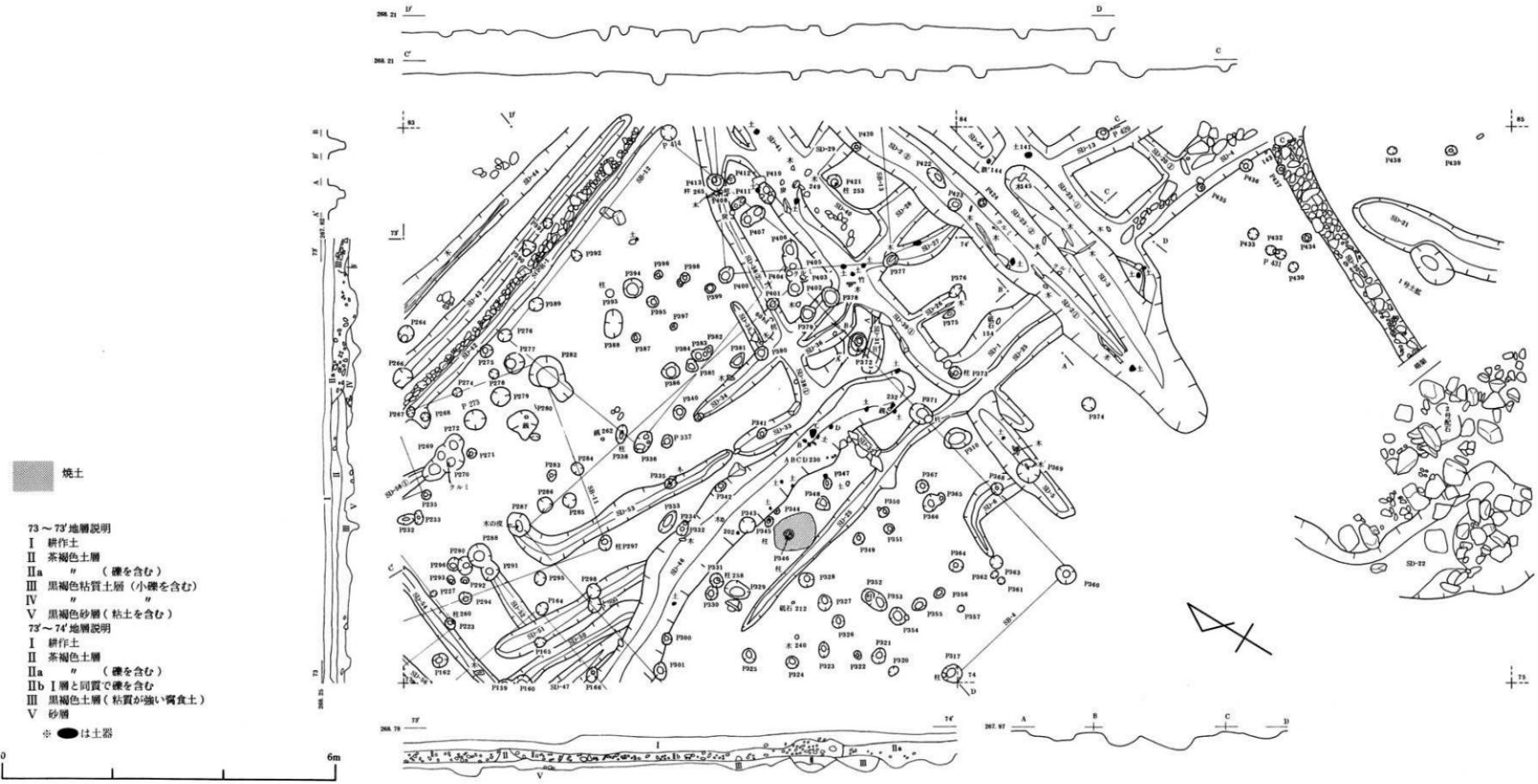
+ 81 -

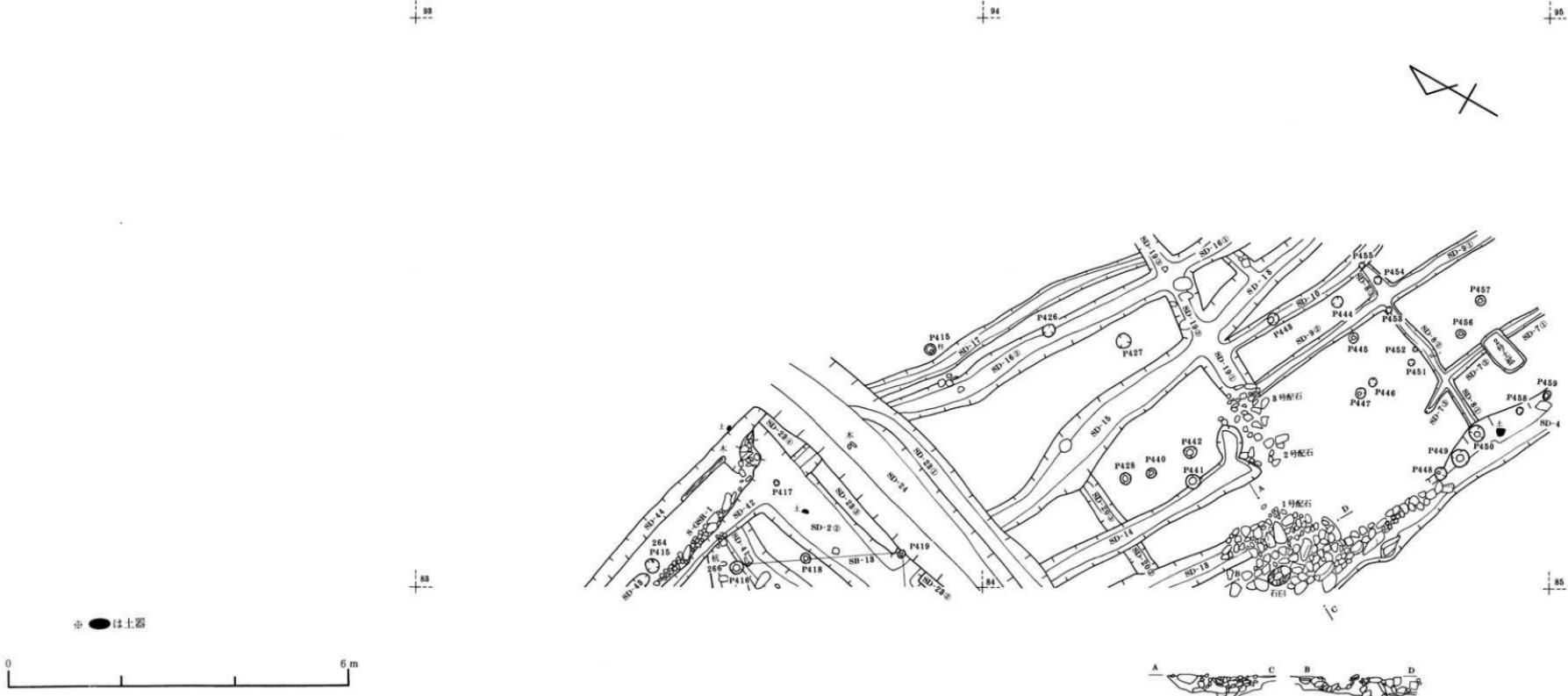
+ 72 -

+ 82 -

+ 88 -







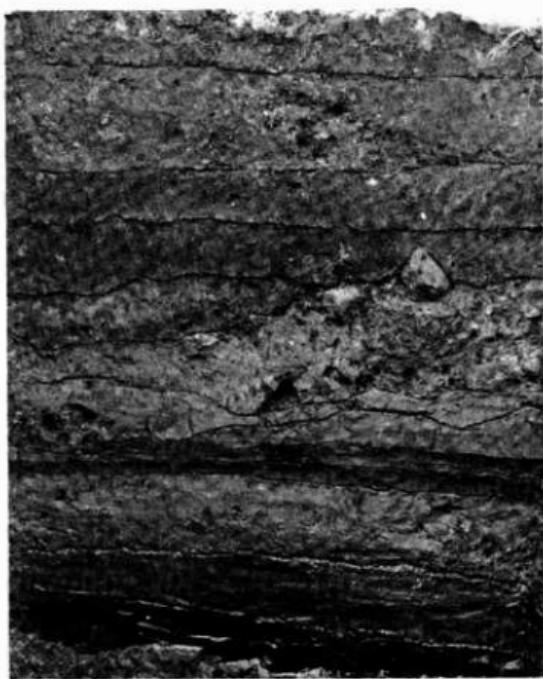
# 図 版

圖版  
1



藏福遺跡全景

9号試掘セクション





全 景 西方より



全 景 東方より



51グリッド - 62グリッド付近



63グリッド - 73グリッド付近

圖版4

二号集石列



一号集石列



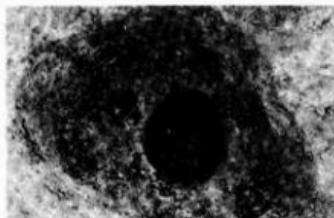
柱穴と柱



一号列石



柱穴

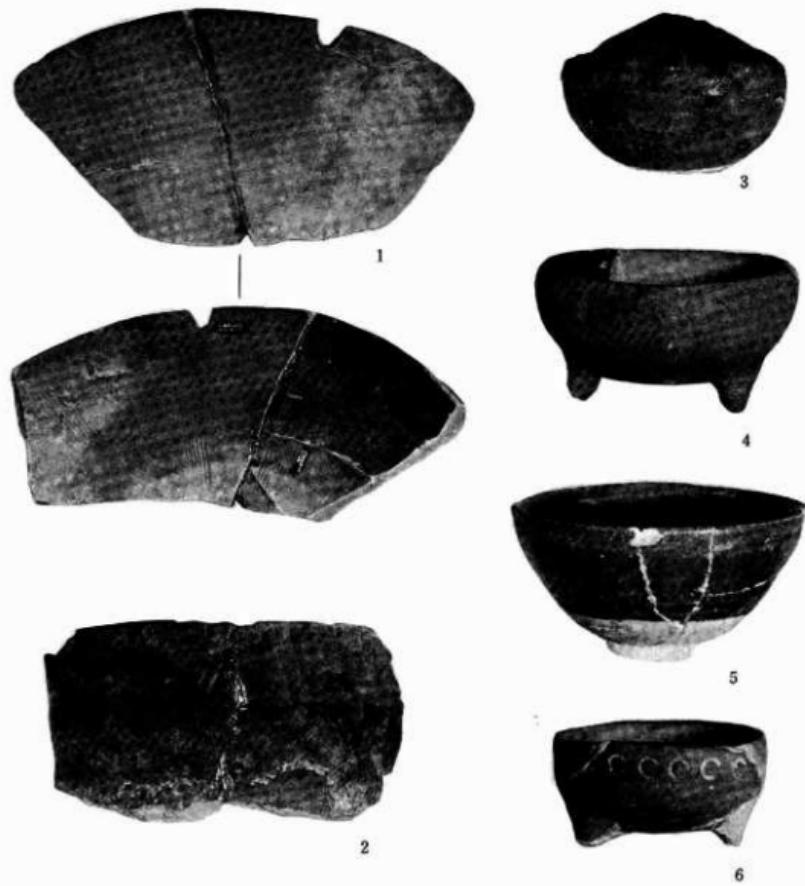




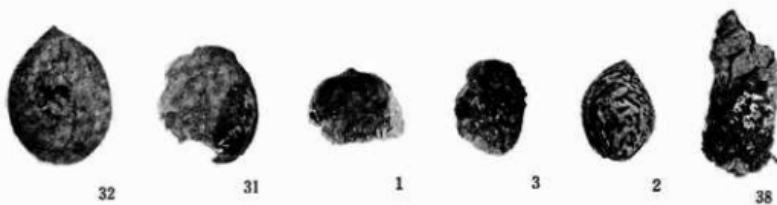
1号配石



67号清 遗物出土状况

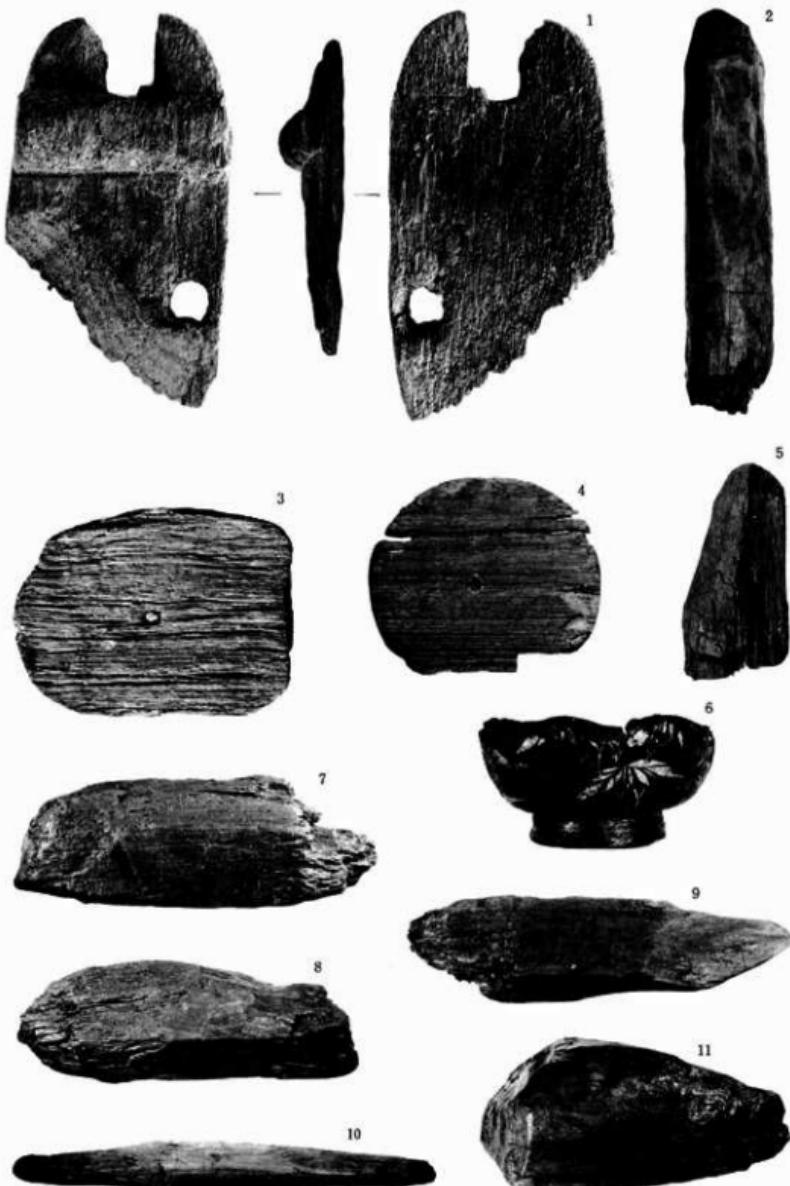


64号溝  
12号溝 } (1) 46号溝(2) 74グリッド (3~4) 121グリッド(5) 84グリッド(6)

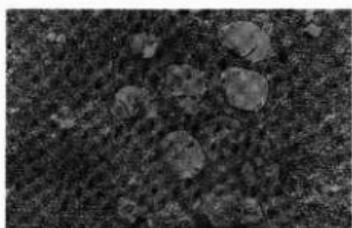


67号溝(1~3) 23号溝(31) 2号溝(32) 23号溝(38)

図版7 出土木製品

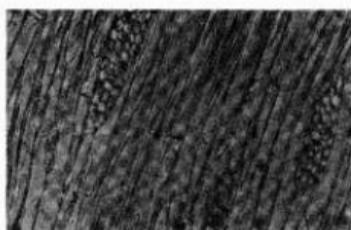


51グリットF(1) 71グリットF(2) 41号溝(3) 73グリットF(4,5,7,8) 67号溝(6) 12号柱(9) 83グリッド00  
42グリットF(10)

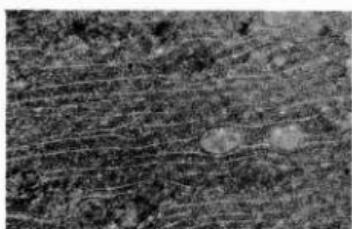


木口 32×

14

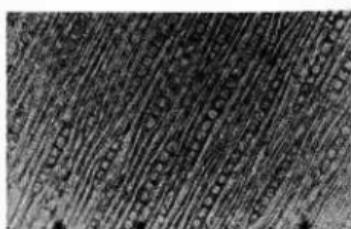


板目 115×

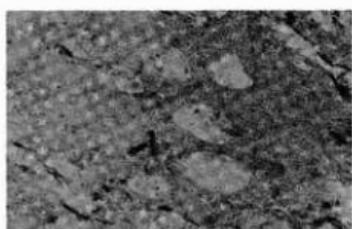


木口 32×

16

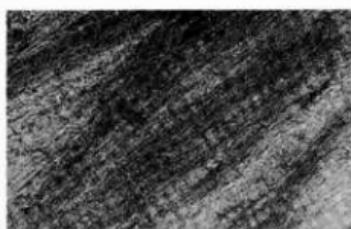


板目 115×

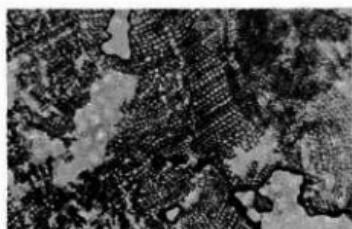


木口 32×

17



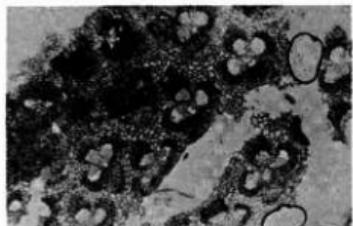
板目 115×



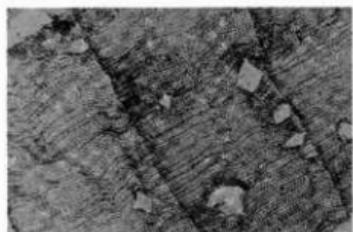
34 木口 32×

18

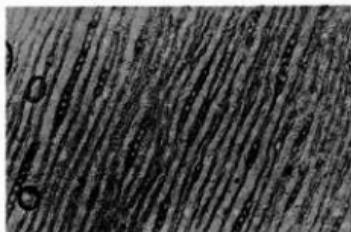
番号は P 27 の資料 No. と同一



35 木口 32×



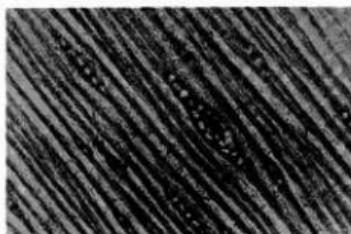
木口 32×



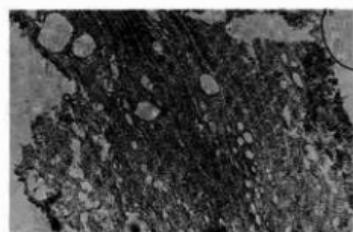
板目 115×



木口 32×



板目 115×



木口 32×



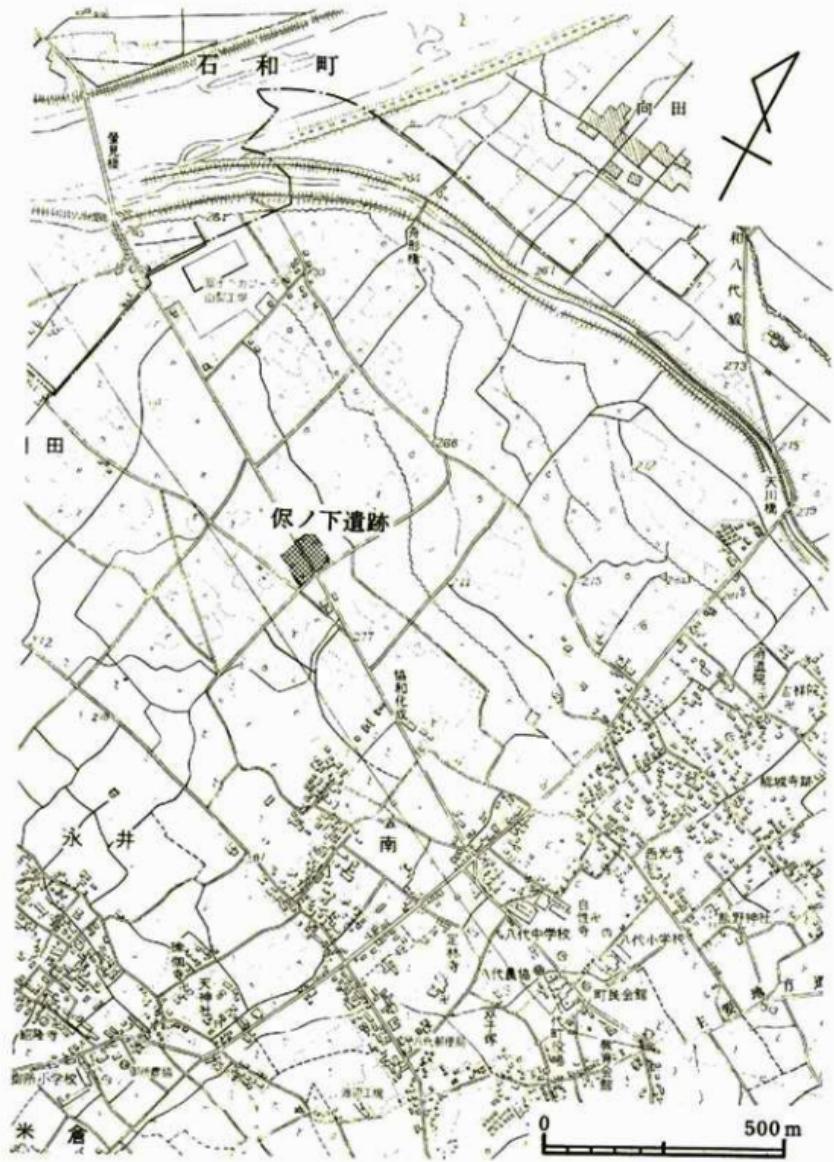
板目 115×

番号は P 27 の資料 Na と同一

圖版 10  
出土  
錢貨



# 但ノ下遺跡



第1図 保ノ下遺跡付近図

### III 保ノ下遺跡

#### 第1章 遺跡の位置と環境

##### 第1節 位 置

遺跡は東八代郡八代町南字渋田2717番地、2660番地とその周辺にあって、中央道中心枕S・T・A・N491の西と北に広がる。東経138度37分53秒、北緯35度36分26秒の位置にある。

相対的位置は、甲府市から南東約8kmにあって、県道上芦川甲府線に接している。東300mに南部落、北700mに笛吹川の支流である天川が西流し、西900mに笛吹川が南流している。また南1,200mの地点に藏福遺跡がある。笛吹川は下流で釜無川と合流して、富士川となり太平洋に注いでいる。

晩秋から春にかけては、雪をいただいた雄大な八ヶ岳を北西に、南アルプスを西に眺望出来、手前に甲府盆地の沖積地が続いている。

##### 第2節 環 境

###### イ、自 然 環 境

保ノ下遺跡は甲府盆地南東部にある浅川扇状地の末端にある。

浅川は甲府盆地の東から南に連なる御坂山脈から流出している。御坂山麓は、八代町と境川村が接する付近で、地形が大きく2区分されている。すなわち、八代町南部から南西は曾根丘陵が市川大門町まで続き、境川村北部から北東は、勝沼町までいくつかの標式的な諸扇状地が続いている。浅川扇状地はこの中の最も発達したものの一つである。

『八代町誌』(地形と地質、桂田保、八代町、昭50)によると、浅川扇状地は門林を扇頂として約70度に開く扇形をした地形で、その先端は北、南、永井、米倉などの集落の密集した地域の北西側に小さな急斜面をつくっている付近までであるという。

この扇状地の上は、かつて浅川が洪水のたびに流路を自由に変えて流れ、山地から流れが急に緩やかになったため、その運搬量が衰えて多量の土砂を堆積した、とあり、さらに、保ノ下遺跡付近で笛吹川の冲積層となるという。この冲積地では南区新浜、大間田、増利付近の低湿地で地下水位が高く各所に自然湧水も見られる。ここはかつては笛吹川の氾濫原であった地域であり、標高は255~280mで笛吹川の河床とほとんど同じ高さの地帯である。また冲積層については、増田のボーリング資料(井8)によると、地表より45mまで薄い砂礫層を挟む青色粘土層が存在する。これが笛吹川の冲積層であり、浅川の新扇状堆積層と交互に重りながら上部は扇状堆積層を被っている。浅川や天川の運んでくる砂礫が現在も冲積層の上に堆積を続けている。冲積層の形成は、ここ一万年くらいの期間であるという。

以上のように、JRノ下遺跡は浅川の新扇状地の末端か、これよりやゝ低い、笛吹川の沖積地上にあるといえる。

次に遺跡付近の微地形についてふれておく。

遺跡が位置する扇端の勾配は1000分の25（傾斜角1.4度）である。ここは直径300mくらいの扇形に張り出した微高地になっていて、遺跡はその中心線の最も高い場所に占地している。すなわち、南200mでは比高1.7mくらい低く、幅60m程の谷になっていて、浅川の旧河道と思われる地形を呈する。北200mも比高2mくらい低くなり、そのまま北面傾斜となって、天川に続いている。この200mくらいの地点では日本武尊が東征した時通ったと言う伝説のある若彦路があり、ウスのシミズと言う古い伝承のある湧泉がある。この付近から西に向って、低い谷が形成されている。西50m下は、等高線が平行する地形となり、スプリングラインがある。ここから下は笛吹川の現冲積地となるのであろうか。またここから南西（下）200mに、中心点をもつ直径100mの円形をなす湿地帯がある。この湿地帯は、JRノ下遺跡の時期である弥生時代から古墳時代にかけて、水田として開発され、集落の経済的基盤となつた可能性もある地帶であり、また、この西方に広がる大間田部落の地名の起源になった場所であるかもしれない。（前掲『八代町誌』考古、森和敏）

#### 四、歴史的環境

JRノ下遺跡出土の遺物は古式土師器、石器を主とするが、弥生式土器も少し含まれる。また、中世、近世の陶磁器類も出土しているが、ここでは、弥生時代から古墳時代にかけての時期に主眼をおいて歴史的環境を概説する。

本県甲府盆地における弥生時代の遺跡は、過去の分布調査では、盆地の周辺部に多く分布しているように見られたのであるが、近年における発掘調査等の成果では、必ずしもそうではないと考えられる要素もわかってきた。すなわち、甲府盆地低地に一般的にみられる微高地や八ヶ岳山麓の高地にも発見されてきたのである。JRノ下遺跡の場合は盆地周辺部にあたる遺跡と考えてよさそうである。

古墳時代前期の遺跡も10年くらい前までは、知見例が極めて少なかったのであるが、近年各地で発掘や発見が相次ぎ、激増する傾向にある。やはりその所在地は弥生時代遺跡のある自然環境と同様な場所にある。

一方、前期古墳は、甲府盆地東部に集中している。堅穴式石室を有する前期古墳のうち柳形町上宮地所在の物見塚古墳を除いてはすべて盆地東部にあり、その数はおおよそ17基とみられている。

中道町に建設中の風土記の丘（曾根丘陵公園）で発見された弥生時代終末から古墳時代に比定出来る100基を越す方（円）形周溝墓から、順次同町米倉山にある小平沢古墳（前方後方墳）、風土記の丘地内の大丸山古墳（前方後円墳）、銚子塚古墳（前方後円墳）へと続くと考えられている。

以上のように、甲府盆地では東部が前期古墳の栄えたところであるので、それに比定され

る古墳時代初頭の五領式土器を出土する遺跡も多いと考えなければならない。

銚子塚古墳から北へ5kmの地点にある木道跡付近には、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺跡や、銚子塚古墳に続く時期のものとみられる古墳がある。

弥生時代後期遺跡では、木道跡の1km以内に10か所を越える遺跡がある（ただし古式土師器出土遺跡も若干あるかもしれない）。

本遺跡も『八代町誌』にある分布に載っているものである。本遺跡の西200mの県道沿いから、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が出土しており、また20m西からも同時期と思われる土器が出土している。これらは本遺跡に含まれるものであろう。また300m西の笛吹川河床下8mからもほぼ同時期と思われる土器も出土している。（前掲『八代町誌』）。

また保ノ下遺跡の近くには前方後円墳である狐塚古墳、团栗塚古墳や岡銚子塚古墳などがある。

## 第2章 調査の経過

保ノ下遺跡の発掘調査は、昭和55年12月1日に開始し、同56年3月6日に終了した。日曜日と祭日を休み、延約4ヶ月にわたって行なった。

発掘予定面積は約9,000m<sup>2</sup>であったが、このうち遺構を検出した範囲は約1,500m<sup>2</sup>である。

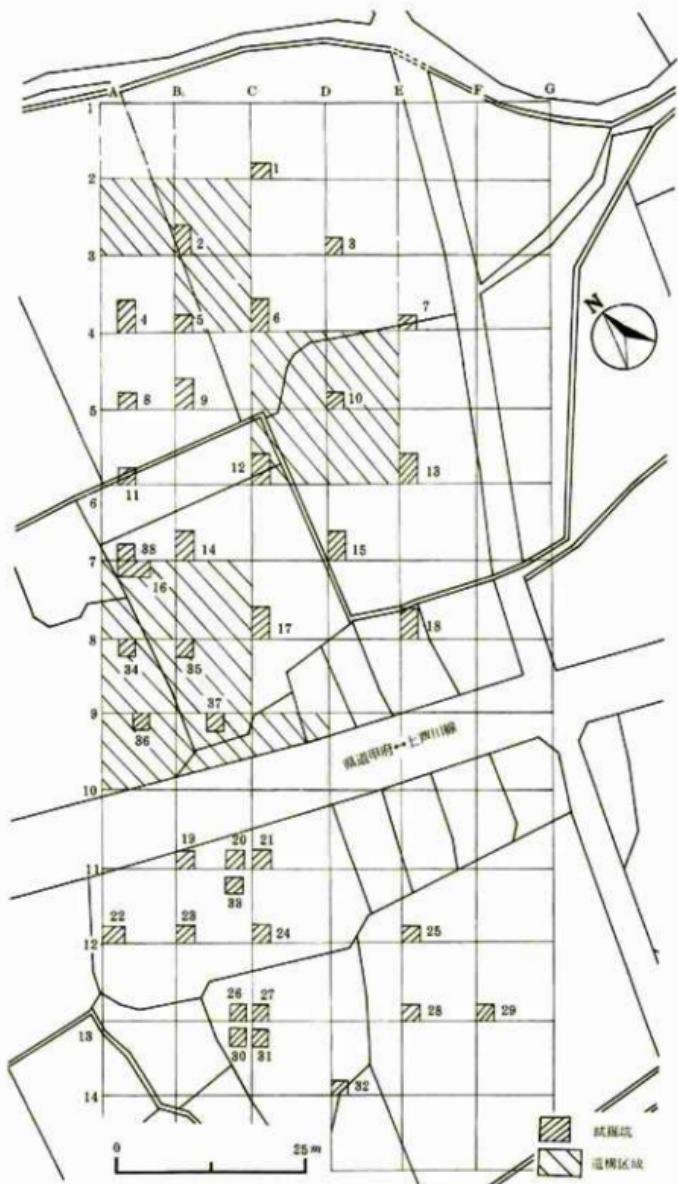
地区全域に、中央道の中心杭を基準としてグリッドを設定した。グリッドは10m×10mの大グリッドをつくり、この中をさらに2m×2mの小グリッドに分割した。その名称は図のとおりである。

11月にバックホーで数ヶ所試掘をして、発掘計画を立案しておいたので、これを基本として進行した。7-Aグリッドの試掘で五領式土器が出土したので、まずここの表土を除去し、拡張していく。7・8・9-A・Bグリッドでは、弥生時代末期から古墳時代初頭に比定出来る土器片や石器が表土とその下層からかなり出土したが、遺構は1月下旬まではほとんど検出出来なかった。県道南側は1月下旬から試掘を始めたが、若干の遺物が出土しただけで遺構はなかった。

主要遺構を検出した順に掲げると次のとおりである。

1号配石を12月下旬に発見し、その後拡張をした。これが遺構か否かを決定する充分な条件に欠けるが、後述するように一応遺構と見做しておきたい。この直上から石鏡が1点出土した。

2月5日に9-Bグリッドで、1号土壇を黒色土中から検出した。7・8・9-A・Bグリッドに集中して検出した古墳時代初頭の遺構を発見した最初のものであった。入れ越しになつた台付甕や木片がここから出土した。この1号土壇に続く1号、2号、3号溝などを検出するとともに、土器や木片、炭化した草などが出土した。20日に3号土壇から、本県では始めての有頭木器が発見された。不規則な形状をした溝とこれに連がる土壇であって、浸透



第2図 僧ノ下遺跡グリッド配置図

水が出てきたため、順序よく発掘出来なかつた。2月27日に五領I式期の1号住居址を検出した。発掘開始以前に重機で行なつた試掘でその一部が破壊されていたが、あまり記録上では支障をきたさなかつたと思われる。3月4日に2号掘立柱建物址を検出した。柱穴の地層は泥炭層だけであつた。

JRの下遺跡では、遺構を主に2~3月に検出した。甲府盆地では、1月下旬から2月上旬が最も寒く最低気温が零下10度以下に下ることもあり、2月から3月にかけては八ヶ岳おろしといわれる身を切るような季節風が度々吹き、それが一日中吹き荒れる日もある。この中を水びたしになりながらの調査であったので、充分な記録が出来なかつた。

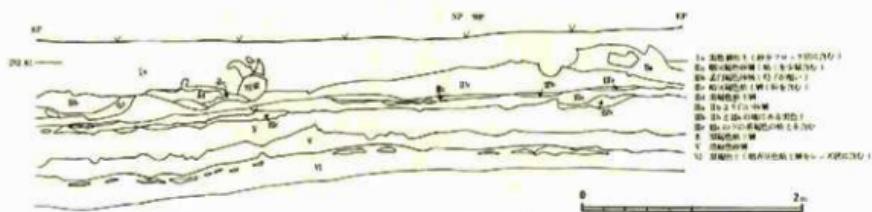
発掘調査速報「JRノ下遺跡」を次のとおり発行した。

No.1 昭和56年1月31日

No.2 同 6月23日

### 第3章 層序

JRノ下遺跡付近は、平均1.4度くらい西に傾斜する。近年は桃畑などに作付転換されているが水田であったため段段畑となつてゐる。地図上から見るとここは条里製造構の中にあるので水田耕作の歴史は古いとみられる。これが地層に現われており、グリッドの区画線、Bライン・8ライン・9ラインベルトの水平になつてゐる線が水田の床土面（水田面）であると考えられ、多い場所では現地表面を除いて3本あり、最下層では深さ50cmである。これらのベルトの地層はすべて地表から遺構直上までの間のもので、その下層はそれぞれの遺構に伴う地層図やエレベーション図で示した。試掘坑16では深く掘り1号住居址の包含層である第Ⅱ層より下まで示した。試掘坑14も深く掘ったが遺構包含層はどれに当るかわからない。



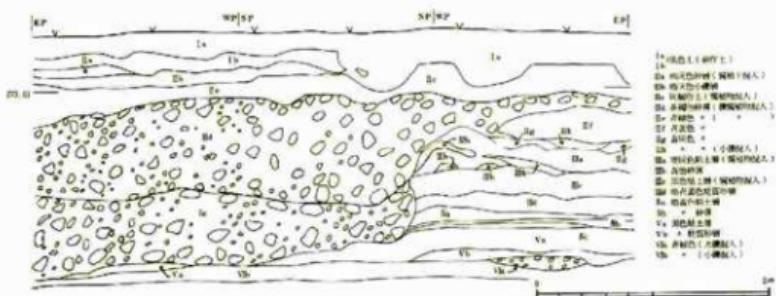
第3図 14号 試掘坑地層図 (1:50)

各地層図の番号は扇状地特有の乱れている地層であるため統一が出来ないので、必ずしも同一番号が同一地層ではないことを断つておく。

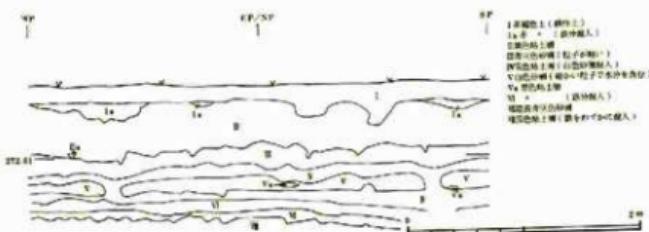
遺構面では、傾斜はおおよそ南東から北西に向つており、すなわち10Bグリッドから7Aグリッドに向つて低くなつてゐる。遺構のある地域から東方約30mでは、試掘坑18（第4

図) のように 140cm に及ぶ氾濫層があることから、ここがかつては河道になっていたと考えられる。II f 層の上に氾濫層が載っているので、ここに集落が営まれた 4 ~ 5 世紀に近い時期には浅川が流れていた可能性がある。

また遺構包含層やその上下には、所によって草とみられる植物が著しく多く堆積していた。



第4図 18号試掘坑地層図(1:50)

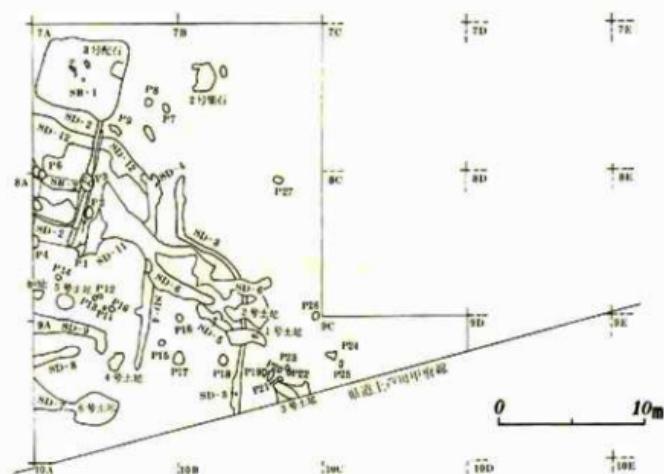
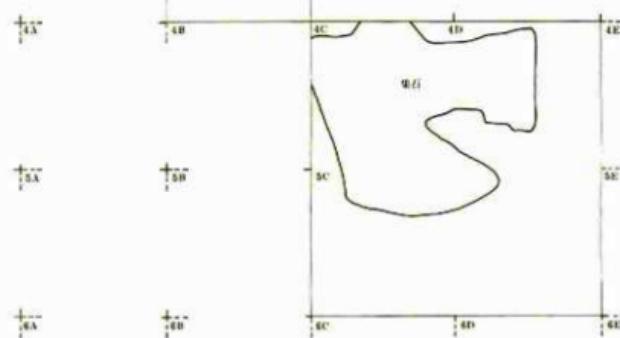
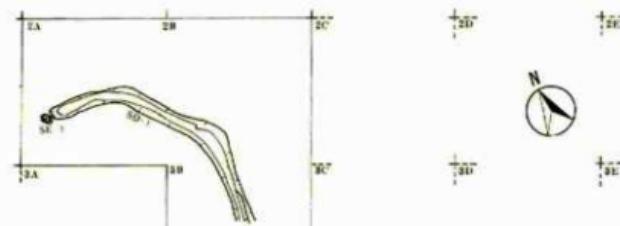


第5図 24号試掘坑地層図(1:50)

#### 第4章 遺構と遺物

弥生時代から古墳時代にかけての土器が出土しているが、この区分は五領式土器以後を古墳時代として取扱うこととする。また石器として使用されたと考えられる自然石が多量に出土した。これらはその出土状態や使用痕から石器として取扱った。

また弥生式土器が出土した遺構は 1 号土塗と 6 号溝だけであるが、これに続く溝や他の土塗等も同時期に掘られたものであると考えられる。しかし弥生式土器を伴出しなかったので、すべて古墳時代の項に入れて説明を進める。

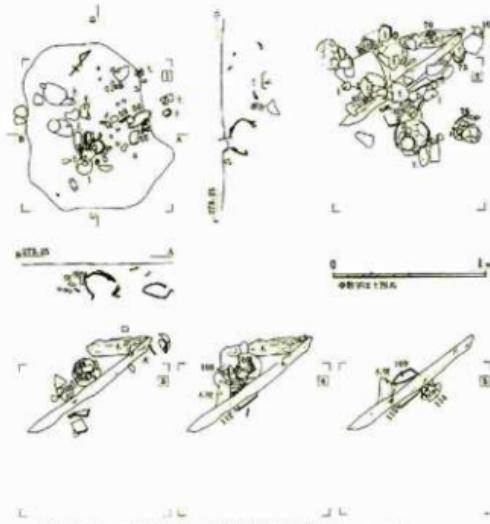


第6図 保ノ下遺跡遺構全体図

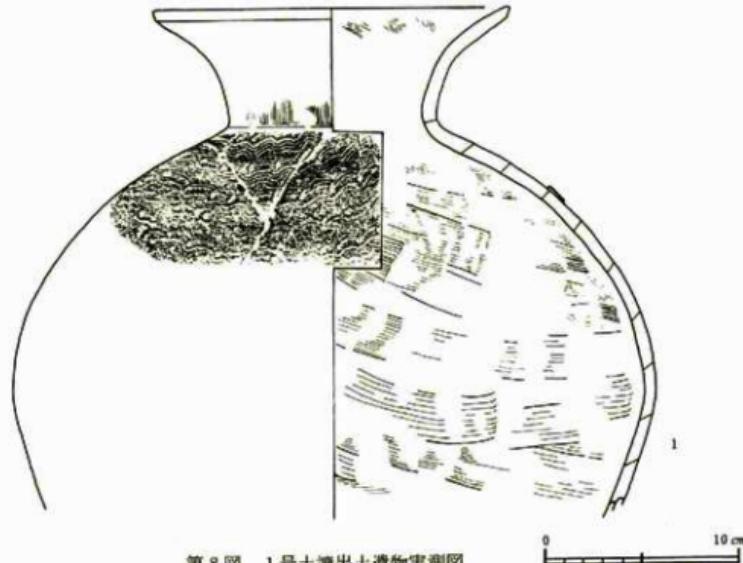
## 第1節 弥生時代の造構と遺物

### 1号土壇

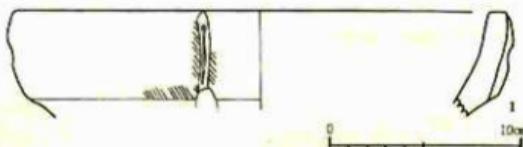
前述したように弥生式土器が出土した造構はことごとく6号溝だけである。第7図のように土壇の底から木器（完全に腐食していたので取り上げ不可能であった）と第8図の壇の上半部が伴出した。壇は破片になっていて、櫛目痕を地文とし、肩部にボタン状浮文が2個ある弥生時代終末期のものである。木器は長さ約1m、太さ約7cmの棒状で両側が削られている。この上層からは多量の五領式土器が出土しているから、引き続いて使用されていたと考えられる。



第7図 1号土壇発掘段階別実測図 (1:40)



第8図 1号土壇出土遺物実測図



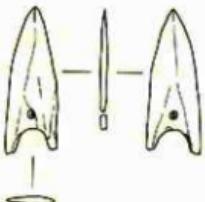
第9図 6号溝出土遺物実測図

#### 6号溝

最も大きく、複雑で不規則な溝である。詳細は古墳時代の項で説明する。遺物は、棒状浮文のある土器口縁部破片が1片出土しただけである。

#### その他

集石の上層から石漠が出土した。粘板岩製でよく研磨されていて、長さ5cm、厚さ2mmである。



第10図 石漠実測図

## 第2節 古墳時代の構造と遺物

遺構が、遺物の出土状況だけでは、弥生時代と古墳時代のどちらかに構築、使用されたのかは決定できなかった。また土壙と溝のつながっているものは、その形態で2者を区分するのに明確な根拠はなく、便宜上分けたものである。

遺物のうち土器は、ほとんど古墳時代初期の五領式に属するものである。

石器はすべて自然石で、かなり同じ形状をしたもののが多量にある。これらは生活直上や覆土上で出土し、使用痕とみられるものも多いので石器とみなした。

#### 住居址と遺物

1号住居址 溝群の北端にあって、前述した薄と重複していないから、溝と同時期に存在していたことが考えられる。

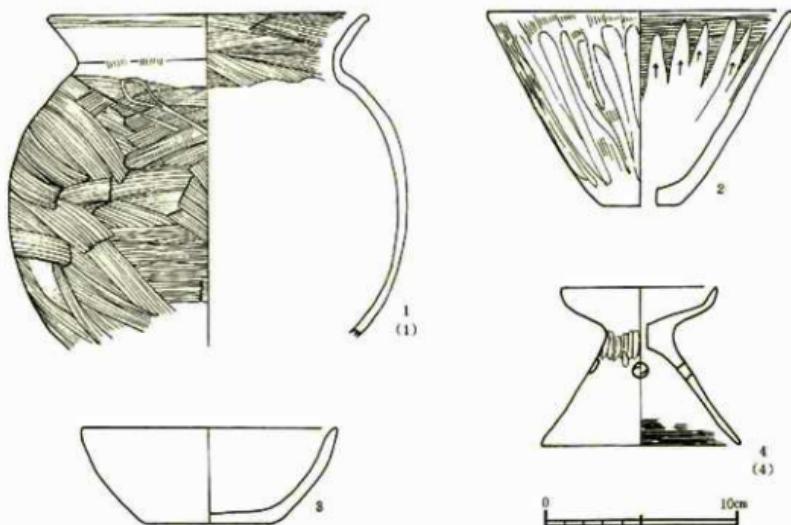
第33図16号試掘坑の地層にみられるように、第Ⅱ層黒色腐食土層を掘り込んで構築されていて、第Ⅲc、Ⅲd、Ⅲe層は掘込みであろう。

住居址の北側から西側に、壁から内側60cmまで溝状に深さ約5cmの掘り込みがあり、西側の2つの柱穴へと続いている。南側には配石らしいものが伴う土壤がある。No.1、2、4の土器が出土している。西側中央部に、配石のような遺構があるのは、炉址であるかもしれない。しかし焼土は伴わない。西側では狭く浅い2号溝で切られているが、黒色土中の切合関係のため、その前後関係は判明できなかった。

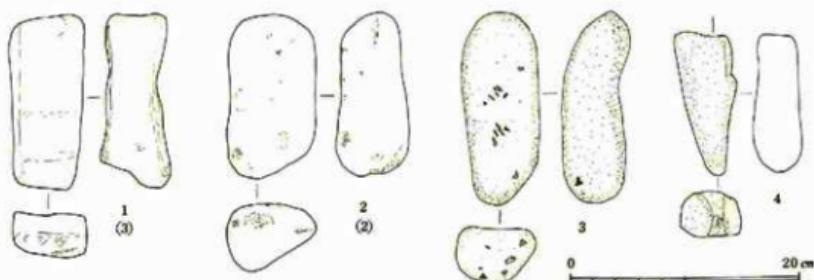
遺物 土器及び石器が出土している。このうち床面直上から出土したものは、型土器N<sub>o</sub>2とN<sub>o</sub>1の石器だけで他は覆土から出土した。

甕の上半部N<sub>o</sub>1は単純口縁で口縁の刷毛目は少ないので五領式くらいに比定出来る。瓶、高杯、器台も五領式の初期に多い形態を有する。他に五領式台付甕の底部や壺の底部と考えられる破片も出土した。

石器は4個出土した。3個は手で握れるくらいの細長い大きさで、先端に使用痕と思われる摩耗した跡がみられる。N<sub>o</sub>1は両面が研磨されている砥石である。



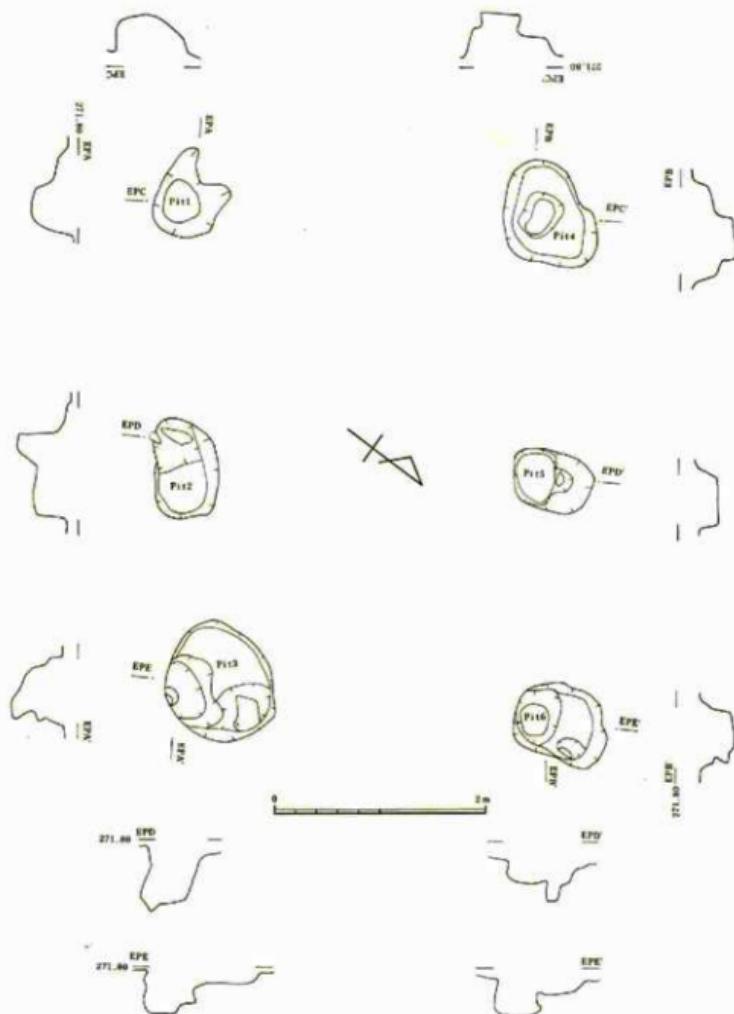
第11図 1号住居址出土遺物実測図(ただし3は上層出土)



第12図 1号住居址出土遺物実測図(1:5)

### 掘立柱建物址

2号掘立柱建物址 1号住居址と並んであり、溝と重複している。長軸は南-66°-西で、2柱間（4.67m）、1柱間（3.48m）ではほぼ東西に長い、南向きの建物といえる。

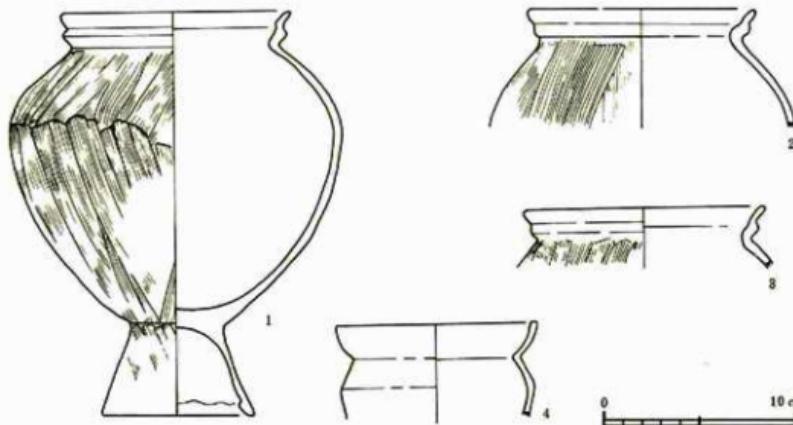


第13図 2号掘立柱建物址実測図

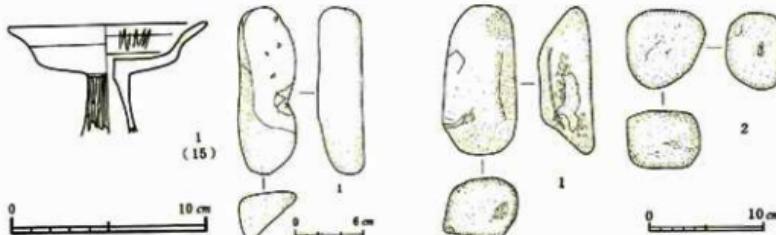
### 溝と遺物

溝は形態上から二大別できる。その1は幅が狭くて浅い一定したもの、その2は幅が広くて深いが、変化が多く、土壌に統くものである。両者の前後関係は、黒色腐食土中で切合っていたため、平面上からも、地層でも見分け難く、決定出来なかった。また両者ともその機能も明らかに出来なかった。

遺物は2号溝からは、壺と思われるものの底が出土した。3号溝からは、小型丸底壺と思われる口縁部とS字状口縁をもつ台付壺が出土した。4号溝からは器台脚部、高环坏部と、内・外面に赤色顔料が塗付された碗や石器が、また5号溝からはS字状口縁をもつ台付壺と壺の下半部や石器が、6号溝からは器台脚部と前述した弥生式土器の口縁部及び石器が、7号溝からは壺と思われるものの底部が、8号溝からは小型丸底壺と思われるものの口縁部が、10号溝からは壺と思われるものの底部がそれぞれ出土した。これらはすべて五領式期に比定されるものであろう。



第14図 3号溝出土遺物実測図



第15図

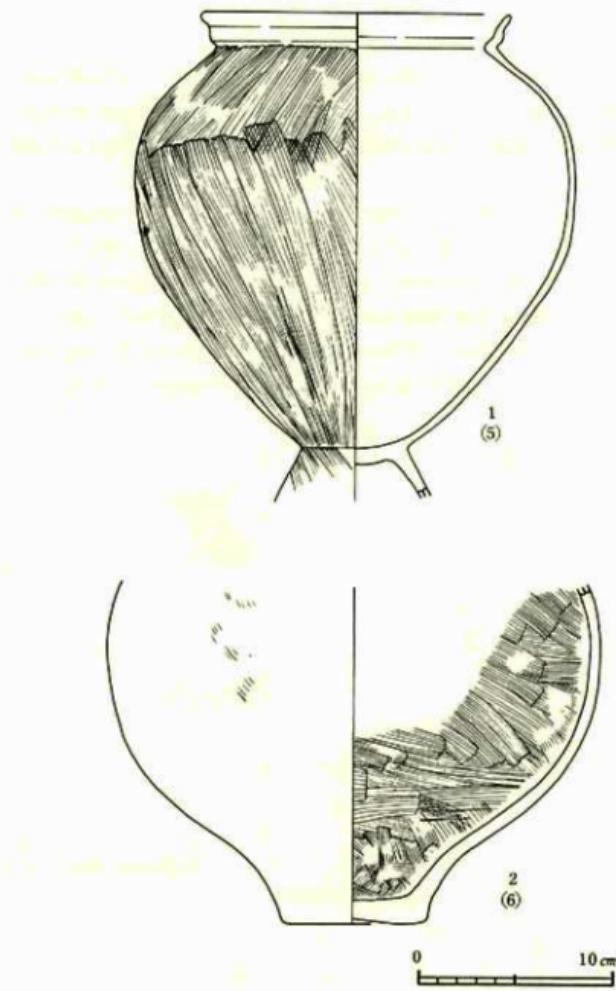
4号溝出土遺物実測図

第16図

4号溝出土遺物実測図  
(1:5)

第17図

6号溝出土遺物実測図 (1:5)



第18図 5号溝出土遺物実測図

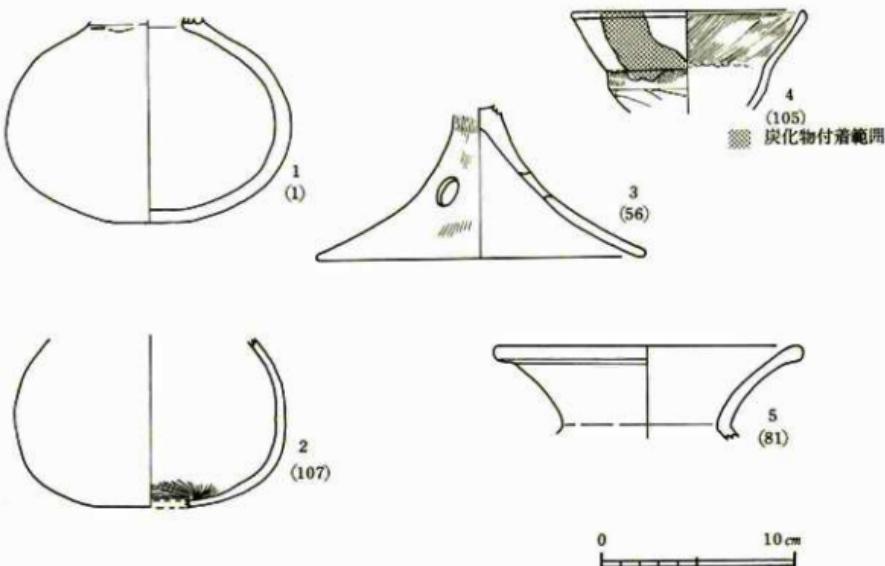
#### 土壤と遺物

1号土壤 土器、石器が集中して出土した。特に土器が出土した土壤はここだけである。土器は、前述した弥生式土器口縁部をはじめ、S字状口縁をもつ台付壺が、完形品と破片で11個体分、小型丸底壺が2個体分、壺が1個体分、高杯が1個出土した。この内、第20回実形の台付壺N.1の中にN.3が入れ越しになっていたので、特殊な土壤に集中して遺物を捨てたものであろうか。

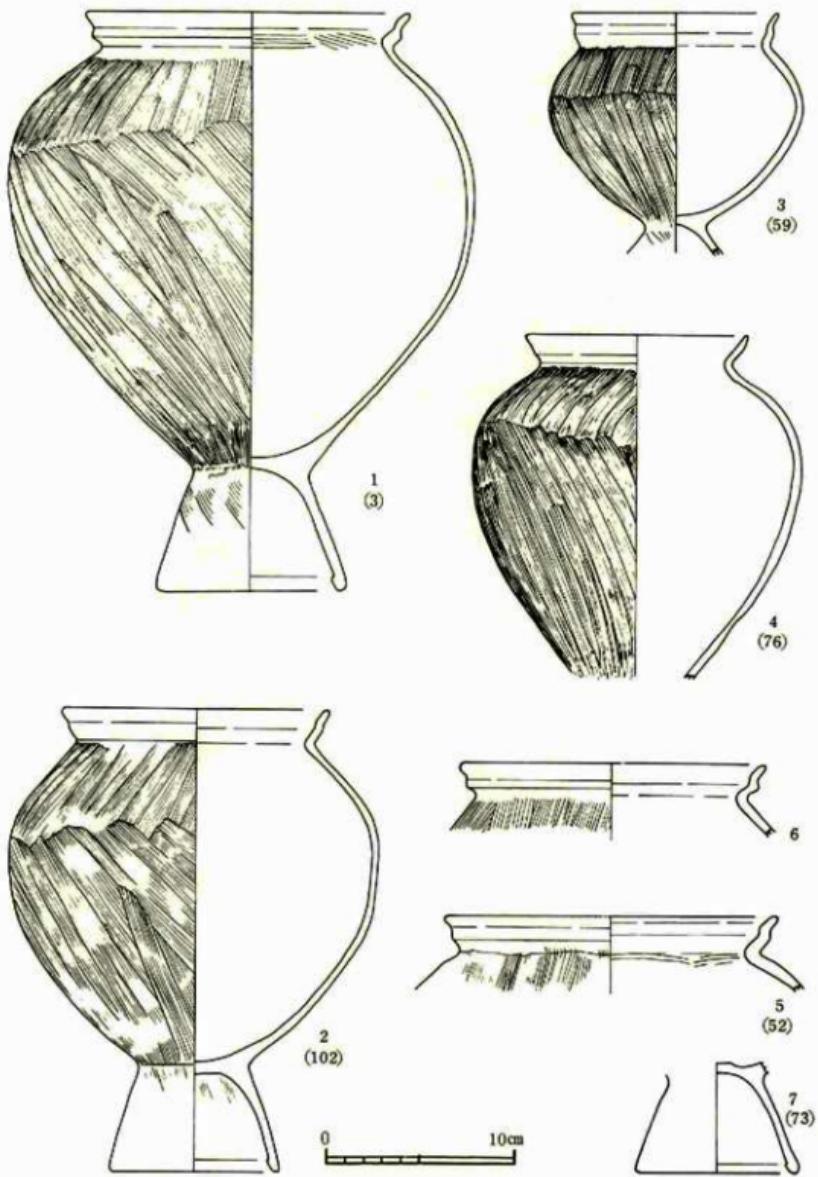
石器は最も多く出土している。すべて自然石をそのまま使用していて、そのうち7個は長円形を呈し、突端に打撃痕がある。石質は安山岩系と硬砂岩である。No.6は3面が研磨された砥石で安山岩系である。No.9は花崗岩の丸石である。また前述した棒状木器が伴出した。岩系のものである。No.117は花崗岩の丸石である。また前述した鍬の柄形木器が伴出した。

2号土壙 1号土壙の北に並びほぼ同大である。ここからは4個の石器が出土し、このうち2個は、1号土壙出土と同形の槌で石質は安山岩系である。No.2は1面がよく研磨された石器、No.4は破片である。

3号土壙 南端にあって、その1部は県道の下になっていたため調査不可能であった。ここからは2個の石器と一本の木器が出土した。No.2は前述したと同様な槌、No.3は両面がよく研磨された石器である。木器は片方に鋭利な刃物で造った頭があり、くびれ部を境に他は自然木のままで、他の一端は折損したらしい痕がある。現状97cmの有頭木器であり、同形のものが登呂遺跡から出土している。この木器はPEG含浸処理法によって保存処理をした。



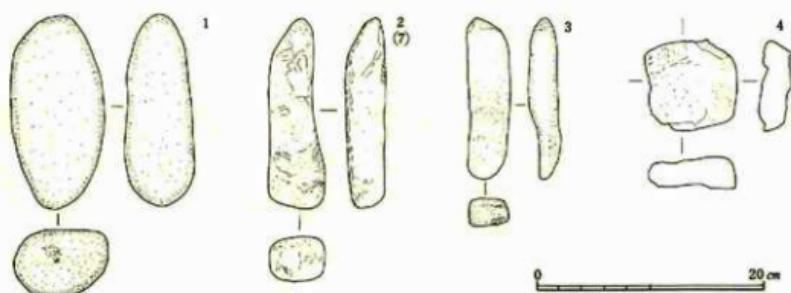
第19図 1号土壙出土遺物実測図



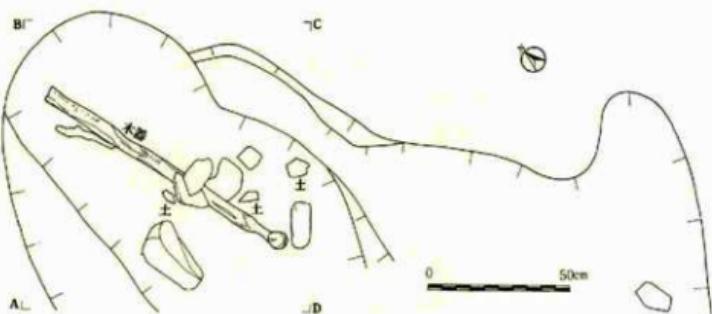
第20圖 1號土壤出土遺物實測圖 (1:30)



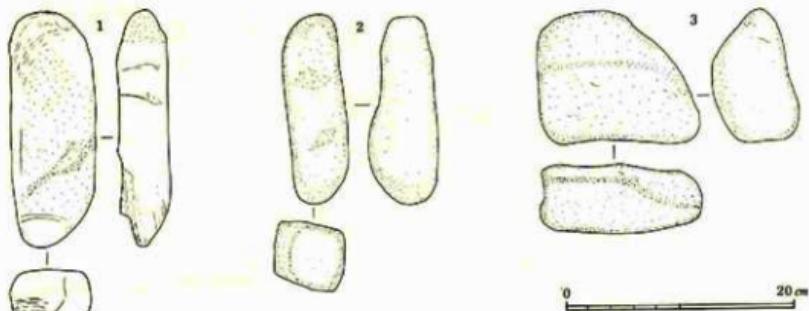
第21図 1号土壤出土遺物実測図



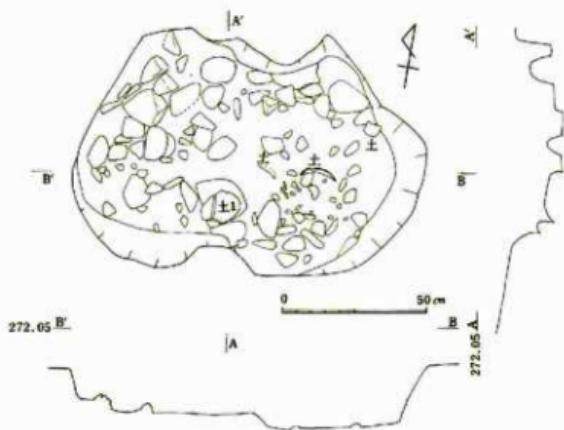
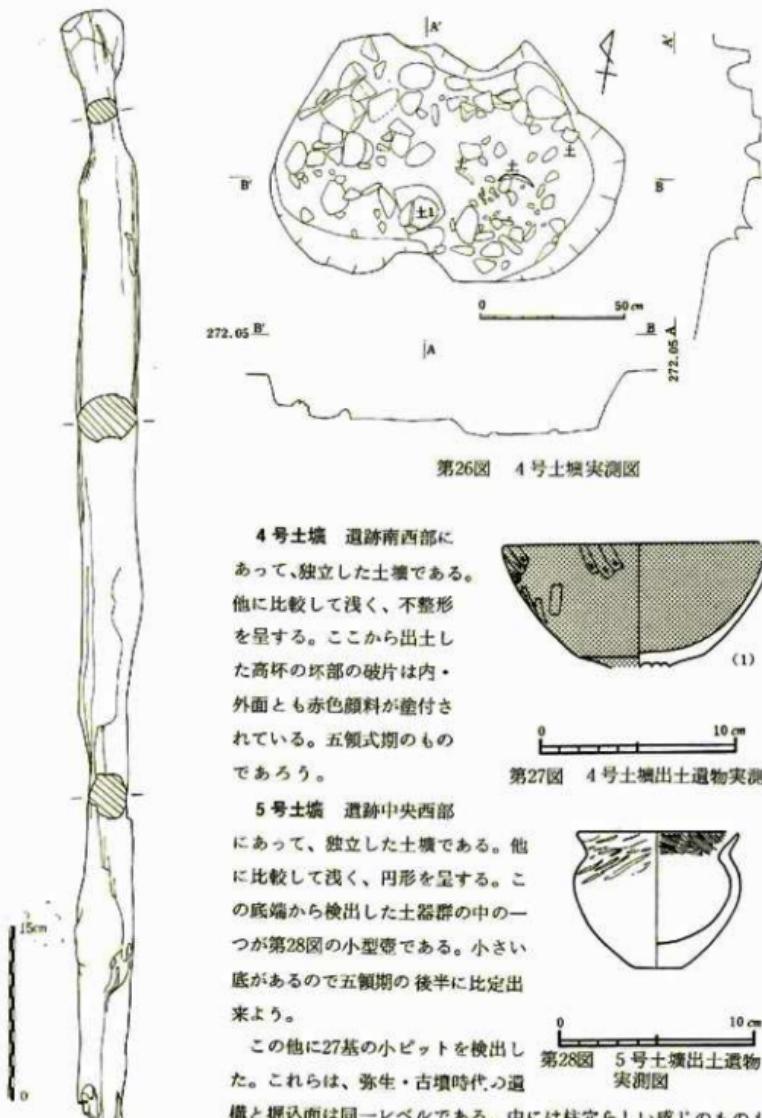
第22図 2号土壤出土遺物実測図 (1:5)



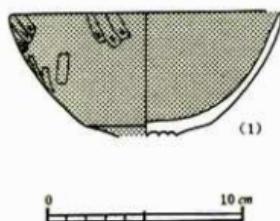
第23図 3号土壤実測図



第24図 3号土壤出土遺物実測図 (1:5)



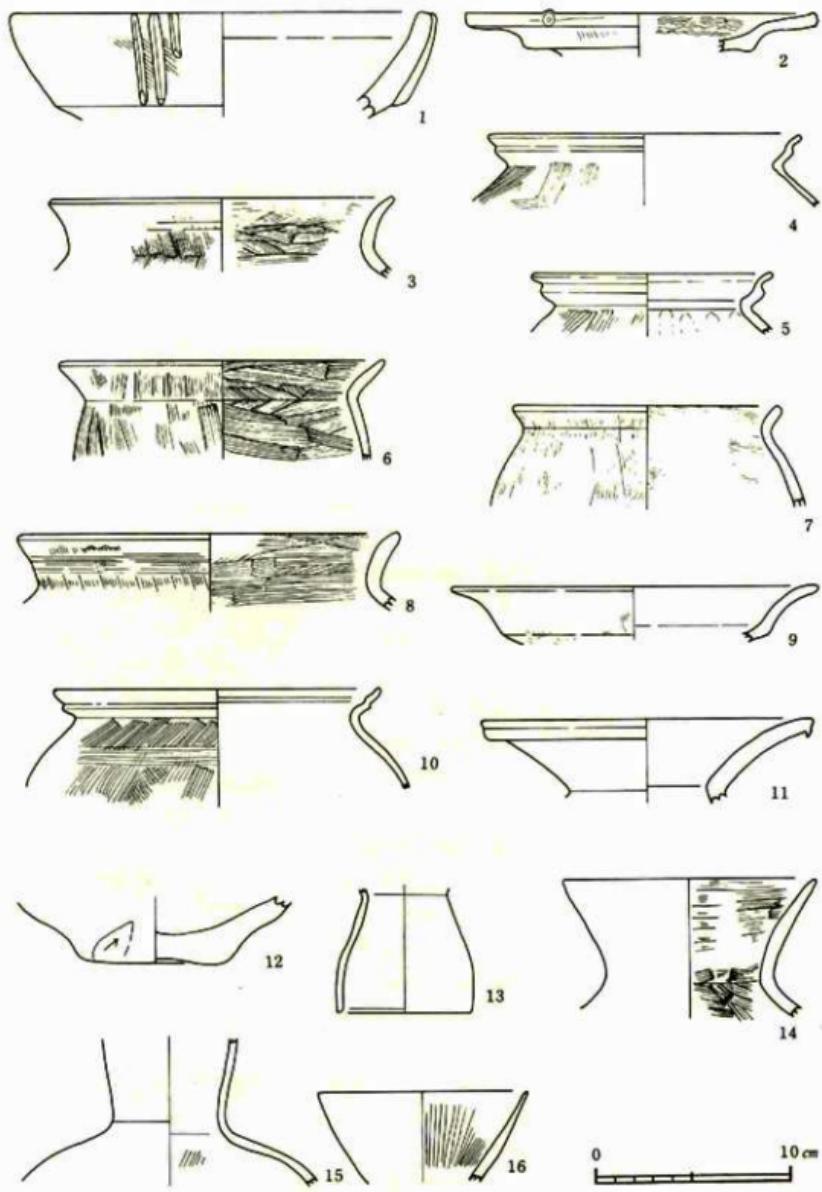
**4号土壙** 遺跡南西部にあって、独立した土壙である。他に比較して浅く、不整形を呈する。ここから出土した高杯の坏部の破片は内・外面とも赤色顔料が塗付されている。五領式期のものであろう。



**5号土壙** 遺跡中央西部にあって、独立した土壙である。他に比較して浅く、円形を呈する。この底端から検出した土器群の中の一つが第28図の小型壺である。小さい底があるので五領期の後半に比定出来よう。



この他に27基の小ピットを検出した。これらは、弥生・古墳時代の遺構と掘込面は同一レベルである。中には柱穴らしい感じのものもあったが、その目的は明らかに出来なかった。



第29図 挖立柱建物址付近出土遺物実測図

番号	出土場所	種類	器形	法寸法 （横×縦×高）	調査				胎土 色焼成	備考
					口縁	外面	内面	底		
第202 回	1号土壙	土師	台付盤	14.0 23.7 9.0	S字形	口縁部横ナデ 刷毛目2段の刷毛目 斜位刷毛目	口縁部横ナデ 刷毛目ナデ、脚部指 押え、刷毛目		砂粒を含む 白褐色好	
*3	1号土壙	*	*	10.8 —	*	*	*		砂粒を含む 白褐色好	
*4	*	*	*	12.6 —		*	*		*	
*5	*	*	*	17.4 —	S字形	口縁部横ナデ 脚部刷毛目	口縁部横ナデ 脚部ナデ		*	
*6	*	*	*	16.0 —	*	*	*		砂粒を含む 白褐色好	
*7	*	*	台付盤 脚部	— 8.6		斜位刷毛目	指押え 刷毛目		砂粒を含む 白褐色好	
第271 回	4号土壙	*	高环	14.0 —		横ナデ 跳躍	口縁部横ナデ 横刷毛 跳躍		黒褐色 褐色好	赤色胎土 一部剥落
第281 回	5号土壙	*	小型 丸底壺	8.3 6.8 2.6		跳躍	斜位刷毛目 跳躍ナデ		砂粒を含む 赤褐色好	
第291 回	8Aグリフ F2層	共生	壺	22.0 —	複合口縁	口部に棒状 浮文の3本貼付 刷毛目	ナデ		砂粒を含む 茶褐色好	
*2	*	*	*	18.0 —		口縁部横ナデ6~ 7条の凸状の筋 りと斜位 斜位斜位刷毛目ナデ	7条の波状文あり		砂粒を含む 茶褐色好	
*3	*	土師	台付盤	18.0 —	薄長	口縁部横ナデ 横刷毛目	交互の刷毛目		砂粒を含む 茶褐色好	
*4	8Aグリフ F2層	*	*	16.2 —	S字形	口縁部横ナデ 脚部斜位 刷毛目	跳躍ナデ		砂粒を含む 茶褐色好	
*5	*	*	*	17.0 —	S字形	口縁部横ナデ 脚部斜位刷毛目	横刷毛目		砂粒を含む 茶褐色好	
*6	8Aグリフ F2層	*	*	13.0 —	薄長	口縁部横ナデ 脚部斜位刷毛目	指頭痕あり		砂粒を含む 茶褐色好	
*7	*	*	*	20.0 —	*	口縁部横ナデ 脚部から肩部に 致刷毛目	斜位刷毛目		*	
*8	*	*	*	14.0 —	*	*	横刷毛目		*	
*9	*	*	*	17.0 —	*	口縁部横ナデ 刷毛目、肩 部に1条の刷毛目	口縁部横ナデ		砂粒を含む 茶褐色好	
*10	*	*	高环	19.0 —	S字形	口縁部横ナデ 刷毛目→ナデ	*		砂粒を含む 茶褐色好	
*11	*	*	壺	17.0 —	折り返し	横ナデ ↓ 跳躍	刷毛目 ↓ 跳躍		砂粒を含む 茶褐色好	
*12	*	*		— 6.7		斜位直削	剥落多し		黒褐色 褐色好	

補圖番号	出土場所	種類	器形	出土品 目次番号	調 整				胎土 色調 焼成	備考
					口 線	外 面	内 面	底		
第 81 図	1 号土 塵	弦生	空	18.4 — —		口縫部横ナデ 煙管刷毛目 肩部に磨痕状工具 による波状文あり ボタン状突起2ヶ	口縫部刷毛目 煙管 肩部斜位刷毛後 半スリケシ		砂粒を含む 褐色良	色好
第 91 図	6 号溝 弦生	*	*	26.0 — —	4.5 cm さの筋 腰帶小貼 在	口縫部刷毛目 ↓ 笠ナデ	ナデ		*	
第 111 図	S B - 1 土師 台付壺			16.8 — —		口縫部横ナデ 肩部刷毛ナデ	口縫刷毛ナデ 笠削		褐色良	密色好
* 2	*	*	壺	16.0 10.0 4.0		縫刷毛目 ↓ 笠 刷	横刷毛目 ↓ 笠 刷	中心 に穴 あり	細かい砂粒 を含む黄灰 褐色良	内、外面と も煤付着
* 3	S B - 1 上 扉	*	壺	13.4 4.8 7.2		笠 帯	笠 帯			
* 4	S B - 1 *	器 台		8.0 8.1 10.2		笠帯は横ナデ頭部 鋸削 脚部横ナデ	指頭鋸削		褐色良	密色好
第 141 図	3 号溝 *	台付壺		11.4 21.0 7.8	S 字 形	口縫部横ナデ頭部 2段の前毛目 脚部刷毛目	口縫部横ナデ 脚部ナデ、脚部指 ナデ、折り返し		砂粒を含む 褐色良	色好
* 2	*	*	*	12.0 — —		口縫部横ナデ 脚部刷毛目	口縫部横ナデ 笠 帶		砂粒を含む 褐色良	密色好
* 3	*	*	*	12.6 — —	*	*	*		砂粒を含む 褐色良	
* 4	*	*	小丸底空	10.6 — —		ナデ	ナデ		褐色良	密色好
第 151 図	4 号溝 *	器 台		10.2 — —		横ナデ 脚部挽削	ナデ 放射状端文 脚部指面粗削	中央 部貫通孔	褐色良	密色好
第 181 図	5 号溝 *	台付壺		16.0 — —	S 字 形	口縫部横ナデ 脚部2段刷毛目 脚部刷毛目	口縫部横ナデ 脚部笠ナデ		砂粒を含む 褐色良	色好
* 2	*	*	壺	— 7.2		刷毛目 ↓ ナデ	刷毛 ↑ 上・下部相目 12本 中央部太目 8本		砂粒を含む 褐色良	色好
第 191 図	1 号土 塾	*	小丸底空	— 4.0		刷毛目 ↓ 笠ナデ	ナデ		褐色良	密色好
* 2	*	*	*	— 4.9	斜 笠 ナデ	上部斜位笠ナデ 下部斜位刷毛目	内面中心から斜位 上に放射状に刷毛		*	
* 3	1 号土 塾	*	高脚 壺部	— 17.4		刷毛目 ↓ ナデ	横篦磨き		褐色良	密色好
* 4	*	*	小丸底 空	12.1 — —		刷毛目 斜位挽削	口縫部斜位刷毛目 脚部放射状端文 脚部ナデ		*	外側の一部 に炭化物付 着
* 5	*	*	壺	16.0 — —		口縫部横ナデ 笠 帶	ナデ 笠磨き		*	
第 201 図	1 号土 塾	土師 台付壺		17.4 29.7 9.4	S 字 型	口縫部横ナデ 脚部2段の刷毛目 脚部刷毛目	口縫部横ナデ 脚部ナデ、脚部指 押え、刷毛目		砂粒を含む 褐色良	色好

被 国 号	出 土 地 点	種 類	器 形	法山(所 用)等名 称(或地)	調 型				胎 色 調 燒 成	備 考
					口 端	外 面	内 面	底		
第 2913 國	8 A グリッタ Y	土師	台付甕 脚部か	7.0 — —	刷毛目→横荒刷き	横荒刷き			砂粒を含む 褐 良	
* 14	8 A グリッタ F	土師	甕	12.8 — —	刷毛目 ナ ヅ	L1脚部横刷毛目 脚部斜位刷毛目			砂粒を含む 褐 良	
* 15	*	*	*	— — —	荒磨き	指圧痕あり 荒磨き			砂粒を含む 茶 良	
* 16	8 A グリッタ F 2	土 陶	甕	11.0 — —	ク	放射状暗文			3mm程の小 孔を含む 褐 良	

第2表 保ノ下遺跡出土の種核

番号	種核名	遺物出土遺構 またはグリッド	巾 Wide	長 Long	厚 Thick	$L/W$	備考
1	オニグルミ	TP-17	2.25	2.85	1.00	1.27	半分
2	モ	モ TP-22	1.95	2.60	1.63	1.33	自生、側面に傷がある
3	モ	モ TP-22	1.95	2.17	1.48	1.11	自生、虫咬痕
4	モ	モ TP-22					自生、炭化、欠損
5	モ	モ TP-22	2.09	2.42	1.69	1.16	自生
6	ヒメグルミ	TP-22					自生、炭化、欠損
7	ヒメグルミ	TP-24	2.07	2.26	0.75	1.09	欠損
8	モ	6AG 3層	2.12	2.44	1.70	1.15	自生
9	モ	9BG 2層					自生、欠損
10	モ	9BG 2層No.12	2.21	2.52	1.73	1.14	自生
11	モ	9BG 2層	1.99	2.52	0.73	1.27	自生、半分
12	モ	TP-19	2.09	2.33	1.76	1.11	21.
13	モ	TP-19		2.42	1.26		半分、虫咬痕
14	クルミ	TP-19		3.37	1.30		半分、側面欠損
15	クルミ	TP-19	1.84		0.99		半分、底部欠損
16	ヒメグルミ	TP-19	2.21	2.80	0.77	1.27	半分
17	ヒメグルミ	TP-19	2.39	2.55	0.78	1.07	半分
18	モ	TP-24	1.56	3.36	1.03	2.15	欠損
19	モ	TP-24		3.30	0.87		欠損
20	クルミ	TP-30	2.43	2.84	1.09	1.17	半分
21	クルミ	TP-30	2.31	3.03	1.16	1.31	半分
22	クルミ	TP-30			1.08		半分、底部と側面が欠損
23	クルミ	TP-30		2.98	0.97		半分、欠損
24	クルミ	TP-30	2.40		1.27		半分、欠損、炭化
25	クルミ	TP-30		2.84			半分、欠損、炭化

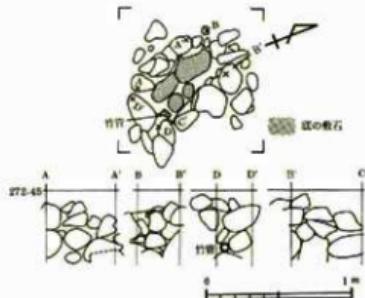
(注) 1~11 市河三次教授鑑定

### 第3節 中・近世の遺構と遺物

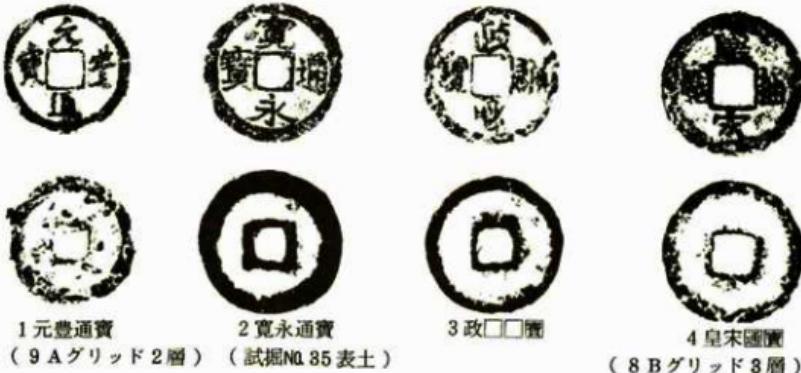
遺構から伴出した遺物は、染付の一口茶碗下半分が1個だけだったので、確実な時代判定は困難である。中世末から近世にかけての遺物と推定して取り扱うこととする。グリッドから出土した陶磁器もこの頃のものであろうか。

**1号溝** 発掘区の北端にあって1号井戸状遺構に連結している。溝の幅は広い所で180cm、狭い所で80cmで、深さは30cm~40cmである。その形態は、全体的にV字状で、中段があり、テラス状となっており、底にはすべて葦状の植物が束ねて入っており、中間に2か所杭と板で土留状の施設がある。1号井戸状遺構が下流となっていて、これと140cmの竹筒で連結している。以上の状況から明渠であったと考えられ、1号井戸状遺構に水を流す施設とみられる。遺物は染付の底部破片が1個出土しただけであるが、これによって溝の使用時期を一応中世末から近世にかけてのものと推定した。

**1号井戸状遺構** 1号溝に連結する。自然石を井戸状に積み上げ、その深さは50cm、南北50cm、東西30cmの長方形を呈し、底には石が敷いてある。機能は確定出来ないが、排水施設か貯水施設であろう。使用時期は1号溝と同じである。



第30図 1号井戸状遺構実測図(1:40)



第31図 錢貨拓影

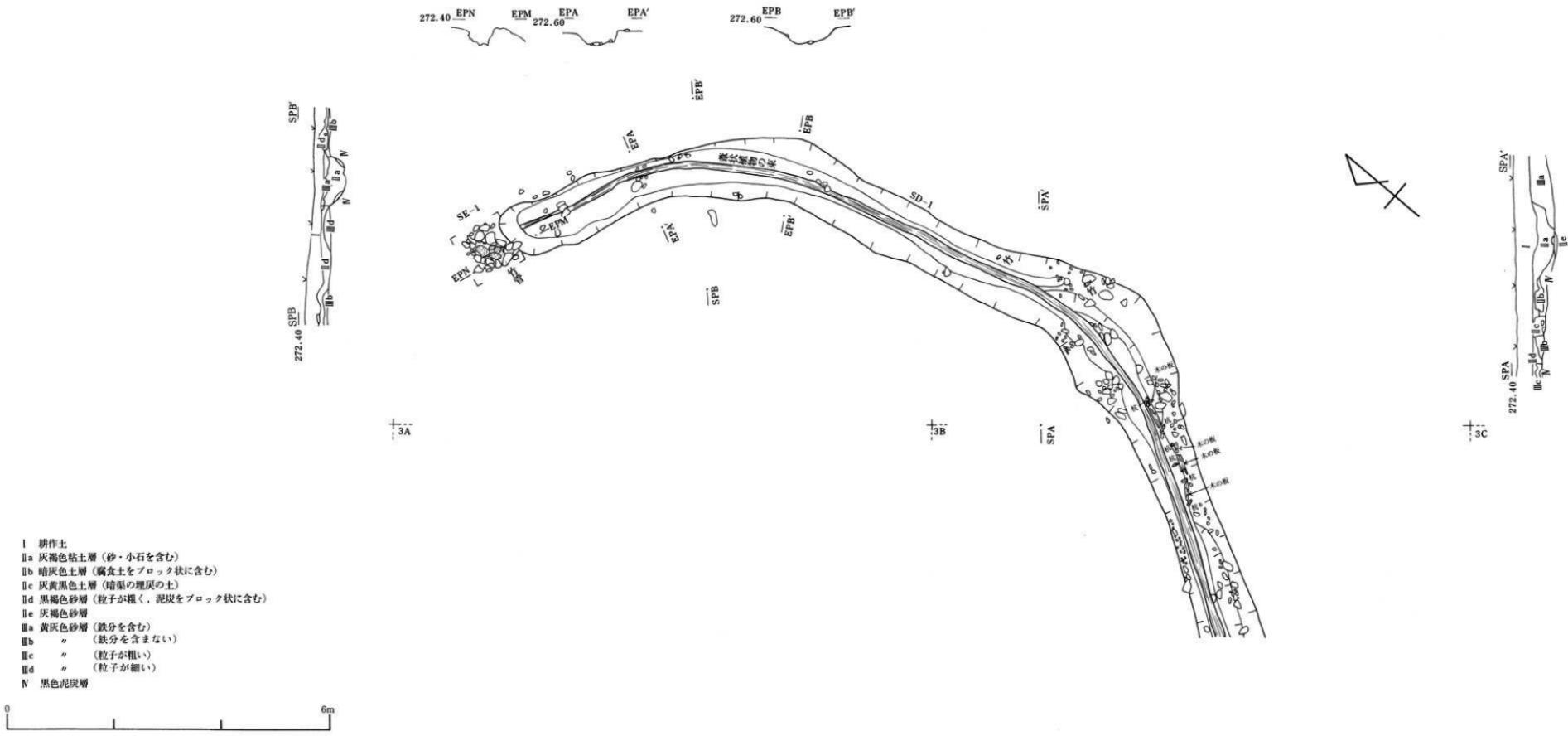
## 第5章　ま　と　め

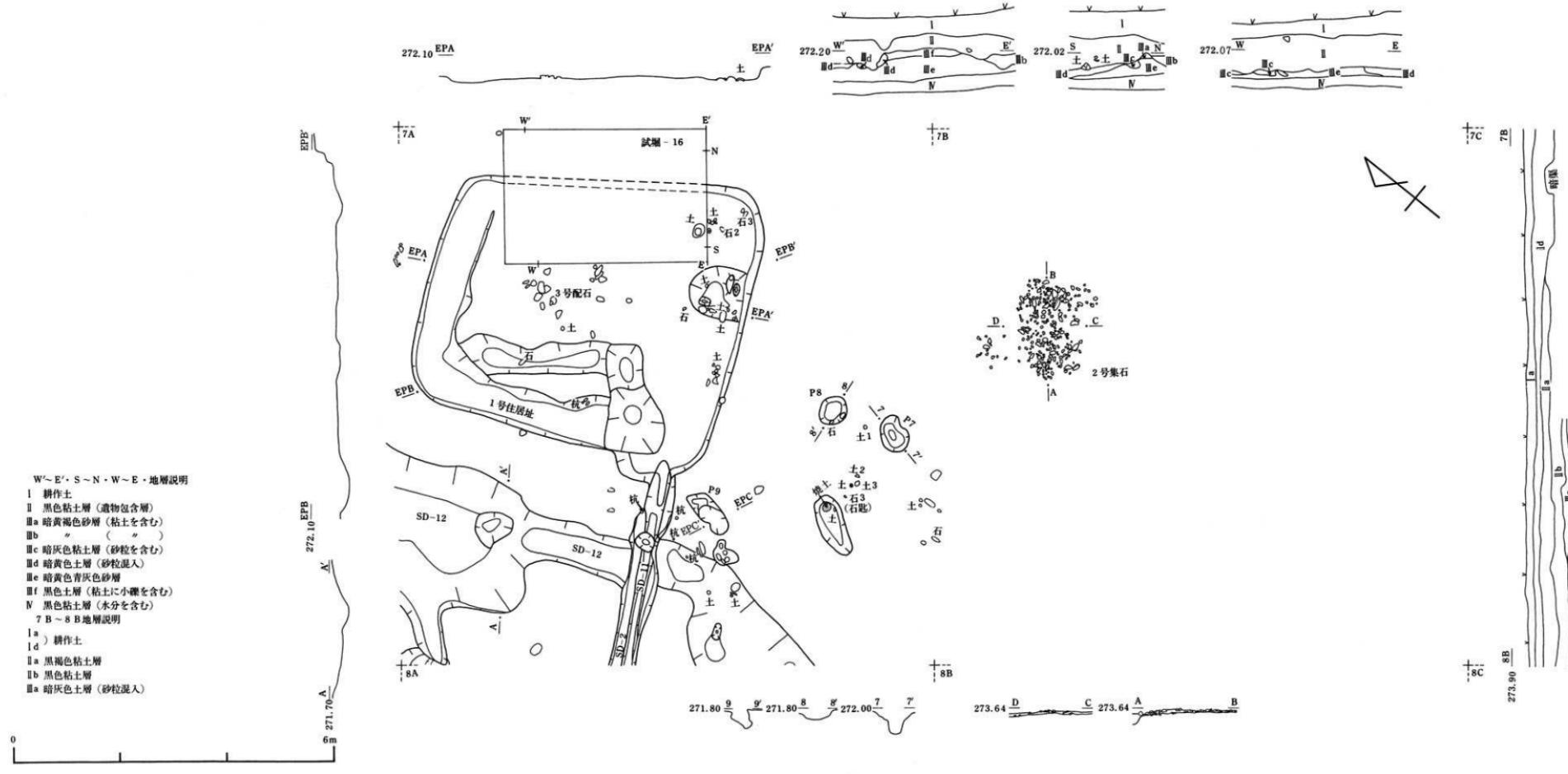
次の下遺跡は甲府盆地東部に広がる浅川扇状地扇端に営まれた本県弥生時代終末から古墳時代の初頭にかけての集落遺跡である。

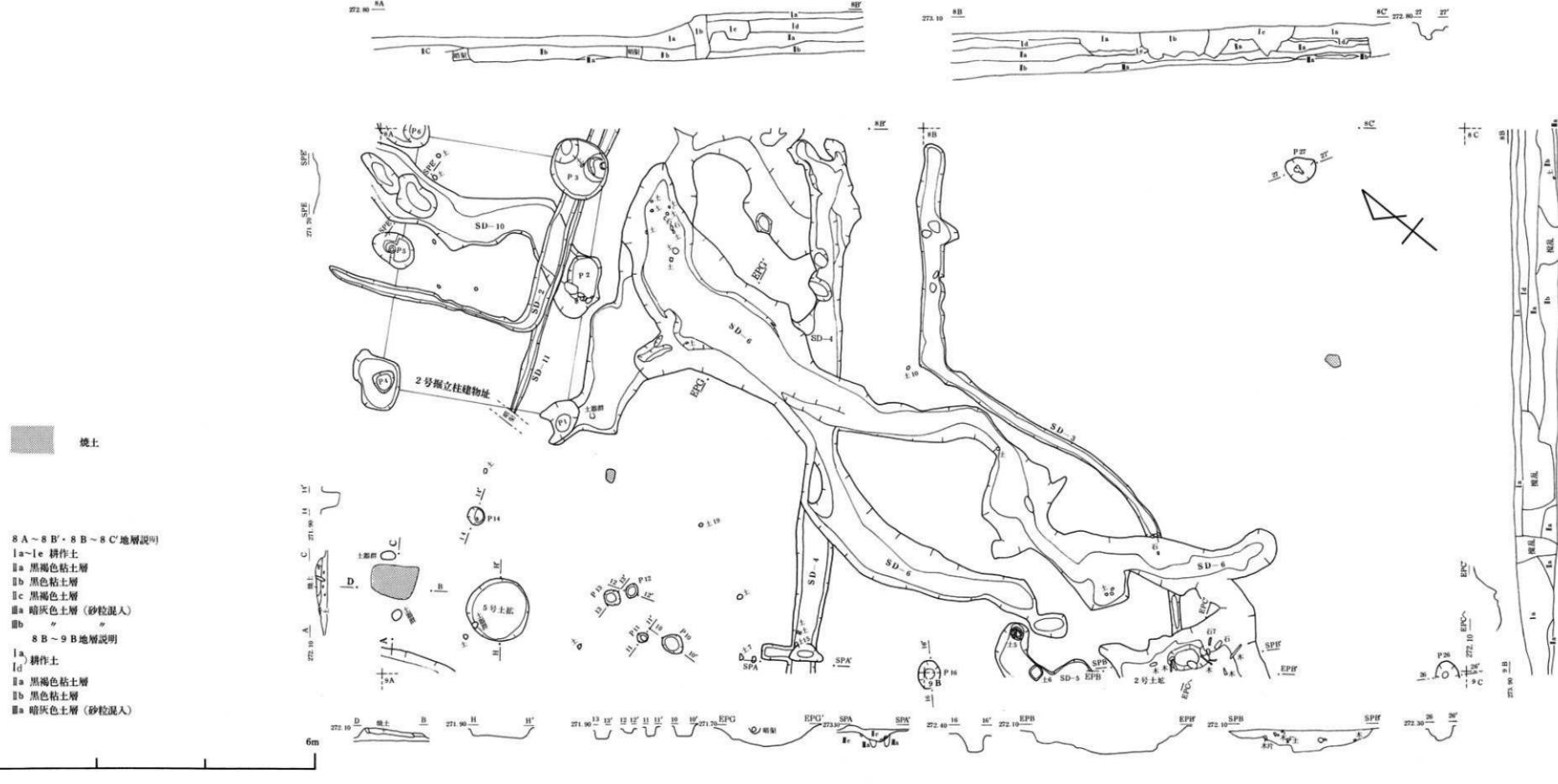
遺構は主に整穴住居址1軒、掘立柱建物址1棟や多数の土壙や溝などが検出され、ここから五領式土器のI・II型式と極めて少量の前野町式土器や多数の石器、登呂遺跡などで出土したものと同形の有頭木器が発見された。発掘区の西（下）方からは農耕中2ヶ所から土器が出土したことがあり、また遺物も散布しているので、集落の中心は西にあると考えられ、範囲は地形等から推察すると、東西に長い自然堤防上100mくらいに広がっているであろうか。遺物について特記すると、土器形態は東海地方の影響が多く見られ、石器はほとんど自然石を利用して、磨痕、たたき痕のあるものばかりで占め多量である。

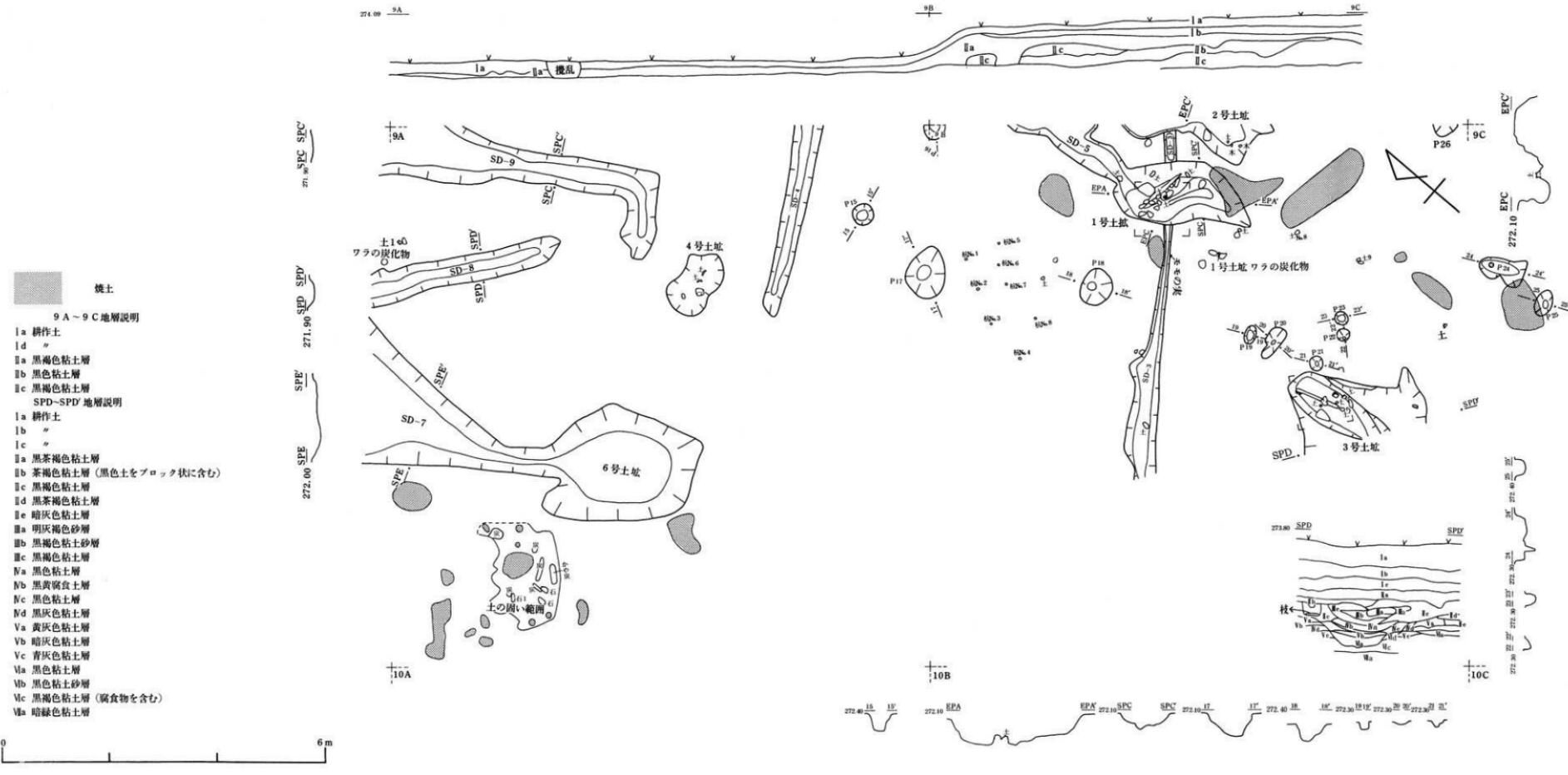
本県の弥生時代末期から古墳時代初期の遺跡は近年10指を数える程発掘され、古墳時代初期の五領式土器の編年はほぼ確立された。一方古墳の編年も一般化され、初現期の中道町小平沢古墳は4世紀台中葉といわれている。しかし五領式土器と古墳との年代関係、その絶対年代に関する資料は未だ充分整ったとはいえない。今後の課題となるところであろう。

第32図 仮ノ下遺跡2A・2B・3Bグリッド平面図(1:60)









# 図 版



全 景



1 号 住 居 址



2号据立柱建物址



6号 溝



1号土壤土器出土状况(1)



1号土壤土器出土状况(2)



1号土壤土器出土状况(3)



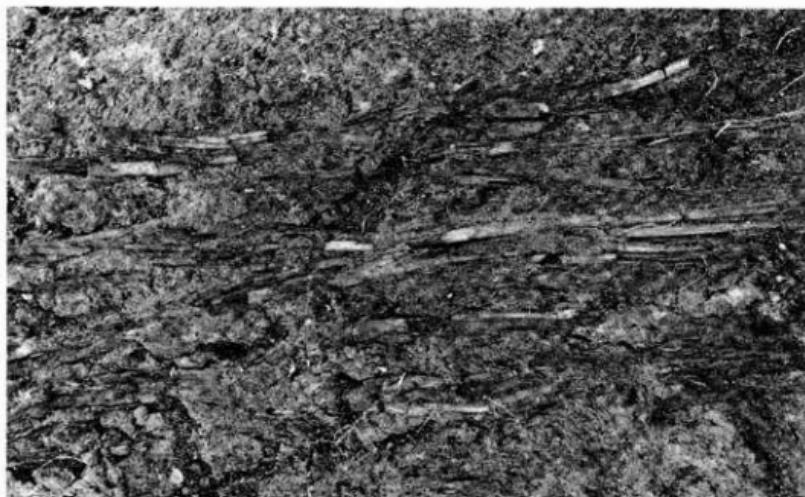
3号土壤遗物出土状况



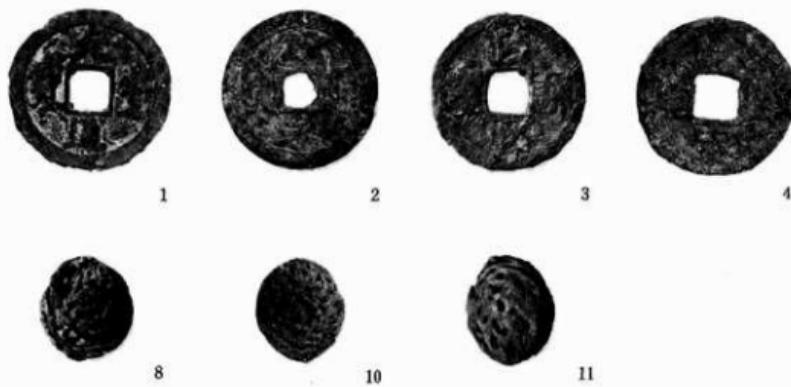
1号溝



1号井戸状遺溝

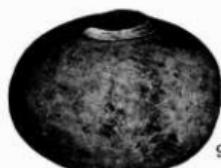


9 AG 炭化物をともなう焼土

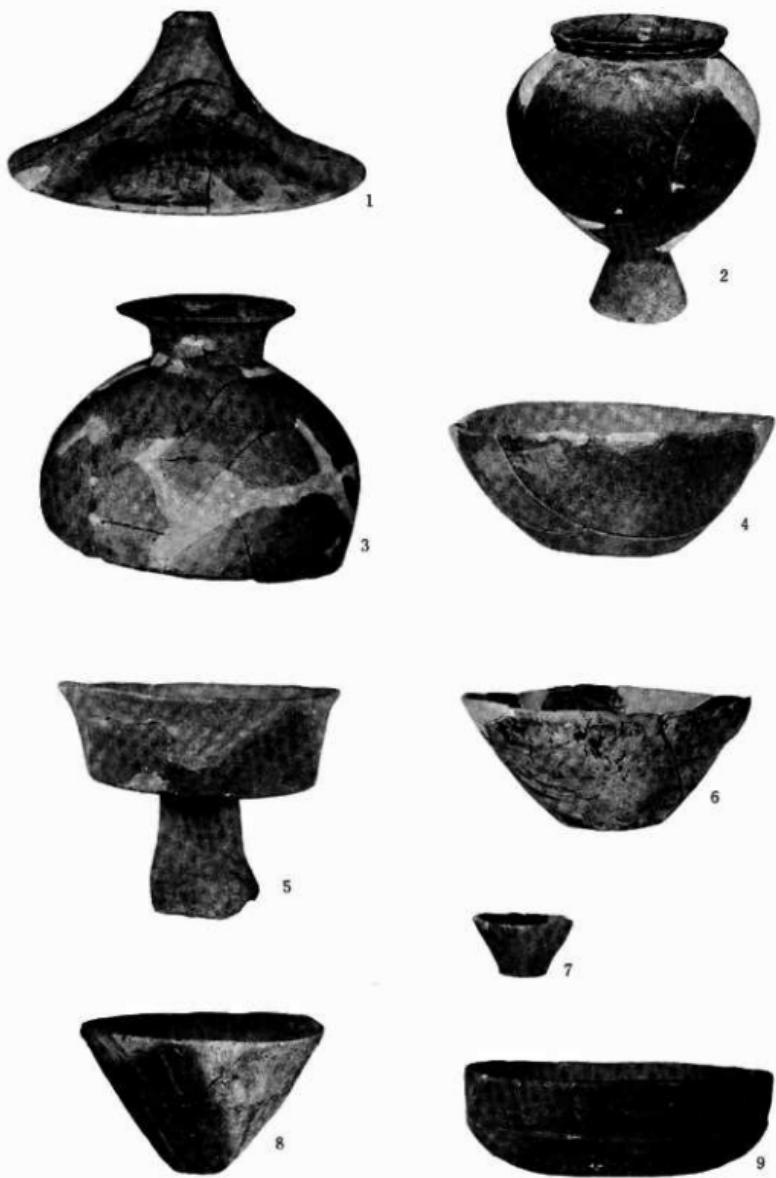


出土錢貨と種核

圖版 7  
出土 遺物



1号住居址(1~2) 3号溝(3) 5号溝(5) 1号土塙(6~10)



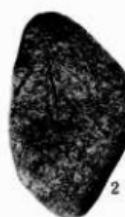
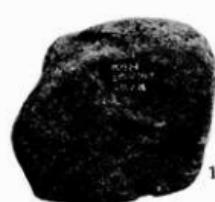
1号土壇(1~3) 4号土壇(4) 6Aグリッド(5) 7Aグリッド(6~8) 8Aグリッド(9)

圖版 9  
出土 遺物



1号住居(1~4) 6号溝(5~6) 4号溝(7) 2号土壤(8~10)

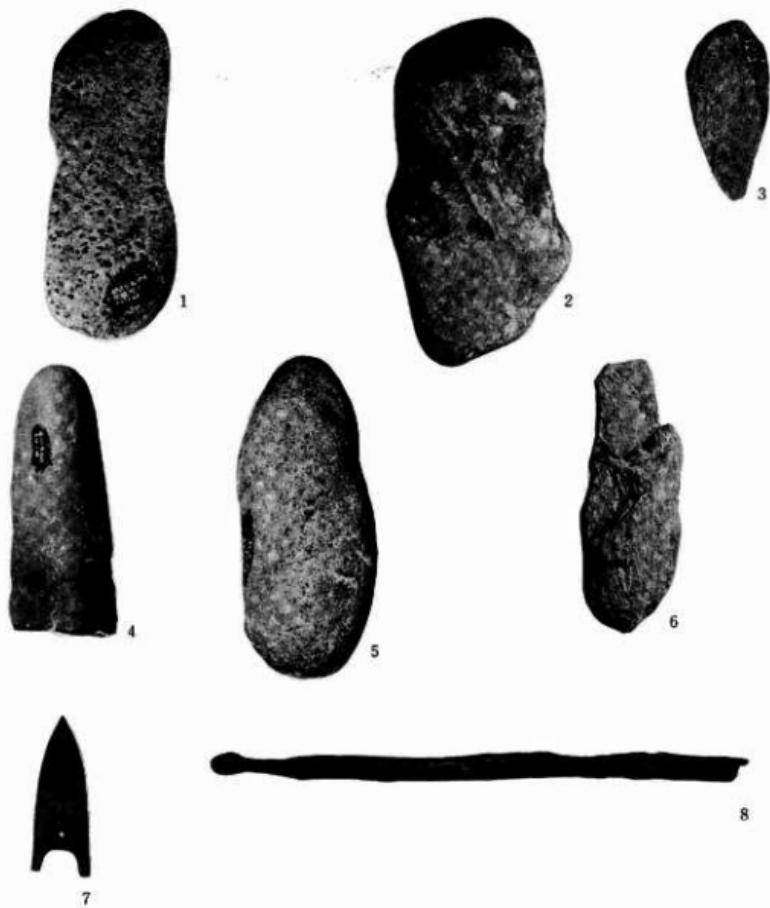
圖版 10  
一號土壤出土遺物



図版 11 出土遺物



3号土壙(1~3) 7Aグリッド(4~5) 8Aグリッド(7, 9, 10) 9Aグリッド(8)



9Aグリッド(1~2) 9Bグリッド(3,5,6) 13グリッド(4) 1号集石(7) 3号土壤(8)

昭和59年3月31日 印刷  
昭和59年3月31日 発行

石橋 条里 制造跡  
藏 祐 道 跡  
修 下 道 跡

山梨県中央自動車道  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

発行所 山梨県教育委員会  
日本道路公園

印刷所 合資会社三木七印刷

